

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和30年9月17日日本国有鉄道特別授受雑誌第3203号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・郵政第7号・昭和37年4月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

4月号

絵物語・フオトストーリー特集



THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和30年9月17日日本国有鉄道特別授受雑誌第3203号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・郵政第7号・昭和37年4月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

- 絵物語 ある夜の強盗ごっこ
- 絵物語 砂漠の恐怖王ハッサン
- 私本礼津女切腹抄
- おえん地獄夢
- 絵物語 女猫は鉛色の牙を磨ぐ
- 絵物語 鞭に生きる女
- 畜獣デリムソン
- 日本拷問史

定価 200 円
IBM 1807

あなたとわたしの
桃色旅行案内 永川肇

奇習・奇祭コンクール、びっくり神さまお色気詣でなど一風変わった全国観光地案内！ 普通の旅行案内にあきた裏窓ファンならば必読のトラベル・ガイド！

一七〇円

推事 理件
ボーイハントの報酬 雨宮郁夫

シャツとパンツだけの被害者X氏。頸に布をまきつけただけの被害者Y氏。犯人は男色者だったのか？ ゆがんだ性欲がうんだ変態犯罪……など特選ミステリー。

一三〇円

女性犯罪実話集
夜の蝶・もだえるとき 日比野晃

若い娘。人妻。未亡人……あらゆる層の女体を密かに盗み見しては快感におぼれた男の物語……など裏窓ファンには欠かせない、お好み耽美実話集！

一五〇円

検診台の微笑
奇癖のある女たち 岡林浩

夜見た夢のなかで女が強姦された。そんな朝、女は本当に強姦された気持になった。ノイローゼからくるセックス問題を扱った街で話題のセックスノイローゼ。

一五〇円

女のずるさいやらしさ
女なんて大嫌い 井関雅夫

こんな本なんて大嫌い！ と一人の女がいいました。悪性にして赤裸々な女性を描いて酷！ 映画にならないエロ話/法悦境の表現など異色女性に関する十二章。

一三〇円

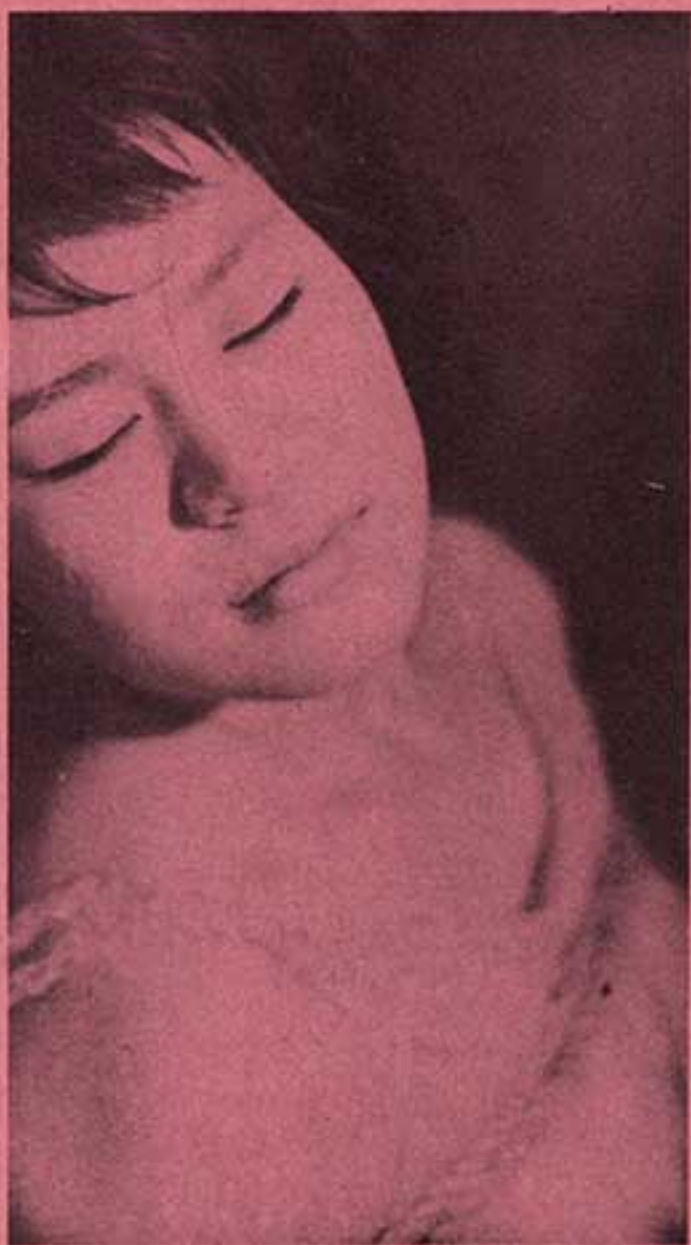
お楽しみ易学
隠すれど色に出にけり 田畑大有

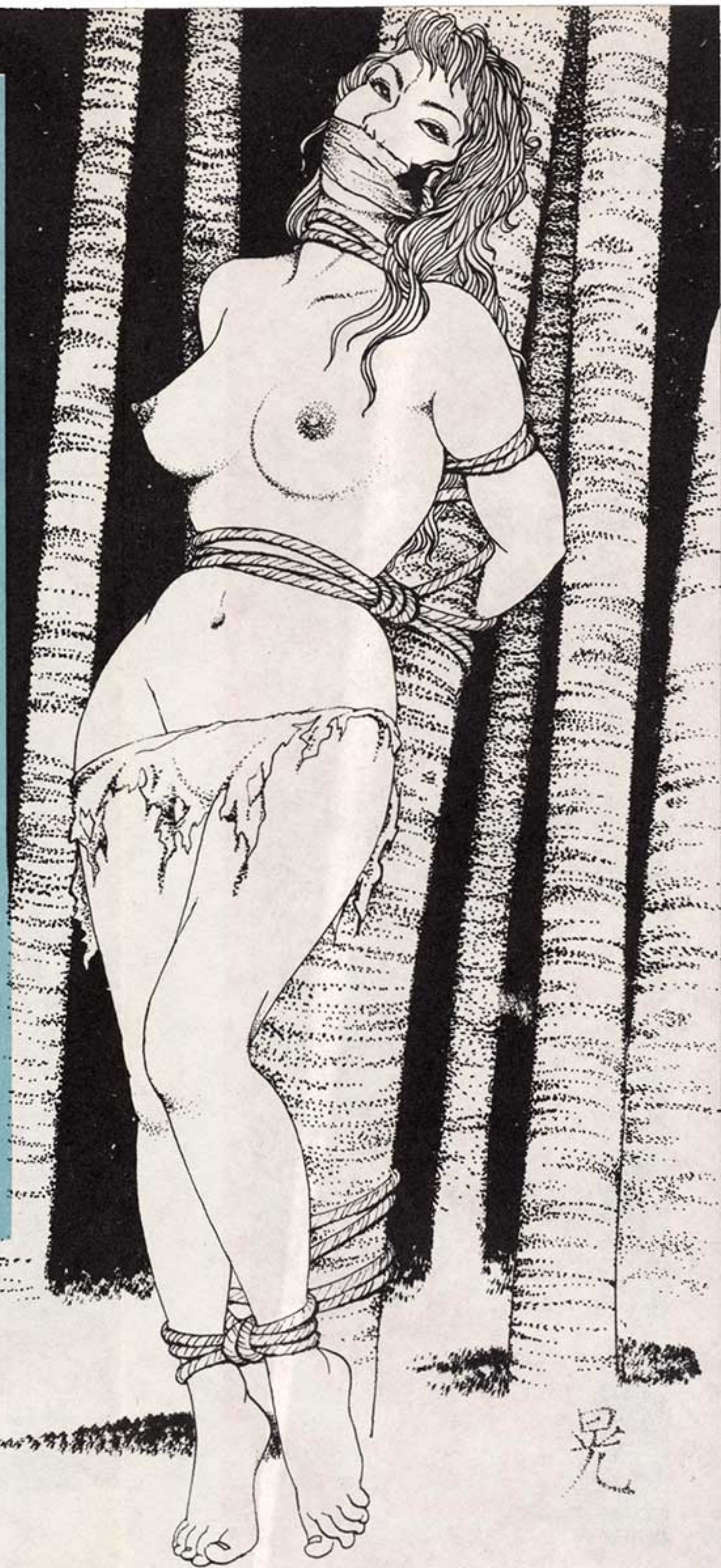
肉のない尻は凶相・薄削な尻もまた凶相豊満な大きいお尻は大の吉相。人間・アタマから足のつま先までいたるところで幸・不幸が判る人体易入門の好指導！

一五〇円

おもしろくて、安くてゾクゾクする
あなたをエクスタシーにさそう！
あまとりあ社の異色新書判をどうぞ

東京都中野区江古田一ノ二三〇二
(振替・東京一〇七五六・久保書店宛)
株式会社・あまとりあ社
送料各冊 40円





晃

裏窓・四月号・目次

■表紙……藤沢修 ■目次カット……美濃村晃

★絵物語・フォトストーリー特集号★

オフセット
二色絵物語

地獄への招待状

文・小川左門
画・喜多子
(9)

ある夜の強盗ごっこ

文・藤見郁
画・山田彬弘
(14)

砂漠の恐怖王ハッサン

文・松平荘子
画・中川彩子
(227)

新釈小松嵐お時の危難

文・高月大三
画・小日向一夢
(131)

鞭に生きる女

作・画ヴァン・ロッド
特約・泰西出版資料
(107)

女猫は鉛色の爪を磨ぐ

文・烏丸克彦
画・沖渉二
(48)

文物語
本絵物

真夜中のプロダクション

文・海老沢七郎
画・羽田真樹
(158)

フォト・
ストーリー

妖蘭亭の愛欲

豊田一狼
(219)

特選 グラビア

★はんにやのめん……………吉田久
★ゆがむ豊胸……………藤沢修
★いすくと女……………吉田久
★片隅にうごめく……………猪島昌也
(128) (124) (115) (19)

画家とモデルのリボンに巻かれる娘……………綾川妖司 (28)

女性禁聞の姫肌受難船……………黒部恭治 (38)

娘復讐のおとしだね……………西田仁 (64)

小説 奇妙なあしながおじさん……………黒田史朗 (192)

ほも・とせまい五つの場……………かびやかずひこ (58)

ショート遊女おそでの仇討……………島本春雄 (72)

女性出現世畜獣デリムソンV……………阿麻哲郎 (90)

女性美の私本・礼津女切腹抄……………団克衛 (140)

Mの世界なめたい……………田沼醜男 (150)

暗黒録日本拷問史③……………名和弓雄 (100)

モデル想まりものためいき……………谷まりも (178)

◎裏窓タウン……………(76) ◎読者コーナー……………(214)

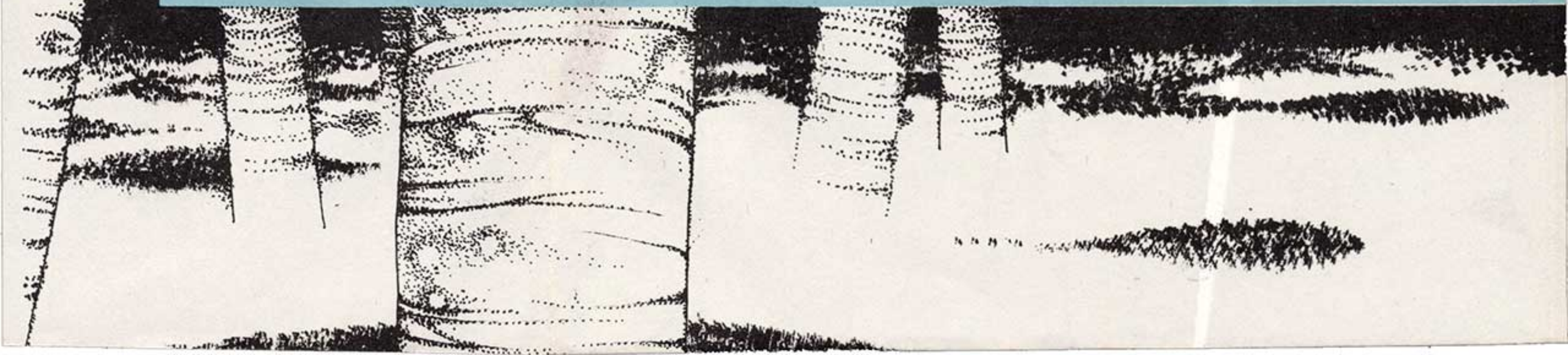
夢幻の夜の捕われた姫君……………宮古志満夫 (84)

浅草劇の「黄金観音」ご紹介……………矢桐重八 (174)

小説代姫君様御入牢……………小田桐爽 (180)

小説代おえん地獄夢……………五斗六太郎 (202)

◎原稿募集・編集後記……………(218)



の手紙 招待状

①

裏窓編集長……………。可哀そうだが、君の奥さんは
もう俺のものなのだよ。

ホラ、こうして、手も足もぎっちり縛られて、俺の
足元に転がされているのだ。俺はこんどの、この計画
のために、特別に借りておいた倉庫の中で、君の奥さ
んの、若いキメの細かな肌が、羞恥の脂汗で濡れてい
るのを眺めながら、この手紙を、一字一字、ゆっくり
と書いているのだ。

そして、この手紙を書き終ったら、今夜ひと晩、ゆ

小川左門

喜多玲子・絵





ある読者から

地獄への

「くりと時間をかけて、君の奥さんを蹴ってやるのだ。驚いたかい」

「だめたよ、今更あわててみたところで、どうにもなるものか」

「だいいち、この手紙を君が読んでいる頃には、俺の年来の目的と復讐は、もう充分に達せられて、君の可愛い、美しい奥方は、もう生きていないかも知れないんだよ。いや、たとえ生きていたとしても、さあ、どんなことになっていることやら……」

俺はいま、からた中の毛穴が、ソクソクとしているのだ。この手紙を書き終って君のところに投函したあと、それからの、たまらない時間のことを考えると、ふるえかとまらぬほど、コーフンしてくるのをどうすることもできない

「この俺のうれしさが、君にわかるかい」

二年前から、俺はこの日のくるのを、どんなにジリ

作・

ジリしながら待ち続けたことか。俺はどうとう、こうして、この日を自分のものにするのができたのだ。君と、君の奥さん……幸子といったね……その二人に、今こそ復讐ができるのだ。

うれしいのだ、たまらなくうれしいのだよ、おれはこの手紙を読んでいる君の、その驚いた顔、あわてている蒼白な顔が、眼の前に浮ぶようだ。

だめ、だめ。あわてて、一一〇番に電話しようとしても、だいいち、この俺と君の奥さんのいる倉庫の場所が判るものか。



②

手紙の消印は板橋局になっているはずだがそれだけで、すぐ、ここが見つけだせるわけがないじゃないか。

また、タカをくくって、この手紙を、誰かのいたずらか、ただのおどかしくらいに思うかもしれないが、いやいや、決してそうじゃないぞ。

君は、この手紙を封筒から取り出すときに一緒に中に入っていたものを、ちゃんと知っているはずだ。

そう、そのとおり。それは、君の奥さんの肌の匂いのしみこんだ、スリップの切れっぱしと、君が常日頃、頬ずりし、愛撫した髪の毛の、ホンの一部だ。よく嗅いでみたまえ、自分の愛妻の匂いのわからぬ男はいないはずだから、それが、本当に君の奥さんのものか

どうかわかるだろう……。

どうだ。奥さんはいま、悶えている。

手と足を、縛られて、俺のそばから逃げることもできないで、羞恥と怖ろしさに震えながら、必死に悶えているのだよ。

スリップは、たったいま、俺の手ではぎとってしまったところだ。破るのに手間がかかったが、しかし、それはそれで結構たのしませてもらったぜ。

本来なら、あとでゆっくり裸になってもらうつもりだったが、この手紙の中に入れるために、わざわざ、こうして脱いでもらったものだ。

いいからだをしているぜ、君の奥さんは。何と云ったらいいか、スベスベとして、ムチムチとして、ふ、ふ、ふ。

たまらないよ、おれは。

もう、こんな手紙なんか、どうでもいいよ

うな気持になつてくるのだが、しかし、あとのたのしみのことを考えながら、こうして君への手紙を書くのも、また、別な意味でゾクしてくるよ。

なぜ、俺が、こんな手紙を書いているかわかるかい。

なぜ、俺が、君にこんな復讐をしようとするのか、わかるかい。

いまさら、手紙の字のくせや何かで思いだそうとしても無駄だよ、わかるはずがないのだから……。

しかし、どのみち俺の正体を明かさないと、この復讐の効果がないのだから、俺の正体をあかしてやる。

俺は、二年前、君のためにひどいことをされて自殺した、金井美恵子の夫なのだ。

あのとき、この俺が、どんな思いをしたかを、いま、ゆっくりと思ひしらせてやる。

玲子

君が、美恵子にしたことをそのまま、いやそれよりも数倍のことを、これから、君の奥さんにしてやるのだ。

この倉庫の中には、おあつらえ向きに、天井には滑車もぶら下っているし、縄もいっぱ

いあるんだ。

足首に縄をつけて、両方に引っ張り、それを固定するための金具も、ちゃんと壁ぎわに取りつけられている。もと、何かの機械部品を納めておくための倉庫だったここには、君の奥さんをいろいろ虐める道具や装置にはここかないのだよ。

俺が胸を悪くして療養所に入っている間、君は美恵子をなぶりものにしていたのだ。美恵子はモデルだった。

君がまだ、裏窓編集長でなく、作家だった頃、モデルだった美恵子を、雀の涙ほどの金で自由にして、そのあげく、何度も何度もひどい眼にあわせたのだ。(本文一七〇頁につづく)



ある夜の強盗ごっこ

藤見 郁・文
山田 彬弘・絵



① 夢うつつ

夢うつつのなかで、時計がひとつ鳴るのを
きいた。午前一時だ。

——おそいわ、どうしたのかしら？

あたしは、ちよっと気になった。でも、ね
むい。ふとんのなかは、とてもあたたかい。





勝手口のほうで、コトンと音がした。

そろそろと、戸のあけられる気配。

—— やっとかえってきたわ。

ご主人さまのご帰宅。でも、あたしはべつに起きて迎えなくともよい。このまま、ふとのなかに、ねていればよいのだった。

ひるま、テレビの映画やら、よろめきドラマやらを、三時間半もみつづけた。それで、あたまが痛くなったので、ねる前に頭痛薬をのんだ。

ところが、うっかりして、頭痛薬のつもりで、睡眠薬をのんでしまったのだ。

だから、とてもねむい。頭痛もなおってしまった。

寝室の障子が、音もなくひらかれる。それから、主人の足音が、みしり、みしり、とあたしのまくらもとにちかづく。

「おい、起きろ」

しゃがれ声とともに、あたしはえり首をつかまれ、ひき起こされた。

「ひえッ」と、おどろいたフリをしなければならぬ。

すると主人は、
「しずかにしろ。金をだせ」
と、こうくる。

これから、あたしたち夫婦の、ちよっとたのしい遊戯がはじまるのだ。

② 合意の遊戯

夫婦合意の上の、強盗ごっこというわけ。キバツかもしれないが、これも、子どものない夫婦の、倦怠期をまぎらわせるひとつのテクニク。

強盗に化けた主人に、あたしはなんなく縛りあげられる。

いつものとおりのおしろ手。なさけようしやもなく、びしびしと縛りあげられる。

「ふん、色っぽいねまきをきてやがる」

ひくいかすれ声で、主人はつぶやく。

主人の演技も手なれたものだ。もう、こんな芝居を、十数回もくりかえしている。今夜は汚ないタオルで顔をかくし、よれよれのズボンをはいて、上には黒っぽい作業服。衣裳もなかなか凝っている。

あたしのほうの衣裳は、主人のいちばん好きなきな、あわいピンク色のネグリジェ。これも主人が朝でかける前のご注文。

「あたしね、さっき、まちがえて睡眠薬のんじゃないのよ。だから、とてもねむいの。ごめんなさいね」

あたしは、ぎりぎり縛られていく。するとねむいなかにも、あたしのからだの奥のほうの官能の火が、ぼちちりと赤く燃えあがる。

「こんちくしょう！」

ののしるようにいって、主人はあたしのからだを、乱暴にふとんの上につきとばした。

あたしは倒れ、ネグリジェのすそが、大きくひるがえる。ふとももに主人の目が吸いつく。色が白くて、キメがこまかくて、肉づきがよくて、あたしのからだで、もっとも魅力的な部分。



③ 凄みの演技

「うふふ、いいからだをしてやがる」

主人のセリフ。声の調子の凄みの演技。

あたしの胸もとに手をかけ、ネグリジェのえりを、びりりと左右にひき裂いた。

「あら、まだやぶくのは早いわよ。これ、まだ新しいのよ」

「うるせえ！」縄と縄のあいだから、むっくりと顔をだしたあたしのふたつの乳房に、主人の目がぎらつく。汚れたタオルのふくめんの下の鼻と口が、もごもごとうごめいた。ふふふ、主人は興奮しはじめた。





④ 男の体臭

あたしははだかにされ、あらためてうしろ手に、厳重に縛られてしまった。身にまとうものは、わずかにパンティだけ。

今夜の主人の演技は、いやに熱っぽい。そのおかげで、あたしのねむけも、だいぶさめてきた。

「お、おかねはあるだけさしあげますから、どうか、それだけは……」

あたしの、いつもいう哀願のセリフ。

「ふふふ、いまさら、なにをいやがる、両方、ただいていくさ」

主人は、ズボンのポケットのなかから、くしゃくしゃに汚れた手ぬぐいを取り出した。その手ぬぐいで、あたしの口にさるぐつわをかませるのだ。

へんななおいがした。あたしの鼻と口をおった手ぬぐいには、主人のにおいではないほかの男の体臭があった。

——あっ！

はつきりと、あたしは目をさました。

主人の顔をかくしていたタオルが、あごの下までずり落ちた。

「ゆっくりいたたくぜ、奥さん」

男のゆがんだ笑顔が、あたしにせまった。本物の強盗だったのだ！



はんにゃのめん

カメラ・吉田 久



モデル ■ 谷 まりも
演出 ■ 藤 見 郁





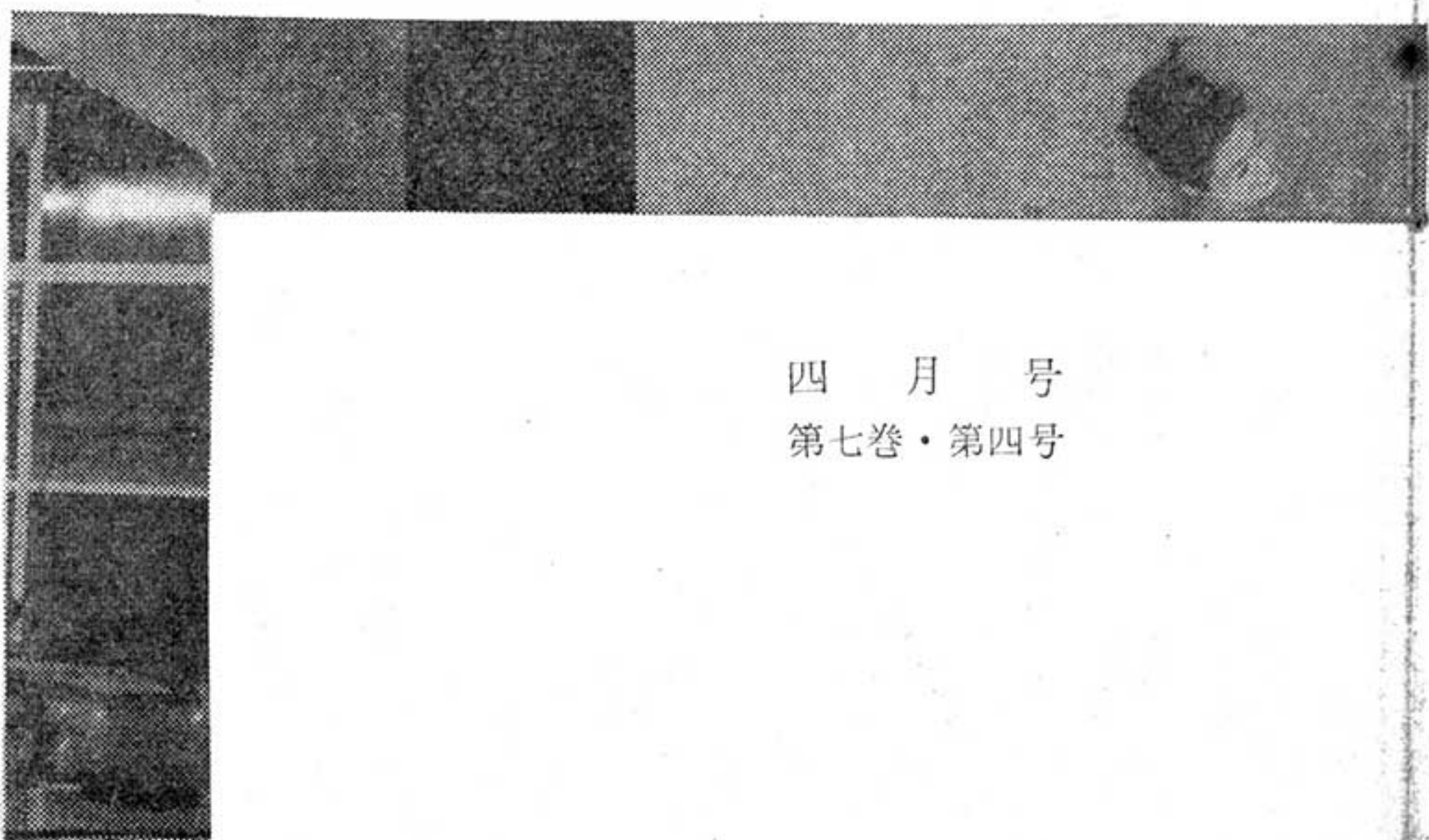
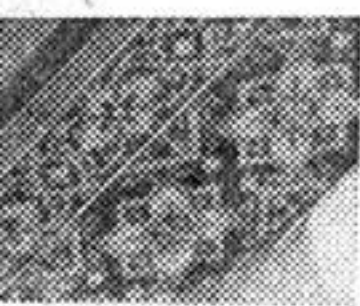








裏窓



四月号
第七卷・第四号

可憐なモデル

娘に巻かれるリボン

とつぜん画伯はパレットナイフを洋子の
微妙なあいだに突きたてました
ひゃあっ……………

綾川妖司

絵・江淵晃夫

立花容一郎画伯は、ある時ドイツ人の友人
から奇妙な絵の依頼を受けました。
それはシュール風の幻想画です。
岡本太郎の若いころの絵に「傷ましき手」
というのがあります。

大きな男の腕の皮膚がクルクルと螺旋状に

剥けて、恰度コンビーフの缶をむいた時、中
の肉が桃色に見えるように、男の筋肉が見え
ている絵なのです。それと同じアイデアで、
それが男の腕でなく、女のヌードになっ
ていくというのです。

「僕は写生しかしないんだ」画伯は云いまし

た。

「女の皮をクルクル剥いて写生するわけには
行かない」

「いや」

ドイツ人は答えます。

「剥くかわりに、モデルにリボンを巻きつけ



て写生すればいい」

「なるほど」画伯はなぜか洋子のことを思い浮べました。洋子というのは近所に住んでいるお嬢さんで、よく画伯のアトリエに遊びに来るのです。

冗談に「モデルになってくれよ」と云ったことがある位見事な体の持主でした。

その時は「いやアだ」と答えましたが満更嫌じゃないということを画伯は見抜いていま

した。彼は頭の中で洋子の裸身にリボンを巻いて見ました。それは見事でした。彼はついドイツ人の注文を承知してしまいました。案の定、洋子はモデルになることを一応了解しました。

「でも、リボン巻くなんて、何だか恥しいな」

「嫌なら無理にとは云わないよ」

「でも、小父さま絵描かなきゃ損？」

「少しは損さ、何しろ君をモデルにするんじ

やなきや、そんな自分の絵じゃないもの描く気はないからね。君の承諾なしに勝手に約束したのは悪かったがね、君は多分大丈夫と思つたんだ」

「勝手ね」「うん、勝手だ。けれど、してく

れれば半分上げてもいいよ」

「いくら位なの？」「三十万位だな」

「三十万！じゃ半分で十五万？ほんと」

「本当さ、でもお金で誘惑するなんてよくな

いな……これは取り消そう」

「わーつまんない」「つまんないって、君みたいなお嬢さん、十五万のお金って使い方知らないだろう」

洋子は暫く考えます。

「そうね、使うのはわけないけど、証拠が残るわね、ママに内証にするの無理だわ……うん、じゃいらない。ただでいいわ」

全くおっとりしています。

画伯にはもともと洋子を承知させる自信があったのでしよう。リボンは用意してあります。

「何だか、矢張り嫌だなア」

簡単に裸になったくせに、洋子は仲々カーテンの向こうから出て来ません。

「小父様も裸なら平気なだけだな」

「馬鹿だな、それじゃなおさら危険じゃない

か」「でもその方が自然じゃない？ 小父様だけ着ていると気になるわ」

画伯は苦笑します。洋子の気が知れないのです。それでも洋子はとうとう出て来ます。案にたがわず、いやそれ以上に、実に立派な体です。

洋子は真裸でにこにこして、矢張り落着かず絶えずもじもじと体を動かしています。

「じっとして！」画伯はリボンを巻き始めます。「あら、顔も？」「笑っちゃ駄目だよ」彼は叮嚀に巻いて行きます。

首から肩、すべすべしたリボンの感触。洋子はくすぐったい様な変な気持です。

腕のつけ根から胸へ、彼女は手を上げようとしてしました。けれど彼はそこで一寸考えました。腕と胴とを別々にすると三度手間になります。胸を巻いて、腕を巻いて交叉し、背へ

三

そして腕へと、巻いて行けば一度で済みます。

けれど、そのやり方で行くとかやがて洋子は自由を奪われてしまうでしょう。それに気づいた洋子は「嫌」と云おうとしました。けれど画伯があまり平気な顔なので、こだわる方がおかし

い様な気持で、ついされるままにしていきました。

洋子の乳房は見事です。くつきりと稍上向きに、本当に処女らしい初々しい姿です。それだけに、リボンは上手に等間隔に巻けま

せん。息をするとりボンがおれてしまいます。彼は少し前からやりなおし、今度は強く締めました。締めるには矢張り腕を一度巻いたやり方が有利でした。彼女の乳房は沢山のくびれを作り始めました。彼女は巻かれるにつれて、息苦しさを感じ出しました。俯向こうと

すれば顔のリボンが突張ります。彼女は何となく切ない気持になって来ました。難しい顔をして巻いて行く画伯の気持もわからず、不安です。その頃になると彼女の手は胴に沿ってびったりと縛りつけられたことになってしまいました。

「やあ足りない、随分いるもんだな」画伯は突然云いました。

恰度手首のあたり、前は下腹部、後はお尻のところでもリボンはおしまいです。彼は端をはさみ込んで、少し後ろに下って汗をふきます。

「苦しいわ」彼女は喘ぎます。息を吸う度に体が締まります。息をするには腹式と胸式とありますがその両方とも出来ず、両方を混



せて体全体、肩まで使わなければなりません。痛くはないけど苦しいのです。そして体の苦しさ以上に縛られている気持の苦しさは、もっと強いのです。それは縛られて見なければわからない気持です。洋子の気持はすっかりふさがってしまいました。けれど画伯はそれに気づきません。リボンで縛られた洋子の顔には表情が無いからです。

「いや綺麗だ。肌がリボンとのコントラストで、肌以上の肌になる。一寸鏡、見てごらん」

彼はアトリエの隅の大きな鏡の前に彼女をつれて行くようにします。

「嫌、小父様ほどうてよ」

「苦しいの？ まア一寸我慢して……」

「嫌、嫌なの、私こんなの嫌なのよ」

彼女は嫌々します。けれど

ど首だけ動かすことが出来ないで体全体の嫌々になります。そしてそのまましゃがみ込んでしまいました。けれど上半身が棒の様になっているので、腰を落し一寸前かがみになっただけで腰の突き出た不自然な、変にエロチックなポーズです。画伯はそこでやっと気づきました。そしてリボンの間から洋子の眼を見、あわててほどき始めました。仲々ほどけません。やっと半ば手が自由になったところで、洋子はリボンを引きずってカーテンの向こうに入ってしまった。

画伯は撫然として煙草に火を点け、肩をすくめます。一服、二服、そのうち笑い出します。洋子は「もう、小父さまなんか嫌い！」とばかりリボンをむしりとりて服を着てこわい顔をして出て来ます。

「何だい。何おこっているんだい？」

画伯の笑顔は人懐っこいのです。見ていると、何だかおこっているのが場違いだった様な気持にさせられるのです。するとおこった顔の向けどころがなくなるのでふてくされて立っています。

「こわくなったのかい？ 先刻……」洋子はその通りなので一寸うなずきます。

「どうしてさ？」「だって……」「縛られたのが嫌だったの？」洋子は照れた様に笑って

もう一度うなずきます。

「だけど、僕は縛ったつもりはなかったんだよ……偶然そういう結果になったけど、僕はリボンを君に飾っただけなんだ。君が勝手に意識するからいけないんだ」

「だって……」洋子は恨めしように彼をにらみます。「小父様だってやはり男でしょう。男の人に縛られて、いくら私でもそんなに無邪気にしてられないわ」

「おや、おや、縛られなきゃ、僕を男と思わないのか？」「そういうわけじゃないけど」

「ふん」画伯はにこにこします。「本当にこわかった？」「こわかったわ？」「本当になにかされると思ったの？」

洋子は一寸びっくりした様に画伯を見ます。「何かって……何かって、そんなことは思わなかったわ、ただこわかったのよ。小父様がこわかったんじゃないかも知れないわ。なんとなく本能的に、そうなっちゃったんだわ」洋子は首をすくめます。やっと本来の彼女にもどった様です。

「私っておかしいわね。小父様こわがったりしてごめんなさい。……それに何かされるって、そんなこと、考えて見たことはないの。……だって私、何かされるってよくわからないのよ」

「かまと……あんなこと云ってる」

「ううん。まさか、私だって知識じゃ、ちゃんと知ってるわ。でも本当にはやはり知らないのよ。私大人ぶったりしないわ」

「立派だね……ところで、それじゃモデルはもうやめ、かい？」

「しても……いいわ、手と別々に巻いてくれれば……」

画伯は、おわびに食事を御馳走すると云って、二人は銀座に出ました。そしてあちこち店をさがし、今度はピンクでなしに燕脂のリボンを二巻き買いました。仲々同じリボンはそんなに沢山なかったのです。

翌日、画伯は裸の洋子の顔を巻き始めました。顔を巻かれるのは本当に妙な気持のものです。人間の個性を否定する様なもので、巻かれているうち洋子は自分が人形かミイラにでもなっていく様な気持になって来ます。

そして肩から腕に巻かれて来て、画伯が又昨日と同じやり方でするのを何となく黙って見過してしまいました。

胸を巻き終えた頃、画伯は一寸彼子の眼をリボン越しに覗き込みました。

彼女は少し笑います。黙っていたことが恥しかったのです。画伯はそこでかまわず手の先まで一緒に縛ってしまふ決心をしました。

今日はリボンが豊富なので脚まで縛ります。

それも一本のリボンを脚の間でS字形に交叉して巻いて行きます。洋子の股は薄桃色でふつくらと湯上りの様です。それが次第に燕脂のリボンにくびれて行きます。

やがて洋子は全身棒の様に縛り上がりました。

「さア、出来た……今日はどうか？　こわい？」洋子は眼で否定します。「じゃ鏡、見てもらんよ」「でも、歩けないわ」「よし、持ってたてやろう」「荷物ね、まるで」

棒の様になっても矢張り生身の女体です。重くて半ばぐにやぐにやして扱い難いものです。よいし、と持上げると腰のところでも少し曲ります。体中のリボンがきしんで、洋子は思わず高いところで息をもらします。

「虫みたいだわ」洋子は自分のまだらの裸身を見ます。

「虫とすりや随分綺麗な虫だよ……それより魚見たいでもあるな、熱帯魚ってところかな」洋子は動いてみようと思います。しかし全然駄目です。わずかにゆらゆらするだけです。

動こうとする意志のある自分が、少しも動けない自分を見ているのは奇妙です。悪夢の中のもどかしさに似ています。ただ手首から先だけが動かせます。すると本当にお魚がひれ

を動かしているみたいにも見えます。

「あわせ鏡をして上げるから、後姿も見てごらん」

「嫌ア、小父様、後から見ないでよ」

「何だ、君の羞恥心で妙な工合に働くんだな……君の後姿は素敵なんだよ」

画伯はわざと後からゆっくりと眺めるのです。洋子はふりむけません。体中がむずむずする様です。

「いじわる。こんなにしといて、小父様、卑怯よ……ねエ、もういいから、早くお仕事にかかってよ、苦しくなるわ」

「早くお仕事にかかってよ……とは色っぽいこと云うね。苦しくなるわ……か」

画伯は妙なことを連想しています。けれど洋子にはわかりません。そこで怒ります。

「本当に苦しいのよ。我慢してるんじゃないの」「いやごめん、ごめん」

画伯はそれから仕事にかかります。仕事にかかれれば流石に冷静になります。顔つきも変わります。頭の中は絵のことで一杯になり始めます。

洋子との距離は二、三メートルも離れていますが、気持はもつと離れます。

何分たったでしょうが、ただ縛られて立っている洋子は何とも味気ない気分になって来

ました。

そのうちふっと彼女は大へんなことに気づきました。もし自分のバランスが崩れたら……：：：そうです。文字通り、棒を倒すように……：：：パターンです。足も動かず、腰も振れず、手もつけません。もろに頭を打つか鼻を潰すか……：：：彼女は不安のとりこになりました。頭がくらくらして崩れてもいないのにバランスが崩れている様な気がして来ます。思わず足の指に力が入り、手の先が空しく動きます。

画伯はしかし目ざとく彼女の体のそうした不安を見てとりました。

「こいつはいけない」彼は立って彼女を支えました。「もしも倒れたら……：：：って思い始めただな」云いながら、そうっと彼女の体を床に倒しました。

「突っかえ棒しとくかな」「いやだわ……：：：突っかい棒なんて」「じゃ紐を張っとくかな……：：：」

「もう大丈夫、そんなことしなくてもいいわ」「しかし、確かに倒れると危い。今度はこっちが心配だ」

彼はそのまま。母屋へ紐を捜しに行ってしまします。洋子は本当に虫みたくにころがっています。一人になるとこの自分の姿の異様さがしじみと感じられます。「馬鹿みたい」彼女は口の中でつぶやきます。

やがて彼は細引を持って来て、アトリエの中二階の手摺にひっかけて端をたらしめます。

そしてその下に洋子を持って行って立たせ彼女の髪を縛り始めました。彼女は気づいて叫びます。

「あ、ひどいわ……：：：小父さま、それ、少し残酷よ」

「うん」彼は平気です。縄を引いて洋子の髪を吊り上げます。

「痛い、痛い。痛いわよう」

「嘘つけ、大袈裟だな、痛い筈ないよ」

「本当に痛いよ」でもそれは嘘です。それほど強くは引き上げられてはいないので

「君が倒れそうになるのは心理的なものなんだ。私は倒れない。倒れかけたら髪が一寸痛いだけだ」と思えば大丈夫なんだ」

洋子はその通りだと思いました。でもその通りだからこそ口措しくなりました。それに何と云っても髪を吊るなんて失礼です。

彼女は彼に対する悪口を捜しました。

「サジスト！ 小父様サジストだわ」

彼は平気でキャンパスに向いながら答えます。「うん、そうだ。僕はサジストだ」

煙草に火を点け、くわえ煙草で描き始めます。眼を細め、彼女をじっと見つめ、「こん

なに可愛いお嬢さんをグルグル巻きに縛り上げ髪を吊して、冷然と絵を描いているのは、なる程立派なサジストだ。違うって云ったって通用しないね」そしてフーッと煙を吐きま

す。洋子はますます口惜しくなります。「ねエ、ほどこいてよ、ほどこいてくれないと、もう二度とモデルになって上げないから」

「いや、結構ですよ。それじゃ、出来上るまで二度とほどこいて上げないだけだ」

「嫌ア、小父さま、本当に吐きそうなの」画伯は一寸注意深く洋子の様子を見てから笑います。

「いや、だまされませんね。言葉は便利。云うだけなら、何とでも、吐きそうとでも、死にそうとでも何とでも、だけど声音は少しも変らない。とても元気で張りがある。そして体の線もしっかりしてる。大丈夫。だまされません、だまされません……描くまでは……とね、ここがこうなって、こうなって……ふーん、線だけで充分ボリュームを出せる。体に等高線が引いてある様なもんだからな」画伯は絵に熱中しています。

「悪魔！ 二重人格！」

育ちのいいお嬢さんの悪口の語彙はあまり豊富じゃありません。

「小父様のいじわる……私本当に泣くわよ」

「泣いてごらんなさい。泣いてごらんなさい。泣けば鳥……か、そうだ涙を描くと、絵が生きるかも知れないな……、さアて、と」

何を云ってものれんに腕押しです。洋子は黙ってしまいます。少し我慢しよう、と覚悟をきめます。けれどきめても切ない気持ちに変わりはありません。本当に胸苦しくなってくるし、倒れたら髪が痛いし、体中が縛られているので火照った様になって来るし、どこか痒くでもなったらどうしよう……とか、脚の筋が次第に硬わばった様に疲れて来るし、画伯は冷い目で彼女の裸を見ては描いているだけで、何時もの彼とは本当に別人見たいになっているし、彼女は哀れな声で云いました。

「本当に、まだなの？」

「あ、もう少し、もう少し、悪いけれどももう少し」画伯は一生懸命描いています。頭がぼうつとして来ます。画伯の姿が霞んで来ます。涙が出て来たのです。リボンが濡れます。

「あ！」画伯はパレットを置きました。「ごめん、ごめん」そして立って来て髪を縄から解いて、彼女の体を床にねかせます。

「ひどいわ、ひどいわ」彼女は泣き出します。「早くほどこいてよ」「よし」画伯は彼女をころりと俯伏せにしました。結び目が後ろにあったからです。

画伯はほどこうとして一寸彼女の俯伏せの体に眼をやりました。

後姿というものはやはり前からより、人格的な要素の薄いものです。よく発達した洋子の背には艶やかな脂肪が乗って滑らかで処女というより、もっと成熟した色気があります。腰も豊かで、リボンで斑になった丸いお尻は、むしろ貪欲な女そのものを感じさせます。後から見ると全く、無邪気な洋子とは別人に見えます。画伯がいつも遊ぶ相手にしている女と変わりありません。いやそれ以上です。彼は一瞬、我にもあらず自分の男性が眼ざめて来るのを感じました。奇妙なことですが、それまで画伯は洋子を自分の欲望の対象として見たことはなかったのです。そして随分いじわるをして来たのですが、そこには直接性に結びついた興味はなかったのです。ところが一度欲望的になった画伯の気持ちの中で、それまで洋子が縛られ、吊られ、うめき、喘いでいた様々のシチュエーションが生々しく色っぽく思い起されて来て、いま目の前にころがっている無抵抗の女体と重なって来たのです。それは急激な変化です。けれど画伯は案外理的で、自意識の強い常識家なのでしよう、「これはいけない」と思いました。彼は洋子が好きなのです。好きな洋子を傷つけてはな

りません。けれど彼の中で目覚めた野獣が仲
手に負えない奴だということも又百も承知
です。それはこの年になるまでに重ねた甘酸
っぱい経験で知っています。

画伯は溜息を吐きながら、ねじ飴の様にく

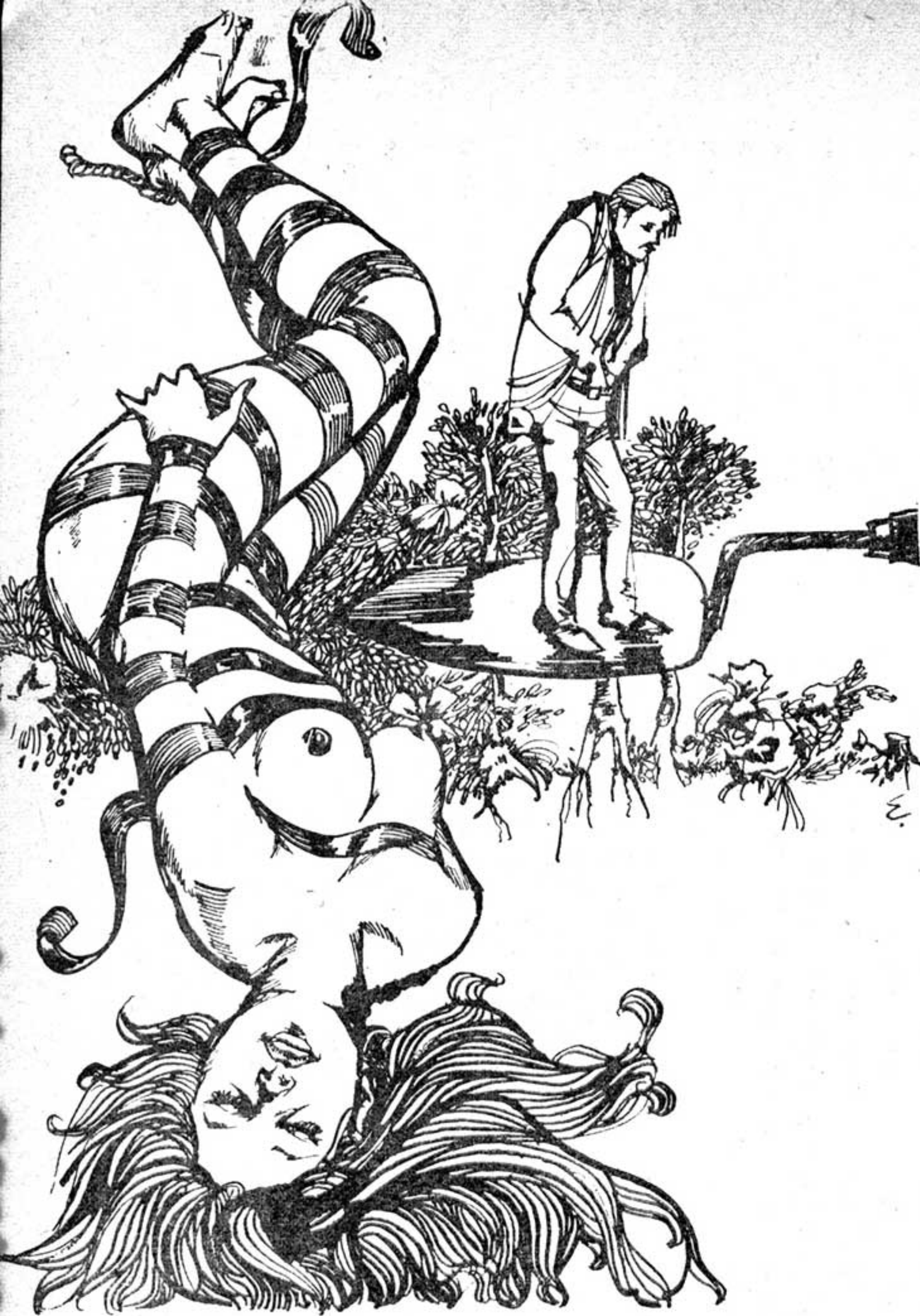
くり上げてある洋子の下半身を眺めます。見
ようによっては無惨です。けれどこうしてい
る限り、洋子はかえって安全です。ほどこい
はいけないのです。危険です。甘く、暗い洋
子の谷間、そこまでほどこいて行った時、火の

様になっている自分の男性を抑えつけられる
かどうか、どうも自分のことながら自信のな
い画伯です。

彼はそつと洋子を又仰向けしました。無邪氣
に泣いている洋子の顔を見れば少しはおさま
るかも知れないと思うので
す。けれど洋子はもう泣いて
いません。

「ほどこいてくれないの？」夢
から醒めた様な声で洋子は云
います。「ああ……」「恥し
い話だが……」画伯はパレッ
トナイフをもて遊びながら話
し出します。彼は自分が欲情
していることを洋子に告げま
す。洋子はびっくりして画伯
を見上げています。画伯の眼
は疲れた様に濁っています。
彼は説明します。男の欲望と
はどんなものか、
「君も知識では知っていると
云ったが……」

云いながら突然彼はパレッ
トナイフを洋子の微妙な間に
突き立てます。「男の欲望と
いうのは、ここで充すんだ」



洋子はゾクツとします。ナイフが冷たかったからばかりではありません。「ところが……縛ってあれば出来ない。ほどけば出来る。切れば出来る」

ナイフはリボンを切りそうです。洋子は眼を閉じています。画伯の眼は苦悩に充ちています。まるで初恋の青年です。純粹に恋し、その恋故にその恋を充すすべを失った矛盾。

洋子は眼を開きます。画伯は溜息を吐きます。「……けろっ」としている。君は悪い子だ。

全く平気なんだね」

「ちっとも平気じゃないわ。何だかわかる気もするの、……でも小父様、私はどうすることも出来ないわ」

「嫌とは云わないのかい？」

「だって、……嫌って云えば小父様、しないの？」「しないよ」「ほんと？」「本当だよ」洋子はじっと彼をみつめます。

「小父様、好きよ」「じゃ、いいのかい？」

「さア……」洋子は笑います。「私、やはり、わかんない。どっちでもいい」

「悪い子だ！ 本当に悪い子だ」

画伯はナイフを抜きます。欲望はもう醒めています。もうほどこいても大丈夫。けれど画伯の胸に別の欲望が湧いて来ます。いや頭の中に残った欲望だけがまださめていなかった

のかも知れません。

「こういう悪い子は、やはりほかかないままにして置かなくちゃ。そして少しお折檻してやろう」

「あつ、嫌！」叫ぶ洋子を又俯伏せにします。「痛くしちや駄目」

「いけない。こんな綺麗な体を粗末にする子は許して上げない」「痛い！ 許して」

「何だ、まだ何にもしてないよ」

画伯は洋子のお尻を叩きます。

「助けてエ、許して、大切にするわ。許して大切に……」

叩く度に動くこうとするのですが、ほんの少ししか動けません。その少しの動きが全身の苦痛を現わして一種媚めいたうねりになります。

す。手首の先だけパタパタ動くのも可愛いものです。洋子は喘ぎます。一種異様な甘さが苦痛の中に混って来ます。ぴったり合わさった脚と脚の間に、自分の肉の弾みが熱っぽく感じられます。打たれる痛みは、重なると鈍くなります。頭はぼうつとして来ます。

「小父さまア、……ママア、助けてよ」

さすがに画伯は笑い出します。そして仰向けにして軽くキスします。

「小父様嫌いだわ！」洋子の眼はうるんできます。「嫌いになってくれて結構だ」

着ている間に画伯はコーヒーを沸かしします。洋子はカーテンの陰で一寸お化粧さえして、ほんの今まで泣いていたとも思えない晴れやかな顔で出て来て早速コーヒーを飲み始めます。時々クスンと笑います。

「この次はいつ？」

洋子は何気ない風を装って、訊ねます。けれど画伯は浮かない顔で、じっと洋子のさっぱりとした顔を眺めます。それから思い切った様に、「この絵はやはりやめにしよう」

「どして？ 三十万損じゃない？」「うん、

しかしやはりどう考えても、これは僕の画風じゃない……いい年して違った画風に深入りするの危険な気がするんだ」

もう一度、画伯は洋子を見つめます。

「君、そう思わない？」

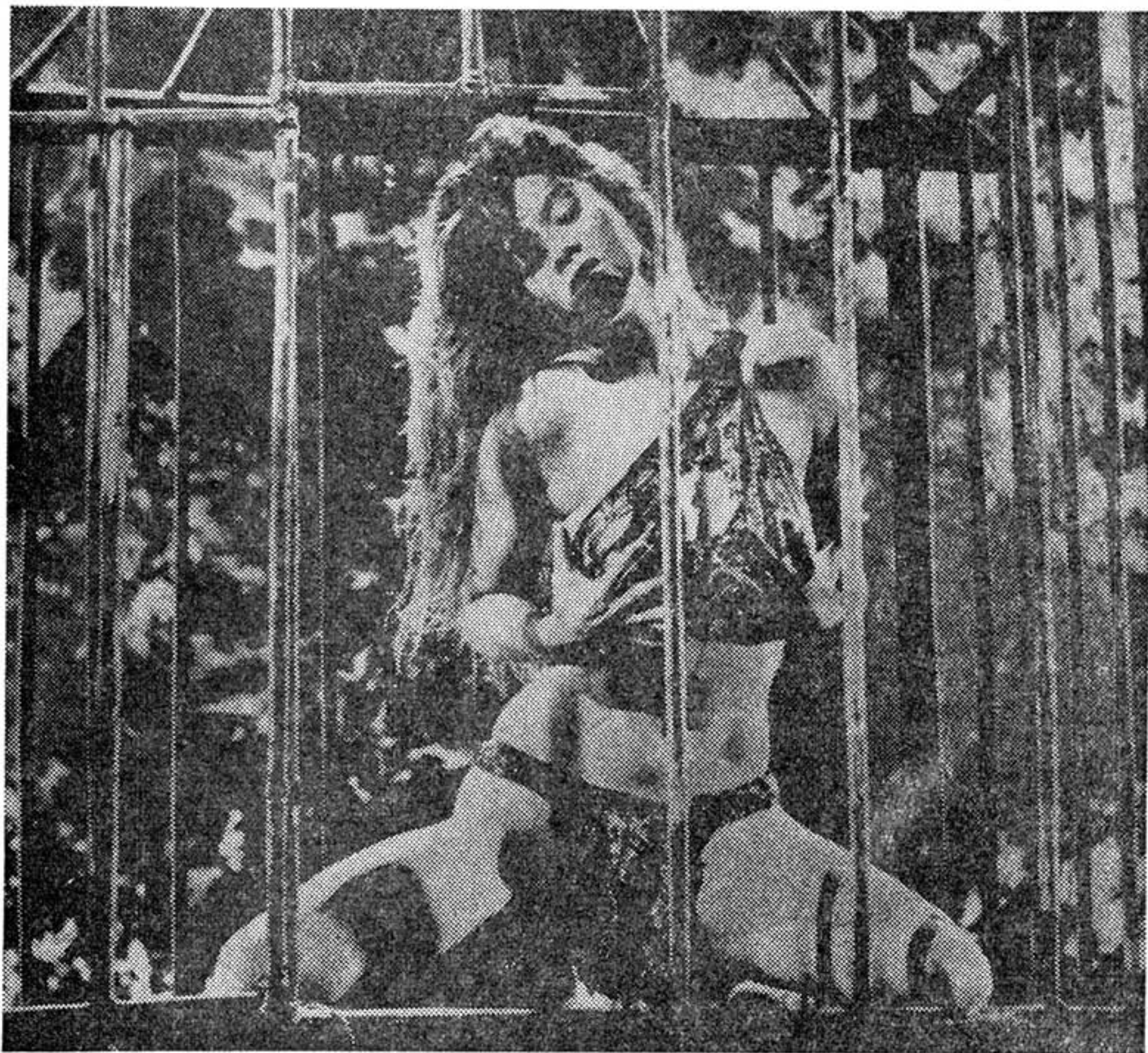
「思うわ」陰のない、甘く美しい洋子の顔。

「又それとは別にいつでも遊びにいらっしゃい」「ええ」洋子は明るく答えます。でも画伯はただお愛想に云って見たのでしたし、洋子も、

「もう私は来ないかも知れない」と。となぜかふっと思えます。

「バイバイ」

その成熟した後姿を画伯は見送ります。外はまだ午後の日ざしが照っていました。



「ヨーロッパの夜」「世界の夜」「アメリカの夜」につづいて、世界の歓楽境を紹介する映画。

ショウ・シトンが連続するなかで、もっとも裏窓派にとって密接なのは「奴隷の快楽」と名づけられたストリップで、濃厚なSMシーンが盛りあがる。

檻のなかにつながれた女奴隷が、音楽に合わせて官能的な身のもだえをみせる。ぴしりッ、ぴしりッという鞭の効果音もはいつて、まことに刺激的。半裸の美女が、髪をふりみだして胸をのけぞらせ、腰をくねらせ、嗜虐味にあふれたポーズが、一種妖しい陶醉にひきずりこむ。

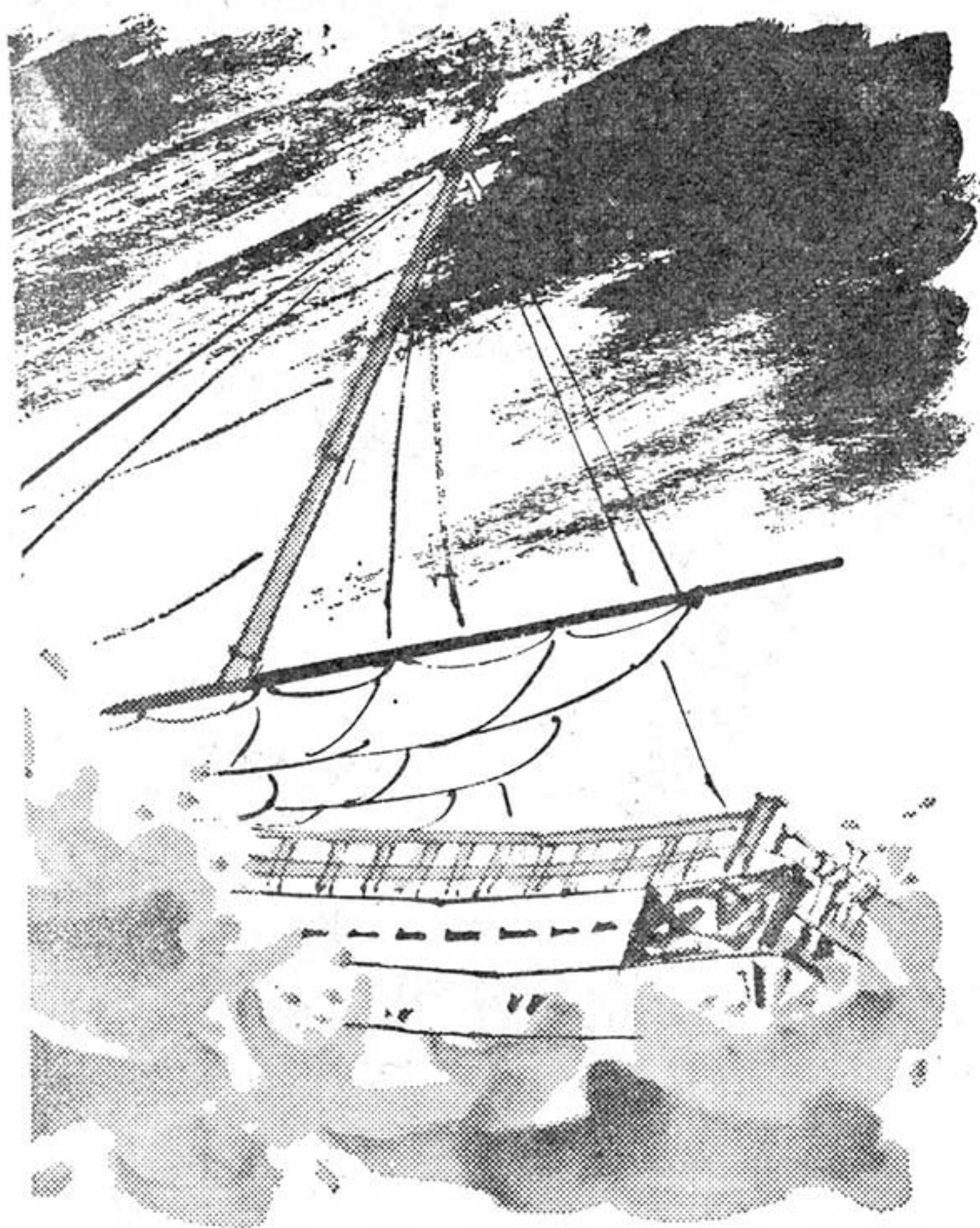
また、ほかに、ドラムの上で踊る超現実的なアクロバットがある。これはまったく一流品で、見事なもの。前に封切りされた「世界の夜」よりも、こっちのほうが、いわゆる、ゲテモノが多くて、その意味でたのしい。

ミスター筋肉コンテストで、男性裸体美の極致も目のあたりにみられるし、女性のローラー・ダービーでは、ローラー・スケートをはいた女同志が、敵味方にわかれて、なぐる蹴るつかむ、の大乱闘を展開する。魅惑と興奮の二時間、という宣伝文句に、まず、いつものわりのない、たのしい映画といえよう。

女人禁制悲聞

姫肌受難船

黒部恭治
東 桂史・絵

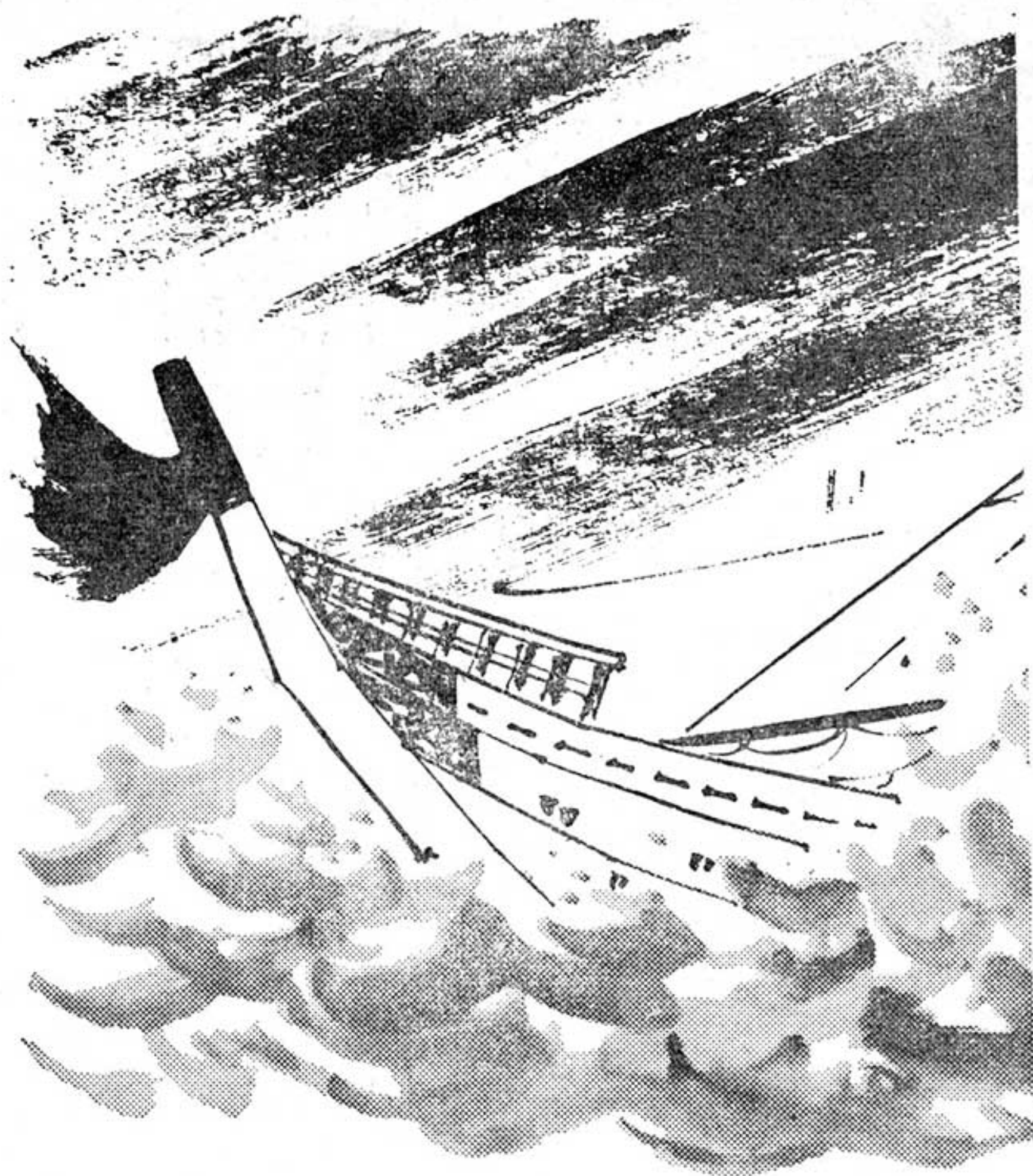


「おい、皆の衆、この船には女が乗り込んでいるに違えねえ。でなくて、こう海が荒れるわけがねえぞ。禁制の子が乗っているから、岬の神様がたたっているんだッ！」

蝦夷地の神威岬沖合、木ッ葉のように翻弄される三百石積の和船の胴の間で、立ちはだかった。船頭が食ってかかる勢いでこう言い放った――

胴の間の船客はしめて十二人。武士あり、商人あり、坊主あり、渡り者もありという顔ぶれだが、見渡したところ、女の姿は一人も見えぬ――

それも道理、昔から神威岬は女人禁制の不文律がある。古老の言い伝えによると、鎌倉時代の昔、奥州平泉からこの地に逃れて来た源九郎義経が、ここでないんだ美しいメノコを置き去りにして、この岬



元祿模様の肌襦袢から大きく波うつふたつの乳房がこぼれ
でた！ 吊るされた二人の頭上からなだれ落ちた波に洗わ
れると、もはや二人の腰をおおうものは一糸もなかった！

から遠く西の大陸へ渡っていったという。置き去りにされたメノコは悲しみに堪えかね、岬から身を投げて自殺した。以来、メノコのたたりで、この沖を通る船は女を乗せている限り、必ず暴風に遭って沈んでしまう。蝦夷地に出稼ぎにやって来る知人は、妻や娘を絶対に同伴できなくなってしまったのだ。

忍路高島及びもないが

せめて歌棄磯谷まで――

追分の文句はここから生れたという。夫や父を見送って、同行を許されない妻や恋人が男恋しの心を切々と唄ったものなのだ――

「この船に女だと。馬鹿を言うもんでねえ。船頭さん、見る通り、女っ気など一つもありやしねえじゃねえか」

客の一人が抗議するのを、船頭は頭を振って高飛車に決めつけた。

「いいや、たしかに女が乗っている。三十年からこの海で暮している、おれの目に狂いはねえ。今日は朝方の雲行を見定めて、風の間違いねえと見込んだからこそ、船を出したんだ。こんな突拍子もねえ大時化になるはずはねえ。きっと女が乗っているに違えねえ」

船頭は三白眼を光らせて、十二人の客を一人々々、鋭く見渡していった。

その視線が、胴の間の一方の隅で、急に釘づけされたように止った。

その隅に、二人の客が乗っている。

笠をまぶかにかぶった、派手な元祿模様の小袖姿の若衆二人。積荷の蔭に隠れるようにして、肩を寄せ合い、身を固くして坐っている――

船頭の視線を避けるかの如く、二人の若衆は笠を傾け、顔をそらした。

船頭ばかりではない。他の十人の客も、次第に両人の若衆に注目し出していた。

ぐらりと船が傾く。船は今にも覆えりそうにゆれる。客はよろめきながら、柱や床板にしがみついて、なおも若衆達を見つめていた。

船頭が、さすがに慣れた足つきで、大ゆれの床をふみしめながら近寄ってゆく――

二

「そこなお客さん達、聞かしやった通りだ。

女と思われなくなったら、かぶりものを取って、顔を見せておくんせえ」

近寄って来た船頭の声に、うつむいた二つの編笠が一そう傾き、かすかにすくめた両人の肩がぶるっとふるえた――

こいつら、いいいよ臭い！

「ええ、取れというのに、聞えねえのか！」
いら立った船頭が、積荷の蔭へ足をふみこ

みざま、両手を別々に二人の笠にかけて、ぐいっと引んめくるようにはね上げた。

「あっ」

「何をしやる、無礼な！」

小さく叫んだ二人の顔が笠の下からのぞかれて、若衆鬘こそ結ってはいるが、二人とも色白の頬に紅さえ散らした、花も恥じらう風情の美貌――

「手前たち、女だな！」

「ち、違います！」

思わず口走った一人の声は、到底男のそれでない、甲高い叫びだった。

今一人は色を失って身をふるわすばかり。

船頭はじめ十人の客の視線を浴びて、真白な両手を胸に当て、あやしく高まる二つの隆起を押しかくそうとする。

もう疑いない――

「太い奴らだ」

「女人禁制を承知で、若衆などに化けやがって」

「おかげでこちらは飛んだ迷惑だ。すぐ下りてもらおう」

総立ちになってわめき立つ一同の中へ、船頭に手をつかまれた若衆が、一人ずつ、どんと突き飛ばされ、打ち重なってころがった。

「ああっ」

「お許し――」

二人とも、笠はむしり取られ、若衆鬘もさんばら、元祿模様の裾がひるがえって、どうにも隠し切れない、真白なふくらはぎが痛ましくむき出される――

起き直ろうとしても、右に左に、ゆり上げゆり下される船板の上では、二人ともまりのようにならねて立つことさえできない。やつと柱につかまって身を支えた二人は、蒼白になっ

て一同を見廻した。
もはや、だれの目にも、女ということは明らかだ――

「おい、皆の衆」

二人の前に立ちはだかった船頭が、十人の客を見まわしながら言った。

「このままにしておけば、メノコの祟りで船は沈んでしまふに決っている。祟りを防ぐには、メノコの死霊をなくさめるこつた。それには、この二人の女を痛い目に合わせた上、海へ放りこんで人身御供に上げるほか仕方がねえ。かわいそうだが、そうしなくては、船は助からねえ。おれ達一統まで巻きぞえ食つてお陀仏になっちまう。皆の衆、人身御供を承知してくだせえよ」

三



かわいそうだが、船頭の言う通り、大勢の生命には代えられない。巻きぞえ食って土左衛門などは真平だ――

十人の客はお互いの顔を見合せて、言わず語らずのうちにうなずき合った。

その時――

「お許し、お許しくださいませ！」

柱につかまっていた若衆の一人が、突然、

身を投げ出して一同の真中に手を突いた。

「いかにも、わたしは女でございます。悪うございました。女禁制と知りながら、つい、

御主人さまに無理にお願いしてお供に同船させていただきました。わたくしは、どんな罰でも喜んで受けます。人身御供も構いませぬ。でも、こちらの御主人様は違います、御

主人様は女ではございません。男、男でございます――

います。どうぞ、御主人様だけはお許しくださいまし。決して、決して、御主人様は女ではございません……」

覚悟を決めた必死の顔色で、彼女は、自分の主人という、もう一人の若衆をかばって嘆願するのだ。

だが、それは、はかない哀願に過ぎなかった――

「ふっふっふ、そうかい、お前は女で、そっちの御主人とやらは男かい。それならそれでもいいが、その証拠を見せてもらいたいな」

「えっ」

「雑作アねえ、御主人とやらに、ちょいと肌を見せてもらいてえ。なあにちよつくら、片肌脱いで見せるだけで結構だぜ。男なら手間暇いらねえはずだ」

さつと顔色を変えた二人は、船頭の野卑な言葉に憤然と相手をにらんだ。

「何だ、何だ。その目は、え、おい、男だ、男だといって、片肌脱ぐほどのしぐさも知らねえのか。ふん、笑わせるな。おれ達の目を節穴だと思っているのかッ！」

つかつかと進み寄った船頭は、はっとすりつく侍女を脇へ突き飛ばしておいて、主人らしい若衆へつかみかかった。

「ああっ、おのれ！」

きやしやな利腕を逆にねじ上げられて、若衆は絶望の声を上げた。うつ伏した若衆の帯がずるずると引きほどかれ、元祿模様が肌襦袢もろとも、大きく割れてめくり返る。むき出した肩の下から大きく波打つ二つの乳房がのぞかれた。

「姫様！」

突き飛ばされた侍女がやっと起き直って、

よろめきながら狂気のように船頭へ飛びかかっていた。

「無礼は許しませぬぞ、この御方は、その方ごとき下司どもの——」

「花路、だまりや。申すでない。何も言うでないぞえ！」

二人の女のただならぬ言葉づかいに、さすの荒くれ男もぎょっと身を引いた。

四

「おい親方、このままでいたら船がくつがえってしまうぞ。早く女を人身御供に上げるんだッ！」

舳の方から水夫の叫び声がひびいた。それが一瞬ためらった船頭の心を定めさせた。

「よしッ」

くそ！ どのだれ姫であろうと、船の上ではおれの支配だ。海の掟には姫も下司もあるもんか！

「おい、手前達二人、さつさとその着物を脱げ！」

「ええっ」

「男の着物なんぞ着てやがって、メノコの死霊が納得するかよ。二人とも裸になるんだ。さつさと脱げ！」

紙のような顔色になった二人の女は、しっ

かり手を握り合ったまま、身動きもしなかった。

「脱げなきゃ脱がしてやろう。おい、皆の衆も手を貸してくれ」

近寄った船頭はもう一度若衆の着物へ手を掛けようとする。

「待ってください、待って——」

花路と呼ばれた侍女が船頭に取りすがって叫んだ。

「脱ぎます、脱ぎます。おっしゃる通り、わたくしが裸になります。でも、姫様だけはお許しを——船方衆、どうぞ、わたくしの体を思う存分になされませ。この肌に縄打って、胸のいえるまでお責めなされませ。責めて、責めて、責めさいなんだ上、海の底へ沈められても構いませぬ。その代り、姫様だけはお見逃しを……」

ならねえ——と言いかけて、急に思い直したらしく、船頭はにやりと笑った。

「そうかい。そんなに言うなら、お前の忠義に免じて、姫様とやらは大目に見よう。さ、そんなら、早いとこ裸になってもらおうじゃねえか」

「はい、姫様さえお見逃しくだされば、わたくしは喜んで——」

立ち上った花路は自分の帯に手を掛けて、

するすると解き始める。

「あ、待ちや、花路、そなたばかりに……」

「いいえ、姫様、花路は姫様のお身代りとなれば本望でございます」

姫を制しながら、花路は元祿小袖をさっと惜し気もなく脱ぎ捨てた。

船頭はじめ十人の客の視線が花路の裸身に集まった。

腰から下に、白い、下帯代りの布を巻いた花路、十九か二十の若い肌をさらして、さすがに恥じらい深げに乳房を抱いて立った。みだれる髪の下から流れるふくよかな肩と胸の線、乙女らしく張った腰や太腿の豊満さ——殺風景な胴の間に時ならぬ花が咲いたような美しい裸だった。

「さ、縄打ってくださいまし」

花路は静かに両手を後ろへ回して言った。

五

「ふん、いい覚悟だ。望み通りにしてやろうぜ」

せせら笑った船頭はいつの間に取り出したか、荒縄の束をしこいて花路の後ろへ回る。

ぐいと両腕がねじ上げられる——

裸の上半が思わず折れそうに前へ傾く。それを引き起すように荒縄が乳房の上へからん

で締め上げた。

「むうん」

さすがに堪え切れぬうめきが唇を割った。

キリリ、キリリ、とからんでは二の腕かけて絞り上げる荒縄に見る見る豊満な乳房が縄の下にゆがんで、ぶっくりふくれ上るが——

「さあ、どうだ。いい姿だぜ、うれしかろうな、へっへ」

縛り上げた花路の腰をどんと突き飛ばして船頭は毒々しく笑った。

よろよろして、思わず横倒しになる花路、それを見向きもせず、船頭は、横の柱にすがっている姫の前へ進んだ。

「さあ、今度はお前さんの番だ。さっさと着物を脱いでもらおうか」

「えっ」

姫はむろん、花路まで、不自由な身をよじって船頭の顔を見つめた。

「約束が違います。姫様はお見逃しくださるはず……」

「うっふっふ、馬鹿も休み休み言えッ！ この嵐を乗切るに、姫であろうが、おかめであろうが、女を乗せたままでもいいものかどうか、考えて見やがれ。さあ、ぐずぐずするな、さっさと脱げッ！ それともおれが脱がしてやろうか！」

おびえた小鳥のように立ちすくむ姫の手を取って、船頭は情け容赦なくその場に引き据える——

「あ、あれッ！」

「待ってください、この方は、このお方様は——」

「やかましいッ！」

姫の逆手を取ってねじ伏せながら、船頭は威丈高だった。

「おい、よく聞きな。この娘がどんなに身分の高い人であろうと、金輪際容赦はしねえからあきらめろ。後でどんなお咎めを受けようが、このおれが一人で責めを受け持つ。たとえ逆さばりつけになろうが構わねえ。おらあこの二人を人身御供に上げるんだ。大勢の乗合衆と、積荷をあずかる船頭として、だれが何と言おうが、おれア船を沈めるわけに行かねえ。お咎めを恐れていては、この海の船頭は勤まらねえんだッ！」

言葉は野卑だが、さすがに長い間海で暮しただけの威厳を見せて、船頭はきっぱり言い放った。

もはや口をきく者もない。

ねじ伏せた姫の帯を解き放し、元祿模様の着物と肌襦袢を無残に引き剥がす船頭の手もとを、一同は凝然と見守るばかり——花路も

今は返す言葉もなかった。

六

わッ、と嵐の中に男共の下卑た笑声、罵声
が起こった。

上に、下に、雲の中から波の底まで、ゆり
上げ、ゆり下される船楼の上に、松前家の息
女滝姫と侍女花路の二人は、みじめな裸身を
さらして立っていた。

二人とも腰の下に形ばかりの白布をまとっ
ただけ、ほとんど全裸に近い肌を潮に打たれ、
風にさらしてギリギリ荒縄でくくり上げられ
ていた。

蝦夷藩主松前家の息女ともあろう身が、侍
女とともにこのありさま——舌を噛んで死に
たい。

二人の縄尻は頭上で一本につながり、帆綱
の一つに結びつけられている。立ったなり、

身を伏せるすべもないのだ。

だが、立っていられるならまだよい。木の
葉のように左右に傾きつつ上下する楼の上で
は、二人とも直立していられず、間断なく足
を滑らしてよろめき、ともすれば倒れかかっ
て縄尻に辛うじて支えられるのだ。並んで立
っている二人はお互いにぶつかり合い、はね
かえりながら、裸身をもつれ合って、やっと
立ち直る。立ち直ったと思うのもつかの間、
次の大波がたちまち二人の足をさらって、ま
たもや二つの女体を宙にのた打たせるのだ——
間断ない裸踊りを強いられている二人だっ
た。

楼の下では船頭や水夫をはじめ、乗合客ま
でがこの自然の拷問に見とれている、生死の
境にありながら、男どもの野卑な視線が八方
から二人の裸にそそがれていた。

二人とも休むひまとてない裸踊りの連続に

綿のように疲れていた。荒い息づかいとともに

に乳房をふるわせ、肩を波打たせている。腰
布はほどけかかって辛くも下腹部にまつわっ
ている。波のしぶきで全身はぐっしりと潮
にぬれ、ぬれた肌に高手小手の縄目がいよいよ
よきびしく食い込んでいた。

ザ、ザーッ。

ごう、ごうつ。

波風はますますはげしく船を打ち、船楼は
崩れそうに大きく傾いた。滝姫と花路は一つ
によろめき、足をすべらせて、ぐうんと宙に
浮いた。

「ううん」

「むうっ」

宙吊りになった二つの女の悲痛なうめき、
小山のような大波の頂きから、船はぐらりと
奈落の底へ落ちこみ、今度は逆の方向へはげ
しく傾く。

「あっ」

やっと足をふみしめたのも一瞬
の間で、二人はふたたびよろめい
て反対側へ崩れると、又も足を取
られて宙に吊り下った。

「ひ、ひいっ」

「姫様！」

二人の頭上からなだれのように





「いいえ、姫様……」

よろめきながらも、花路は姫の肌をかばうように前に立ってささやき返した。

「お家のためよかれと思って姫様のなさったことです。花路は姫様とともに海の底に沈んでも少しもいたしません。ただ、姫様がお痛わしいばかり——」

「いえ、私は自業自得です。この嵐では、船頭はじめ乗合衆を納得させるには、どうしても人身御供を避けられません。松前家の姫だからとて人身御供を拒み、そのために船が沈むようなことがあったら、人々の恨みを買うことになる。お家に傷をつけないために、身分を隠して人身御供を甘受する覚悟はとうから定まっています。そなたを道づれにするだけが不びんです……」

ささやき交わす間にも、波はいよいよはげしく、船の腹を打って二人の頭上へしぶきを散らす。立っているだけでも息絶え絶えの二人だった。

「いよいよだめだっ。二人を海へ落とせ。だれかあの帆綱を切るんだ！」

船頭の叫び声に応じて、一人の水夫が七首

波が落ちて来て、吊された女体を洗い去ると、もはや二人の腰を蔽うものは一糸もなかった。

七

「窮迫した松前家の財政を立て直すには、ぜひとも開拓をすすめて運上金の上りを増さねばならぬ。そのためには、蝦夷の奥地へどしどし知人を移住させる必要がある。だが、和人の大量移住と開拓進展の上に、非常な妨げになるのは神威岬の女人禁制の風習だ。何とかして、迷信深い船乗をすかして、この風

習を改めさせる法はないものか——」

松前家にとって悩みの種のこの迷信を打破すべく、みずから男装して侍女とともにこの航海に乗出した滝姫だった。うまくいけば、一挙にして迷信を一掃することができる。が、万一、失敗したらどうなる——？ 内心恐れていた、その最悪の事態が起こってしまったのだ。

「花路、ゆるしてたもれ、私が向う見ずに城を抜け出し、お前をさそってかようなことをしたためにこの災厄——みな私のせいです。許してたもれ……」

を口にくわえて、身軽に帆柱へよじ登っていった。

「二人とも地獄へ行きな、へん、悪く思わねえでくんなよ」

見上げるばかりの大波がまたも迫って来る。その間合いをはかりつつ、水夫は縄尻を結んだ帆綱を切り放しにかかった。

「あつ、あ……」

二人の口から思わず悲鳴が洩れる。ぐうんと波の上にゆり上げられた船は大きく傾いて水底へ突き落とされそうにのめっていった。

二人の足が楼をすべる。二つの女体の重みで帆綱がびいんと張った。

「うっ、うう……」

「ひいっ」

斜めになった楼の上に、二人はまたもや宙吊りの形でぶら下る——同時に、張った綱はぶつんと音を立てて切れた。

八

「ああっ」

切られたはずみに、二つの女体はもつれ合つて折り重なりながら、楼からまりのように放り出され、逆巻く激浪の中へ落ちこんでいった。

「姫様ッ！」

叫んだ拍子に水を呑み、高手小手に縛られた裸身を必死にもがいたまま、花路は目の前が真暗になっていった。

姫も同じこと、この方は水に落ちた瞬間に腹を強く打って気を失っていた。二人は一つに縛られたまま、あえなく気が遠くなった。それがかえって二人に幸いしたのかも知れない。——

何刻たったかわからないが、花路は不意に胸のあたりが熱くなつてぱつと水を吐き、同時にふっと意識を回復した。

「おお、気がついたぞ！」

「花路、しっかりしたも、私です……」

ほんやり聞いた花路の目の前に、滝姫の氣づかしげな顔があった。

「あつ、姫様！」

鉛を呑んだように重い身体を起こした花路は、どことも知れない民家の炉端にすわっている自分と姫、それに周囲を取り巻いている大勢の漁師風の男達を見回した。

「花路、私達は海辺に流れついていたところを、この村の人々に救われたのです。ここでは、人身御供の女が流されて来るのをたびたび見ているので、私達もその中の者だとすぐに察しがついたらしいのです」

花路の身に口を寄せてささやく姫の言葉に

花路はほつと息をついた。

「そして、その船の人達は……」

「その船なら沈んだぞよ」

年配のひとりが重々しい口調で答えた。

「わしらは海辺で見っていた。お前さん達の乗っていたらしい船が、沖でもまれていたのを見ていた。それは、沖の難所で岩にぶつかつて粉々に砕けてしもうた。乗合の衆は一人も助からぬ。人身御供のお前様二人だけは浜に打ち上げられて、どうやら息を吹き返した。

人身御供など、他愛もない迷信じゃ。神威からこつちの者でそんなもの信じておる奴は一人もおらんでのう、はははは」

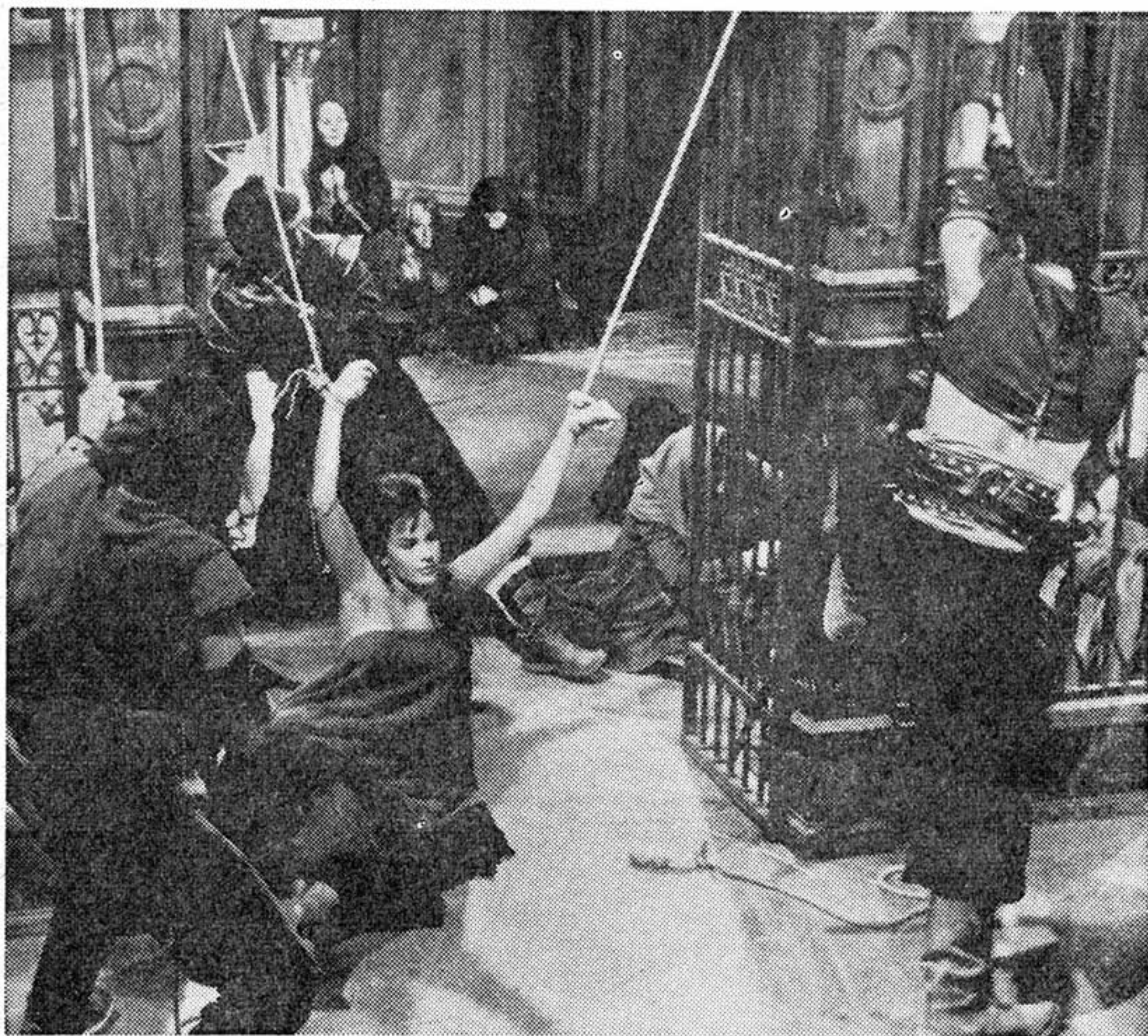
年配の者の言葉に漁師達は顔見合せてうなずき合つた。よく見ると、中には女の姿も幾人かまじっていた。

「花路、私達のしたことは無駄ではなかったのです。今に、こんな迷信はきつとなくなつてしまふに違いありません」

姫の言葉に花路は改めてうなずき、姫の勇氣に今さら打たれるのだった。

数日後、函館から二人を探索する御用船が到着し、姫と花路は無事に救い出された。

江差追分に歌われた女人禁制の掟が有名無実となり、和人の女が神威岬を越えるようになったのは、それからまもなくである——



おなじみの蒙古王ジンギスカンが、アジアからヨーロッパ各国を荒らしまわっていた十三世紀ごろのおはなし。

といっても、この映画で活躍するのは、ジンギスカンの長男のオゴタイ（ジャック・パランス）という、残忍非情な王。

オゴタイの妻ウルナにふんするのは、アニタ・エクバーグで、これがまた冷酷残忍、M派むきの悪美女。雄大なSMシーンが、ずい所に展開され、裏窓派の読者にとっては、ちよっと見のがせない映画といえよう。

蒙古軍に抵抗する美女アミナは、数度も捕われ、拷問にかけられたり、いけにえとしてハリツケにされたりする。

エクバーグも、その豊富な肉体を、バランスのために、ふとい皮ムチでびしびし叩かれる。このエクバーグが、半裸の勇壮な姿態で馬を疾駆させるシーンはすこぶるM派むき。

ラストは、ジンギスカンの葬儀シーンで、火葬台のまわりに、男女のハリツケ柱が林立する。炎がヒロインの肌をなめはじめ、あわや、という瞬間に、救いの手があらわれるのは、れいのおりだが、壮大な娯楽映画で、本誌読者もたっぷりたのしめます。（豊）

①拳銃強盗

「ホールドアップ！」

ドアを蹴って飛びこむなり、拳銃が三挺、黒い銃口を向け、室内の男女を釘付けする。

瞬間、見返った幾つかの眼が醜くつりあがり、おびえて、両手を頭上にさし上げた。

白昼の拳銃強盗——三人組は、おれとニグロのブラッキー、イタ公のアンドレアだ。

三人とも、眼だけをくり抜いた黒い袋で覆

鉛色の牙を磨ぐ

彦彦 丸克 文・烏
二 涉 沖 絵



面しているのだが、こいつが予想した以上に連中に恐怖を与えているらしい。

ここはシカゴ、ゴールデン・アロウ・ストリートのパーク・マーケット、経理室。

この店は銀行のしまる三時前に、午前中の売り上げ金を銀行へ運んでいる。おれたちはその時間を狙って押し入ったわけだ。

札束を積んだデスクに憤怒の顔をふるわして突っ立っているデブは女社長のアナだ。

近づくなり、おれはぶら下げていたスーツケースに札束を押し込んだ。口惜しく見返す女社長の鼻先をびしゃり撫でつけてやった。(強欲婆ア、僅かな売上げ金の着服でおれをクビにするから、こんな目にあうんだ)

女猫は

②金髪娘の首飾り

貰うものを貰ってしまえばもう用はない。
一同を威嚇して立つ相棒を促して退散だ。
「命が惜しけりや、二分間じっとしてな！
電話や非常ベルのコードは切つてあるんだ」
銃口を向けて後退しはじめた時、ドアの近



くにいた若い金髪女が、逃げようと動いた。
「ぶっ殺して欲しいかッ！」

ブラッキーのでっかい掌が女の顔に飛んだ
ひいーッ！ 悲鳴あげて、金髪女は床に叩
きつけられた。痛さと恐ろしさ、女はひいひ
い泣きだした。

「静かにしねえかッ、この野郎！」

びしッ、びしッ！……ブラッキーの掌は容
赦なく金髪娘の顔面で鳴り続けた。

「そのへんでやめておけ、早く出るんだ！」
たまりかね、おれは出かかった部屋の外か
らどなった。ああ、と去りかけたブラッキー
は手を伸ばして女の首飾りをひっぺがした。

「あッ、お願い。それを持ってかないでッ」
追いつがる女の顔をブラッキーの鉄拳が
殴りつけた。ぶっ倒れた女は動かなくなった。

ニグロは前後の見さかいなしだから困る。

しかし、おれたちの計画は大成功だった。店
の裏に止めておいた乗用車に飛び乗ると一目
散、おれたちのアジト、ガレージへ向かう。

車のなかで覆面をはいだ。緊張がほぐれて
三人ともわけもなく笑いがこみあげてきた。

女から奪った首飾りが気にいったのか、ブ
ラッキーはずっと両手でもてあそんでいる。

「ブラッキー、そいつはすぐ故買屋へ売っ払
っちゃえよ、へたすると足のつくもとだぜ」

③最低な野郎

『スーパーマーケットに三人組拳銃強盗

計画的犯行か、百二十万ドル強奪さる!』

翌日の朝刊に、派手な見出しでおれたちの仕事が紹介されている。おれがそいつを読むと、ブラッキーもアンドレアも英雄気取りで酒臭い息を吐いて奇声をあげてやがる。

へたに動いて足取りを探られては、せっかくのボロもうけも水の泡。三人は裏街河岸のボロガレージで一夜明かしたのだ。

ここは親父がおれにのこしてくれたたったひとつの財産だ。が、まったくさびれ果て、ドブ鼠どもの遊び場化しちまっている。

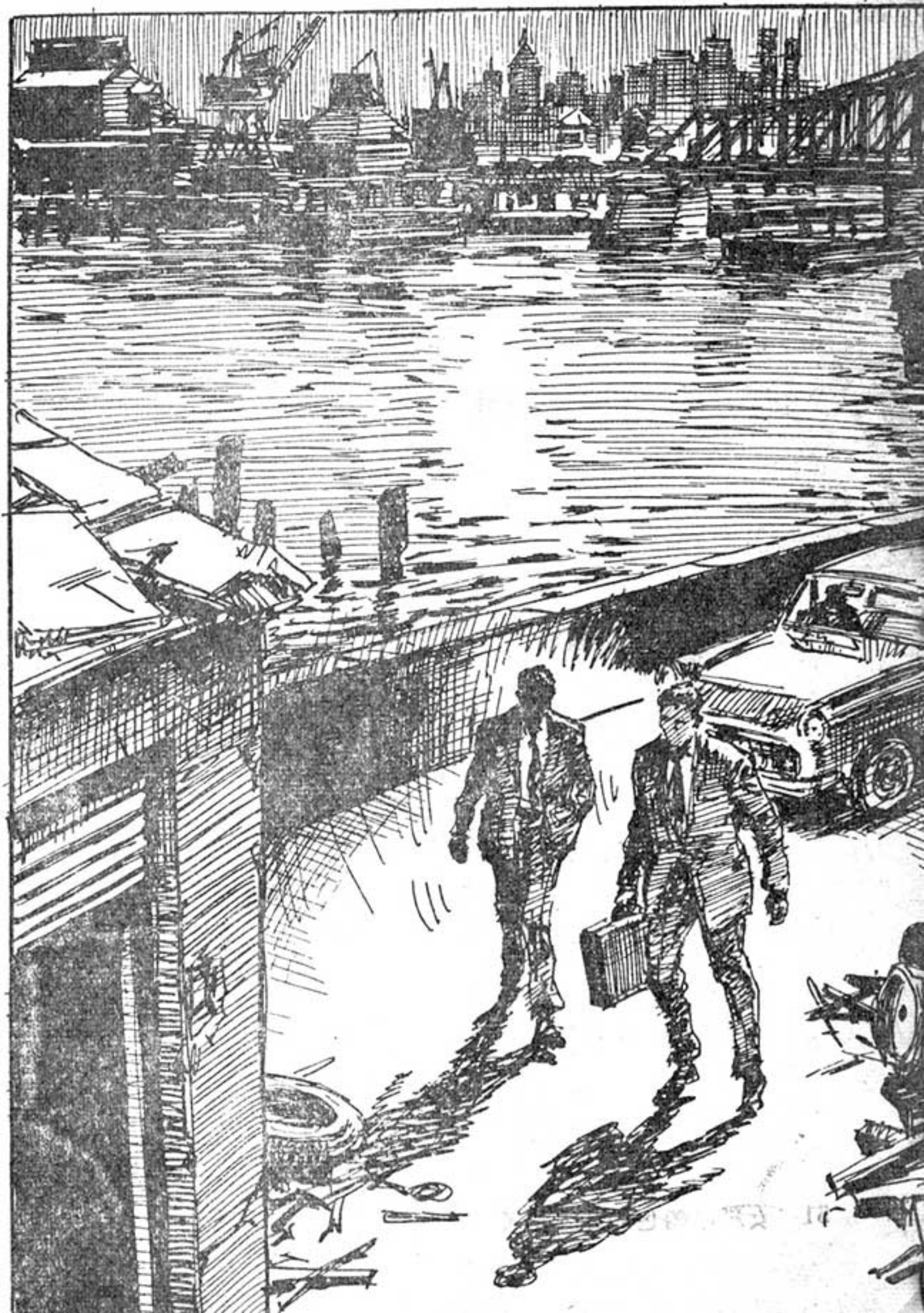
かつては十名以上の職工が働いていた。

ところが、両手の爪に脂垢をため、脂やけに真っ黒になって働くのはおれの性分にあわねえ。そんな仕事は女どもが相手にしない。

現に、親父だって、女——つまり、おれの

お袋に逃げられた口なのだ。

親父は黙って働き続けた。おれを大学までやってくれた。おれの出世にすべてをかけていたのだ。卒業と同時に銀行採用が決まったときは頭取りになったような喜びようだったところが、親父の期待通りにことは進まなかった。おれは銀行の金につけてクビ。



それ以来、なにをやってもつかなかった。

親父の失望は大きかった。とどのつまり、泥酔し、トラックにはねられて死んじまった。

店も左前——職工にも賃金が払えず、みんな逃げられてしまったのだ。

お節介屋がみかねておれをパーク・マーケットに世話してくれたが、ひと月もたたな

った。女社長の野郎、給料もくれずおれを放

り出しやがった。その報酬が百二十万ドル。

ざまアみると、ばかり喜んじゃおれない。

事件記事のおしまいに目撃者談が載っている。首飾りを奪われた金髪娘、リンダが当時の模様をくわしく語っているのだ。ひとりには黒人だったとはっきり証言している。

④ 女同志の喧嘩

おれたち三人がシカゴでウロウロ動き回ったところで、大海の木の葉だ。自由でもしない限り犯行が露見する恐れはまずあるまい。だが、慎重に行動するに限る。ずるがしこいアンドレアは心配ないが、問題はブラッキー

だ。安全を計って奴を高飛びさせることにした。切符を買い与え、情婦のニグロ女デデと二人、ニューヨークへ発たせた。

金は三人で分配し、ひとり四十万ドル。半年は遊んで暮らせる。おれはニールのアパルトに転がりこんだ。金は見せなかった。女って奴はゼニをみるとつけあがる。派手に振舞

って墓穴を掘る真似はしたくねえ。

食事に誘ったり、美容院へ通わせたりしときゃ、女は機嫌がいい。そのくらいのせいたくで足がつく心配はないだろう。

ブラッキーを發たせた三日目の夕方——。イルミネーションの誘惑めいたまたたきにひかれ盛り場へ出た。ごぶさたの三流バーをのぞきたくなって小路を曲がりかけた時だ。

突如、舗道前方から女のののしりあう声。

白と黒の女が、つかみかからんばかりに睨みあい、なにか口汚く叫びあっているのだ。たちまち野次馬の群れ。おれも駆け寄った。と、その女たちを見たおれは、全身凍てつく思いがした。無理もない。ひとりはリンダとかいうストアーの金髪娘。ひとりはデデだ。ブラッキーの野郎、發たなかったらしい。黒豚になめられたと思うと、たまらなくむかつ腹が立つ。

リンダはデデがさげている金の首飾りを自分のものだと主張しているのだ。当然だろう。

「この黒豚ッ、身のほどを知れッ！」

おれは人垣を分けて前へ出るなり、肉づきのいいデデの肩口を激しく突き飛ばした。つんのめり、ぶざまな格好で転倒するデデ。おれはデデの首飾りをひきちぎり、驚くリンダの手をとると露地に身をおどらせた。



⑤ 黒い裏切り者

夜霧のひっそり垂れこめる河岸公園――

いぶかって見あげたリンドに、言った。

「出しゃばったかも知れねえが、あんたが嘘をいっているとは思えなかったし……あのニグロの態度が気に入らなかったんだ……」

感謝をのべ、リンドは首飾りが奪われた時の模様を話し始めた。その強盗のひとりが目の前にいる男とは夢にも気づいちゃいない。

首飾りは母の形身なのだという。無事に返えった喜びを両眼にこめてみつめる。こぼれんばかりの魅惑。ふるいつきたくなる美貌。

思いきって抱けば女はおれのなすがままだろう。だが、今夜は紳士ぶって別れよう。近い将来には、おれの女になる運命なのだ。

あの日、ひと目見た時からおれは狙っていた。それが、こううまく近づけたとは――。

なんて幸運児なんだ。タクシーに女を乗せると、明日の夜のデートを約して別れた。

今夜はブラッキ―の始末をつけなくてはならない。錠を破る奴はもう仲間じゃねえ。

おれは電話でアンドレアを呼び出した。

ブラッキ―のドヤはダウンタウンだ。アンドレアと二人で豚小屋ホテルへ向かった。

なんてえずうずうしい野郎なんだ。ブラッ



キ―とデデは素ッ裸でベッドにもつれあっていた。おれたちの姿にあわててはね起きた。

窓から射し込む月光が汗ばんだ黒豚どもの肌を銀色に浮きあがらせている。

「ブラッキ―、早く服を着ろ！ 女もだッ」
おれの声に殺気を感じたらしい。ブラッキ―は四つん這いになり床に頭をすりつけた。

「おれのゼニは返えす……ニューヨークへ発たしてくれ……殺さないでくれッ！」

デデもおれにすがりついて哀願を始めた。

醜悪な顔。おれをますます刺激した。いやというほど、デデの肩口を蹴とばした。かばおうとするブラッキ―の顔を蹴あげた。

黒い皮膚が破れ、鮮血が顔面を染めた。

⑥連縛責め

おびえて、ウダウダ哀願をくり返えす二人。情に溺れ、見逃せば、いつかおれたちに不利なむくいではね返えってくるに違いない。こんな時の利口な処置は口をふさぐこと。即刻、実行に移した。拳銃でうながし、表

へ連れ出すと、車に押し込んだ。行先は郊外、数マイル離れた石油の廃坑だ。走る車のなかで、思いきりの悪い二人はひいひい悲鳴のあげどおしだった。「安心しな、地獄まで一緒に送ってやらあ」だらしのねえ、車からひきずりおろすと、二人とも蒼さめて腰をぬかさんばかりだ。

びしッ！ 横つらをはりどばし、ひるむブラッキーの両腕をうしろにねじあげる。助けて、とすがりつくデデも同様にしめあげる。そして、二人を背中合わせに立たせ、用意のロープでぐるぐる巻きにした。こいつらは、おれの心配をよそに乳くりあっていたのだ。おれの怒りが爆発した。びしーッ、握った皮鞭がブラッキーのつらに斜めに走った。

ひいッ！ 獣みてえな叫び声をあげて身体をひん曲げるブラッキー。はずみに、背中合わせのデデの身体が弓なりにのけぞった。ふたつの豊かな胸の隆起が前につき出る。

おれの鞭はふくらみをなぶるように飛んだ。うわッ！ 火の絶叫をあげてデデが身をよ

じるとブラッキーの身体が鞭の標的になる。連縛の二つの肉体は赤土の上に転がった。鞭は苛酷さをまして、鳴り続ける。

もがけばもがくほど、ロープのささくれがぶよぶよした二人の肌にめりこみ責める。

皮膚が切れて、顔といわず胴といわず、ふつふつと幾条もの朱アザが血をふいた。

おぞましい二人の悲鳴は無人の幽境の闇に吸われてゆくだけだ。鞭は非情さをました。気がついた時は、二人とも動かなくなっていた。にやけて見おろしているアンドレアをうながし、二つの死体を古井戸に叩き落した。



⑦ヒステリー女

ブラッキィの上着に、四十万、ほとんど手つかずに残っていた。思わぬ大金だ。使い道に戸惑っていたに違いない。老婆心じゃねえが、奴は死んだほうが幸福だったろう。

金はアンドレアと山分けだ。ゼニを受け取る時、ギクリ、アンドレアの手がふるえた。初めて見せたおれの残忍さに畏怖したのだ。

「見た通りだ、くだらねえ世話やかすなよ」
うなずき返えすアンドレアの眼には、れいの狡猾な光りが浮かんでいた。

ニールのアパートに帰ったのは夜明け近かった。女はベッドに腹這いで眠っている。

痴呆丸出しの寝顔。だが身体はイカす。おれはネクタイをほどいてソファに転がった。

気配で目をさますニール。おれを見るなり寝ぼけ顔が奇妙に歪んだ。

「浮気者！ わかってるよ、あのブロンド娘だろ……夕方、あんたのあと追って見たんだ」
眼をつりあげ、ヒステリックに叫んで枕を投げつける。枕はかわしそこねたおれの顔にモロにぶつかった。

「恥じ知らず！ 怠け者！ ゼニがなくなりや転がりこんできやがって、顔も見たくない」
ニールは悪口雑言をまくしたてた。おれは



口紅のはげた唇の不格好な動きをみつめた。
ひと仕事やって来たあとだ、口をきくのもおつくうなのだ。女の金切声は神経をえぐる。
おれは申しわけなさそうな表情をこしらえてニールに近づいた。すがるようにみて、肉づきのいい両肩に手をさしのべる。
接吻。アルコール臭い。ヘドが出そうだ。

我慢しなくちやなるまい。ヒステリーの特効薬はこれ以外にない。効能は満点だった。
ニールのウスラバカ、おれの胸毛に唇を押しつけて、甘い声を出しやがった。盛んに、つぎの行為をうながし始める。
肉の饗宴が展開した。だが、おれの頭の中は金髪娘リンダへの憧憬でいっぱいだった。

⑧ 女猫の誘惑

昼間がこんなに長く退屈なものだとは――

リンダとのデートが待ち遠しかった。

ニールのアパートは午前うちに飛び出したのだ。せっかくの逢う瀬をヒステリーのバカ女に邪魔されたくはねえ。

映画館に飛び込んだが、見ちゃいなかった。

スクリーンの映像は清純なリンダの幻影と

オーバーラップする。みずみずしい無垢なリ

ンダが、それまでのおれの生き方をなじって

いるかのようだ。

これほどまでリンダに夢中になっていよう

とは、おれ自身、奇妙な気がしてならない。

たまりかねて、パーク・マーケットをのぞいてみた。数日前強盗に押し入った店だ。そこをうろつくのはさすがにうしろめたい。

リンダは地下の事務室だ。店内をほつつき歩いても会えやしない。それでも、おれは来ちまったのだ。一時間以上、おれは店を去らなかつたが、やはりリンダには会えなかつた。

約束の時間が迫るにつれ、おれはますます落ち着きを失った。初めてのデートを思い出す。ソバカスだらけの珍奇な女だったが、おれには女王だった。それなりに興奮もした。

だが、リンダこそ本当の女王だ。いや、女王以上に素晴らしい女性なのだ。リンダのためなら、おれはどれいになってもよかった。

リンダは時間キツカリに現れた、夕日を浴びたその容姿は天使のように輝いて見えた。

どもりどもり、おれはお茶に誘った。

すると、リンダはためらいがちにいった。

「私のアパートにいらっしゃいませんか？」

予期しない言葉。おれは戸惑った。有頂天になった。なんのためらいもなく同意した。

おれを夢中にさせているリンダの眼が異様に燃えた。爪を磨く女猫の光りであった。

不覚――おれはそいつに気づかなかつた。

魅惑の微笑に誘われて、一步彼女の部屋に入った途端。ガッ！ 後頭部を一撃された。



⑨なぜ責める

ずきずき、地獄にひきずりこまれるような
激痛だ。その痛さが神経をよびさました。

おれはカビ臭いじゅうたんの上にぶっ倒れ
ていた。全身、金縛りにでもあったように身
動きがとれない。神経が麻痺しているのか、
そう直感した瞬間、恐怖がつきあげた。

おれは手足をひん曲げられ、背中できくり
つけられているのだ。逆えび責めの格好だ。
もがくと、手足首をしめつけている細縄が
ギリギリ肌に喰い込んで、そのまま肉にめり
込み、骨を砕きそうだった。

(くそッ！ おれがなぜこんな目に——)

顔をねじって見回した。その視線の先に、
傲然、見おろすリンダの姿があった。両腕を
前に抱えて、冷笑を投げつけている。

「リンダ！ おれになんの恨みがあるッ」

リンダの表情がゾツとする冷たさで綻んだ
「ふふふ……おとぼけ。あたいはね、あんた
の正体を知ってるのよ……マーカーレットから盗
み出したゼニ、どこにあるの？」

おれの喉の奥で愕きがひっからまった。ぐ
えッ、声にならない呻きが口をついた。

おれの心をとろかした清純さなど、かけら
もない。リンダは悪魔に豹変していた。



「おとなしく吐いちないなッ！」

ねじ曲げたおれの顔に、鞭が飛んできた。
痛いなんの。眼がくらんだ。

若い男が青竹の先で、おれの鼻の頭をぐり
ぐりえぐりやがる。不意打ちをかけやがった
のはこの若僧だ。だが、おれは睨み返すだけ
で、手出しは無用だ。口惜しさったらねえ。

「黙ってないでいっちゃまいな……厭だなんだ
って、こっちは吐かす方法はあるんだ」

目の奥で笑って、リンダは洋服ダンスの引
手ドアをあけた。ごろり、半裸にむかれ、荒
縄巻きにされた女が転がりおちた。

あッ！ ひと目見るなり、おれは思わず叫ん
だ。ぶざまに倒れている女はニールだった。

⑩ 眼には眼を

さるぐつわをかまされたニールは、おびえた眼をむいて、おれに救いを求めている。助けて貰いたいのはこっちのほうだ。苦勞したゼニを青二才どもにとられてたまるか。おれは黙否権をきめこむことにした。

ところが、やつらは悪辣巧妙な手段に訴えてきた。

ハイファイプレーヤーのポリュームをあげた。われるようなロックンロールが室内にわんわんひろがった。

男は後ろ手小手高手に縛りあげられているニールに近寄った。そして、うしろに回され

た両腕の間に火かき棒をさし込む。棒の先で縄の結び目をぐいぐいねじあげるのだ。

ひいーッ！悶絶して悲鳴をあげるニール。男の苛酷な責めはその間にも続けられる。ニールの喘ぎはおれのあらゆる神経を責めつける。耳を押さえた。だが、できやしない。眼をつぶったが、おぞましい悲鳴は容赦なく耳に入りこんでくる。

さすがのおれもこの拷問はこたえた。

「いいな、ゼニはどこなんだよう……ついでに仲間のアドレスも吐いちゃうんだ」

無言でいると、固く眼を閉じたおれの髪をひつつかみ、ニールの苦悶を見せつけるのだ。ついに、おれは敗北した。ゼニのかくし場所、アンドレアのドヤ、ついでに、ブラッキ、のおやすみ場所を教えてやった。

「おれにも教えてくれ、なぜおれがわかった」がつくり尋ねるおれに、リンダが答えた。

「ふふふ……たんまりゼニが入ったんだろ、靴ぐらい新調しなきゃ……あの時見たのさ、この靴の傷をね……警察にもいわなかったよ」にたり笑って、小型拳銃をおれに向けた。音楽のなかで、ダーン！銃声がふたつ。カッと、鉛の弾が心臓をえぐりやがった。（バッキヤロ！ゼニは誰にもやらん——）薄れゆく感覚のなかでおれはそう呟いた。



① 映画館で ワン・ステップ

男色者がその愛の相手をもとめる場合は、そのみち独特のものもあるが、多くは異性愛の場合のそれと大差はない。が、ただ、後者にしても、相手にたいするモーションの方法は、ヘテロのそれとはいささか、かわっているようだ。

いちばん手ツとりばやく、即決的な場では、その一つに映画館が挙げられる。

その映画館も、どこでもというのではなく、東京、京阪、名古屋その他の大小都市を通じて、その道のものが相手さがしの目的で来るのは、かれらだけのあいだで公然の秘密的にきまっているコヤである。

東京では、新宿、池袋、浅草などの盛り場のそれに多い。

それらの映画館のなかで、かれらはたいてい客席の後方に立つと、周りの人たちの中から、おのが相手になりそうな同性を目でさ

② ほも・とその周辺

場五つのせい

こひさ・かびや 晃 村濃美・絵

がす。

自分とおなじ目的で来たような者は、スクリーンの方はうわのそらで、キョロキョロ、ソワソワしているから、すぐわかるらしい。

おなじ目的といっても、これらのなかにはセミ・プロ的なゲイの輩もすくなくなく、そういうのになると、目のみでなく、手をも使って、相手(ゲイ輩にとっては「カモ」のわけだが)を物色する。

すなわち、両手をうしろに組みながら、自分の後方に立った男を、カモとにらむと、なにげない風でうしろの手の指先を相手の股間のあたりにふれて、その反応をみるのだ。

そして相手がそのままだまっているとか、その手をひきよせでもしたら、たくみに戸外に誘いだし、旅館などで歓をかわしたのち、金を要求する。

たちのよくないのになると、法外の金をもとめ、相手が出し渋りでもすれば、あたりに聞こえよがしの大声で、バクロ的な言辞を弄

する。

おのがホモの傾向をひみつにしている男色者にとって、これはたえられないことだ。しかたなく、そのゲイのいうままの金を出してしまうことになる。

私の知っている若いサラリーマンのソドミアも、新宿の映画館で、こうした悪質のゲイにひっかかり、止宿先にまでつきまとわれて、かれにしては相当多額な金をゆとりとられたということだ。

話がちょっとそれたが、ふつうの男色者の場合にしても、こうした映画館で知りあった相手とは、この道のコトバでいう「ワン・ステップ」つまりその場かぎりの一回の交渉きりで、二度とは逢わぬらしい。

広島市のN・Kという同性愛者が寄せてきた手紙の中にも、次ぎのようにしるされている。

「……広島市内の男色者の集合場所として知られているM劇場で、多くのソドミアと知り、半年くらははだれかれなく遊びました。」

しかし、理想の人には一度もゆきあたりません。この人たちとの交際はほんとうに一度か二度で、あとはグッドバイです」

(2) いとなみの場 トイレット

さらに手軽な場がある。街や映画館の公衆便所だ。これは男色者独特のものといっているだろう。

それがその場かぎりのたまゆらの快楽のためにしても、その相手をもとめる場、逢いそめ場が、トイレであるとは、あまりにも暗くかなしいことだが、これが、ソドミアの背負っている、否、かれらに背負っていると信じられていく暗いかなしさを、そのまま表現しているのだろう。

では、かれらは、その公衆便所で、どのようにして愛の相手をもとめるのだろうか。東京在住のある男色者が記したのを見てみよう。

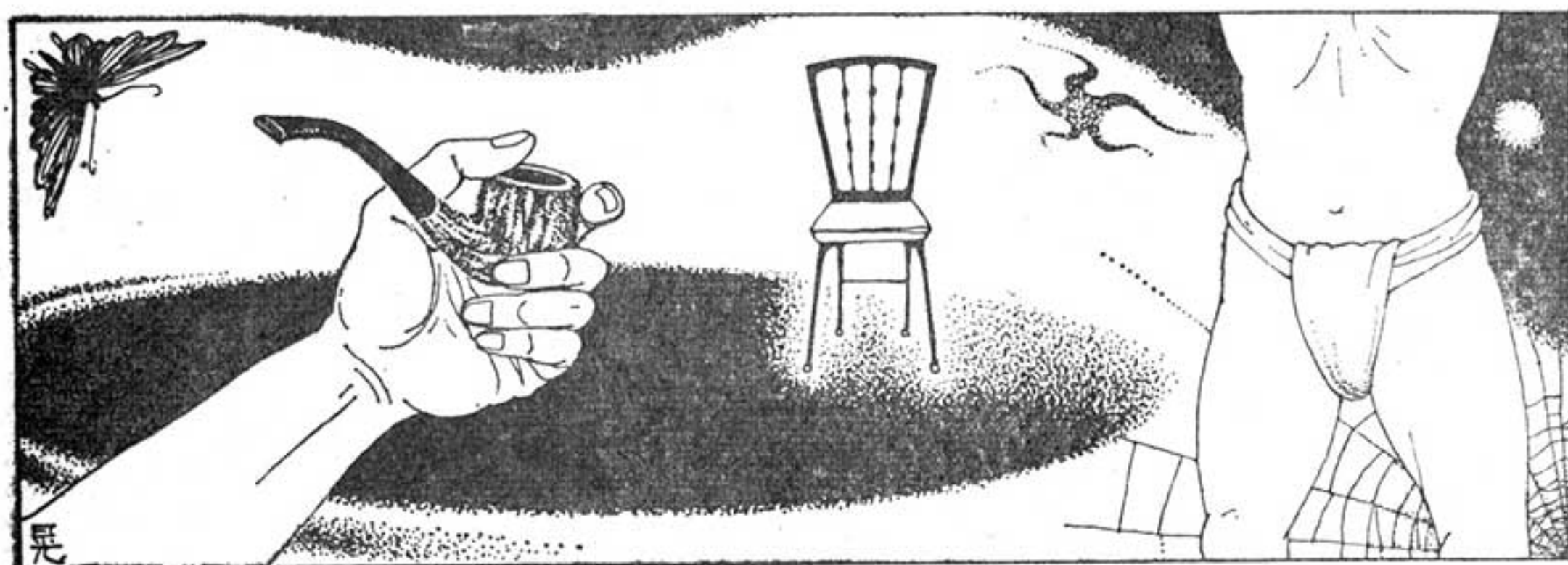
「……その夜もぼくは、惹かれるように日比谷公園へまぎれこんで

しまった。男どうしの肉体の花道、しかしぼくはすでになれてしまっているが、そのたびごとに、胸がくるしくなる。恥や見栄のくるしさはすこしもない。みたされぬくるしさばかりが、胸いっぱいに広がってくる。きょうもなんのために、と自分で問うてみてそのはかなさが、またぞろやってくるのだ。

公衆便所にはいると、いつものように目の血走った中年の男たちの視線が、音のたつほど、からだじゅうに感じられる。そしてかれらは、用便をするべくのよこにきて、からだじゅうをなめるように見定めてくるのだ。ぼくは強いてなにくわぬ表情のまま、めざす相手を物色するが、いない。さいしょの絶望が、いつものようにきまつて起こる」

うんぬんとあるように、きわめてそのものズバリの物色方法なのだ。

すなわち、そのケのものらしい男のかたわらに立って、用便中の男のPをまずみさだめながら、そ



の両者のあいだに、暗黙のうちにピーンと意気投合するものがあれば、それで愛の約束はきまったというわけである。

当の本人たちはきわめて真剣なのだが、他から想像すると、なにかユーモラスな、そして子供っぽいものを感じるであろう。

そう、同性愛というものが、だいたい小児的な性的嗜好なのだ。ソドミアのほとんどすべてがもっているPナイドなども、遺憾なくそれを現わしている。

上に引用した手記にしろされている日比谷公園内のある公衆便所は、この道の者の集まるそれとして知られているところのものであるが、このような公衆便所は、相手をもとめる場であるとともに、ときによきまま、かれらの愛のいとなみの場としても用いられることがあるようだ。

ついさきごろも、Hというソドミアの青年（ペデ型）が私を訪ねてきたおりに、次ぎのような話をしていた。

それは昨年の秋のこと、Hが都内のある有名なデパートへ行つて服を誂えたとき、係りの若い店員が、親切すぎるまでにいろいろと気をくばってはからってくれた。

甘い感じの美貌の二十二、三歳——それはHの好みのタイプであったが、素行も識見も堅実な紳士であるかれは、ケのない者に手のだすようなことはしない。

そのまま忘れてしまつて、十二月中ごろのある夜、Hは新宿のL館に、前にみそこなつた映画が上映されているので、キップを買つてはいりすぐトイレに行った。

と、かれがドアをあけてはいるとほとんど同時に、そこの大用——小用にたいして——の一つの箱から、男が二人つながつて出てきた、その二人が、なんのためにいっしょに一つ箱にはいつていたか、Hにはもちろんすぐわかった。

ふいとHは、その一人の顔をみてびっくりした。前月、デパートの洋服売場で、彼の寸法を計ってくれた青年だったのだ。

青年の方はHの顔をおぼえているのかいないのか、そ知らぬ風で相手の中年男とともにトイレを出ていった。

Hは用をたして廊下へ出て、さらにまた驚いた。そこには中年男の姿はみえず、かのデパート店員の青年が、二十がらみのB・G風の女と手を取りあいながら、喋々ちやちや喃語なんごをかわしていたのだ。

その青年はホモは金のための演技で、じつはヘテロなのか、あるいはその逆なのか、それともホモ・ヘテロの二刀流なのか。Hはなにやらわけがわからなくなつた。

が、いずれにしても、そこに現代のわかもの一つのタイプをみた、とHは感じたという。

サテ、このような男色者に知られている公衆便所には、きまつてかれらの記したものらしいらくがきがあることだ。

それは、おさだまりの男女の交情図にまじつて、男同士の愛戯の図やファルロスの絵、あるいは、

「ホモの相手を求む」の意味の文句である。どれも稚拙なものばかりだ。

このような「求人広告」は、案外ほんものもあるらしく、これが機縁で知りあい、歓をかわす場合もけつしてすくなくないらしい。

前記の広島市N・Kのなども、そのことを告白している。が、彼の場合は求人者と逢うことは逢つたが、その相手が胸にえがいていたイメージとは正反対の、みすばらしい男だったのでガツカリした、というのだ。そんなところなのかもしれない。

また、このような公衆便所には、その多くが、大用をなす箱と箱との境に、直径四センチほどの小孔があけられている。その孔から隣りの箱をうかがつて、相手を物色するわけだ。

ときにはまた、その小孔は、隣りの箱の男にたいする文字どおりの単刀直入的な、求愛の手段にも使われるというから、愉快である。

③湯のなかの……

銭湯その他の公衆浴場も、男色者に愛の相手をみつげるための場として用いられることがすくなくない。

そこではだれでも一糸まとわぬ裸体となるのだから、男色者にとつては、単に同性のそうしたむきだしの姿をみるだけでも、楽しみというものだろう。

少年愛傾向の、ある若いサラリーマンは、私のもとによせてきた書信のなかで、こんなことをいっている。——

「……S少年と別れてからのぼくは、さびしさのわずかな息抜きとして、銭湯で他人の裸身をぬすみ見ることに、楽しみをもとめるようになりました。

あたりの人たちに気づかれることをおそれながら、ぼくの目のそそがれたのは、第一に思春期の少年の恥部でした。

そのうっすらと生えはじめた若草や、発育途上のペニスを見るこ

とが、わずかの楽しみでした。年のわりにその発達している少年をみると、どうにかしてそれにふれる機会をほしいと思ったり、また、ある少年が頭髪を洗うとき、そのつやつやした桃色の臀部を少しげもなくさらすので、ばくにアヌスへの郷愁を感じさせたりしました」

また、あるソドミアはいう――

「昨夜も銭湯で、ちょうどピンボンの球くらいの大きさのグラブが、湯の中に五つ六つ透けてみえていた。だが、私のあこがれをみたすに足るものには、めったに出合わない。風呂で湯をすかしてみると、やや無難なのだが、湯から出たとたんにそれは形が崩れ、色彩があせてしまうが多い。湯の中でほんやりと生きもののように動いているあいだが、命なのである」

どちらも重視するところは、Pの一点にしぼられていることかわりはない。後者にいたっては、じつにこまかい観察をしているもの



とおそれいるくらいだ。

浴場で相手をもとめる場合も、やはりそこからはじまり、そこにおわるようである。

私の懇意にしている日本舞踊の師匠で、ことし二十五歳のFという青年がいる。弟子の若い女たちから、いつも騒がれているほどの美貌のもちぬしなのだが、じつは同性愛者で、その愛の対象は、自分の父親ほどの年齢と父性的性格の人でなければならぬという、つまりジェロントフィリー（老人愛）なのである。

このFがその道の師について修業していた十八歳のころのこと――幼時から母親の手一つで育てられてきた彼は、父親とおなじ年格好の男をみると慕わしく、同時に、そうしたタイプの男のベニスを見たい気もちから、そのころ、二、三日おきに近所の銭湯にゆくことを、なによりの楽しみとしていた。ある日、ラジオが「笛吹童子」の放送をやっている時刻、Fはその銭湯へ出かけた。そこはクスリ

湯なので、湯船につかったら頸から下はまるでみえないのだが、彼がふと気がつくと、右がわにいた四十五、六歳の男が、片手を彼のひざから太ももの方へソロソロとさしのべてくる。

こんなことに遇ったのははじめてなので、Fはただやたらに胸をドキドキさせるばかり、とうとうその男のするままになってしまった。

あくる日になると、Fは、笛吹童子の時間がまちどおしく、胸をおどらせながら銭湯に出かけた。案の定、昨日の男はいっていた。が、他に数人ほどの客がいたためか、男はなにもしなかった。

Fはなにか期待はずれの気もちで、銭湯を出ると、その男もいっしょについてきた。彼は歩きながら、Fに愛をうちあげた。

あまり好みのタイプの対象ではなかったが、Fは男のみちびくまに近くの公園へついていくと、人かげのないあたりで、男はFをだきしめて接吻をした。

男はつづいてFのものを弄根をし、またフェラチオをしはじめた。

相手のするままになっていたFも、このときびっくりして、男の頭をひきはなそうとしたが、相手はFの腰に両腕をまきつけたまま、どうしてもはなさない。

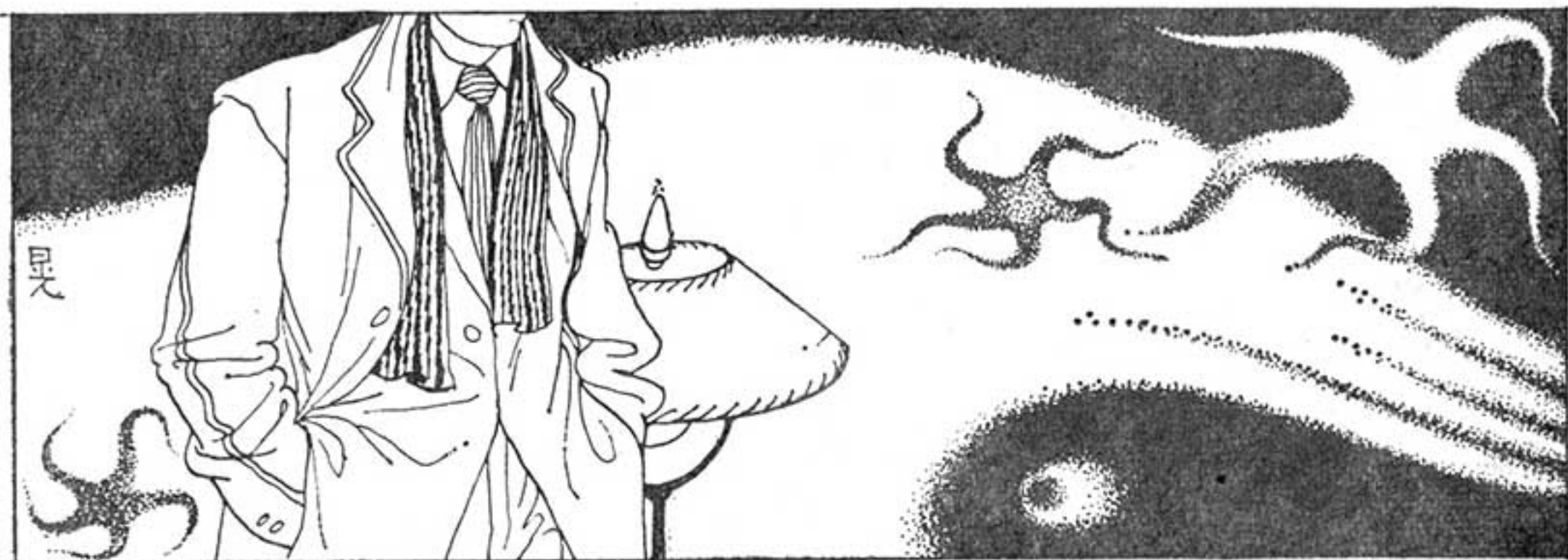
やがて男は、Fにもおなじことをするように要求したが、Fは空おそろしくなって、その場を逃げだした。それきりFは、その男とは逢わない。

——というのである。

自昼の銭湯のなかで、見知らぬ少年にいたずらをするあたり、その中年男は、おそらくそうしたことの常習者だったのではないだろうか。

東京の盛り場の各所にあるトルコ風呂の大衆浴場などでも、プロのゲイらしい男が、浴槽のなかで、かたわらの客に弄根の手をのぼしているさまを、ときどき目撃することがあるとか、あるソドミアからきいたことがある。

そしてそのモーションに失敗が



ないらしいから、かれらがホモのケのある者をつけるカンは、なかなかたしかだとみていいのかもしれない。

④ ゲイ・バーがとりもつ愛

ゲイ・バーはひとところのようなブームはすぎさったものの、あいかわらず陰然と根をおろしている、ちかごろでは、大都市のみでなく、中小都市などにもボツボツふえていくとかいうことだ。

このゲイ・バーが、男色者の慰楽の場であるのみでなく、かれらが性の対象をもとめるための場となっていることは、この道の者ならよく知っているところだ。

まず、それらの店のボーイ、これを本人が納得すれば、外につれだして遊ぶことができる。

ボーイも今は、むかしのように、「そうだワ」「そうよ」のいわゆるオネエ言葉を弄する女性型は、一部の「観光バー」でもなければみられないほどになり、一般には

タチ型すなはち男性型が断然多い。それも「純タチ」とよばれる、ホモのケのない若く、りりしいタイプがふえてきた。

男色者はなんといってもW分子が多く、しかもそのほんとうの理想の対象は、ホモ気のない正常な同性である、ということを狙ったバー・マスターの営業政策である。

他方また、男色者には、中年愛老人愛のものも、すくなくないところから、ことさらにヒゲヅラの中年男をボーイに雇っている店もある。

かくて客は、それぞれ好みの型のボーイのいる店で遊び、望みとあれば、お目当てのボーイをホテルなりなんなりへ同道することができるわけだ。

ちかごろはふつうの連れこみ旅館でも、男同士のアベックが休憩あるいは宿泊しても、宿の者が妙な目でみなくなったということである。いわば、なれっこになったのでもあろう。

また、ゲイ・バーの客のなかには、ボーイ特有のコマーシャルなポーズを嫌って、おなじ客のなかから、愛の対象をさがそうとする者もすくなくない。

知らぬ客同士でダンスなどして、いるうちに、情意投合して、そのまま連れだって店から姿を消してしまう情景を、私はよく見かけたことがある。が、店の側では、こうした客同士の直接的な睦みあい

を厭がる。トンビがアブラゲでなく、アブラゲにアブラゲがさらわれたような気がするであろう。

そしてそれを防ぐためだろう、マスターが進んで、客同士の恋のとりもちをする店がある。

「こちら、というひとがお好き？」
とママさん——といっても女ではなく、マスターをよぶゲイ・バ

ーの通称——みずから客に対象の好みをたずね、その場にいあわす他の客のなかに、これと思う者があるときは、その双方の交情の幹旋をするのだ。

うまく話がつけば、両者からマスターのふところへチップがはいり、二人でこっそりと逃げられるよりは、はるかに賢明な政策である。この風潮は、東京のみならず、関西や中京方面のゲイ・バーを通じて、おなじらしい。

⑤旅館の三疊の部屋

そこへ行けばかならず相手が得られ、しかもその場で愛の交歓ができるという所がある。

それは旅館ではあるが、この道の者それも常連以外の客は、せつたいに入ること許さないとい

都内に数軒あるとかで、そのうちD区内のP館が、もつともよく男色者のあいだに知られている。

私はその家の外観だけは見たが、内にははいったことがないで、その常連の客の一人から聞いたところによって説明すると——P館は客室の数は十にみたく、しかも各室とも三疊という狭ま

さ。いや狭まいというのは局外者のいうことであって、そこに遊んだものにいわせれば、三疊という部屋は、二人で歓をかわすべく、もつとも黄金分割の理にかなったものだという。

この旅館の特長は、客のだれものが各室に出入り自由という点である。つまり、客はどの室にもノックなしではいり、その室の男と意気が合えば、その場で交渉をもつことができる。そしてそこを出

て、また別の室へという風に、つぎつぎと廻ってあるけもする。多情が通有性の同性愛者には、まさに桃源郷ともいってよいかもしれない。この旅館の経営者も、おそらくやはり男色者であって、この道のあれこれを身をもって知っているからであろう。

外観は古ぼけた貧弱な家だが、ほとんど毎日部屋が満員だというのうなずかれる。また、常連客には相当の地位の者もすくなくないとか。

——以上、男色者が愛の相手をもとめるための場、愛のいとなみの場のいくつかについてしるしてきて、それらがヘテロの場合とは比較にならぬほどせまく、そしてけわしくさえあることを、感じるが、それでいいのかもしれない。秘密の道はその方が……。

お蒐めになるなら

今のうちです！



既刊号目次は最終頁にあります

毎号素晴らしい売行きを示し、類似誌をグンと引き離している本誌は、既刊号でも価格が高くなるばかりです。今のうちに、まだお読みになっていない旧号をお揃え下さい！いまにありませんから！

おとしだね

西田 仁

都築峰子・絵

あたしはね、おばさんみたいにぶよぶよしたのを見るといじめたくなるのさ！

I

マユミははっと身を硬くして物蔭にかくれた。マユミが街をあるいていて人目を避けるなんて、めったにないことだ。しかもそこはちょうど道路から地下室へ降りるレストランの入口で、暗い階段の奥のほうから生温い淀んだ空気が立ちすくんだ足許に這い寄ってくるようないやな感じだ。

料理の模型を並べた飾り窓に、その白っぽいコートと二人連れがぼんやりと映り、一瞬にしてマユミの視野から消えた。女のほうの肩が、たたずんでいるマユミに触れんばかりにして通り過ぎたのに杉は気がつかず、なにか早口に話している。もっとも目が合ったところで、こんな場合、公然と挨拶のできる間

柄ではないのも癪にさわる。

「ちえッ、ボケてんの」

舌打ちして二人をやり過してから、マユミは人通りの激しい舗道に躍り出し、折から人波に逆らうようにもさもさやってくるチンピラの胸をどんと突いた。

「いいからあの白い女の子つけてよ」

そうささやかれたチンピラは、生き返ったように素早く振り向くといま来た道をさっと戻っていった。マユミはしばらくそれを見送っていたが、やがてハーフコートの襟を荒々しく立てて、それとは逆の方向にあるき出した。杉と最後に会った夜からかぞえて、もうかれこれ半月ぐらいの日が経っている。そのあいだ、会いたいと思わない日は一日もなかったが、しかしマユミには杉の居場所がわか

らなかった。新聞記者ということだけは知っているのだが、どこの新聞でどんな仕事をしているのか、そこまでは突っ込んで聞けないのが金で買われる女の辛さだった。ありていにいえば、たったそれだけの関係なのだから、杉が他の女と街をあるいていたところで文句をつける筋はないぐらいのことは、マユミだって承知している。

それならなぜ笑って見逃せないのか。

杉に対するとくべつな思慕の情はたしかにあった。が、それにも増してマユミの心を激しく揺さぶったのは、映画で見てからほしいほしいと思っていた白いバーバリのコートを、マユミがじぶんの体に合わせて空想しているのと寸分違わないスタイルで連れの女が身に着けていたことなのだ。

——バカにしてるわ。

着ることと男のことしか頭のない若い女の感情が、そのふたつとも横奪りされて抑えようもなく湧き立っているところへ偶然通りかかったのがあのチンピラだ。だからマユミと

しては、べつに深い魂胆があつてあとをつけさせたわけでもなく、強いていえば会うたびごとに足を洗えの堅気になれのと、ごたいそいうな説教をする杉への面当てめいた気持が動いてあれを使ったのだ。だがチンピラのほう

はみょうな一人合点から、命じられたとおりの仕事をやってのけてそれをマユミ姐さんに報告した。

II

Y製鋼業務部次長の朱樽長三郎氏宅は、世田谷区の松原町というところにある。あたりは古くからひらけた閑静な住宅街で、家族は夫妻と令嬢、それにばあやの四人暮らしだった。その長三郎夫人の雪子とひとり娘の頼子とが、庭に面した六畳の日本間で雑談しているところに突如若い女がたったひとりで乱入して来たのは、うすら寒い風の吹く暗い日の昼さがり。さきにその姿を見つけたのは母親の雪子だった。

女は堂々と表門からはいり、狭い芝生を横切って、ぴったりと締め切つてあるガラス戸のまえに猫のように足音もなく立ったのだが、雪子はそれを娘の友人がふざけているのだとばかり思った。女子大に通っている頼子の友達には、そんな茶目な子もたまにはいるのだ。

「あらッ」

だから、がらつと乱暴にガラス戸をあけて侵入してきた女をみとめて、まず頼子が声をあげた。



「おかあさま！」

娘にすがりつかれ、雪子もぎょっとして女を見た。土足だった。ネッカチーフで髪をしばりトックリ型のセータを着ているようだ。スラックスの足を大きく開いて立ちはだかったその姿が、母子の目には真っ黒に映った。

「あんただあれ!？」

娘をかばって雪子はいった。ばあやは今しがた駅前まで使いに出したところだが、相手はうら若い女の子ひとり。まさか強盗でもあるまい。誰かに追いかけられるかして逃げ場をうしない、慌ててここへ飛び込んできたのかも知れないと思う心の余裕がまだあった。もともと勝気な雪子だったが、しかし女の視線がかたわらに震えている頼子のほうへ注がれたとき、彼女ははっと胸をつかれた。きりりと髪を束ねているせいか、りんかくをはっきり見せたその横顔が、驚くほど頼子に似ていたからだ。あるひとつの厭な記憶が反射的に雪子の脳裡を一瞬かすめ、

「頼子、早く！」

と叫んだ。とつくに忘れていた苦いできごとだった。それがいまきゅうによりみがえって、いち早く娘を逃がそうとしたその鼻先に、いきなり黒光りのした小さな刃物をつきつけられ、

「あッ」

雪子の記憶もそれで吹っ飛んだ。

「静かにしなよ」

マユミは初めて口を開いた。そしてただもう恐ろしさに真っ蒼になって坐っている頼子にずかずかと近寄ると、矢庭にその顎に手をかけて顔を挙げさせた。鼻の高いほそおもての愁い顔、手入れのゆきとどいたしなやかな髪——。間違はなく杉とあるいていたあの娘だ。しかもベルトの付いた白いコートが正面の壁に掛っている。

「ちくしょう」

どす黒い妬情の炎がマユミの心身に燃えあがった。頼子はまるで置物のように他愛なく

転がされた。そのほっそりした首筋に、スラ

ックスに包まれたマユミの逞ましい膝頭がのしかかった。頼子の咽喉の奥が押し潰されてぐうッと鳴った。しかしマユミはそんなことにはお構いなく、全身の重味をかけて頼子を押え込みながら右手のナイフを持ち直し、早くも油断のない目を雪子に注いでいる。

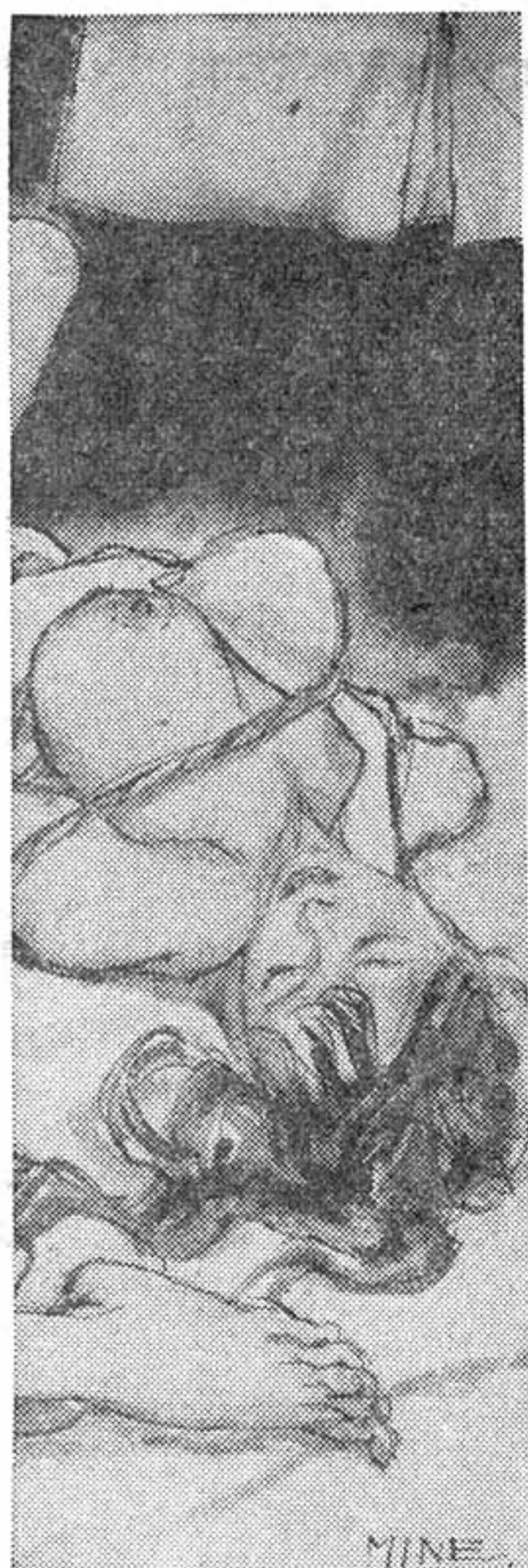
「ちょ、ちょっとあんた」

目前に娘のみじめな姿を曝されて気も顛倒した雪子が、硬張った四肢をのろのろと動かして二人のそばへにじり寄り、

「そんなひどいことしなくたって……」

頼子の頭を臀の下に敷くようになっこうになっっている女の体に手をかけたが、それは邪慳に振り払われた。そのとき、ナイフの先が前搏に触れて、ちりっとした痛みが走った。「おばさんはおとなしく壁に向かっててよ。そうしないとケガするよ」

電話の台は、頼子が捻じ伏せられている向う側にある。そんなことまでちゃんと計算しているらしい小娘のやりかただった。助けを求めても隣近所には聞えるはずもない住宅地であるうえに、相手は刃物を娘に擬している。声音だけは糞落着きに澄んでいるが、さすがにぶるぶると小刻みに震えているあの腕が、もし一寸でも動いたら頼子の体に傷がつくこ





出して、その片端を口に咥えた。

慣れたものだ。

中学を出るか出ないかの頃から盛り場で暮してきた経験が、こんなときにはものをいう。他のシマから流れ込んできた女を締め上げたり、仲間のいざこざを腕ずくで解決したりするときと較べれば、お嬢さま育ちの頼子を縛るぐらいのことは朝めし前の仕事だった。たちまち頼子の自由を奪い、その頭上から腰を上げて向きを換えると、つきには縛めた手首を蹠に踏みつけてタオルの猿ぐつわまでしっかと噛ませた。頼子のやや削げた両頬に引きしぼられた手拭いが無情に食い込み、その場にごろりと転がされた。縄は手首にぐるぐると巻きついていてただけなのだが、もちろん頼子にとっては初めての経験である。いたずらに両手をこすり合わせて切なく身悶えをするばかりだ。しかしそんなことでは皮膚が擦れるだけで、縄はすこしも緩まない。恐怖に血走った目が母親を気遣うように雪子に注がれている。女中が早く帰ってきてくれればいいが、たったいま使いに出たばかりだから小一時間は戻らないだろうし、たとえ帰ってきて、勝手口からはいつてしまえば、こっちから呼ばないかぎりこの部屋へ顔を出すこともない慣わしだ。むりやりに詰め込まれたハン

とは必定だ。げんにじぶんはもう浅い傷を負っている。気丈な雪子も、こうなっては打つ手がなかった。真っ昼間、女ひとりと思ったのが大きな誤算だった。女だって、思い詰めればなにをするかわからないのだ。雪子はまたもや胸のなかに湧き出してくるいやな想い出を振り払うようにして、

「お金——。お金なら——」

なさない声でようやくいったが、マユミはふん、と冷笑を浮かべただけでそれには答えず、ずぶっとナイフを頼子の顔の前の畳に突き立てた。それはありふれた工作用の切り出しのように見えたが、柄に巻いた白布が手

垢に黒ずんでぜんたいに手摺れた感じ。それがかえってぞっとするような凄さで母娘に迫った。

「あっちを向いてろっていつてるのに」

マユミは頼子を引き据えたままで顎をしゃくり、こんどはいきなり頼子の腕をとって逆に捻じ上げた。押え込んだ膝にさらに力が加わったのか、

「ああッ」

するどい悲鳴が小さく頼子の口からほとばしった。ばたばたともがきつづける頼子の両手首をすっかり背中に合わせてしまうと、マユミは腰のポケットから一条の細引をさぐり

カチよりの小切れが口中の湿りをぜんぶ吸い取って、やわらかい粘膜に突き刺さる。そしてうしろに回された手首の骨は、得体の知れない女の足の下でぎしぎしときしみ、いまにも砕けそうな痛さだった。

「さ、これでいくら暴れてもいいよ」

マユミは無抵抗の頼子の体から離れ、足を挙げてその肩のあたりを憎々しげに蹴飛ばした。芋虫のようにくくられた頼子は畳の上をずずつとすべって、そのまま壁に押し付けられた。

III

誰も口をきかない無気味な静寂のなかで、雪子の歯がガチガチと鳴った。

マユミは頼子の乱れたスカートの裾に爪先をかけ、それを思いっきり捲り上げた。黄色と赤の荒い格子の下から白い素足が、太腿が、そしてまるい二つの丘陵を蓋っている薄色に光る布までがむき出しにされた。頼子は必死に両膝を合わせ、そしていじらしくも足をちぢめた。

「はっはっは」

突然男のようなマユミの高笑いが、室内の静かな空気を破った。

これはただ金ほしさに忍び込んできたので

はなく、なにか意趣を含む女だとそのときになって雪子は思った。そしてさっき頭をかすめたあの思いがふたたび胸中に芽生えたが、いまそれを整理しているひまはなかった。頼子を征服した勢を駆って猛然と襲いかかって来た女の両手が、ぐいっとばかりに雪子の前髪を掴んだのだ。

——あんたはだれ？ いったいなにをしようっての？

しかしそれは声にはならず、ただ咽喉がぜいぜい鳴っただけだ。マユミも無言だ。きれいにセットした雪子の髪が引きちぎられてばらばらに乱れた。のけぞったその上体に、マユミは無雑作にじぶんの体を浴びせかけた。熱い息に顔を吹かれながら、雪子は夢中でのたうちまわった。踏みしだかれた着物の裾から四十五歳の脂肪肥りの足が二本。片方は必死に踏ん張り、いま一方は激しく空を蹴る。「なにを撥ねまわってんのよ。ほら、ほら」

二つ三つ横っ面を撲られ、雪子はくらくらと目まいがした。はじめからすっかり気を吞まれてしまっている上、嵩にかかって攻め込んでくる若い体力に抗う術もなかった。マユミの下肢にびっちり食い込んでいるスラックスが、成熟しきった女体の線をみごとに浮かびあがらせながら、やがて雪子の巨大な乳

房の上にまたがった。

「く、くるしい」

雪子はわずかに身をくねらせて顔を歪めた。マユミはそれを真上から見おろした。恐怖と屈辱に目が、ぎらぎらと輝き、小鼻の脇に脂汗を滲ませている。頬に赤く血が寄っているのは、さっきマユミが撲った痕だ。マユミはその顔立ちのなかに、十六、七年まえに見たおそろしい女のひとの面影を探ろうとした。

が、なんといっても年端のいかない童女の頃の記憶である。怖くて泣いた思いだけは今日なお胸の底に冷たく蟠まっているが、そのときの女が、いまこうして脚のあいだに挟みつけられ、身動きもできないままに喘いでいる女かどうか、それは定かにはわからなかった。しかし、戦時スタイルの黒っぽい服装によく映えて目立った白い顔、そしてマユミの母親を捕えてめった打ちに打ち据えていた腕の逞ましく白かったことだけは、痛いほどによく憶えている。母よりもはるかに体格がよくて、それゆえにいっそう弱々しい母が哀れに思われ、とつぜん現われたその女のひとが怖ろしくてならなかった異常な想い出。

そうだ。この女にちがいない——。

マユミは心の裡でそう叫んだ。そして着物

の襟を掴んでいた手を離し、こんどはそれを相手の咽喉首にじかに当てがってぐいぐいと締めた。雪子の額に血管が青黒くふくれ上り、噛みしめた歯と歯のあいだから、呻きとも呼吸ともつかないものが微かに流れ出た。

「あたしはね、おばさんみたいにおよよしたのを見ると、つい虐めたくなる性分なのさ、手加減はしないからね」

言葉につれて、体の奥のほうからじわじわと泌み出してくる嗜虐の感興が、もうそのときには古い怨恨とはべつにマユミの血を沸き立たせていた。

体を張って生きて来たここ数年のあいだに、このようにして痛めつけた女の数はどのくらいあるだろう。十代のときからいかがわしい飲み屋で働き、ときには客もとるといいうような、たとえようもなく不幸な生い立ちがかえってマユミの性質をそんな方向に駆り立てたのかも知れない。人を虐げ、その苦痛の表情に興奮し、必死に抵抗する相手の四肢を悲鳴とともに塞ぎ込んでしまうようなことに、ただならぬ快感を覚えるような荒んだ心身は生得のものではなかったはずだ。一生を日蔭で暮したマユミの母は美しく、そして氣持の優しい女だったのに。

朱梅雪子を組み敷きながら、マユミは、あ

のとき母に連れられて逃げていった氏神さまの古井戸の音を聞いていた。マユミが六つか七つぐらいのときのことだ。やはりきょうのように雲の低く垂れこめた陰気な日だったと憶えているが、それは古い出来事のために記

憶のせんぶが灰色に染っているせいかも知れない。その夕方、ふた間しかなかったマユミの家に、とつぜん血相変えた大きな女のひとが飛び込んで来てふた言三言いい募ったと思つたらとたんに母に掴みかかり、いきなりそ



の場へ押し倒した。そしてちょうどいまのマユミのような体勢から、両の拳でむちゃくちゃに母を撲りはじめたのだ。それなのに、後

年肺患で早死するくらいにひ弱な母には手向いができず、その女のなすがままにされながら、ひいッ、ひいッと壊れた笛のような悲鳴をあげるばかりだった。マユミは子供心にも母の危難を察して、上になっているその女のひとにしがみつき、かえって思いきり突き飛ばされたような記憶もある。そして命からがら逃げ出す母に手を曳かれて家を出た。物見高い近所のおばさんたちががやがやと寄って来た。そのなかを抜け出して近衛歩兵連隊の通りまでいくと、折から夜の波のような暗い歌声とともに茶褐色に汚れた兵士の列が、ザックザックと果てもなくつついてやってきたのだ。

「ごめんなさい」

その列のなかをもぐり込むようにして横切ったとき、汗と革の臭いをいっぱいに泌みつけた兵士のひとりが軍歌を止め、眉深に着けた軍帽の庇から威丈高な目を光らせてなにか怒鳴った。しかしそれは、響きわたる歌声とおびただしい軍靴の音に消されて聞えなかった。軍列を横切ることの禁制を、当時の若い女である母が知らないはずもなかったろう

が、あの女の人の暴力と、近所の主婦たちの冷笑から逃れようとして止むなくその掟を犯したもののだろう。

「こっちへおいで！ 早く！」

母の腕に抱かれていったのか、ちよこちよこ駆けていったのかは憶えていない。やっと落着いたのが氏神さまの境内で、そこだけは決して近寄ってはいけないとふだんから厳しくいいわたされている御興蔵のそばの古井戸の蔭だった。ふしぎにもその深い底のほうからは、いつもチリン、ポロンと、雨垂れのような澄んだ音色が聞えてくるのだった。

IV

朱樽家では、この日のへんな出来事を警察へは届け出なかった。物的被害はなにもなかったし、仕返しを怖れた頼子が強くそう主張したせいもあるが、雪子にはべつの心当りがあった。

むかし若い頃、良人の長三郎が青山の連隊裏に妾を囲っていたのを知ってあばれ込み、相手が意外におとなしくした手に出るのをいいことに、気の済むまで打ちのめしてやったことがそれだった。そしてそのとき、馬乗りになっているじぶんの手に、泣きながら噛みついてきた小さな女の児のいたのも思い出した。

ていた。まさかとも思うが、しかし良人はいま社会的にも大事なところにさしかかっている。それに、じぶんのためにもこんどことは表沙汰にしないほうがいいと雪子は判断した。そんなことから、この事件は母娘の胸にだけそつと蔵われたままになった。

マユミはあれから、雪子が気を失いそうになるまで首を締めつけ、顔じゅうにべっぺつと唾を吐きかけた揚句、相手の帯を解いて娘とおなじように縛り上げている。しかし縄尻は結ばなかった。そうしておけば、誰にも知られることもなく雪子が縄を解くだろうと思ったのだ。人に見つかからないかぎり警察沙汰にはしないだろうと、小さな悪事を重ねてきた今までの経験から推測していた。

それでも門を出るとき、マユミはちよつとうしろを振り向いた。しかし助けを呼ぶ声は聞えず、追跡してくるようすもなかった。門柱に掲げられている陶器の表札に「朱樽長三郎」と記してある。「あけたる」と読むのだ。その名の示すとおり酒豪であったと話してくれたことが、母がマユミの父親の人柄について教えてくれたすべてであった。マユミの心にはその面影も残っていない人である。しかし、朱樽長三郎などという珍らしい名はめったにあるものではないし、Y製鋼に勤めてい

るというのはあのチンピラが探つて来たことだが、これも母が死ぬすこしまえに、父の名とともに便箋に記してくれたものとびったり一致する。病弱の母が娘の行末を案じて書いてくれたものだろうが、それ以来すこしの親しみも持てずに忘れていた父親だった。しかし、これでもう朱樽の前に名乗り出ることは永久にできなくなってしまったとマユミは思った。妾に生ませた女の子がいまこうして生きていることを、朱樽は知っているだろうか。マユミは帰りのタクシーのなかで、さすがに激しい鼓動を伝える胸に腕を組んで目をつぶった。

杉がマユミの店にあらわれたのは、それから四、五日の後であった。れいによって汚れた白木の台に無精らしく肘をついてコップ酒を嘗めているのに、

「ねえ今夜いいでしょ？ 久し振りなんだから」

と誘いをかけておいてマユミは這い込みの二階に駆け上った。衣紋掛けから新調の白いコートをおろす。安物だが、あれからひどい工面をしてこしらえたものだ。店の前では、れいによって、流しの連中や地回りどもがトグロを巻いている。板切れなどを集めて石油をかけ、火事場のようには火を燃やして楽しんで

でいるのだ。杉はいつものようにその仲間入りをして、マユミを待つ姿勢になっていた。職業柄、こうした連中とも気やすく口をきき合う男なのだ。マユミは素早く袖を通し、ダダッと階段を駆け降りた。

「お待ちどおさま」

マユミはことさらに明るい声でいい、凍てついた道にヒールを鳴らして近寄った。

と、正面に立っている杉の表情がふと変わった。隣の流しとなにか話していたのがとつぜん口を噤んだ顔になって、一瞬ののち、ぱっと身を翻えして背を見せた。

「ちよつとオ、待ってよ。すこし暖まってい

くんだからさ」

しかし杉は振り返らなかった。裝飾灯がずらっと並んで輝いているアスファルトの通りを、白いトレンチコートに風を孕ませながら急ぎ足で遠ざかっていく杉のうしろ姿は、マユミのついてくるのを拒否していた。

ズベ公くずれの無慙な衿持が、それを追いつめようとするマユミの足を釘付けにした。マユミの臉にうつすらと涙が滲んだが、それには誰も気付かなかった。アクビでもするスキのほか、涙を見せる街の女はいないのだ。

「いかねえのかい？」

地回りのひとりが聞いた。

「シケてんだろ」

マユミは虚ろな笑い声を立てたが、突然、「貸しな」といいざま、その男のセータの裾をぐっと捲り上げた。

「あ、あぶねえ」

素肌に着ているセータの下の胸まで巻いたさらしの腹巻が、火の燃え移ったように赤く染まり、同時にマユミの手に白刃が光った。

腹巻に仕込んでいたヤツを不意にひっこぬかれたその男が慌ててもぎ取ろうとするより早く、マユミは片袖を外したじぶんのコートにそれをぶつりと突き立てていた。

「姐ちゃん！」連中みんな息を呑んだ。

杉の姿が消えてしまった路上に目を据えて狂ったように布地を引き裂いているマユミの形相は、さすがの荒くれ男たちも怯気づくような物凄さに引きつっていた。一同は一人二人と焚火のまわりから遠ざかった。

マユミはたったひとりあとへ残り、びりびりに切り破ったコートを火のなかへほうり込んだ。厚い布は、いぶつて黒煙をあげ、やがて赤黒い炎に包まれた。火はいちだんと勢を増して燃えさかり、放心したようにそれを見つめているマユミの瞳にもきらきらと映った。

遊女おそでの仇討

島本春雄

石を抱く女

食い縛った齒の間から、押し殺したような奇妙な人声Vが断続して洩れる。——それは、苦痛と恐怖と真恵と絶望のないまざった呻き声ともいえた。

肉体的な苦痛が誘発する動物的な声に、精神的な呵責が押し出す狂気めいた声が混合して、その呻き声を、いっそう陰惨なものにしている。

部屋そのものも、また陰惨であった。陽射しの入らぬ薄暗い部屋——黒くくすんで、ところどころに、何が原因でできたものか判別のつけかねる汚点の散っている部屋……そんな不気味な部屋の中で一人の女が折檻されている。

足の骨が陰湿な音をたてた。それは苦痛に直結する音であった。

「む、むむむ……」

女は呻いた。苦痛のために、その頬がひん曲り、唇が歪んだ。女は後手に縛られ、正座させられた膝の上に石を乗せていた。その石

は膝をおおうほどに大きく、その重量は、女の細腕では抱えることも不可能なほどであった。——そしてそれは、一枚から二枚になった。

「う、ううう……」

女の脛の下には、鋸齒形に齒を並べた板があった。石抱きの刑——しかし、ここは牢舎でも奉行所でもなかった。女は、父親と姉の仇討を誓った遊女おそでであり、酷薄な折檻を加える男は、遊女屋の主人七兵衛である。いったいどうしてこんなことになったのか？

黒蛇の網

記録によると、この遊女の仇討事件は、天保十二年極月の十七日に発生したことになる。時の將軍は徳川十二代の家慶であり將軍職について四年目、映画や時代小説で大活躍している遠山の金さん——例の刺青奉行の遠山左衛門尉景元が、北町奉行となって二年めだ。そのほか、お馴染みの人物をあげると、ご存知天保改革の立

役者水野越前守忠邦が老中職となつて七年目、そして時代小説ではもっぱら悪役のほうを引受けている鳥居甲斐守が、御目付衆から南町奉行になって一年めである。また俠客のほうでいうと、海道一の大親分清水の次郎長が、このとき血氣盛りの二十一才だった。

もっとも、こういう前書きをしたからといって、これらの人物が八遊女おそでの仇討Vに関係があるわけではない。なにしろ場所が江戸や清水とは遠く離れた美濃の国である。お江戸日本橋から百と四里半、はるけくも来た苗木の宿場だ。ここは一万二十石……と細かく刻んだ小大名、遠山美濃守の領内でもあり、下呂や山中を左右に控えて、辺鄙ながらも宿場女郎をかかえた娼家があった。

「吉乃家」これが表向きは旅籠屋ということになっているが、その実、この宿場にただ一軒しかない遊女屋であった。

八事件Vは、この吉乃家で発生した。吉乃家の主人七兵衛は、ただ



の遊女屋の亭主ではない。土地の博徒で「黒蛇」の異名を持ち、執念深く、貪欲で、惨忍酷薄で、吝嗇で、まったく人痰Vのように汚ない男であった。

だから、旅の女に因縁をつけておのれの所の女郎にしてしまいうぐらいのことは、やりかねなかったし、げんに、この事件の発端となつた「遊女おこよ」の場合などはもっと卑劣で強悪なことをやらかしている。

苗木から西へ八里——金川在の百姓与左衛門と娘のおこよが、下呂の湯治場へ行くために苗木の宿場を通りかかった。この宿場には黒蛇の七兵衛が毒蜘蛛のように網を張っている。おこよの美貌が、この網に掛つた。七兵衛は子分に命じて、与左衛門をむりやり賭場へ誘い入れ、いかさま細工で翻弄して、娘のおこよを貸金のかわりに奪い取った。よくある手だ。

おこよは七兵衛のなぐさみものにされ、あげくは吉乃家の遊女に墮^{おとし}される。与左衛門は首を吊って



死ぬ。悲惨な結末である。

宿場女郎にされたおこよも、苦界のつらさに逃亡をはかって捕えられ、酷使と粗食で弱っている身体に、水責め鞭責め石抱きと、情容赦のない制裁をくわえられ、それが原因で死んでしまう。

このまま終わったら、この世に神も仏も存在しないわけで、七兵衛の悪業も記録に残らなかったかもしれないが、八天Vはここに、おそでという娘の存在を許した。おそでは与左衛門の娘、おこよの妹であった。彼女は父親と姉の復讐を誓い、七兵衛の悪事をあばき立てるために、すすんで吉乃家の遊女となった。

狂気の部屋

遊女となって三月めに、おそでは七兵衛の秘密を握った。ばくち好きの苗木藩士脇坂新之助を殺害して庚申塚の下に埋めた事実である。物欲の強い七兵衛が秘蔵していた証拠の印籠——象牙に金銀を象嵌した新之助の印籠……も手に

入れた。しかし、それを証拠に訴え出ようと逃亡の機会を狙っているうちに、七兵衛に勘づかれてしまった。

「虫もくわねえツラあしてやがるくせに、この野郎、とんでもねえアマだ！」

七兵衛はいきり立った。吉乃家の遊女として、その献身的な勤めぶり、苗木の宿の男や旅人ばかりでなく、下呂、一宮、高山や

金川、八幡、下田あたりの男たちまで引き寄せて稼ぎまくる美貌のおそでに、すっかり心を許していた七兵衛である。反動的に、その狼狽と怒りは物凄かった。

「顔立ちに似たところがあって、どうも変だとは思っていたんだ。てめえ、おこよの妹だな」

怒り狂った七兵衛は、多くの女の血と涙と、悲鳴と苦痛と、そして真恵、絶望、狂乱——もろもろの黒い地獄のようなシミがこびりついている折檻部屋に、おそでを引きずり入れた。

「この部屋がどんな部屋だか、百

も承知のはずだな？」

後ろ手に縛りあげたおそでを前にして、黒蛇の七兵衛が陰にこもった声でいった。

おそでは下唇を噛み、その美しい瞳に、黒い憎悪の色を浮かべて七兵衛を見上げた。

「ふふ、うらめしいか。いまに、ただうらめしいだけじゃすまねえようにしてやるぜ」

七兵衛がねちねちした語調で続けた。惨忍なよろこびを秘めた声……この男の体内には、女が苦痛にのたうつ姿を見て、舌なめずりするような毒血が流れているのかもしれない。

「あそこにあるのが何だかわかるか？ あのと歯形の台木……ふふ……その台木にこびりついて

いる腐った墨のようなシミ——あれは、おこよの血だ。おこよは、あの台木の上で石を抱いて、脛の骨をくだきながら、狂い死にしたのよ」

おそでの眼に涙が浮いた。姉の苦痛と無念を思ったからである。

「おこよの二の舞になりたくなかったら、印籠の隠し場所を白状するんだ」

おそではこたえなかった。七兵衛の首をしめる唯一の証拠——脇坂新之助の印籠は、すでにおそでの手もとからはなれていた。しかし、その事実を七兵衛に知られてはならない。

「強情なアマめ、どうしても痛いめがしてえというのか」

七兵衛は、多くの宿場女郎の、血と悲鳴と怨念がこびりついている弓の折れを握った。

それは折檻部屋の陰湿な空気を裂いて、おそでの肩先へ、背へ、胸へ飛んだ。

「さあ、ぬかせ！ 印籠はどこにある」

七兵衛の額に脂汗が浮き、おそでの唇から呻き声が洩れる。しかし、おそでは屈しなかった。弓鞭の折檻に耐え抜けば、次に石抱きの恐怖が待っている。

たとえ脛の骨がくだけでも、まけるものか——おそでは、与左衛

門とおこよの霊に祈った。

彼女は一種の賭けをしている。

本能的に危険を感じて、そのと

き遊びに来ていた苗木の宿の油屋藤吉に、証拠の印籠を托したのである。藤吉がおそでの希望を入れて、苗木藩目付衆、脇坂忠太夫の屋敷へ駆け込んでくれたら……しかし藤吉は、七兵衛の無法を恐れ騒ぎのかかり合いになるのを嫌って、おそでを見捨てるかもしれない。

七兵衛は、おそでの強情に業をにやして最後の手段に出た。

「泥を吐くまで、何枚でも石を積んでやる」

おそでは、姉の苦痛をそのまま体験することになった。脛の骨に加えられる苦痛は、おこよの狂気をうなずかせた。神経を引き裂かれるような激痛である。しかし、狂気する寸前、おそでは乗り込んで来た新之助の兄、脇坂忠太夫の手で救われた。七兵衛は、印籠と庚申塚の下死体が証拠となって断罪された。

戯曲「黒蜥蜴」

三月三日から二十六日まで産経ホールで公演の「黒蜥蜴」三幕の戯曲が、雑誌「婦人画報」十二月号に掲載されている。

「犯罪が近づくと夜は生き物になるのです。僕はこういう夜を沢山知っています。夜が急に脈を打ちはじめ、温い体温に充ち……とどつまりは、その夜が犯罪を迎え入れ、犯罪と一緒に寝るんです。時には血を流して……」

「でも己惚れかもしれないが、僕はこう思うこともありますよ。僕は犯罪から恋されているんだと。犯罪のほうでも僕に対して、報いられない恋心を隠してるんだと」と、こんな調子のセリフが、ずい所にうたわれる。

三島由起夫一流の耽美主義的なシニカルな、宝石をちりばめた精巧な寄木細工のような芝居。

江戸川乱歩原作の精神を忠実に守りながら、練り真珠のように、ことばを練りあげたおもしろさが

全篇にあふれている。

通俗性を排除した、高度に洗練された裏窓イズムを基調にした芝居ともいえるだろう。芳醇な美酒といった味わいがある。

直接的なSMシーンとしては、第三幕第二場、港の廃工場で、宝石商令嬢の早苗（大空真弓）が、うしろ手に縛られて登場する。

女賊黒蜥蜴（水谷八重子）の一挙一動は、やはりサディスティックな魅力があり、二人の侏儒（こびと）を従えてのふるまいには、M派をよろこばせる驕慢さがある。

この二人の侏儒に「いつものように私の足を揉んでおくれ」などと水谷八重子がいうセリフもある。（豊）

テレビの円地女史

フジテレビ、一月二十二日夜放送の「スター千一夜」には「男の銘柄を書き終えて」というタイトルのもとに、作家の円地文子女史、それに、連載していた週刊文春の婦人編集者で、円地女史係りだった

た岡富久子という、ご婦人が登場した。

司会は、いつものように三木鮎郎。

鮎郎氏は、ひかく的大胆に「サディズム」とか「マゾヒズム」とかいふことばを発しながら、執筆中の苦心談をききだす。

サド・マゾの資料をさがすために、あちこちの古木屋をあるいたこと。

自分はいままでそういう趣味の存在を知らなかったので（ホントカネ）そっちのほうの人に、いろいろ教えてもらった、など円地女史の話は興味ぶかった。

資料さがしには、文春の岡富久子女史も手伝ったそうである。

鮎郎氏が、その岡女史に、

「それじゃ、岡さんには、そっちのほうのご趣味がおありなんですか？」

ときいたとき、

「とんでもない！」

と、とびあがらんばかりにしてこたえた岡女史の表情が、印象的





裏窓タウン

であった。

小説「男の銘柄」は、読者の間に非常に好評で、そのために、予定より執筆を長くのばしたということである。

ともあれ、サドとか、マゾとかいうことばが、テレビに堂々と登場するとは——ああ、時代なるかな。

(藤)

「白昼の恐怖」

日本テレビ、一月十六日夜放送の「ダイヤル一〇番」は近來にない迫力シーンの連続であった。

布勢博一・脚本、高井牧人・演出の「白昼の恐怖」という囚人脱走もので、テーマはよくあるやつだが、かんじんの場面の描写がていねいで、異色ある真実味をだしていた。

作業中の二人の囚人が、看守を殺して脱走する。二人は街なかへのがれ、夜を待って、西川家へ侵入する。

そして西川家の妻（梅村伶子）長女（真山知子）長男（山崎猛）

を縛りあげて、逃亡のチャンスをはかる。

(狼)

長女の年ごろは二十歳前後。可憐な容貌の娘である。三人とも、うしろ手。

詩の中にかくされ
たホモ

途中、食事のしたくをさせるために、妻と長女の縄がとかれる。それからまた、うしろ手に縛られる。縛りかたは、手首だけをな

一部の人にはその名を知られていて、Nという詩人が、さきごろ自分の手で「花火」という個人誌をつくって、その創刊号を寄贈してきた。

にかみじかい紐のようなもので縛ってあるが、背後をハッキリと、かなり長くうつす。

Nはかなり高度なホモであって他の大半の男色家のご多聞にもれず、みずからのその傾向を周囲に秘しているため、それについての

逃げだし、外へ知らせようと努力し、脱獄囚のほうは、これまた神経をすりへらして監視し、逃亡の計画をねっている。

いいたいこと、書きたいことが、腹のなかにモヤモヤとうずをまいてい。芸術家だけに発表欲の旺盛なかれには、これがどうにもがまんができず、腹のなかのモヤモヤをぶちまけたいために、この個人誌をつくったということである。

うしろ手に縛られた娘が、男たちの兇手から、なんとかのがれようと、家のあちこちをよるめき歩くシーンなど、その緊迫感だけで三十分のドラマが終始するわけである。

だから、もちろん、かれのホモの傾向を知っている者やその道の友人だけに寄贈しているということだが、おおね（大根）は一人で

けっきょく、縛られなかった二男の少年の機転で、危機は去るわけだが、ちかごろ興味ぶかいテレ

もより多くの人——理解者を対象



としているにちがいない。

この中に「銀の匙」という題の詩が載っている。――

「あなたの臥床に銀の匙を並べて

なにになろう

レモンの汁がしたたり、あなたの若さが、はじらいをみせて、置時計のセコンドを数え、ふつと、ある日の幻想に恍惚としたかのように、まつ毛を上げたとき、私のこの手をどう処置すればいいのか迷ってしまう。

肅然とした雨の日、濡れたアンブレラをもてあそびながら、あなたのえりあしをそっとぬすみみた

瞬間、私の告白に驚いた、あなたの戸惑ったような瞳に、港のわびしい風景が映った

寒々とした地球儀がまわり、私は未来の暗黒を想った

そして、空虚なバスに乗った

ああ、だから、この輝かしい

ハしんじつの祭日Vを私は疑わずにはいられないのだ

うて、なのように可愛い唇の端

が、瞳孔に映えて、はげしい奔流となった

今宵、あなたの臥床に飾る人わたしの凡てV」

内にひそめた烈しいものをおさえて、しずかにうたいあげているこの愛の詩における「あなた」という対象が、同性であることはもちろんだが、これがふつうの雑誌に掲載されていたとしたら、大方の読者は、この「あなた」を異性と思うにちがいあるまい。

それにつけて思いだすのは、昨年亡くなった釈超空（折口信夫）の相聞歌^{そうもんか}すなはち愛の歌で、それらが女性を対象としたものではなく、じつはすべて男性にたいする恋情をうたったものであることは、彼が同性愛者だったことを知るもの以外には、おそらく想像もつかぬことだろう。

おなじことが、小説にもみられる。

たとえばマルセル・ブルーストの大作「失われし時を求めて」の第二篇「花咲く乙女たちの蔭に」

に現われる女性アルベルチーヌは、じつは作者ブルーストが、かれの愛する美貌の従僕アルベールの姿をかえたものだということだが、ジイドの日記の中に語られている。

ここに文学のカラクリがあり、文学の秘密があるといえよう。

ちなみに、ブルーストの同性愛について、ジイドの日記にきくと、「昨夕ブルーストと一時間ばかり話す。わたしが訪れるなり、同性愛のことを話しはじめた。かれは自分の男色を否定したり隠くしたりするどころか、それを露出する。それを自慢にしている、ともいえるような気がする。女性は精神的にしか愛したことがないし、男性相手の性愛しか経験したことがないという。かれはボードレールは男色家であったという確信を語る。かれの声の調子には、わたしがそれを疑うのをボードレールにたいする冒瀆だという調子が含まれているようだった。かれのいうことが正しいと信じたい。そして男色



家は、はじめわたしが考えていたよりも少し多いことを信じた。いずれにせよ、ブルーストがこれほど徹底的な男色家であろうとは思っていなかった」(三光寺公英氏訳による)

うんぬんとあり、ブルーストの徹底したホモ観に、ジイドはかなり影響されているらしいことがみられる。

(か)

またまた

「ハイ・パト」

たびたび本欄に紹介される、テレビ映画の「ハイウエー・パトロール」(NETテレビ、日曜の午後六時半から——)

一月七日に放送されたものは、「夫婦強盗」と題する、前にもあったような睡眠薬使いの強盗事件だ。

ハイウエーに面したドライブ・イン。コーヒーと軽い食事ぐらいを出して、ドライヴァーの息抜きをさせるような店に、女が睡眠薬を隠し持ってカモを狙っている。

そこへ運転手に化けたダン隊長が入ってきてコーヒーを注文する。

ダン隊長の隣へ坐った女は、故意にハンド・バッグを床へ落とすアメリカ男の礼儀としては、レディの落とした物は拾ってやらなければならぬ。

そこが女の付け目だ。ダンが床へ手をのばした隙に、女は錠剤を二粒、素早くコーヒーカップに入れる。

ダンは、それを承知で飲み干し、店を出て車に乗る。女は自分の車で跡を追う。

カモは走っているうちに睡くなり、運転ができなくなる。そこへ男が現われて、夫婦協力してカネ目のものをいただいちゃおうという手口である。

むろん、ダン氏が眠ったふりをする頃にはハイウエー・パトロールの連中が包囲網を張っていて、この夫婦は悪運尽き「御用」となる。

ここに至って、かの有名な、フアン必見の、テレビ史上まれに見

る(?)後ろ手錠スタイルが見られることになる。

女優が自分から両手を背中にまわして手錠の鳴るのを待っているのは、どうも毎度のことながら不自然だが——しかし、考えてみると、これは仕方がない。

だって、そうでしょう。かりに、女が前で両手を揃えたとする。それを、いきなり方針通りに(?)

後ろ手にしたんじゃ妙なものになってしまう。サディズム隊長の後ろ手パトロールになっちゃう。

さて、女は、手錠をかけられながら警官たちを見回して「あんた達の顔を憶え」といって、今度は薬を倍にして入れてやるわ!と捨てゼリフを吐く。

「その必要はない」と答えたダン氏が、フラリとよろめく。薬はやはり、キビシク効いてキタのである。

引き立てられて行く女を背後から撮って、映画は終る——という次第。

探偵ものの番組は沢山あり、美女



が犯人である話も数多く放送されるが、普通、逮捕の場面は省略される。その中で「ハイ・バト」はまことに異色だ。どう？ 日本のテレビ屋さん。誰か、時代ものでこの手法を真似ちゃったら……。

（黒椿三十郎）

「明治一代女」より

一月七日の日本テレビ、夜十一時二十分からの週末名画劇場は、新東宝映画「明治一代女」が放送された。

六、七年前の溝口健二監督作品であり、花井お梅を木暮実千代、箱屋巳之吉を田崎潤、歌舞伎役者の沢村仙枝を北上弥太郎、という配役。その他、端役、ふだんはてんで見ちゃいられねえ老朽大根役者数名を巧く使いこなしている点など、さすがに故溝口の演出手腕は一級である。

物語りのクライマックスは、いうまでもなく雨の浜町河岸における巳之吉殺しの場である。この映画は、お梅の殺人から後を念入り

に描いている点、先年の大映作品（お梅に山本富士子）とは違ってコクがある。

取り乱して家へ帰ってくるお梅に、母親（浦辺粂子）や弟（井上大助）は自首をすすめる。

弟は学生であり、法律の本を調べたりして「ああ、これなら大丈夫。正当防衛だから大した罪にはならないよ」などという。

母親は「やっぱり、行くのかねえ……」と吐息をしながら、着替えを用意する。

弟は姉の煙草を詰めてやりながら、「屯所へ行ったら、もう吸えなくなるんだから、今のうちにたくさん……」と云いかけて、さすがに悲しみがこみ上げ、絶句する。お梅は自首の決心がぐらついてくる。

「おっかさん……あたし、このまま隠れてしまつては、いけないだらうかねえ」と悩む。

驚く母親に、お梅は「いえ、逃げるんじゃない。ただ、あの人の襲名披露の舞台をひと目みてから

捕まりたい……」という。

お梅は木賃宿にひそんで襲名披露の日を待つことになる。

せんべい布団をかぶって、罪におのくお梅のそばでは、「柳橋で一番の別嬪だ」「いや毒婦だ」などと、同宿している連中が噂をしている。そこへ刑事たちが踏み込んでくるが、お梅はからくも逃がれ去る。

襲名披露の日——、劇場には刑事たちが張り込み、弟も探しにきている。

顔を隠して立見席から眺めるお梅を、弟が見つけて「もう、いいでしょう」と自首をすすめる。

劇場の外——繁華な町並みの夕暮れ時。雑沓の中をお梅が曳かれて行く。前手錠（江戸時代の手錠）の上、捕縄が胸にかかって、その中央から手錠に走っている縄目——つまりY字型の縄目をかけられている痛々しい姿だ。

弟が走り寄り、着物を羽織ってやる。お梅がその前を掻き合わせるところで「終」となる。



裏窓タウン

この映画の封切当時、ある新聞の芸能欄に出ていた木暮実千代の感想というのを記憶しているが、「手錠をかけられた時、お芝居とはいえドキリとして、悪いことはしたくないと思った」のだそうです。いい心がけでした。

(腐爛軒酒多飲)

池内淳子の受難場面

昨年暮れの十二月二十六日、TBSテレビの夜八時半から放送された「おとなしい妻」というミステリードラマは、原作、多岐川恭、主演が池内淳子。

昼寝をしていた人妻(池内)が、刃物の行商人(中谷一郎)に眠りを破られる。

「押売りとは違います」という男は、「庖丁を買ってもらったお礼に、サービスとしてお宅の刃物を砥いであげます」と台所へ上がりこむ。

そばで見守る女を、男はいきなり抱きすくめる。女は必死に抵抗するが、男の力には勝てず、押し

伏せられてしまう。

そこまでがプロローグで、強引な情事の場面にかぶせて、スタッフ・キャストなどタイトルが出てくる——という、よくある手法だが、タイトル・バックになっている犯される女のクローズ・アップが、まことになまなましい感じで、思わずドキリとさせられる。

眼尻から一筋、涙が流れ落ちたりして……何といったらよいか、現在進行中という感じが如実に出てしまう。

女は亭主(須賀不二夫)の外泊にも文句をいわないような「おとなしい妻」だったのだが、その後男と密会を重ねて、御存知よろめき女優の面目を發揮し、イケナイ淳子に変貌してしまう。

月日が流れて——男は刃物工場を経営するまでになり、女はますます男と離れがたくなる。

「工場拡張の資金が欲しいんだ。君の亭主を殺して保険金を取ろう」と男は云い出し、女も同意する。

方法は狂言強盗である。まず、女を後手に縛り、両足も縛り、猿轡を箠めてから、家中を物色したように装う。

亭主が帰宅するのを待ち、男が刺し殺して逃げる——という計画なのだが、意外な破綻がくる。(このあたり、脚本、演出ともに巧くない。池内がテレビ界のスターであるため、余り悪女にしすぎないように、との配慮から筋の運びに迷ったのではないかと思えるフシが多分にある)

刺されたのは、キャバレーづとめをしながら男の仕事の資金面を助けている妻(男は、池内よろめき夫人に対しては独身といいつわっていたのでアル)の浦里はるみ姐御であった。

亭主は、池内の猿轡を取り、足の縄を解き、次に手を解く。なぜ、手の縄を最後に解くのかは誰にもわからん。

新東宝時代には縛難場面も何度かあった池内だが、最近はどういう場面も珍らしいから少しでも長



く見せてあげましょう——という
演出者の親心(?) じゃなからう
か……などと考えるうち、物語の
中の彼女は、再び「おとなしい妻」
に戻って、疑われることもなく済
んでしまう。

「君のようなおとなしい女が、強
盗に縛られたりしたのに、よく平
気でいられたもんだな」などと亭
主は感心する。知らぬが仏である。

(真砂)

暁の婦勇伝

二月十日早朝のことである。

千葉県船橋市海神町旧新地内に
ある若松劇場合宿所の裏窓から、
ひとりの怪漢が侵入した。

この若松劇場合宿所というのは
ただの合宿所にあらず、ヌードダ
ンサーたちが起き臥ししている建
物である。

さて、怪漢は、ねていたT子さ
ん(23歳)のふとんに、ごそごそ
ともぐりこんだ。

ハッと気づいたT子さん、キャ
ーッとさけび声をあげる。とたん

に、ガバとはね起きた同宿の、肌
もあらわな六人の貴婦人、

「くせもの！」

とばかりに、怪漢におそいかか
った。

怪漢はもちろん男、

「なにをこの女めらが」

と抵抗したが、いかんせん多勢
に一人。ましてや、ヌードダンサ
ーとあるからには、テキは筋肉発
育したグラマーばかり。

この魅力的なボリウムの集団に
なぐられ蹴られ噛みつかれ、ぎゅ
うぎゅうの目に合わされたあげく
男は当局へ突きだされるといふな
さけなさ。

この、かよわき痴漢の正体は、
同市の建設会社にはたらく二十七
歳の青年労務者で、酒に酔ったあ
げくのイタズラ気だったという。

けっきょく、住居不法侵入現行
犯というわけ。

ところが、男の話をきいたおま
わりさんたちは、

「とんだサイナンだったな」

と、かえって痴漢をなくさめた

り、ひやかしたり。

男は、コブのできた頭をかきな
がら、

「ナイロンの靴下より、はるかに
強かった」

と、しょげていたという。

いくら酒に酔っていたとはいえ
建築会社の労務員で、しかも二十
七歳という血気さかな男を、よ
ってたかってふんづかまえて、警
察につきだすとは、なんとまあ、
たくましくも、スバラシイ、お嬢
さんがたでしょう。(不二夫)

「スーパーマン」

以前にも本誌で紹介されたこと
があったが、アメリカのテレビ映
画「スーパーマン」には、ときど
き秀逸なシーンがあらわれて、S
派をよろこばすようである。

さいきんでは、フジテレビで毎
日曜の朝十一時から放送している
が、二月十一日の「海賊島」では
おなじみの婦人記者ロイス嬢が、
ほとんど縛られっぱなしというス
トーリーだった。



裏窓タウン

太平洋（らしい）に浮かぶ無人島を目標にして、アメリカ海軍が射撃演習を実施することになる。編集長の命令により、れいの三人組記者が、この島へ取材にやってくる。

ところが、無人島ではなくて、そのむかし、七つの海を荒らしまわっていた海賊の子孫たちが、当時の服装そのままで生き残っていて、宝物を守っている。

三人組の新聞記者は、この海賊たちに、あっさり捕われて裁判にかけられる。

ロイス嬢は縄で手首だけをうしろ手に縛られて、島のあちこちをひきまわされる。この時間が、かなり長い。とどのつまり、ロイスは大砲の砲身に縛りつけられ、最大の危機がやってくる。

このときは彼女の胸（というよりもおなかに近いが）に、ふと縄がぎりぎり巻かれ、かなりの緊縛感があった。

あわや、というときに、スーパーマンが正体をあらわすのは、い

つものとおり。

お子さまむき映画だから、喜劇仕立てで、お色気をうんぬんするほうが間違っているのだが、ロイス嬢はなんともやせていて、ぎすぎすして、女らしいふくらみがな

（重）

眠れる美女

川端康成の小説である。波の音がかすかにきこえてくる湘南地方のある館で、恵まれた環境にある老人ばかりを相手に、はちぎれるような娘たちが、睡眠薬をのんで眠っている。そのベッドで一夜をともに明かすという趣向である。

眠れる美女とは絶対にことばをかわすことは許されない。というのは、ベッドで娘が眠っていると

き以外には、決して顔を合わせる

ことができないからだ。もちろん娘は裸でベッドのなかで眠っている。だから老境に入っ

では、さまざまな形で欲望がもえてくる。話しかけても、かるい寝息をたてているだけで娘の返事はない。ときには髪にむせ、頬をすりよせたりするが応じない。それでも老人には、娘が腕のなかにいる以上、ただの眠りとは考えられず、裸体の一部にふれずにはいられない。そういうとき、ねがえりを打ちながら、娘が何か言ったような錯覚を起こす。それが娘のねごとだったりする。

朝めざめても、娘はなおも眠りつつけている。館の女あるじに呼び起こされ帰っていく。こうして老人は何回かその館をたずねていくが、同じ娘とはふたたびめぐりあえない。そのたびに別の娘がベッドで眠っているのだ。

これがもしも裏窓向きの眠れる美女だったら……そう考えたりするのは邪道というものか？ どんな物理的な圧力をくわえても、目をさますことのない裸の美女……S派の人にはどうだろう？ M派にはどうだろうか？

（衆）

捕われた姫君

宮古志満夫

豊田みのる・絵

振り袖すがたの姫君に繩——この比類なき艶麗さよ！

一 振り袖の晴れ姿

今年の一月二日は、冷たい小雨の降る寒い日だった。

ぼくは、招かれて、大阪帝塚山にある田口美代子の家へ遊びに行った。お正月なので、ぼくは緋の着物に緋の羽織を着ていた。ぼくが訪れたのは、午後七時過ぎだった。美代子の家へは、すでに、もうひとり、彼女と同じ高校二年生の浜田文子という美少女も来ていた。

ぼくは、今年の三月に大学を卒業するので、これからは、ぼくにとっては学生時代最後のお正月ということになる。ぼくは、美代子が中

学三年になった時以来、彼女の家庭教師として田口家に入ったり、彼女の両親や同家の女中とも懇意にしたりして来ていた。美代子は一人娘で、一年余り前に日本舞踊の名取りになっていた。ぼくは踊りの会にたびたび招かれたので美代子の踊りを何回となく見たわけだが、姿の美しい彼女の踊りは、見る者を酔わす魅力を持っていた。ぼくは文子とも知り合いだった。

ぼくたち三人は、掘りごたつのある十畳の座敷で、コーヒードリンクを飲みながら、とりとめもない雑談に花を咲かせた。二人の少女は日本趣味の持ち主で、今夜は、二

人とも、華やかな振り袖の着物を着て、帯を胸高にきっちりしめている。ぼくは彼女たちの美しさに心臓がドキドキするのを覚えた。ぼくは掘りごたつに両足を突っ込んでいたが、二少女は、座布団の上に端坐し、淑やかな動作でお茶を飲んだりなどしながら、ぼくの罪のない無駄話を聞いている。

その夜は、この広い邸の中に、ぼくたち三人と、一人の老女中との四人しかいなかった。ぼくも文子も気楽に時を過ごした。

話題が映画のことに及ぶと、ぼくは、躍る胸を抑えて、次のような順序で会話を進めて行った。

二 時代劇問答

「田口さんは、日本の時代劇の映画を見たことがある？」

「ええ、ありますわ、何度も。時代劇は好きですから」

「浜田さんはどう？ 映画やテレビの時代劇をどう思いますか」

「そうね——時代劇には、なにか、別の時代の、別の世界の、夢のようないろんなものがあるわ」

「じゃあ、浜田さんは、もしも江戸時代に生まれていたら、さしずめ、美しい武家娘というところかな」

「あたくしよりも美代子さんの方がお姫さまらしいわ。お上品で、

おきれいで、おしとやかで」
「あーら、文子さんったら——でも、あたくしも、時代劇に出るのなら、お姫さまや、下町の大きなおうちの娘として出てみたいと思いますわ」

そこで、ほくは次のように言ってみた。

「しかし、時代劇ではね。そういう美しいお嬢さんは、必ず一度は、あぶない目に遭うことになってますよ。田口さんは、それでもいい？」

「あぶない目に遭うって？」

「そうです。たとえば敵方の悪者たちに狙われるとか——」

すると、文子が、

「そうよ。美代子さんなんか、たちまち、人質としてさらわれる役よ」

「あら、いやだわ。あたし、悪い人にさらわれるなんて」

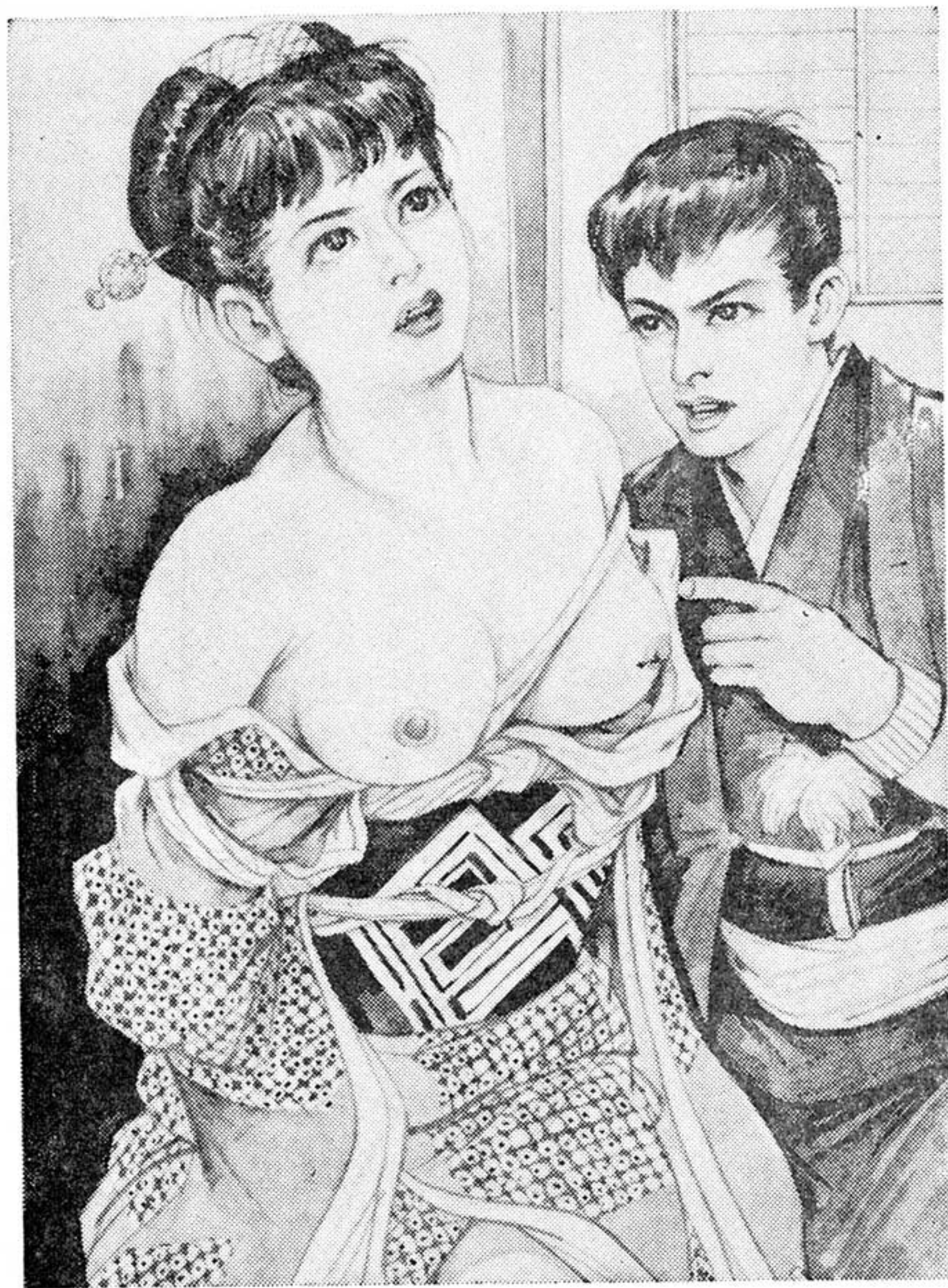
また、ほくが誘導的な問いを試みる。

「——徳川時代に、美しいお姫さまが悪方の侍たちに捕えられて連

れて行かれる時は、どういうようにされるか、浜田さんは知っていますか？」

と文子が答えると、美代子がおもしろそうに、
「縄で縛られて、それから、口の上から手拭いで猿ぐつわをされて

乗せられるのでしょうか？」
「そうね——やっぱり、おかこに」
「縛られるって、どこを縛られるのですか？」
「両手を後ろに回されて、手首を



括られ、それから、胸の上もぐるぐると括られるのです」

ほくは、どっとどよめく心の高鳴りに堪えつつ、

「ところで女の人の最高の盛装と言え、浜田さん、どんな服装でしようね？」

と訊ねてみた。浜田文子は、

「最高の盛装？——それは、あたし、やっぱり、お振り袖だと思えますわ」

と答えた。

「そうすると、今夜のあなたがたは、二人とも、女性最高の晴れ着姿をしているわけですね。田口さんも浜田さんも」

「ええ、そうだわ」

と、文子は自分の着物の両方の袂を持ち上げて見せ、

「この着物、袖丈は三尺近くあるのよ。あたし、もし、こんな姿のまま縄で括られたら、きつと胸がどきどきするでしょう。美代子さんはどう？」

「あたし、そんな目に遭ったことがないから、わかりません」

そこで、ほくは文子に、さらに次のように訊いた。

「両手を背中に回されて縛られることをなんと云うか知っていますか？」

「後ろ手に縛られると言うんでしよう。何だか、あたし、変な気持ちになって来たわ」

すると、田口美代子も、

「あたしもよ。胸の中が落ち着かないような妙な気持ちですわ。どうしてかしら」

と応じた。

「ほんとに不思議ね。あたくし、なにか切ない気持ちだわ。悪者に両手を背中のお太鼓の上にねじ回されて縄をかけられる時って、きつと、こんな、こわいような不思議な胸さわぎがするんでしょうね」

また、ほくが口をはさんだ。

「浜田さんの帯の結び方は、かさ高くて、重そうですね」

「はい。これはお太鼓結びじゃありませんもの」

「田口さんの方は？」

「これは、普通のお太鼓です。あ

たしひとりで結んだのよ」

「じゃあ——田口さんの方が邪魔にならない？」

「なんのこと？　なにの邪魔にならないのです？」

ほくは思い切って言った。

「後ろ手に縛られるのに。高手小手に縛められるのに」

「まあ、ひどいひと。あたくしが括られますの？」

「うん。今から三人でお芝居をしようよ。田口さんは、さらわれていじめられるお姫さまの役。そう

ですね。名前は夕姫さま。それから浜田さんは琴姫さま。さらわれて来た夕姫さまをいじめる役。ほ

くは敵の殿さま」

「あーら、ずるいわ。あたくしは縛られる役にされてしまうの？」

「なんだか恥ずかしいわ」

と、美代子がかみ笑いを浮かべながら言ったが、

「だって。いちばん優しくて、気品があって、おとなしいお姫さま

の役は、美代子さんでいいでしょう」

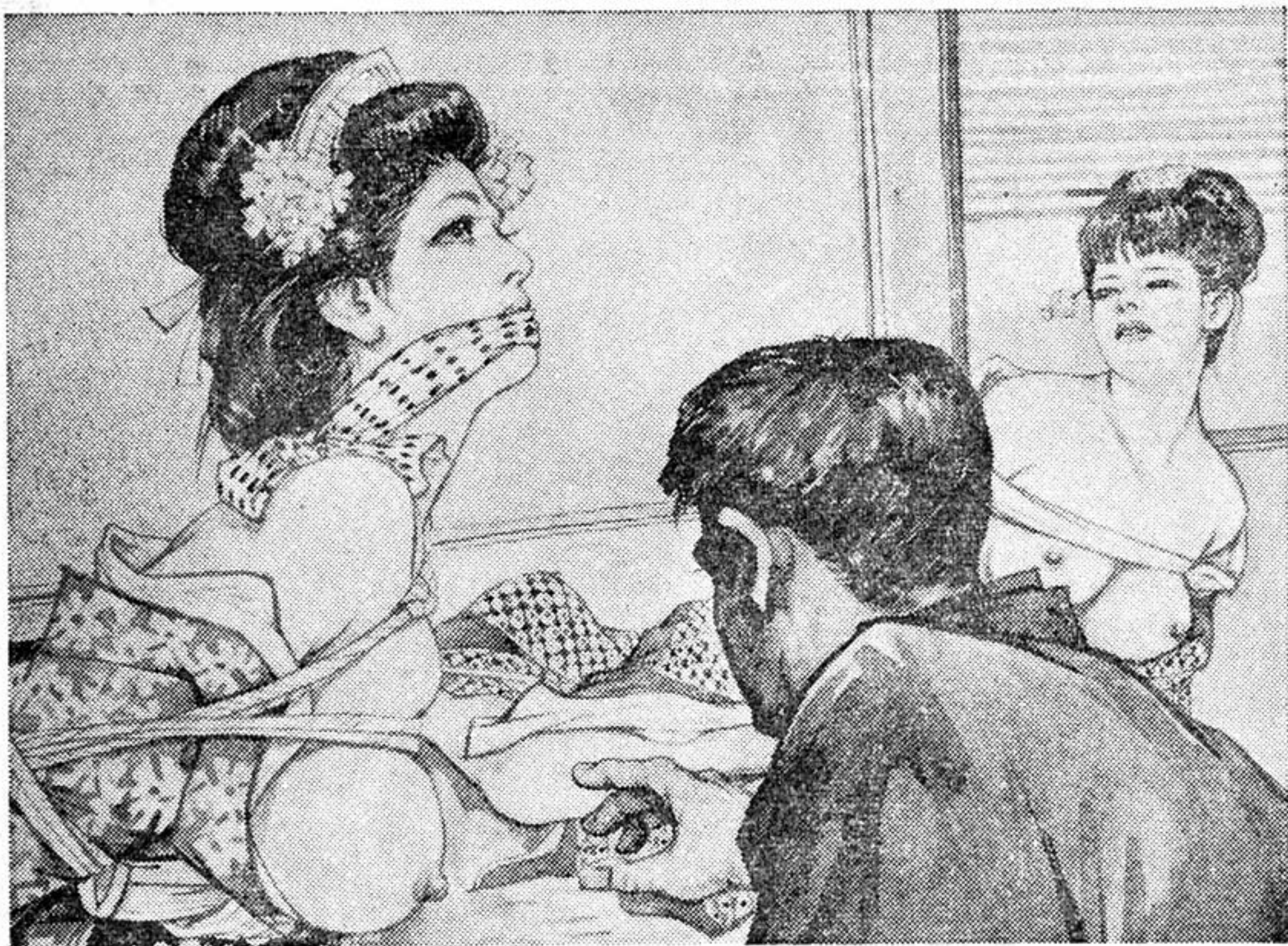
と、文子は取り合わなかった。ほくは、美代子に頼んで、納戸

の部屋の押し入れや箆笥の中を探させ、ピンクの腰紐と、長い木綿の細い縄と、日本手拭いと、風呂敷を持ってこさせた。縄は直径が八ミリメートルくらいの、柔い、恰好のものだった。美代子がそれらの物の用意をしているあいだ、ほくは、文子に、芝居の筋の運び方と台詞を適当に教えこんだ。

三 後ろ手に括られて

田口美代子は浜田文子に促されて立ち上った。二人の少女は、ふすまをあけて、隣の部屋へはいった。四畳半のたたみの間だ。ほくは近づいて、ふすまを半開きにして二人の行動を盗み見した。文子は美代子の左腕を後ろから両手で取り、美代子の左肩を下へ抑えつけながら言った。

「さあ、夕姫さま、そこへお坐りなさい。なんでも、あたくしの言う通りにするのです。言われた通りにしなければ痛い目に会わされ



ますわよ」

文子の厳しい口調に、美代子は、素直に、「はい」と答えて、その場に裾をさばいて坐った。文子は、きつい顔つきで、さらに美代子に言った。

「夕姫さまは、捕えられて、さらわれて来たお姫さまらしく、今から後ろ手に括られるのです。では、その袂をお膝の上にきちんと重ねなさい」

美代子は、長い振り袖を両方も膝の上に重ねてから、うなだれた。

「帯あげをも少し出して。衿もとをととのえて」

文子に命令されて、美代子は帯あげと衿もとを直した。

「はい。では両手を後ろに回して、帯の上で、手首を組み合わせなさい。神妙にするのです。夕姫さま」

文子は真赤な薄い絹の扱帯で美代子の両手首だけを結わえた。それを見たほくは、そばへ寄って、縛り方について文子に助言した。文子は、いったん扱帯をほどき、

ほくに言われたように縛り始めた。もちろん、その手付きは、不馴

れな、ぎこちないものだった。美代子の両方の二の腕の、肩のすぐ下の袖付けの所を別々に二重に括って背中であらね、その中心に、美代子の両手を高く縛り上げたのだ。従って、美代子の胸には縛めはかけられていない。文子は扱帯の端を右手に持った。

「お立ちなさい」

美代子は立ち上った。括られた両手首の位置は両肘よりも高かった。

「お歩きなさい」

美代子は下を向いて歩いた。ああ、なんという魅力的な姿態なのだろう！

「お坐りなさい」

美代子は座敷にはいった所で、ふすまの前に坐らされた。ほくは、急ぎ足で離れ、庭に近い方の隅の坐布団の上に壁を背にして悠然と坐った。やがて、両膝をついた文子が、ほくの方に向かって伝えた。「申し上げます、お殿さま。夕姫



さまをさらってまいりました」
「そうか。しばらくのあいだ、夕
姫をその鏡の前に坐らせておきな
さい」

美代子は、よろめきながら鏡台

の前まで歩かされた。そして、し
ばらくのあいだ、鏡の前に正坐し
て、いやおうなしに鏡に映った自
らの後ろ手の振り袖姿を眺めさせ
られた。美代子の両腕の肩の

「では、夕姫をこちらへ引っ立て

て来て、私の前に坐らせなさい」
再び、美代子は文子に引っ立て
られて歩き出した。それから、面
を伏せたまま、ほくの前に神妙に
きちんと坐った。やさしい撫で肩
が楚々とした風情だ。ほくは、ま
た、えらそうに言った。

「琴姫、鏡台に置いてある風呂敷
包みを持って来なさい」

「はい、かしこまりました」

と答えた琴姫の文子は、持って
いた扱帯の縄尻を手から離してか
ら立ち上り、鏡台の上に置かれた
紫の風呂敷包みを捧げて来た。そ
して静かに美代子の隣に坐り、自
分の膝の前にそれを置いた。その
とき、急に、ほくの気が変わった。
あの可愛い文子も、ほくのこの手
で雁字搦めに縛り上げてみたいと
いう衝動に駆られたのだ。

「琴姫、その包みを開きなさい」

文子が風呂敷敷をあけると、中に
は、束ねた白い細縄と、日本手拭
いとがはいっていた。ほくは、声
を励まして文子に言った。ほくの
両頬はほてって来た。

「琴姫、あなたも夕姫と同じように、今からお仕置きを受けなさい。二人とも仲よく縛られ、柱につながれてもらいましょう」

そう、ほくが厳然と言いつつ、文子は少し驚いた様子だったが、黙って坐っていた。

「だって、夕姫が縄目姿なのに、琴姫が括られないのは不公平です。琴姫も、ほんとうは、その手を後ろにねじまわされたいのでしょうか？」

と、文子の目をじっと見つめると、文子は赫くなつて瞼を伏せた。ほくの心は勇躍した。

ほくは、さっさと文子の背後に回り文子の前に置かれた白い細引を取り上げて、両手でしごいた。そして、まず文子に胸高に四重、六重に、びしびしと縄めをかけ、次には、さらに文子の両の手首を帯の結びのすぐ後ろへねじあげた。柔かくて滑らかな白い手だった。文子は痛そうな表情をしたがほくは構わずに、文子のしなやかな両手をきりきりと括しあげた。

縄尻が長く垂れていた。

「琴姫さまの方は、猿ぐつわをはめておきましょう」

ほくは、日本手拭いで文子の可愛い頬の上から彼女の口を被つて、手早くぎゅつと後頭部で結んだ。文子は「ふーっ」と声にならない声を立てたようだった。

ほくは、まず、夕姫さまの後ろ手首を別の腰紐で縛り、夕姫さまを立たせて歩ませた。白い足袋が交互に前に出て、夕姫の美代子は観念したように歩を運んだ。桜色の振り袖が美しく揺れていた。庭に面した廊下と、この座敷との境にある柱の左側に、柱を背に立たせて美代子を縛りつけた。

次に、琴姫さまの文子の縄尻を持って立たせて歩かせた。猿ぐつわをされた文子は、視線を落して素直に引立てられた。二尺六、七寸もあるう長い袂が美少女の悲しみを秘めて美しく垂れ、やさしくゆらめいた。それから、文子を、同じ柱の右側に、柱を背にしてきちんと坐らせ、縄尻を柱につない

だ。

二人はおとなしく、ほくにされるままにしていた。この二人の美少女は、うなだれたまま、申し合わせたように、そのふくやかな胸を震わせていた。

そして、無意識裡に身悶えをして見せていた。

ああ、その比類のない艶麗さよ。そして、この、筆舌に尽せない妖しくもまた不思議な雰囲気よ。二人の乙女の捕われ姿の、珠玉のごとき優雅さを見よ。

ほくは、元の場所に帰り、こたつのそばに坐ると煙草を喫った。ほくの手元は少し震えていた。ほくは、仲よく揃って後ろ手に縛り上げられ、柱に縛りつけられた二人の乙女の目も覚めるばかりに美しい振り袖姿を眺めているとき、まるで夢幻の世界をさまよっているような陶酔を感じた。

今夜のことは、恐らく、ほくにとって生涯に一度の体験となるだろう。

それから五分間ほどのち、ほくは夢から醒めたように二少女の縛めを解き始めていた。

三人とも、もう一言も言わなかった。

ほくは、この二人の美少女に、自分の心の奥底の秘密を見透かされたような気がして、恥ずかしくて仕方がなかった。

ほくは、その面映ゆさから逃げるため、早々に田口家を辞し去った。

外では寒い風がひゅうひゅうと吹いていた。

ほくは、この夜の経験を、死ぬときまで忘れずに、いくたびとなく反芻しつづけることだろう。

帰宅して寢床にはいつてからも、優しい二人の乙女が、角柱をはさんで背中合わせに括られていた世にも美しい晴着姿が目の前にちらついて、いつまでも眠れなかった。

四 夢よもういちど

畜獣デリムゾン V

未来の人類としての栄光を受けつぐものは女性である。男性はいっさい抹殺すべきだ！

阿麻哲郎 画・江淵晃夫

畜獣を救済しよう

女性革命というより、三次大戦の後処理のため、天文台の女性たちは日夜討議を続けた。革命は戦争によって、自然のうちに成就されていったからであった。だから、

もはや考えねばならぬことといえ、その未曾有な大被災の後始末の方策についてだけであった。その方策をつけることが、革命を不動のものにすることであった。

セシウム137やスロトンチウム90

を含む、恐しい放射能に対しての、免疫力が全くない人たち、特に男性たちは、もはや嵐の中の枯木にも劣る無力な存在でしかなかった。彼らは皆、女性からの救済と、その厚い保護の手を必要としたのであった。

今日ただ今、日本を動かす力をにぎる者は、男ではなく女なのだ。女は女としての権利をここに新しく確立するため、戦争に生き残った男の救済と保護を必要とした。小沢所長やルミ子を初め、他の代表から構成された臨時女性政府委員会日本支部の役員たちで、いち

はやくそのことが決議された。

男性の救済と保護は、人道主義の名に基づ





くセンチメンタリズムによるものではない。それはあくまで、女性の権利と繁栄をもたらす手段としてのものであった。この手段として、という一点においては、全員一致で了承するところであったが、その一致を見るためには二つの異なった立場から、さまざまな意見が交わされた。

小沢所長の主張から言えば、それは全く合理的な、いわば物理的にともいうべきよんどころない方法であり、しかしその方針は断乎として貫かねばならないものとした。三つ児の魂百までというが、先天的に男性は男性たる性格から脱却はできない、つまり周期的に爆発する破壊と暴力の本能である。それを防ぐための政治制度やイデオロギー、あるいは知性派で推進された文化活動や芸術上の運動、その成果、また宗教や思想上でのさまざまな推移と変ぼうなど、その過程で激しくもつれ合ったいっさいの試みが、破壊本能ともいうべきすさまじい戦争の宿命

の前には、いかに無力で卑小なものであったか、まざまざと歴史が証明する通りのものであった。

一度、二度、三度と繰り返されることは、地球の自転のように永久にとどまることなく繰り返されるのである。

理屈は無用、感情も無用。この長い人類の歴史を一変させるためには、男性そのものをまっ殺することである。ではだれが未来の人類としての栄光を受けつくか、それは女性である。未来の人類としての女性は、あらゆる苦役や悩みから、すっかり解放されるべきである。そのための労働力、いっさいの奉仕、それを果たさせるための男性資源はこの意味で救済、保護される必要がある、と、これが小沢所長らの主張する立場であった。

ルミ子はその立場を、それほど深く追求はしなかったが、所長のその数字的に割り切った合理的な未来像の説明の仕方には、決して納得はできなかった。

彼女を革命に駆り立てた情熱の源泉は憎悪である。徹底した男性への憎悪である。彼女はデュマの『モンテクリスト伯』を、どれほど愛読したかしのれない、結着は復讐である。復讐の物語が彼女の血をわかすのである。

男性に対しての復しゅう、それは彼らを殺

すことではない。デリムソンという、新しい生物によみがえらせることである、そのために現在、彼らの救済と保護は緊急の重要事項であった。

つまり、見解は二つに分かれたとして、方法は皆の一致するものであり、討議のまともには驚くほどスピーディーに行なわれた。

新生物資源の発見

天文台の女性たちは、やがて山を下り東京に帰った。やはり主権者としての女性の居所はほぼ日本の中央部に当たる東京が最適であったからだ。

破壊され尽くした東京には、もはや何物も残ってはいなかった。その激しさがいかばかりか、あたかも整理されたかのように瓦れきさえまばらな焼土のさまが、それを物語っていた。ただその地下深くには、あらかじめ戦争を予期して造られた地下工場や資材貯蔵庫、それに限られた高級指導者たちの豪華な宿舎が、そのままに残っていた。地底の核戦争も、こうした設備をも打ちこわすことはできなかった。

しかし、そこは土壤深く浸透した放射能から無事であるわけにはいかなかった。やっと生き残った男性の幾群れかが、やっと地下の

宿舎や、貯蔵庫のあたりにたどりつけても、強烈な放射能は彼らをたちまちのうちに無力な状態に陥れてしまった。女性の救済と保護の手がなければ、全員自滅のほかにはなかった。

女性たちは、これら未来の新資源、デリムソンの素材である男性たちを、放射能の災厄から解放してやるべく、いろいろな化学治療や外科療法を試みたものの、結局彼らを救うものは女性の尿以外には見当たらなかった。尿に限らず、肺から吐き出される炭酸ガス、皮膚呼吸によって出される体液、あるいはふん便等、つまり女性のからだから排泄されるもののうちの、あらゆるものの中に含まれる水分が強力な免疫源となっているからであった。

水分といえばやはり尿である。ふん便は一日当たり百グラムの水分しか与えないが、尿は一、四〇〇グラムの水分をこなす。

女性たちは全員スラックスの軽装で、焼土の町をかつ歩した。元気な顔で、あるいは美しい平時の装いで、町を歩くのは、女性に限られていた。彼女らは放射能に対しては、完全な免疫を持っていたし、それさえ恐れねば食料も豊富だった。

魚も獣も鳥も、その場所に行きさえすれば簡単に入手できた。彼らは戦争のあおりで、死んでしまったか、もしくは神経機能がまひしていた。早晩消滅していくであろうこれらの食料源も、全世界で一どきに二〇億の口減らしをした人類にとっては、もて余すほどの大きな資源になり得た。

労働力はまだ多少元気な男性の生き残りが狩り出されて働いたので、女性はさし当たって直接、何もする必要はなく、美しい装いに楽しい空想図を繰り広げることで過ごせばよかった。

天文台の女性委員たちが、東京の地下宿舎に移ってきたときのこと、そこには難をのがれた男性たちが多くひしめき合っていた。放射能に犯された彼らは、皆が皆体力も、思考力も正常ではなかった。だから数少ない女性たちに難なく蹴散らされ捕えられた。女性に特別の力があつたのではなく、男性に力が無かったためである。

もはや男性に昔日の面かげはなく、足なえ手なえした生きたしかばねであった。そのあわれな光景を見る時女性たちは、何というみっともない生物だろう、と、心にブタ小屋をのぞくときのような、けん悪感をおぼえるの

であった。もう同類としての人間をそこには見ず、ただ未開発の、別種の新生物資源を発見するだけであった。

フン尿貯留槽

のおもむくまま、おもむく所に携行されたが、やっかいで困難なのは高梨教授の扱いであった。彼はもちろん、天文台の女性たちの恩師であり、後援者であり理解者だった。数少ない男性の中の先覚者のひとりであっ

あった。

「感情は抜きにしないと、本質的な解決は来ませんよ」

ルミ子の主張にはだれも異議を差しはさまない。その正当さを認める。しかし、当のル



さてそれでは、天文台にいたシロと、また高梨教授の運命はどうなったであろうか。シロは他遊星の高等生物というより生きた便器として、またルミ子や小沢美和のペットとして有用な器具であることから、絶えず彼女ら

た。その彼に対して、未だに女性たちの思慕と尊敬の念は少しも薄らいではない。この矛盾をどうするか、たとえどのような事情のもとにあらうとも、彼をやはり男性の一員として処置するか、そこがきわどい問題の要で

ミ子さえ、実際に教授をデリムソンとして再生させるのに、一歩も二歩もためらいを感じないわけにはいかなかった。

いちおう問題保留のまま、教授は彼女らの賓客として、東京に伴われ地下の新宿舎の一

室に落ち着いた。

女性たちが地下の宿舎に入っていたときすべての希望を失って群らがり住んでいた男性たちは、彼女らの元気なはなやいだ姿を見ると、それぞれ不分明ながら、何程かの喜色を表情に浮かべて彼女らを迎えた。

「女が来たぞ！」

そう思ったに違いない。

「われわれを助けてくれるんだ」

赤十字看護婦以来の、戦時における女性の任務と働き、その女らしい思いやり、それを彼らは期待したのであろう。

女性はそのような男性たちを、彼らの期待通りに救助しようとした。しかし、その扱い方はきわめて乱暴だった。床に寝そべったまま動きのとれない者は、愉快に口笛を吹くようなあんなばいで蹴転がされていった。やっと動ける者も押し倒され、そのままハイヒールの先で蹴転がされた。自由の利く元気な男たちの幾人かが、女性にあるまじき乱暴なその行為に抗議しようとしたが、それらは全く無視された。抵抗しようとしても体に力が入らず、か弱いはずの女の力で、簡単に突き飛ばされ、組み伏せられてしまう。子どもにも劣る体力の無さに、男たちは齒がみをしたが、赤ん坊同然な彼らを、軽くいなしとつかまえてい

くことの愉快さは、女性にとっては何かのゲーム遊びをするようなものだった。

男女をむしばんでゆく恐るべき死の災厄を未然に食い止めたのは女性の排泄物によってであった。だが同じ排泄物であっても、ビン詰めやタル詰めになされた貯蔵用のものでは効果がなかった。

最初手間を省くための、大がかりな男性救済の道が講ぜられ、巨大なフン尿貯留槽が準備され、そこへいちどきに大勢の男性の群れが投じ入れられた。その貯留槽は、天文台の女性委員たちの排泄物ばかりではなく、新しい女性都市東京へ集まってきた若い娘たちのものが、残らずそこに貯留されたものである。ただその槽は、一回一、〇〇〇人の男性を浴させるほどの大きさを持っていたが、体力の衰えた彼らがフン尿の中で溺死するのを防ぐため、底はごく浅目に造られていった。

地下貯蔵庫の一部をくぎった仮収容所の中で、ひしめき合う大勢の男性たちの姿が、さながら何か得体のしれない生物のうごめきのように、薄暗い明かりの幕をとおして壁一面に投影されるのである

「お前たちのうちで、もし死にたくない者がいたら、よっくこれからの命令事項に服するよう……」

堂宇いっぱい、よくとおる女性アナウンサーの声が響き渡った。

「お前たちのからだをむしばんでいる放射能は、もうどんな手当てや薬を用いてもそれを防ぎ止めることはできない。……ただ一つ、わたしたち女性のフン尿で身を洗い、ノドをうるおすことだけが、お前たちを救うただ一つの道である……」

ざわざわ、ざわざわというさざめきが、この堂宇の中の無気力な集団の中で起こった。



「あの声は、あれは東亜放送の下沢アナウンサーの声じゃないか」

そんなつぶやきがあちこちで聞かれた。下沢のぶ子アナウンサーは、ひとところ男性の間で大変な人気を博していた魅力ある美声の持主であった。

「確かに彼女だ」

しかしその声を聞き分け得た彼らの判断も、アナウンスされる命令事項の内容を判じることができなかった。彼女と自分らとの身分の激変振りを、少しも理解してはいなかったからだ。だからただ一言、放射能から救われる、の言葉を頼みに、重い足を引きずりながら、フン尿貯留槽の方向へ隊列を組んでいたのだった。

排せつ水分

異様な臭気が鼻をつく、その異臭に目ざめて男たちは、巨大な槽の壁の上で足ぶみした。「こえためじゃないか。おれたちをとんでもないところに連れてきやがって！」

そんな無気力な憤怒が彼らを足ぶみさせたが、いっどこから現われたか若い女性の幾人かが、事務的に無雑作な手付きで、そうした彼らを槽の中に突き落としていくのであった。女は青い事務用の上っ張りをはおってい

るだけの軽装で、この地下の新政庁に務める女性職員の幾人かであった。

だが、それほどまでに変わり果てた無気力な男性の中にあって、気力盛んな男たちが幾人かいた。

「閣下、とんでもない事態に至りましたね」

閣下と呼ばれた男が、そのたくましいからだを、隅の壁からむっくりと起こした。中山達平である。閣下と呼んだ男が、そのそばにじりよって敬礼した。かつての親衛隊長、谷である。

「何たることです。こんな侮辱はあり得ません。あまつさえ男の身でありながら、女づれの奴隷の身、いや、畜生にまでその身を陥れられようとは、まだしもソビエト軍の捕りよになったほうがずっとましです」

「今それを言っても始まらん。時機を待つのだ。それよりも、とにかく放射能の災厄からのがれる方策だけは、つけておかねばならぬい」



あきらめてしまったのか、それとも秘策を講じているのか、達平は落ち着いた態度で、はやりたつ谷を制した。

しかし、こうした大騒動の後、貯留されたふん尿ではあまり効果がないことがわかった。排泄されるその時の新鮮なふん尿でなければ、放射能除去に役立たないことがはっきりわかった。つまり、シロをそ生、保護したと同じ手順と方法が採られる必要があった。

シロは女性たちの生きた便器の役を果たすことによって、生き長らえ活力を保った。彼は今では、みんなの共有のペットであると同時に、ルミ子個人の所有物でもあった。

夜の床で、ちょうど小説中の人物、忠実な佐助が主人のお琴の足を、ふところにだいて暖めるように、シロは彼女のふとんの中で、湯たんぽ代わりに女主人の下半身を暖めた。シロのからだは真綿のようにふかふかして足ざわりがよかった。その心地よさを一度味わえばもう二度と彼なしに床につくことはできない。シロのからだは全部が人間の舌である。その暖かみとしめり気があった。だから、彼に下半身を包まれていると、ちょうど一どきに、巨大な舌の輪の中に包まれるように、からだ全部が暖かくしびれた。

その上重宝なことは、夜トイレに立つ心配のないことであつた。夜のトイレは、ふところから起きでるのがわずらわしい。ところがシロは、そのすべてをからだ全部で吸い取ってしまうので、トイレに立つまでもなく、寝たまま安心して用が足せた。こういう便利な生体便器が行きわたるとなると、寝小便患者はひとりもいなくなってしまうことになる。

シロはこのように、新鮮な排泄物を吸収することで生命を維持し、活力を取りもどした。今、ひん死の状態にある多数の男性群にはシロと同じ方法、つまり貯留槽にためられたものではなく、直接排泄される新鮮な尿やふん便を与える必要があつたのである。

だがそういうことになれば、直接排泄する女性の数にも限度があり、その量も汗を含む水分を含めて、一日二、〇〇〇グラム足らずの水分では、まかなえる対象も限られてくる。

そこでよりより協議の末、全女性ひとり頭、五人ずつの男性が当てがわれることになった。二、〇〇〇グラムの排泄水分で、五人の男性を保護、救済する、すると日本中、五〇万の女性で二五〇万の新資源が確保できる、こういう計算が成りたった。

和歌子

和歌子は戦争のお陰で自由の身になれた。

長い捕われの期間のやつれが、自由な青空の下で手足をいっぱい伸ばすことで、うそのように癒えていった。

れんがが、真黒にくすんで溶け落ち、被災の恐しさをまざまざとめている丸の内界わいの路傍で、彼女は倒れている吉野の変わり果てた姿を発見した。それは最初、がれきの一部のように、くすんだ色でくず折れていた。それが吉野であることを発見したとき、和歌子は狂喜して彼にしがみついた。

「吉野さん、吉野さん！」

はるか戦火の地のかなたに、富士山が遠くそびえていた。さえぎる建物も樹木も何もなく、山のふもとまでそのまま赤茶けた大地の連なりであつた。

吉野のからだは、顔といわず手足といわず、無残な火ぶくれのためにゆがみ、ひつつつていた。

彼は和歌子の胸の中で、うつすらと目を開いたが、何もしゃべらなかつた。というより、意識を取りもどせずに、和歌子の顔も、戦争も、生きるか死ぬかの自分の状態も、すべてが混沌した無意識のうちにかすんでいた。



和歌子はもう夢中で彼の胸に取りすがって
いた。道行く女たちが、その様子をチラと見
やりながら通り過ぎてゆく。和歌子をば、一
見男だというふうに見たからである。そうい
えば彼女の服装は、捕われの時と同じままに
汚れていたし、ズボンをはいた男のような格
好と、伸びるに任せた髪の毛のぐあいから、そう
見られるのは無理ではなかった。

「だって……」

「あら、あなたは女性の方ね」
そう頓きような声をあげて、彼女は和歌子
の肩を後からだくようにいだき、吉野のから
だから引き離そうとした。
「何をそんなに乱暴なさるんです」
和歌子は女性の手を振り払うようにして言
った。

女性ハリスのようなクリクリとした円い目
をしていた。それがさも驚いたように和歌子
のくすんだ顔を、まじまじと見詰め直した。
「あなたは女性の方でしょう」
それがどうしたのだ、と言わぬばかりに和
歌子は相手の様子をうかがった。場合によっ
ては容しやほしない、といった、張り詰めた
闘志がわいてくるのだった。それでなくてさ
え和歌子は、もうじりじりした気持ちのはけ

場に困っていたところである。何にでも、手当たりしだいにかみついてみたくて、仕方がないのであった。

「あなた、戦争は終わったのよ、女性革命は成功したのよ」

「それがどうしたというの」

「これからの世の中は、女性だけが人間なのよ。男性は皆畜獣だわ。人間じゃないのよ、あなたが介抱なさろうとしている相手は、男でしょ。きたないわ。彼はデリムソンよ。手をお放しにならなくては……」

和歌子には、相手のことばがよくのみこめなかった。しかし、彼女が言ったデリムソンという名は、確かに聞きおぼえがあった。デリムソンが何を意味するかも、半分は聞き知っていた。デリムソン、それはルミ子の発案であり、ルミ子の主張だった。

そうだ。ルミ子はどうしているだろう。ルミ子が和歌子の身を案じたように、和歌子はデリムソンという相手のことばを耳にしてルミ子のことを思いだした。

「デリムソンのこと、ルミ子さんが話したんでしょう。あなた、ルミ子さんとお会いになったことがあるんでしょう。彼女は今どこにいるの、どうしているの、どうか教えてください」

どうかお恵みを

和歌子は、通りすがりの女の口から、ルミの所在とその立場を教えられた。彼女は現在新政府の委員であって、司法権の責任者としての高い位置にあることが、彼女にはわかった。和歌子は、ほっとした軽い安どの気持ちと同時に、激しいけん悪感をおぼえた。

「吉野さんがデリムソンだって……」

その思いが彼女をいきどおせた。彼女は今では、深く吉野を愛していた。独裁者達平を倒すための同志として、いや、すべてにわたって和歌子をよき方向へ導いてくれた吉野、今改めて彼女はそれを心の内に呼びさますのだった。

和歌子は吉野の上半身をだき起こし、重い荷を引きずるようにして歩いた。周囲の目をさけながら、何か見せてはならぬものを運ぶように、やっとの思いで歩いていった。少し行っでは休み、休んでは少し歩いた。

そうして彼女は、四谷付近のある地下壕に身を隠した。そこは深く掘られた待避壕の一つであったが、かなり整理が行き届いていた。おまけに木造りの、がっしりした寝台まで備えてあった。

和歌子は最後の力を振りしほって吉野をだ

き上げ、寝台の上に横たえたと、そのまま気を失った。

果たしてどの位の時がたったかわからない。物の気配に和歌子は、フツと気付いてあたりを見回した。吉野は最初の時と同じように寝台に横たわったままだった。十坪ほどの広さのへやである。壁ぎわに大きな戸だながあり、その上に幾つかのつぼがのっていた。何も変わったようすはうかがえそうになかったが、しかしそれでも感じられる物の気配に、和歌子はだるいまぶたを上げてひとみをこらした。

するとかなりはつきりとへやの隅々の様子が視線の中に浮かび上がってきた。

その薄暗い隅のほうに、四、五人の人影があった。彼らはじっと息をひそめている様子であった。和歌子は別段恐れを感じなかった。起き上がるなりこちらから声をかけた。

「そこにいるのはだれ！」

答えはなかった、おびえているのは彼らのほうであった。ルミ子は立っていった彼らのそばまで行った。彼らは皆男たちであった。男たちが皆、十七歳の若い少女の前でなすところなくおびえていたのだった。

和歌子は相手の様子に安心して、尊大な調子で言った。

■ふき屋さん

いまは現役をしりぞいて、たまにラジオやテレビの「なつかしのナントカ」というリバイバル・アワーに出演するだけになってしまったが、かつては日本調の流行歌手として人気のあったKのゴシップが、ある夕刊紙にでていた。

それによると、Kは女ながら80キロもある肥満体。びろうな話だが、おトイレへいっても、おなかがつっかえて、しゃがむのが苦しいほど。

用がすんでも、おなかや腰まわりの肉づきがじゃまになって、自分でペーパーを使うことができない。つまり、自分の手では、とどかないのだ。

そのために、それ専門の男の弟子みたいなのが一人いて、いちいちふかせたという。

その男のひと、どんなキモチでふいたのか知らないけど、ずいぶんM的なハナシ！

(不二夫)



「みんな、そんなところに引っ込んでないで、こちらへ出てらっしゃい」
疲れきっているのか、それとも万事にあきらめてしまったのか、男たちはしおしおとなだれながら出てきた。皆それぞれに屈強なからだをしていたが、重い原爆症にかかっていた。それにしても、この屈強な男たちが、屠所に引かれる羊のように、十七歳の少女の前におびえている光景は、ちょっとした痛快事に思えた。

和歌子は、捕りよを検分する將軍のように落ち着き払った涼しいひとみで彼らを迎えた。彼らはまぶしそうに彼女を仰ぎ見た。和歌子も彼らを仔細にながめた。
突然、彼らの間に、いっそうの恐怖の叫びが上がった。和歌子もハッとして彼らを見返した。彼らこそ、和歌子や吉野を、長い間いじめ抜いてきた、達平の親衛隊の面々であった。その中にはあの谷隊長の顔もまじって見られた。谷とその部下は、つい以前、やっと

のことで女性本部の収容所から脱走してきたばかりであった。
彼らはしかし、原爆症の発作のため、非常な苦痛に襲われたのであった。
「お願いです。和歌子さま、あなたの尿を、どうぞいかに何でもわれわれにお恵み下さい」
彼らは薬の切れた中毒患者のように彼女の足もとにひれ伏し、手を合わせて彼女を拝んだ。

(未完)

暗黒行刑秘抄

日本拷問史 三

名和弓雄

絵・東 桂史

捕縄は春夏秋冬、四神にかたどって四色の縄を用いた……

○侍と拷問

江戸時代、士分の者の監察は、目付、大目付などの職にある者が当った。侍を取り調べの場合、「白状しないと拷問に掛ける」といわれると、累が主家や上司に及ばず、一身上の問題で片づくと思われる場合は、たいてい、ありのままを自白したそうである。

侍で拷問を受け、見苦しいさまを人に見られることを、大きな恥辱としたものである。

しかし、主君や藩に、禍が波及する危険があると思われる場合や、侍としての信義に反すると思われる場合は、いかような拷

問で責められても、たとえ責め殺されようとも、絶対に口を割らぬことが、士道として要求された。

肥後国、細川藩の侍、都甲太兵衛が、江戸城改修の宰領を命じられた際、藩の危急を救うために、他藩の石材を盗み、捕えられて厳しく取り調べられたが、「知らぬ、存ぜず」で押し通し、拷問にかけられたが、ついに口を割らず、放免され、肥後侍の華と賞讃された逸話が残されている。

侍を責める場合といっても、特殊な責め方があったわけではない。いざ拷問となれば、身分の上下など問題ではなく、士農工商の差別も全くないわけである。しかし侍ともなれば、日頃からの覚悟と鍛練が違うのであるから、打ちたたくくらいでは自白しないのが当然であるから、戸板または梯子にしばらくつけて、顔面に、間断なく水をそそぐ水責めにしたり、爪を責める方法を用いた。手足の爪の間に五寸釘を押しこんだり、爪の上から釘を打ち込んだりするわけで、釘が指先を突き抜けるとたいてい気絶するそうである。蠟燭の火で、腋毛や陰毛を焼く方法も用いられたそうで、幕末、新選組屯所内で行われた拷問も、ずいぶん苛酷なものであったようである。

○江戸時代の手錠

江戸時代の拷問に使用された種々な拷具

は興味深いものであるが、ほとんど現存していないのが実状である。なぜかというところ、罪囚を責めるのに用いられたものは、不浄であるという観念があつて、徳川幕府瓦解の折、その大部分が、打ちくだかれたり、焼かれたり、地中に埋められたりして、滅失したためである。

田舎の迷信的な伝えに、(名主田)という諺がある。上州地方でも(名主菜畑)というが、これは、名主は、捕物道具や拷問具を保管しているから、その崇りで、いつかは、零落して潰れ、その屋敷は菜畑になるという意味である。このように思ひきられた拷問道具が、大切に保存され残っているわけがない。某博物館に展示してある抱石、箒尻等の道具は、そのほとんどが複製品であるのも致し方のないことである。小生も四十年近く、日本全土にわたって資料の蒐集を続けてきたわけだが、集まった実物といえば、手錠、足枷、捕縄、文献等、極めて少数の実物資料に過ぎないという現状である。

手錠と捕縄は、拷問と、いささか関係もあり、捕縄の掛け方や、種類などは、読者諸兄弟姉にも、興味あることと思うので、実

物と文献の両方面から、抜き書きして見よう。江戸時代の手錠は、現代警察官使用の手錠とは、その使用法からいっても全く異なった製作様式になっている。現代のものは、犯人逮捕の緊急な場合にも使用しやすいように、

註



打ち込み式(輪を犯人の手首に強く打ち当てると、輪の半分が、他の半分の間を通りぬけて一回転し手首を内に囲んで、もとの輪状にもどる、さらに歯車によって適宜に輪がせばまり、手首一ぱいまでしまる)の片手錠と、

片手錠を、二個連結した両手錠である。鉄製でニッケルめっきがしてある。

江戸時代のもものは、鉄製で、洋数字の3の字の型をした二個の鉄片から成り立っていて、二個を蝶番でつなぎ、他の端に、鍵穴のある板鉄があつて、錠をはずす様式である。

手錠を掛ける場合は、腕組みを浅くするような形に手首を重ねて掛ける。さらに念の入った手錠には、錠のほかに、小環がついていて、封印をするようになっていたものもある。輪の大小は変化しないので、各人の手首の太さに応じたものを施したものであると思われる。

江戸時代の軽犯罪には、手錠何日間という軽い刑罰があり、手錠をかけられて自宅に謹慎を命じられるのがあつた。軽いといっても手錠のまま、三十日も五十日もでは、食事、用便にも不自由なので、役人は忘れもののような顔をして、手錠の鍵を置いて行ってしまう。時折の取り調べは日がきまっているので、その時は、手錠をかけて神妙な顔をして謹慎している。昔の人は正直だから慎んで外出もしないし、大体の目的は、それで達せられたものだ。ところ

が不心得なのがついて、手錠何日間の間、手錠をはずして、吉原に遊びに行き、大いに浩然の気を養って一杯機嫌で帰宅して見ると、出火で家は丸焼け、驚くよりも、本人が一番慌てたのは、手錠が行方不明になったことで、蒼くなつた当人は名主つきそいで、すごすごと奉行所へ出頭、何と申し開きをしたか知れないが、奉行は、察するに手錠が大きすぎたため、出火の際、紛失したのであらう、と深くとめなかつたという話がある。輪を三つにして、両手首と片足首を一しよに固定する様式のものもあるが、蝶番、錠前板等は、普通手錠と全く同じである。

縄目の恥とか、首に縄がかかる、という言葉が、昔の文学にたびたび出てくるのだが、縛られるということ、昔の人は極端に思ひきらつたもので、そのため、うるさい問題が起つたものである。たとえ縛られる場合でも、作法通り身分に従つて縛られねば、恥辱であるとしたものである。縛るといふのは、縄に結び目をつけるのが縛るのであつて、結び目がなければ、縛つたことにはならぬという解釈もあつて、泥酔者や、乱暴者を、取りしずめるような場合、あと

で縛つたといわれぬように、結び目をこしらえず、ぐるぐる巻きにしてしまふ。

こうすれば、巻くとか、からげるといふことで縛つたことにはならぬのである。

捕縄は、すべて麻製で三つよりになつてゐる。三河国宝蔵寺で産する上質の麻をもつて作られたものが最良とされている。

使用する前に、米酢で、半刻（一時間）ぐらい煮て乾かし、砧で軽く打ち、柔く、しなやかにして用いる。長さは、本縄が、十三尋、十一尋、九尋、七尋、五尋の五種類。

逮捕のさい使用する早縄は、二尋半。

鉤縄も二尋半というのが、大体の基準である。捕縄は、春夏秋冬、四神をかたどつて四色の色を用い、縄を打つ方角にも作法がある。

春は青色染めの縄を東に向つて掛ける

（青龍）

夏は赤色染めの縄を南に向つて掛ける

（朱雀）

秋は白縄を西に向つて掛ける

（白虎）

冬は黒色染めの縄を北に向つて掛ける

（玄武）

土用中は、黄色染めの縄を用いる。と定められている。このしきたりは、江戸中期になつて、すたれ、

北町奉行所同心は白縄、

南町奉行所同心は紺染縄、

勘定奉行関係は、三番白縄、

加役本役（火方盗賊改め）並びに寺社奉行関係は白細引、

牢獄関係は、紺染縄、というようになり、

明治政府に引き継がれた。

鉤縄というのは、鉄製の鋭い小鉤を一端につけた二尋半の縄で、捕物の際、鉤を犯人の下襟や、帯に手早く打ち込み、縄で、ぐるぐる巻きにして捕り押えるためのものである。

早縄も、捕物の際、逃亡、抵抗を防ぐため、簡単な縛り方をするためのものである。

いよいよ罪人として扱われ、送り（護送）や出廷する場合に用いるのが、本縄である。本縄の掛け方は、約四十種類あつて、身分、職業、性別、状況によつて、種々な縛り方が用いられる。

伊予大洲、加藤遠江守藩中、捕縄術の宗家方円流、武知吉太夫家伝の十八型といふのは、

将真総角、土行総角、軽率草線角、本陽十文字、本陰十文字、本陽菱、本陰菱、早陽十文字、早陰十文字、早陽菱、早陰

菱、早蟹減、早猿結、早蜘蛛、先生形仕込、引渡鎖掛、長袖鱗形、女伍方の十八型である。

普通、侍には、二重菱縄、雑人には、十文字縄、割菱縄、違菱縄、上縄。女には乳

固め縄を打つ。流派が異なると、同じ結縄法でも、呼称が違って、落花、千鳥、村雲、六道、角矢倉、微塵、など風流な名称で呼ぶ流派もある。(以上六種は、制剛流、南蛮一品

本人の(まげ)に打ち掛けるか、襟に小穴をあけて縛りつける方法なども工夫されている。現在伝承されて残っている捕縄術の流派は、一角流、一速流、方円流、竹内流、制

掛縄。出家僧には破戒縄(返し縄)。山伏には笈摺縄。坐頭縄。

稚子縄。禰宜社人縄。結人縄。

連雀縄。双の胸張り縄。京の胸

張り縄。新の胸張り縄。下引け

縄。流人縄。股下縄。くぐり縄。

張付け縄。熊坂縄。無双縄。火

付縄。晒縄。死罪の者は切縄(斬

首の際、血潮で汚れるので、再

び用いないため、藁縄二筋ない

合わせて用いる)対決には、小

手をとめぬ羽付縄。追放や請渡

しには、国渡し縄(介縄)。

縄抜け巧みなる者には留り縄

を打つ。この結縄法は、指の関節を使って

縄抜けできぬように縛るので、二時間くら

い、放置すると、縄をほどき、血行を回復

させてから、縛り直すというようにしない

と、指が腐れおちるといわれている。剛力

な者には腕の自由をさらにうばうために足



杖

なお、各流派には秘伝の縄が種々伝承され

ていて、一例をあげると、一尺二寸の短い縄

で縛る方法として、正座させて、両腕を背後

に回させ、両手拇指と、両足拇指の四本を、

巧みに縛り固める方法や、両足を背中になわ

させて、両拇指を縛り、縄尻を締め上げて、

尺棒を使用する。長時間、このまま放置されると、意外に苦しいものである。

鉄砲というのは、片手を肩から後方に回し、片手を脇から後方に回し、背中で、太指と太指を合わせて縛り、その間に、木碗をはさむものである。これは短時間放置さ

剛流、新陰流等であるが、結縄の実地を究明した人は、全国でも数えるほどしかない。文献に残る明治時代の拷問は前述のごとく旧幕時代の拷問と異なるところもなく、笞打ち、釣り責め等が行われたが、弾正台の拷問として棒縛り、鉄砲、砲丸抱きの三種が見られる。

棒縛りは、片手を肩から、片手を脇から、背後に廻し、背中に一本の檣棒を当てて、両手首を棒に縛る。正座させる場合は三尺棒、直立させる場合は、六

れるだけでも相当に、こたえる拷問である。砲丸抱きは、重い鉄丸を両手に抱えさせて、正座、または直立させる責めである。腕を動かすと、檣棒で打ちたたく。未決監に数年を過ごした某は、この砲丸抱きの拷問のため、出獄した後も、腕が曲って伸びなくなったといわれている。

鉄丸という責めは、後手に縛った手首に、二貫目または三貫目の鉄丸を釣り下げる。

窄衣というのは、牛皮製の銅着で、背後で締めるようになっていて、胴着の脇に接して、両腕を締める皮筒がついている。これを着せられると、気を付けの姿勢をとったように身動きができなくなる。長時間放置されると、だんだん苦痛がましてくる。この鉄丸、窄衣などは、監獄での懲罰に使用された。

明治、大正、昭和初期まで、憲兵隊、特高警察などで、秘密裡に行われた拷問は、原始的なものから、合法的な心理的な拷問に至るまで種々雑多であるが、最近の新聞紙上で「無実叫ぶ死の床のテープ」の見出しで、二十五年以前、湯河原の放火事件の犯人として、五年の服役後、三十二年死亡した高杉五作さんのこした、録音テープ

は、当時受けた拷問について「頭髪を引き抜く、胴を麻縄で縛って逆さにつるす、唐辛子をといた水を鼻につきこむ、頭が福助のようにはれ上がって、指でおすとめり込む」などと述べている。



これがもし事実であったとすると、旧幕時代の拷問となんら変わることがないわけである。

水や食物を与えないで、長時間取り調べを続け、自白をすれば、欲しいものを与えると

交換条件を出して責める方法はよく使われたものであるが、一步をすすめて、被疑者を、暖い部屋に置き、御馳走をたくさん与える。被疑者は思わず飽食する。食事が終ると、冷えきったコンクリートの留置場に帰して放置する。これを三、四回繰り返すと、境遇と食事の変化で、体の調子も神経も、すっかり参ってしまうそうである。

睡眠を全くとらせないで、入れ替り、立ち替り責め立てる方法もある。四、五日、昼夜ぶっ続けに質問責めにされると、意識が混濁して、誘導尋問によって、思わすありのままを自白してしまうそうである。

昼も夜も真暗な、暗室に一人で閉じこめられるのは、監獄の懲罰にもあって、暗居と呼ばれていたが、この方法も、とてもこたえる拷問であるという。

精神的拷問で効果のあった実例の一つとして、昭和初期の少女殺し犯人の場合がある。

被害者は、セーラー服を着た美少女で、強殺したと思われる有力容疑者を留置したが、どうしても自白しないので、被疑者の眠っている独房の壁に、セーラー服を掛け

て置いたところ、深夜目覚めた被疑者は、恐怖の叫び声を上げて戦りつし、俺が悪かった、許してくれと泣き叫び、ついに堪えかねて、犯行の一切を自供したと、当時の関係者が語ったことがある。

電流による拷問や、女性を責める場合に、竹刀や、ビール瓶を使用したという話も聞いたことがあるが、見聞者から直接聞いた話ではないし、真疑のほどは何ともいえない。外国の拷問には現在もあるらしいことは、本人の手記を読んだ記憶があるが、現

在の日本では、あり得ないことである。昭和の始め頃、偶然の機会に恵まれて、拷問らしいものを一度だけ、実際に見聞したことがある。四、五名の頑丈な男達が畳の上に、花むしろ（ごさ）を拡げ、手に手に、竹刀、皮ベルトを執って用意すると、これまた、鬼のようにかついで体格の男が、下帯一つの真裸体にされて、花むしろの上に、四つばいになるように命ぜられた。不敵な面構えの男は恐れ

な

と臀部を打ちたたき。
「さあ、いえ、白状せぬと、打ち殺すぞ」

「こらあ、腹がつくぞ、体を浮かせ」などと怒号しながら打ち続ける。一人が、薬罐の口から水を口に含んで、時折、背中に吹きかける。ピシリピシリと肉に喰い入る皮の音と竹刀の音が、恐ろしい怒号と入れまじって高い白壁の天井に響き、異

様な雰囲気をかもし出す。打たれた皮肉はゆでたように真っ赤になり湯気がたつて見えるように見える。苦しがって体をむしろにつけると、「体をあげんか」と二の腕あたりを強打している。責める方が一層猛り狂って鬼のような形相になり、ピッチをあげると、やがて、男の苦痛にゆがんだ口から、ひいひいと悲鳴がもれて、身もだえしながら、「許してください」「許してください」「許してください」と泣き声をあげて屈伏してしまった。この間、ずいぶん、長く感じたのであるが、せいぜい十分あまり、十五分間くらいではなかったかと思う。はじめての見聞なので息づまるような圧迫感を受けて、聞きしに勝る恐ろしい処であるとしみじみ思った。男は、それでも独力で、ゆっくりと立ち上り、下着と袴下を着けて、のろのろと正座したが、わりあい平気な顔つきで、泣きわめいていたという顔つきではなかったところを見ると、相当に悪ずれのした奴ではなかったかと思った。なぜ水を吹きつけるのかとたずねて見たら、「ああ、水を掛けた方が、皮膚が破れないからですよ」との答えであった。

正確にいつて拷問といえるか、どうかは



疑問であるが、大正六年三月三日に起った、傷害致死事件は、夫、小口末吉が、内妻である、矢作よね、当時二十三歳を、七首、鉄てこ、焼火箸、太のみ、こて等を使用して、連日、責めさいなみ、ために、よねは、生きずの絶え間がなく、ついには、焼火箸、焼こてで、肌の上に（小口末吉妻）の五文字を焼きつけられて、死亡した事件である。末吉は獄中で病死してしまつたし、被害者も死んでいるので、真相はつかみにくい、死体の解剖と、死因の鑑定を依頼された東京帝国大学、法医学教室では、教授、医学博士、三宅鉦一氏が、心血を注いで鑑定に当り、前代未聞の性的犯罪であると断定し、サジスト小口末吉が、マゾヒスト、矢作よねを得て、両名優の呼吸が、うまく合つて演出された莊嚴な場面の予期せざる結果であつて、末吉は無罪であるべきであるといふ鑑定書を製作した。

拷問史の一頁をかざるには、不可解な事件ではあるが、一種の拷問と見れば、見えぬこともない。大正七年七月に起きた事件では、サジズムの夫が、新婚の花嫁の全身に咬傷をつけたというのがある。花嫁さん

の裸体の写真四枚が資料として、手元にあるが、全くひどいもので、咬みちぎられた皮膚の傷あとが臀部、肩、ひざ、腕と、全身にのこり、よくも、この拷問に堪えたものであると、痛々しく気の毒である。このように、夫婦間や、親子の間で、行われる拷問（？）というか、責めは、なかなか表面には表われず、暗闇から、暗闇に葬り去られる場合が多いので、はつきりしないが、昔から、現代まで、相当存在するのではないかと思われる。

乏しい文献資料から、日本における拷問の史実を述べて来たが、全く拷問に関する文献は少ない。御参考までに、引用した文献を次に掲げておくと、

刑罪大秘録（徳隣嚴秘録）。舒明記。齋東俗談。播摩風士記。保元物語。大平記。参考大平記。庭訓往来抄。碧山日録。落穂集追加。慶長見聞集。法曹後鑑。風俗見聞集。邪蘇天誅記。

などである。図録の参考としたものは、「徳川幕府刑罰図譜」であるが、この図譜は間違いが多く、専門的な研究には、あまり役立つとは思われない。

拷問や刑罰に関する記録が少ないのは、徳

川幕府の秘密主義による政策が原因して、特に拷問ともなれば、知らしむべからずの最たるもので、公式の記録はともかく、当時にあつては一般人の筆にすることは許されないことであつたので、わずかに、司法関係の役人の覚え書きや、教育用に書かれたものが現存するだけである。読者諸兄姉にお願いすることはこのよう、未発表、未知の古文書の発見と紹介が、斯道の研究にどれくらい役に立つものであるかを考えていただき古文書の発見に御助力をいただきたい。裏窓誌上に発表していただければ幸甚と思う。拷問や責めに興味をいだいている人は数多いが、私の知る限りでは、文京区動坂に居住していた、伊藤晴雨画伯が、最も熱心な研究者ではなかったかと思われる。古老の聞き書きを求めて歩いた頃の私が、知人の紹介で、晴雨老に逢い、拷問の話や、捕物の話で、意気投合し、間違いの少ない拷問、捕物、刑罰の図譜を、後世に残したと計画を立て仕事にとりかかって下絵十数枚をつくり、絵絹二枚を仕上げて途中で挫折したことに、今から考えると、何とも残念なことであつた。（未完）

海外マゾ絵物語

鞭に生きる女 ②

二輪馬車につながれた男の背へ
美しい女御者の鞭がとぶ!

ヴァン・ロッド絵

泰西出版資料・特約



鞭踊りの女王シルヴィアの邸の地下室に監禁されたリック・ネルソン——。
シルヴィアの皮鞭は、この筋骨たくましい男へ、日ごと夜ごと、奴隷の精神をたたきこんでいった。
リックはすでに、奴隷だった。

「さあ、食事の時間だよ。ありがたくちょうだいするがいい」
シルヴィアの命令。
「はい、ありがとうございます。女王さま」
リックはひれ伏し、くさりに縛られた不自由な四肢のままで、おしいたぐるのであった。



「あんたの男らしい心は、あの踊り子のきちがいじみた皮鞭で腐ってしまったのよ。あたしは知ってるわ。シルヴィアの鞭をうけるときのあんたの顔、歯をむきだして、まるでけだものだわ」

サージーは、なおもののしった。

「もうやめてくれ、だまってくれ」

弱々しく、リックは首を横にふった。首についたくさりか、かたい音をたてた。

「そんなりっぱなからだをしているくせに、あんたは生まれながらの奴隷のような顔になってしまったわ。あんたはまだ知らないのよ、あの女のおそろしさを。ここに捕われているかぎり、あんたは、もっともっとひどい目にあうわ。あの皮鞭で、なぐり殺されるわ。それでもいいの？」

サージーのほうが、まだいくらかは人間らしい抵抗心を残していた。

「おれは、おれは……まったく、だめな男だ……」

リックは、あたまをかかえてうめいた。

土人の女サージーもまた、リックと同じく、シルヴィアの嗜虐の対象として、邸内の地下室に監禁されている運命にある。

「逃げましょう。リック。このままでは、あたしたちいつかは殺されてしまうわ」

サージーは、決意の表情で、リックにいった。

「逃げるって？ この地下室から、どうやってぬけだすんだい。おれの首輪をしろ。手首をしろ。足首をしろ。すてきに重いアクセサリーがいっぱいだ。とても逃げられやしねえよ」

リックは、うなるようにいった。

「いくじなし。あなたは、心まで奴隷になりさがってしまったのね。あたしにはわかる。あんたの足首のくさりか、もし突然切れたとしても、あんたには、この悪魔の邸から逃げだす気はないんだわ。あんたは、あの残忍な踊り子のために、心まで奴隷になりさがり、鉄のくさりで縛られてしまったのよ！」

サージーは口汚なくのしった。

女の本能のするどさで、サージーは、リックの心の底をみぬいたのだった。

鞭の女王シルヴィアの残虐性は、いよいよはげしくなっていた。
ある日、彼女は美しい舞台用の衣裳を、ぴっちりと身にまとい、地下
室へおりてきた。

「奴隷男、元気かね」

長い鞭で、ゆかの上を大きく一度たたいて、彼女はいった。

「はい！」

うずくまっていたリックは、犬が吠えるように返事する。



大きく口をあけたリックの歯のあいだに、その
金具が押しこまれた。つづいて皮紐が男のあたま
にすっぽり縛りつけられ、金具を固定した。

それは、クツワなのだった。

「さあ、立て！」

クツワには、手綱がついていた。

奴隷男の足首から、くさりが解かれ、両手は、

あらためて背後にまわされた。

ちょうど、馬を厩舎からひきだすように、シル

ヴィアは、リックを引いてあるきだした。

地下室からの階段を、ハイヒールの靴で一步一

歩のぼっていくシルヴィアのあとから、リックは

早くも馬になったような気もちで、ひかれていく

のだった。

シルヴィアは手綱を肩にかけて、得意そうにあ

がっていく。

「ぐずぐずするな！」

罵声と同時に、ぴしりと皮鞭が鳴る。

クツワをかまされたリックは、人間のことばを

封じられたのだった。

そして、犬が女主人のすがたをみて、よろこぶような顔をした。
「きょうは、あたしの散歩のおともをするんだよ」
傲然と、シルヴィアはいった。
「はい、ありがとうございます」
リックは、彼女の靴のそばへひざまづいた。
「さあ、奴隷男、口をあけるんだよ」
女主人の手には、鞭のほかにもうひとつの道具があった。



シルヴィアは、リックをひいて外に出た。

玄関の横手に、ほそい鋼鉄でできた、優美なつくりの二輪馬車がおいてあった。

「おまえが馬になるのよ」

誇らしげな微笑をうかべながら、シルヴィアがいった。

「わ、わ、わ……」

馬車はかるいきしみ音をあげた。

「さあ、走るのよ、走るのよ！」

あたらしい遊戯に、シルヴィアは夢中になった。

高い位置から、鞭を鳴らし、いくども、いくどもリックの肩や背や、しりを打った。

リックは走りだした。車輪はまわりだした。

「走れ、走れ、もっと早く！」

速度をあげるために、彼女は鞭をふりまわした。

鞭に追われて、リックは必死に走る。

しかし、疲労が増すとともに、女主人の豊満な肉

体は、しだいに苛酷な重量になって、二本足の馬を責めつけた。

「う、う、う！」

筋肉を波のように躍動させて、リックは走った。

ときおり、女主人は手綱をぐいッとひきしぼり、

馬のあごを上げておいてから、はげしい鞭をくらわせた。

その苦しさ、リックは無我夢中になり、背中に火のついたけだもののように、人気のない郊外の道を疾駆するのだった。



哀れな顔つきで、リックは女主人をみた。

「馬になるのよ！」

もう一度いい、鞭ははげしくリックの肩さきを打った。

二輪馬車に、リックのからだは連結された。二本足で立つ馬のすがた。

「すてきなかつこうよ、とても！」

シルヴィアは、はなやいだ声でいった。

静かな郊外の、池のほとりまで来た。
池の水はつめたそうに澄み、底までがすきとおって見える。
シルヴィアは、力いっぱい手綱をひいて、馬車をとめた。
「ああ、疲れたわ、汗でもながしましょう。」
彼女は、御者台からおりた。たしかに、シルヴィアの美しい額には、う
つすらと汗がにじんでいた。

しかし、それよりも、リックの全身には、浴びたような汗がながれてい
た。二本足の馬の胸は、大きくあえいでいた。
シルヴィアは、汗ばんだ服を、ひきはがすようにしてぬいだ。
そばに男がいることを、まったく無視して、全裸にちかいですがたになっ
て、水のなかへすすむ。
そして、自由ほん放な姿態で、水浴びに興ずるのだ。

白い肌が水にぬれ、太陽の光りに妖しくおどる。
馬車につながれたままのリックの目は、つい、美
しい女主人の水浴びすがたへむく。

むりのないことだった。リックは男なのだ。
クツワをかんた男の口から、よだれのようなもの
が、ながれはじめた。

みてはならないと思いつつも、リックの視線は、
女主人からはなれなかった。

その視線を感じているのか、いないのか、シル
ヴィアはきやあきやあと声をあげ、水しぶきをあげ
ながら泳ぎまわる。まるで、挑発しているかのよう
だった。

リックは、がまんできなくなった。彼のからだの
一部分に、ある変化がおきた。

水浴びを終えて、岸にあがってきたシルヴィアの
目に、その変化がとらえられた。

「おまえは、けだもののくせに、なまいきな！」

シルヴィアの眉がつりあがった。

「ようし、邸へかえってから、うんとお仕置きして
やる！」

シルヴィアは激怒した。





「なまいきな奴隷男め。これでもか！」
シルヴィアは縦横に鞭をあやつる。
鞭をふるうことが、シルヴィアの美容体操であり、スポーツなのだった。
「おゆるし下さい、おゆるしください」
リックはもだえた。彼の心と肉体は、苦痛のなかの甘美な夢幻に没入していた。



一路、馬車は邸へむかい、まもなくついた。
「お仕置きしてやる！」
シルヴィアの怒りは、すこしもしずまっていなかった。
ベランダの上にひきずられてきたリックは、片手吊りのかたちに吊られた。
全身の重みが、右手首だけにかかり、リックは肉屋の冷蔵庫にある肉のかたまりのように吊りさがつた。
「かくごはいいだろうね」
長い鞭を、シルヴィアは頭上にふりかざした。
リックはまったく無抵抗のまま、あらしのような鞭をうけた。
「どうだ、これでもか、これでもか！」
はげしい音が鳴りつづけ、リックの吠えるような悲鳴が、それに加わった。
左手と左足が縄でひとつに縛られ、左足首を縛った縄は、シルヴィアの足もとにつながれている。これは、リックのからだ回転しないためだった。
リックの肩から背中にかけて、まるで縋馬のような鞭あとがきざみついた。

「きょうはおまえのおかげで、すっかり疲れてしまった。こっちへおいで、あたしの足を揉ませてやる」

シルヴィアは、リックを居間につれてきた。

そして、足を揉ませる。

リックは、ゆかの上にひざまづき、シルヴィアの美しい足をおしいただくのだった。

ステージのショウできたえた彼女のすばらしい肉体、とくに足のひきしまった美しさは、リックを恍惚にさそいこむ。

全身にうけた傷の痛みも忘れて、奴隷男は女王さまのふくらはぎを揉むのだった。

——この女王さまのためになら、おれは死んでもいい。

リックの胸に、熱い感情がつきあげた。彼は思わずシルヴィアの足の指に頬ずりし、ついには、その指を口の中にふくんでしまうのだ。

「きたならしい！」

たちまち、リックの顔は足蹴にされ、皮鞭のために、ゆかの上へたたき伏せられてしまう。

それでも、リックは哀願する。

「どうか、どうか、おみあしを！」

男は、女王さまの足もとにすがりつく。

子犬を蹴とばすよりも残酷に、彼女の足は、リックを蹴ころがした。

「そんなに、あたしの足は美しいかい」

「美しうございます。指の一本一本が、まるで宝石のように光りがやいております」

「それなら、おまえの舌で、あたしの足の指と指のあいだを、そうじしてくれ」

「かしこまりました！」

奴隷男は、舌を鳴らしてシルヴィアの足の指を味わいつくすのだ。



シルヴィアの芸能マネージャーであるミス・ビッキイ・ドレイクがやってきて、この光景をみた。

「まあ、すてきじゃないの、シルヴィア。この男、ますます奴隷らしく従順になっていくわ」

ビッキイまでが、そういつて目をかがやかせた。

「よく調教したでしょう。でも、まだまだなのよ。これから、もっともつと、ほんとうの奴隷根性をたたきこんでやるのよ」

シルヴィアは冷然とこたえた。



くさりをはずしても、もうこの男は逃げない、と察したシルヴィアは、思うぞんぶんの奴隷教育を加えることにした。舞台がいこだから、といってリックにさまざまの衣裳をさせ、酷使しては快感にひたった。

まったく従順な愛玩物だった。

シルヴィアは、鞭に情熱を燃やし、鞭に生きる女だった。だから、彼女の手には、いつも鞭があった。

鞭で思いきり男の肌を打ち、男の悲鳴をきくことが、シルヴィアの生きが이었다。

リックという男を得たことは、彼女の幸福だった。

リックは若く、独身で、たくましい筋肉をもち、おそろしく健康だった。



もともと、リックという男は、宿なしのやくざ者である。すがたを消したところで、本気になって心配する者はいない。

シルヴィアの広い邸内に飼われ、鞭によって調教されている哀れな男を救いだそうというような人間は、ひとりもいなかった。

「さあ、鞭の時間だよ。くるんだよ、奴隷男！」

「はい！」

シルヴィアの命令に、こん夜もまた、犬のようにころがっていく、リックであった。

(つづく)

こんなに便利な男奴隷は、めったにいなかった。リックを鞭打ったたびにシルヴィアの美貌は冴え、肌は生き生きとかがやきを増していく。

舞台におけるシルヴィアの鞭踊りにも、いよいよ、みがきがかかり、人氣はたかまわっていった。

その人氣のかげに、ひとりの青年の奴隷生活が秘められていることを、客席で拍手する人間たちは知らない。

リックがいつのまにか町から消えたことも、ひとびとの話題から遠くなっていた。

ゆがむ豊胸

カメラ・藤沢 修







■ モデル 榛名リエ













モデル ■ 榛名リエ
演出 ■ 藤見 郁





いすと女

カメラ・吉田 久

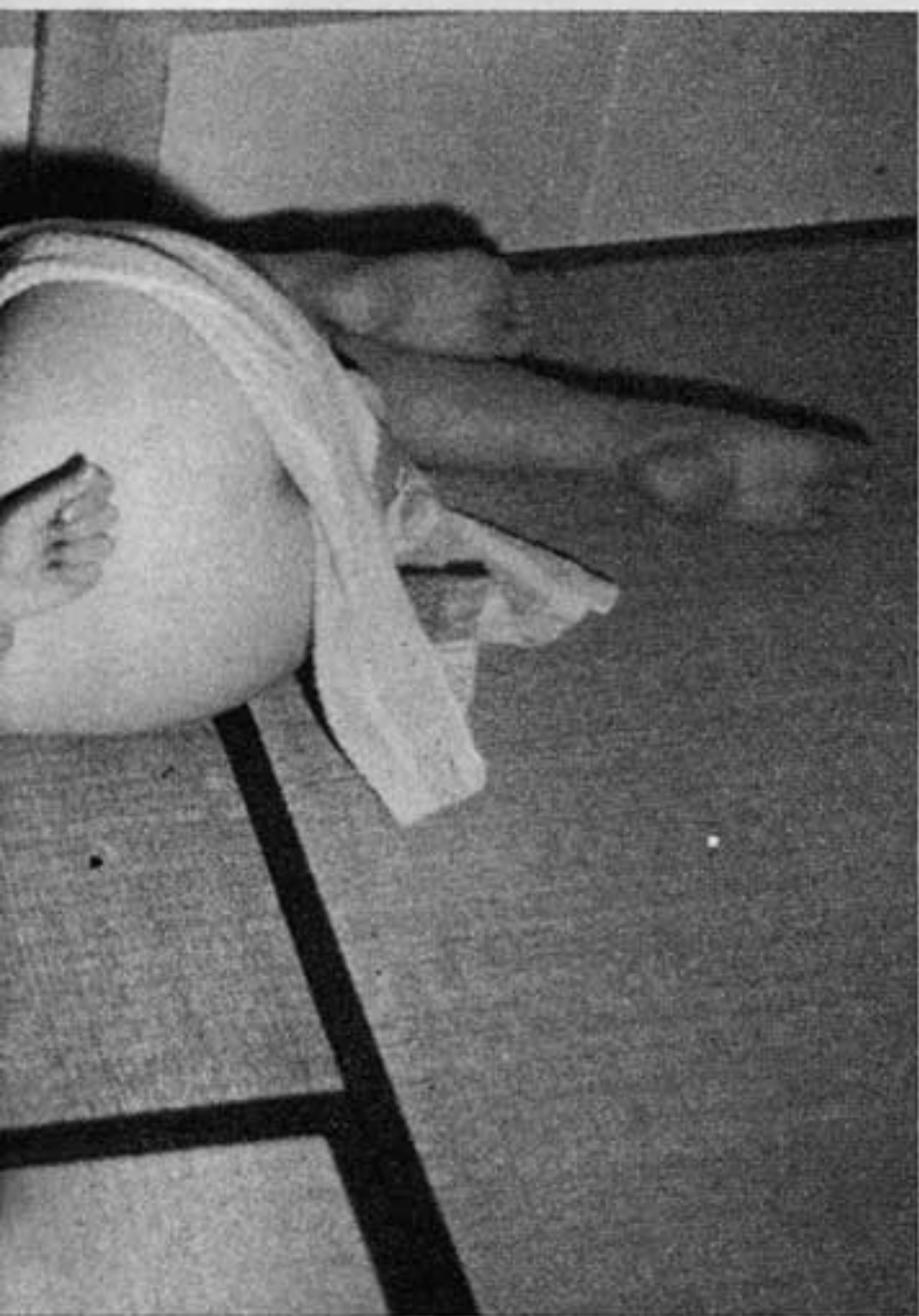








モデル ■ 高倉光子
演出 ■ 藤見 郁



片隅にうごめく

カメラ・猪島昌也







モデル・榛名リエ



新親小松嵐

お時の危難

文・高月大三
絵・小日向一夢



① 地獄と極楽

小名の浜の代官手代、吟味行の羽鳥伝之丞。今夜こそは、あのお時が自分の思う通りになると考えると、もういても立つてもいられない気持で、足音を忍ばして自分の屋敷の裏庭にある土蔵の戸前に近づいた。

阿波国徳島、松平阿波守の家臣だった勤王浪士の小松竜三郎を、やつのことで追分宿まで追い込んで、捕える寸前にまで追いつめておきながら、馬子のお時が竜三郎を手引きして逃がしてしまったことから、お時は捕えられて、小名の浜の代官屋敷にある牢内に投げこまれてしまったのだが、常日頃から、お時の美しさに心を奪われていた羽鳥伝之丞は、このときとばかり、役目を利用してお時を牢から出した上、村預けというかたちにして、土地のごろつき磐若の仁蔵を手先きに使い、お時をここへ閉じこめてしまったのだ。

「ふ、ふ、。牢内に置くと、いくら僕でも好きなこともできぬが、こうして、ここへ投げこんでしまえばこちらのもの。好きなようになぐさんだ上、責めようによつては、あの不逞浪士の小松竜三郎のかくれ場所を吐かせることもできるといふものだ。ふ、ふ、。お時め、今夜という今夜は、地獄と極楽を一緒に見せてやる。……」

伝之丞は、今にもよだれを垂らしそうにほくそえみながら、土蔵の二階へ上ってゆく。

ほこりくさい、ガランとした土蔵の二階の柱の根元にお時は後手に縛られたままぐしつけられていた。

身につけているものは粗末でも、渡辺街道で評判の美しさは、伝之丞の眼をたのしませるには充分だった。



② 二本の燭台

ほの暗い土蔵の、金網行灯のあかりの下に、うなだれているお時の横顔を見て、伝之丞、胸の中がこう、ゾクリとして、逃げ場のない単を見すえる惨忍な猫の眼になっている。

「……お時、小松竜三郎を逃がしたとき、郡内のかくれ場所を教えたらうが。どうじゃ、竜三郎はどこにいるのだ！」

「……………」

「代官屋敷の暗い牢から出してやったのも、そちの為を考えてのことだ。あのままだと、いずれは白州に引きだされて、多くの男達の見ている前で、口にもできぬほどの責め問いにあうのだ。それが哀れだと思えばこそ、僕の情けでここにかくまってやったのじゃ」

伝之丞、勝手なことを云っている。かくまうどころかお時を人知れず自分の思いのままにしたいために、かどわかしてきた奴だ。

代官屋敷で行なわれるよりも、もっと非道な責め苦がこの土蔵の中で行なわれるかもしれないのだ。

「ふ、ふ、ッ」と伝之丞は唇を歪めて笑った。

「そうして黙っているところをみると、白状しないつもりだな。それもよい、おもしろいぞお時。云うなよ、云うでないぞ。ふ、ふ、ッ。そのかわり、そちのその、むつちりとした、まっ白い軀から聞くまでじゃ……」

伝之丞は、土蔵の隅の棚の上から、蠟燭を取りだし燭台を二本立てなると、それに金網行灯から燈りをうつした。



③ 土蔵の鬼

「軀からきくためにはな、まず、脱いでもらわねばならぬ。ふッふッ、それ、こうして、百目蠟燭を二本も立てて明かるくしてやったわ。さあ、この灯りの中で、一枚一枚、着ているものを引っぱいで、一絲まとわぬ真ッ裸にしてやる……ふッ、ッ」

地獄の鬼のように、蠟燭の光りを受けた伝之丞の顔は気味の悪い陰影を土蔵の中に浮かして、お時の前にぞろりと近よった。

「あッ！そ、そんな！、し、知りません！」

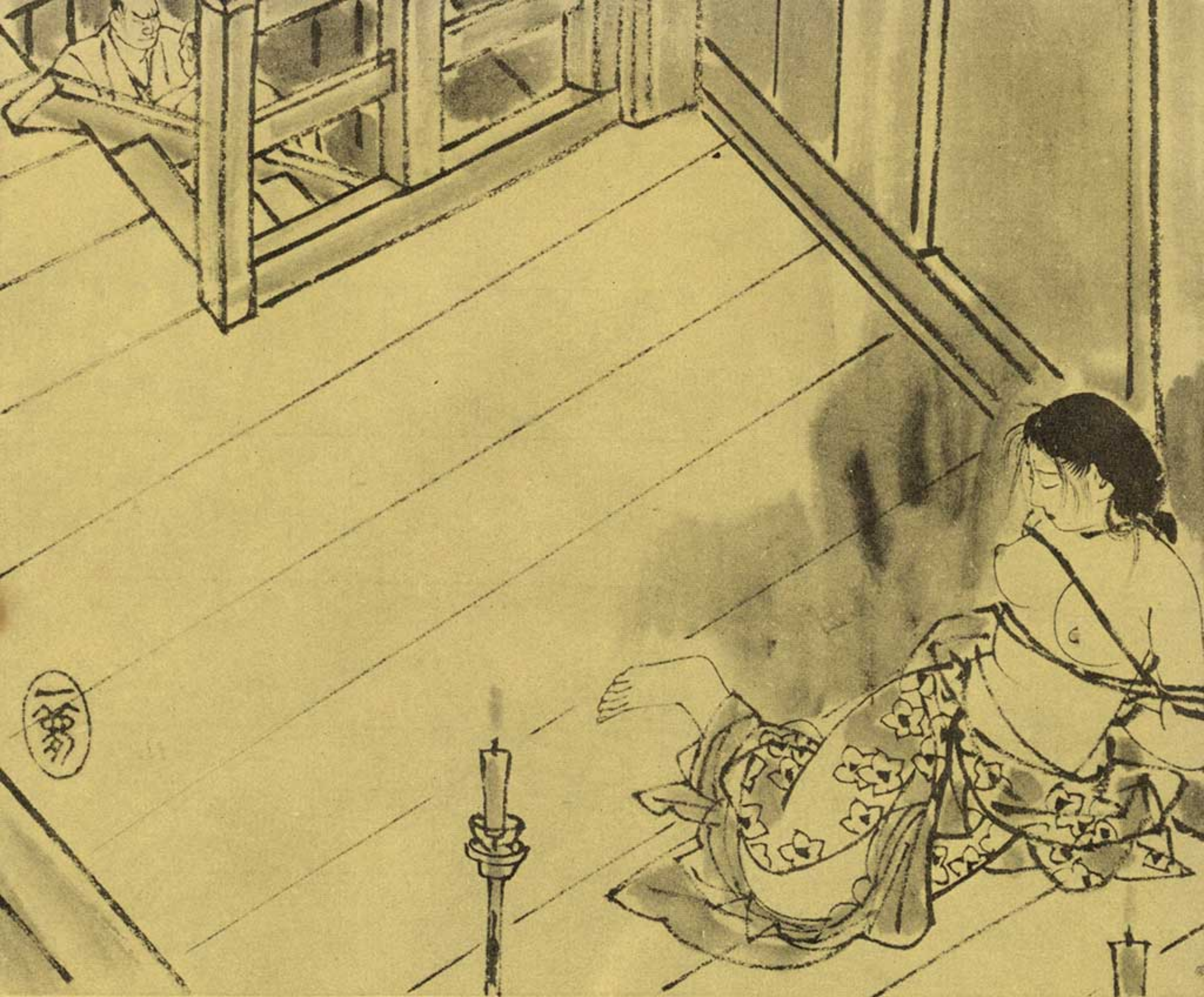
「ふッ、ッ。はじめて声をだしたな。ふッ、そうじゃ、そうじゃ、知らないはずだったな。云うなよ、云うなよ」「たとえ、どんな責め苦に逢いまして、知らないことは、申し上げようが……」

「うふ、うふ、そうじゃそうじゃ、誰でも初めはそう云うがな……そのうち、だんだんと白状したくなってくるものだ。まして女は、こうして、一皮ずつ剥がれてゆくにしたがつて、知らなかったことまで思いだすものだ。これ、そうあばれるな、しよせん、無駄なことだ……」

「あれッ！、お、おゆるしッ！」

柱の根元から一旦とき放たれたお時は、かび臭い板敷の上に胸を下にして組み伏せられ、手首を縛った縄が解かれると、やにわに双肌をグイと左右に引き脱がされてしまった。

着物の袖を引き抜かれた白い腕が、必死になってはねまわるのを、伝之丞は情ようしゃもなく逆に取って、上半身が裸になったお時に、きびしく縄をかけ直した。



④ のぞき磐若

土地のごろつき、磐若の仁蔵は、羽鳥の屋敷の裏庭に忍んで、土蔵の中の首尾を、先刻から気にしている。

どのみち、表街道を歩けぬ奴だから、代官手代のどんな悪事の手先きでもわれからつとめて、そのかわりに自分の悪事の目こぼしをしてもらおうという小悪党らしいケチな了簡なのだ。お時をこの土蔵にかどわしたのも、羽鳥伝之丞の弱味を知っておいて損はないという、考えが働いている。

お時が伝之丞のものになってしまえば、いくらかのヨロクにもありつけようというもので、だから、土蔵の二階から金網窓を通して灯りがチラチラするのが、妙に気になるのだ。

もつとも、それとは別な、助平な了簡の方が、こいつの頭の中には一杯だったのかもしれないのだが……。

「ヘッヘッ。もつけの幸いというやつだぜ、戸前には錠が下りていないらしいや……てヘッ！」

そーっと足音を盗んで土蔵の中。馬鹿のように鼻の穴をふくらませ、口を大きくあけて二階をのぞくようにしながら、一段一段と様子の見えるあたりまで板梯子を上っていったが……。

「うヘッ！」思わず磐若の仁蔵、押し殺したような声をだして、ゴクリと唾を呑みこんだ。

お時、一糸も身にまとっていない。まっばだかのままで後手の縄目をうけて、柱に縛りつけられている。

伝之丞が、弓の折れをこうかまえているところだ。

「だッ、だれだ！土蔵に入ってきたのは何奴だ！」



⑤ 裸の菩薩

「へえッ、あつしで、に、仁蔵でございます」

磐若の仁蔵、シマッタと思ったが、ここで逃げるとあ
とが怖いから、思わず返事をしてしまった。

「じ、実はお手代の旦那。おたずね者の小松とかいう待
が、追分の地藏堂にひそんでいることがわかりましたの
で、急いでご注進に……へえ、てへへッ」

とっさに口から出まかせの嘘八百を、立て板に水を流
すように並べた。口はしゃべっているが、眼は、柱
の根元にくくしつけられている、裸の菩薩のたまらない
うしろ姿の腰つきに吸い寄せられてしまっている。

伝之丞、心の中で、ちえッと舌うち。

どうせできない白状を迫って、今夜中はゆっくり責め
たり楽しんだりできると思ったものが、さて、これから
という場になって、つまらぬ奴が横からべらべらと、竜
三郎のかくれ場所を云ってしまったのでは、せっかくの
たのしみが水の泡だ。

「馬鹿ッ、そ、そんな事はあとで云え。いや、手配をし
なければならん。と、とにかく仁蔵、降りろッ！」

お時の裸を見せまいと、血走った眼で仁蔵をにらみす
えて弓の折れを振りまわした。そして、仁蔵を追いたて
るように板梯子をふみならして階下に降りてきた。

お時の傍にガラリッとはうりだされた弓の折れが、燭
台の一つに当って、はずみで蝋燭が板敷の上に転がり落
ち、お時の脱がされた着物にとろとろと燃えうつる。

伝之丞と仁蔵はそれに気がつかないで、声をひそめて
何やら話しているが、お時は、炎の前に身を悶えた。



⑥ 火事のさわぎ

土蔵の外で羽鳥伝之丞に大目玉を喰っている磐若の仁蔵が、どう云い逃がれようかと頭をめぐらしているときふと土蔵の中の異変に気がついた。

「旦那ッ。あ、あの煙りは。あッ、火事だッ！」

「おおッ！仁蔵、これは大変だ。お、お時を早く！」

脱がされた着物の位置が遠くて、お時の軀は火にいためられてはいなかったが、煙りにまかれて気を失っているのを、仁蔵と伝之丞はようやくのことのでかつぎ出したが、このままお時をここにおいておくわけにはいかない。「火事騒ぎに人が起きてくると面倒だ、仁蔵ッ、女を早くどこかへ運んでくれ、早くしろ、見られるとまずい」役目の手前、自分の家から火を出すことも失態だが、村預かりになっているはずのお時を、土蔵の中にとじこめて裸にした上なぐさんでいたとわかったら、ただでは、すまないことになる。

「いいか、どこか人目につかぬところへ押し込んでおくのだ。騒ぎがおさまってから、儂のところ知らせにこい、お時に妙なことをすると、ただではおかんぞ！」

「へ、へえッ！」

仁蔵は自分の着ているものを脱ぎ、縛られたまま気を失っているお時の裸を包みこんで、肩に引っかつぐと一目散に暗闇の中に姿を消してしまった。

まだ火炎をふき出すまでにはいたっていないが、土蔵の中はもう煙で一杯だ。

伝之丞は自分の悪事を棚にあげ、仁蔵の出現でこんなことになったとばかり、口惜しさにウロウロしていた。

⑦ 井戸端責め

花輪の宿の街はずれ、花屋という女郎屋旅籠の裏にある井戸端に、お時は裸のまま転がされていた。

あの火事騒ぎがあつてから二日目の夜である。

磐若の仁蔵は、つるべからくみ上げた井戸水を、お時の裸身にざあーとあびせかけて、竹ぼうきを手にとると二、三度ピシリ、ピシリーツと打ち叩いた。

「さあ、これでも、客を取ると云わねえのか！」

お時の長い黒髪がしとどに乱れて、濡れた柔肌にぬれぬれと巻きつくように吸いついている。

荒縄でいましめられた身は、死ぬより辛い羞恥の姿をどうすることもできないのだった。

仁蔵のほかには、花屋の女あるじのおしも、仁蔵の弟分の竹虎の二人が一緒になってお時を責めているのだ。

「くそっ、客を取ると首をたてに振れば、縄もというやる、着物も着せて、いい目を見せてやるんだ、まだ強情を張りやがるのか！」

仁蔵、必死だった。

伝之丞にあのとき云った出まかせの嘘がばれて、手が廻っているというのを、早耳の竹虎に聞かされて、仁蔵は小名の浜にいられなくなってしまったのだ。

事情を知らぬおしもの手元へ、お時を女郎に叩き売って、その金を持ってわらじをはこうと云うつもりだ。

「いい玉だから、当人の口から客を取ると云う言葉さえ聞かせてもらえば、三十両は出しますよ……」

こう云うおしもの応待で、いやがるお時を井戸端に連れだしての責め折檻なのだった。





⑧ 枯れあおい

「ちえッ、強情なあまだ。これでもまだウンと云わねえのか！」

仁蔵の手の竹ぼうきの柄が、また、何度もふり下ろされる。そのたびに、お時は羞かしい身をくぬらせた。

「ヒッ!、ひいいーッ」

竹虎の眼はいったいどこを見ているのやら、くみ上げるつるべの手元も狂いがちだ。

水をあびせ、打ち叩く激しい責め折檻に、お時の唇は紫色になり、あげる悲鳴もとだえんばかり。

「あーッ、小松さま。竜三さまーッ」

必死の悲鳴のうちに、恋しい人の名を呼んで、お時は今にも絶え入ろうとする。そのとき、

「おッ、やっぱりそうか、あのときの女馬子ッ!」

こう叫んで、花屋の庭から飛びだしたのは、身を六部の姿に変えて花屋にとまり込んでいた、小松竜三郎だった。

「ぎえッ、て、てめえは、竜三郎だなッ!」

驚きあわてる仁蔵と竹虎を斬り倒して、おしもに当て身を喰わせると、竜三郎は責め苦に気を失っているお時の縄目を斬り放って、抱きしめた。

「しっかりなさい、気をたしかにッ!」

しとどに濡れてまとわりつく黒髪をかきわけて、お時の耳のそばで竜三郎は幾度も叫んだ。

吟味役、羽鳥仁之丞のかずかずの悪事が露見して断罪に処せられる頃、葵は枯れて、西に轡の音がしていた。

裏窓叢書
第五集

責め肌忍法

作・万里小路 崑

挿画・古正英生
装幀・喜多玲子

気狂い学者といわれている小野道玄がつくりあげた、強力な火薬の製法を、公儀隠密の伊賀衆と甲賀忍者が、死力を尽して奪いあう！

道玄の娘、雪絵は、その柔肌に秘文をひめたまま、魔手の渦の中に翻弄されるのだ！

凄艶美貌の女スリ、つばくろお新。淫虐無類の伊賀衆、

黒猿党の総師乾兵部。雌鹿のような肢体をもつ女忍者朱実。正義の剣士扇銀之介。そして女体をむさぼる稀代の好色淫魔で抜荷買いの但島屋源兵衛……正邪入りまじってくりひろげる、伝奇時代責め小説の決定版！！

裏窓叢書第五集完成近し！

目次

破幻の巻

白粉彫り、忍者縛り、苦悶の部屋、武蔵野・樹陰の柔肌

忍風の巻

夜鴉、むささび責め、救いの手、血風陣、忍者屋敷

魔影の巻

苦悶肌、黒猿印、夜ぐも、責め土蔵、肌吟味

呪縛の巻

死の襲撃、魔の翳、美女無惨、甲賀縄、白粉彫り

近日刊行！

御期待ください！

予価四百円・送料七十円・中野区江古田一、あまとりあ社（振替東京一〇七五六・久保書店宛）



女性の悲愴美

私本・礼津女切腹抄

団 克衛
栗原 伸・絵

切っ先五分ほどが、たちまち吸われるように堅く白い肉をはんだ……

一

元祿年間のことだという。ある年の四月、武州岩槻藩（忍藩ともいう）五万六千石の領主、阿部対島守正盛が、家中で馬回り百石取りの侍、吉村嘉六という者の娘に切腹を命じた。女は、れつ——礼津という。これが所謂『礼津女切腹』事件である。

さて、この事件だが、わたくしはこの一篇を書くために一応史実に当たってみる必要にかけられ、若干調べてみたのだが、かえっておもしろからぬ結果を惹起してしまった。あらかじめこうお断りしなければならぬのは、はなはだ残念だが、史実に到達できなかったのである。まず女性人名辞典だが、そこにはない。「与え」や「奈良左近義成の妹」などが

『比売鑑』と出典を明らかにしているのは、これは不思議なことである。で、系譜綜覧で、正盛を調べてみよう——と、これもないのだ。阿部氏は徳川三河以来の譜代で支流が多いが、そのどれにもない。わたくしは、はたと当惑してしまった。斯界権威の中康弘通氏も、前に一度どこかへそんなことを書いておられたのを思い出し、「数ならぬわたくしなだが、とうていはじめから無理だったのだ」——あっさりあきらめたのだが、以来、——この礼津という女は、果して実在したのだろうか？

史話を書くというわたくしにとっては、最悪の疑念がわき起った。れつ——烈女……女の名前としてもだし、この物語りとあまりにもしっくりすぎる。それに正盛なる人物





が実在しない、など。が、とすれば、不思議なのは幾多の作家によって、礼津の伝記が書かれていることであり、その筋の奇妙な暗合である。やはり中康弘通氏が断じられたように、礼津は実在した女なのであろう。しかし一方、こんどは、

——どうにもスッキリしない話だ。

話にからまる謎のようなものが気にかかりはじめた。そこで『私本・礼津女切腹』と名づけ、この話を改めて推理しなおそう、と思いついたのである。わたくしの退屈な推理はおいおい聞いていただくとして、あらかたの読者諸覧はすでによくご存じのはずと思うが、必要上ざっと話の筋を述べさせていた

く。

事件の発端は、嘉六と主君正盛の側用人をつとめる渡辺茂太夫との間に、感情的なあつきが生じたことにはじまる。理由がなんであったかはわからない。が、あつきは確執に発展し、茂太夫は君側にあるをよいことに、嘉六を閑職に左遷してしまうし、その上、ひとり娘の礼津の養子縁組を願い出ても、トンとにぎりつぶしである。嘉六は無念がってもどうしようもない。一夜、皺腹を掻き切ってしまう。当然、乱心自儘の自刃との扱いをうけ、——家名断絶。

礼津は行儀見習として奥へ上り、北ノ方の

寵をうけていたのだが、断絶とともに奥から永の暇を出された。そして数日後、礼津は茂太夫をおとすれ、意趣を含んで玄関先に斬殺してしまう。奥にあるときから「小太刀をとっては男まさり」といわれた腕なのだ。

正盛は怒った。言下に、縛り首にせいという。しかし北ノ方は礼津を哀れみ、士分の扱いという破格の恩命を乞い、正盛を動かした。当日、礼津が切腹の座にある頃、あらかじめ礼津が茂太夫の私曲のかどをしたためておいた書面が、正盛の手もとへとき、正盛はにわかにかえりて使者に助命の沙汰をもってやらせる。

だが、助命をうけた礼津は、『ご恩命ありがたく存じます。さりながらいったんお仕置仰せだされながら云々』と述べ、再座の使者をまわって潔く切腹した。ために家跡はたち、礼津は忠孝両善のれつ女として喧伝された。

——ど、まずざっとのところだが、とにかくあと味のスッキリしない話なのである。疑念というのは、まず第一に、嘉六が皺腹を切り、娘が「仇」よばわりで刃傷事件を惹き起す——奇妙ではなからうか？ 嘉六が茂太夫を討ってこそ本当ではないか。老いの身でそれができないなら、その老軀を恥じるべ

きで、なお役職にきゅうきゅうするなど、見苦しい限りというほかはない。伝わるころによれば性廉直というが、実は狷介一徹、なんのことはない老いてますます頑固で一徹、少々ノボセ気味な老人しか想像できなくなってしまう。

だが、そう断定するというのはなく、ここにこの話の裏がみえることが、いいのだ。それに、養子縁組をにぎりつぶされたにせよ、跡目が立たないのに自刃する動機性にはやや薄い。ほかにこみ入った事情がなければならぬ。

第二に、北ノ方の恩命だが、これもおかしい。士分の扱いといえど当時の通念からいえばたいへんな恩典だったはずだし、いくら忠勤をめでたからといって北ノ方がとくにそう望んだのも変だし、寵臣を討たれた正盛が承諾したのもさらにいぶかしい。

第三の疑念——、これが決定的なのだが、礼津が述べた『一旦お仕置仰せだされながら云々』である。これあるゆえに烈女と伝えられたのはうなずけるが、果してこれが忠であり孝であるといえるだろうか？ 一面、痛烈に主君の朝令暮改を皮肉り、ののしっている。——とはきこえないだろうか？ こんなべらぼうな言い分で、助命を拒めば、それこそ主

君の面目を失墜させるのではないのか？

次にいぶかしいことに、正盛は「それなら」と礼津の言い分通りに腹を切らせていることだ。ここに至っては、全くなにが何だかわからなくなってしまう。例のことばをまこと忠誠あふるるものと聞いた上で、それほどの志を抱いている礼津をむぎむぎと腹切らせる——まことにもってけしからぬ話ではないか？ それも正盛が一言「ならぬ」といえばすむことだというのに。——すなわち、礼津には、正盛を面罵し、その上で主君の意に抗って死なねばならない理由があったのではなからうか？

二

三つの疑念を結び合わせると、おぼろげながら一つの推理が、おのずから浮び上がる。

礼津は北ノ方に仕えていた。奥へは正盛がかよって来る——あの時、フツと礼津をみかけた、というのはさして無理な想像ではなからう。その礼津が、正盛の胸を思わずカッとさせるような美貌だったとすれば？

——よい娘よの。

正盛はついでのおり、茂太夫に謎をかける。どうにかならぬか、——言外の意と悟って、茂太夫は当惑する。

——しかし、何分にも礼津は家つき娘、家督のこととございます……

——跡目は養子でよからう。

こともなげにいつても、正盛も事實はそれほど簡単でないことをよく知っていた。

礼津は北ノ方付だし、これに問題があるのだ。大体この阿部家というのは慶安四年、三代將軍家光の死に際して追腹を切った阿部重次が時の老中職だったくらいで、代々幕閣と結びつきが強い。結びつきというのはおもに政略結婚で、従って実家の権勢を背景にする北ノ方に、正盛は頭が上らない。とうてい侍女を側室にいい出せないし、また切り出したところで北ノ方もおいそれとは渡すまい。昨日まで側でつかった者が寵を割いてゆくのは、おもしろからうはずもないのだ。

それをわかりきった上での、——なんとかせよ、なのである。

茂太夫の困惑ぶりも理由がないことではないが、しかし、そのための側用人であり、日頃の寵愛とあれば仕方がない。とうとう一計案じ出した。

——礼津をいったん、それがしの養女にする旨の口実で奥から下げ、養女にした上で改めてお側へ差し上げると、このように計りましては？

——ふむ、しごく妙案。

茂太夫は嘉六にことをはかった。

ところが、はかばかしくないのである。狷

介の嘉六は、けんもほろろだった。

——某、娘の身かせぎ(稼)で碌を望まぬ。

万策つきた茂太夫が主君に委細をつけて詫
びたが、正盛の執心は意外にはげしく、それ
だけにおもしろくない顔色だった。折から嘉
六が養子縁組の裁可を願ひ出た。嘉六にすれ
ば、早くまとめておかぬとまたいずれ難題が
来るかもしれないというだけのつもりだった
のだろうが、正盛は、正しく面当てととった。

——ならぬ。

茂太夫ににぎりつぶすよう命じて、嘉六を
お役ご免にしまった。お役ご免といえ
ば、無役で、小譜請組閑職といつてももともとす
ることがない。

嘉六は、これを無念とし、——いくぶん主
君の我儘を諫める気持も働いたのかもしれぬ
が、腹を切ってしまった。願ひ出の件は茂太
夫のところでのにぎりつぶされた恰好にはなっ
ていつも、これは主君の傀儡で、斬ってみて
もはじまることではなかった。

さて、そうなると正盛も茂太夫も寝覚めが
悪い。ゆきがかかり上、家名を断絶させたもの
の心中じくじたるものがあつた。

そこへ礼津の刃傷事件である。茂太夫が討
たれた。と聞いた時、

——親娘して面当てしおるか！

正盛がカッとしたのも無理なかった。

礼津にしても事情は知っていたはずだ。そ
れでいて理不尽に茂太夫を斬つたとすると、
面当て以来のなにものでもない。またそれは、
公然と正盛の意を——つまり「ヒジにした」
ともいえるのだ。衿持も失つて、正盛は二重
三重の怒りを感じた。

ここへ北ノ方が切腹の恩命を申し出たの
だ。

嘉六の死で正盛の画策を知つた北ノ方は、
まず礼津の美貌に脅威を感じた。それにつけ
ても、礼津に側室になる意思があつたかどう
かが気がかりであつた。なにしろ寵を与えて
いた侍女なのだ、それさえすぐ当主に媚びる
ようならよほど用心せねばなるまい。

その点をただしてみると、

——もとより礼津には、毛頭そのような：

礼津はキツパリと答えた。正盛になびくつ
もりがなかったというのだ。

——まことであらうな？

——神かけて誠にございます。

その真意を示したさに茂太夫を斬殺した、

——とまでいえなくとも、礼津にはほぼそれ
に近い気持の働きはあつたであらう。父の死、
家の断絶とつづき、動揺した気持の上に、正
盛への面当てと、いろいろな素因がまじり合
つて刃傷事件になつた——といえよう。

で、北ノ方には、礼津の心中がわかる。縛
首とはいかにも哀れ——と、そこで「切腹を」
となつたわけだ。

こう推理して来ると、礼津が助命を拒み、

——いったん仰せだされながら：云々、

と、正盛を面罵したい気持も納得できる。
どたん場、正盛が助命を決心したのは、ひ
とつに一時の激情がさめたせいもあるが、

おそらく外聞をはばかつてのことで、家名は

養子をもつて立て、妹分の扱いで、というよ

うな懐柔めいた措置もほぼ察しがつく。——

すなわち、正盛は己れのヘマと、多分にゆき

がかりから生じたこの事件を、老獪にも美談

にすりかえてしまったのだ。哀れなのは佞臣

のそしりをこうむつた茂太夫である。しかし、

死んだ者から順に貧乏クジを引くのは、これ

はどうにも仕方のないことである。

以上は推理にすぎないが、当らずとも遠か
らずというところかもしれない。いや、わた
くしには、どうしてもこうだったとしか思え
ないのだ。

では、礼津とは一体どんな女だったか？

狷介一徹な父親一人の手塩にかかった一人娘、小太刀をとって男まさり、勝ち気と美貌、気丈な反面、ときとして激しやすく、おそろくは、小股の切れ上った大柄な女、肩幅もゆったりと広く、容貌は、眉が濃く、眸はきれ長で大きくはりがあり、鼻梁がよく通って唇はうすい——みるからに勝ち気をあらわした、江戸好みの美女が、髻髷とするようだ。

三

庭上は、春たけなわの陽射しがさんさんと降りそそぎ、ところどころで陽炎がもえている。その庭に面して、戸子障をうち払った上書院に、切腹の座は西むきに設けられてあった。背後には、白無地の逆屏風をひきまわし、前に畳二枚の裏返し、それを白絹布で巻き四隅に櫛を立て——作法通りである。

正面、一間半の床几に、検使浜田刑部が腰を下していた。左に副使の関多右衛門。

二刻前、切腹の座は庭上にもうけられてあったのだが、

——礼津に妹分の扱いを。

別命が下屋敷に伝えられ、にわかに、表書院へ座を改めたのである。

切腹人の用意がととのうまでの間、浜田刑

部は、庭上の、陽炎がもえている辺りへ視線をそそぎながら、しきりと陣笠の下で額に浮ぶ汗を拭った。ぬぐっても拭っても、汗はすぐにじみ出るのだ。

副使は、それをいぶかしげに眺めた。

昨夜である。正盛は刑部に検使を命じたあと、ひそかに別間へ呼び、

「よい、早ばやと介錯を与えてはならぬぞ、充分に腹を切らせよ」

と、別命を与えて、そればかりか、介錯に刃引きの太刃を用いてもよい、とさえいったのだ。刑部には気の滅入る役目だった。介錯人——脇部甚七には、旨を含めてあるもの、いよいよとなると、やはり心が重苦しい。

と、礼津が、徒士目付二人に付添われ、書院へ姿をあらわした。

疲労のため、にわかにやつれのみえる容貌である。はじめ死の座へついたのが巳の刻で、あれからかれこれ二刻半、上屋敷から再座の沙汰が届くのを待っていたのだ。覚悟の上といえ——いや、それだけに、いっそう辛い二刻半（五時間）だったともいえよう。

畳を踏む足どりが、蹠跟として覚束ない。が、そのまま礼津の白い足袋は、切腹の座の白布の上を踏んだ。

春の陽射しもやや傾き、だが、まだ七ツ時

（四時）の光に耀いている庭上から移した視線には、ややも薄暗く感じられる書院だが、その中にあっても、礼津の白無垢は皚々として白かった。

すぐ、三宝がはこばれた。水盃である。これを二、三重ねさせておくと、介錯に際して出血がすくないという。それがすむと襷・股立ちとった脇部甚七が、礼津の左背後に立つ。徒士が、もう一つの三宝を礼津の膝先五寸の位置へすすめた。それには九寸五分。——柄をはずし、奉書紙を逆巻きしてこよりでとめ、切尖一寸ほども冷たい光を放っていた。

礼津は、蒼く褪めた表情でしばらく九寸五分を瞞めていた。そのうちに、頬へわずかに血の色がのぼって来た。

と、介錯人が、

「いざ」はげますように声をかけた。

しかし、礼津は、下唇を噛んで俯向いたとき、面を上げない。窮した甚七は、もう一度声をかけた上、

「如何なされた」と、きいた。

ふっと礼津はうなずき、胸だかにしめた黒襦子の帯に手をかけた。解こうとするらしい。その指先がぶるぶると震えたが、これは気怯れや畏怖というより、たかぶりのせいであるう。

解かれた帯には、まだ礼津の体のぬく味が残っているものを、膝行した徒士の一人が退いていった。すると礼津は、襟を大きく開き、まず右から肩を脱ぎ、ついで左をはずすと、と膝を立てて、ふくらはぎへ袖を挟み込んだ。二十一の若い肌である。

五尺四寸——大柄な礼津の体は、もろ肌脱いでみれば、ことのほかみごとというよりほかなかった。女としては広い肩幅。あつい胸。ゆたかにもり上った乳房が、かたく胸郭をしめつけている。

その胸の先は、これも緊張のたかぶりのためであろう。山桜のつぼみの色が尖り気味であった。

胴はなめらかに括れ、かなりの厚みがある腰、腹部はかたく肉がよくしまり、ふとした身じろぎのたびに脇腹に筋肉のすじ目が瞥見されるが——とはいえやはり女のこと、その上を豊饒な脂とつややかな白い膚が匂み、中ほどで臍窩は鑿あとのように深く縦長にくぼみ、やや大きくかげっていた。

礼津は、その臍窩のかなり下まで、十分に白無垢を押し下げた。

——場にいあわす者、皆じっと瞠め、声もなかった。居合わす者というのは、検使、副使。介錯人。介添人、二人。

徒士目付二人。それに徒士四人と、雑用の小者が三人で、計十四人。

と、その時であった。

「其許、まことに腹を召さるる所存か」

関多右衛門が、礼津に尋ねた。にわかになれにかえった——。思わず、という声でもあった。

礼津は、またキッと下唇を噛んだ。俯向いて、答えはない。

——が、

「勿体もないことじゃ」と副使はいった。「気丈との噂だが、女子のこと、もし見苦しい態あれば、北ノ方さませつかくのご恩命を、それこそないがしろにしよう」と申すものではござらぬか」

副使の言い分はもつ



ともである。

が、しかし——例えもつともだとしても、人情の機微をわきまえぬとそしりをまぬがれぬだろう。礼津の本心がどこにあったかはおくとしても、これもないことではない。切腹が故実作法にかわった昨今では、介錯はまず三宝を引き寄せる時、次に短刀をいただく時、としている。切腹人にとって三宝にふれることが、まずまず死を意味するのだ。ところが時に生に異常な執着をみせ、切腹人は、實際刃を腹に加えるつもりがなくとも、もろ肌脱ぎ、須臾の生の余情をたのしむこともあり得るわけで、いや、いかに豪胆の者でも、まずこうだといって過言はなかった。ただ、礼津の場合、ふだんは膚をつつしむ女人のことだけに、そのもろ肌脱ぎがあまりにも生々しく、異様に写った。

だが、そうきかれた礼津の立場にすると、生来の勝ち氣に加え、——女だてら半裸晒した含羞がえこじに曲って、実際に腹を切ってみせねばならぬ、突嗟に決心を固めたのかもしれない。

「いかにも」とうなずいた。

得たり、と刑部は甚七に大きくうなずきを与えた。いうまでもなく存分にさせよという合図であった。

多右衛門の善意から発した制止は、結果として礼津をあおり立てたのかもしれないが、それと気づかぬ副使は、

「勿体もない。拙者、不所存でござる」

と声を荒げた。「検使には、切腹人に含むところありと見ゆるが、如何か」

凶星をさされ、刑部は蒼褪めた顔をさらに苦しくして、ひきつれた高声で、やっと、

「某は当人の存念のままと存ずる。正使として責は負い申すほどに、いらぬ差出口をつつしまれよ」

いらぬ差出口——ということばに、多右衛門はムツと表情を硬くした。「なんと仰せられるか」腹に据えかねた様子で、立ち上ろうとした。しかし、その時、

「礼津の存念と思し召しくださいませ」

と、礼津の声がとんだ。

いうなり三宝を引き寄せ、九寸五分を右手にとり、頬を固くひきつらせた礼津が、左の脇腹へ切っ先をむけるのを、検使二人、凝然として見まもった。

一同の凝視のさ中、

「……」

礼津は、左掌の腹で、臍の下を撫でさすると、左脇腹が腰へあつく肉をより上げる辺り、そのツボへ切っ先を擬し、胸乳を反らせると、

視線を明るい陽光の庭上——宙に凝らして呼吸をととのえた。

と、すぐ、蒼くさえかえった礼津の容貌にパツと血の気が上り、濃い眉がぐつと寄って、刃をにぎった手に力がこもった。が、切っ先は——肌を凹ませただけで突き立たない。

一瞬、狼狽と焦りが礼津の表情をよぎり、一呼吸、ふた呼吸とするうちに、吐息が乱れはじめて肩が、やや喘いだ。

——ならじ、

礼津は、そのまま刃を右へ引いた。

すると切っ先五分ほどが、たちまち吸われるように堅く白い肉をはんだ。

「う」——

衝き上げるような呻きが洩れた。

上体がぐつと前へかしぐ。その上体をたて直したときだった。

すーっ、と……幕をひきおろしたように、

礼津の表情から血の気がうせ、一瞬にして、ふたたび蠟色の紙のように白くなった。

唇だけが異様に赤い。

礼津の右腕が、せつないほどにこめられた力をまざまざと見せながら動くと、切っ先を右へ引きまわしはじめた。

——う、うっ、

と、肺腑をえぐる呻き声が、礼津の異様に



赤い唇からほとぼしり
ぷりぷりとも、ずぶず
ぶとも形容がつかぬ膚
の裂かれる音が、しわ
ぶきひとつない書院大
広間を伝わった。厚手
の綿布を裂くような、
微かに、そして不気味
な物音であった。

ふと、また礼津の上
体がかしいでいた。

肩先のはげしい喘ぎ
——切っ先は一寸ほど
も喰い入り、それもす
でに臍の下、一寸ほど
の位置へうつって、三、
四寸になったきず口が
大きく開こうとしてい
た。

はじめの短い瞬間、
きず口は白く弾け、血
は忘れられたようにお
そかった。すぐ、きず
口がみるみる真赤にふ
くれあがり、それは、
ためらいがちにあふれ

出ると素早く下腹の慄える膚の上に伝い、白
無垢のひだにたまり、やがて膝を汚し、切腹
の座の白い絹布のうえにも、点々と小さな赤
い斑点を散らした。

礼津の顔色は、土気いろに褪せて来た。

失血より、むしろ貧血の故であろう。すで
に眸は眈を裂いて大きくみひらかれ、視線は
むなしく宙を凝視していた。それは一種驚愕
と似た、歪んだ表情だが、美貌なだけにひと
きわ凄まじい迫力をおび、凄まじくも美しい
断末魔の形相であった。

一文字やや左下りに、右脇腹のはずれまで
掻き切って来た礼津は、おもむろに胸乳を反
らせ、上体をたて直した。ためにきず口は一
寸余、くわっとひらき、肉のあつい切れがみ
え、ふき出る血汐の間から、菜の花の色に
た皮下脂肪がもり上った。そのときである。
礼津はあごを胸につけ、わが腹を見た。

瞬間、礼津は、

——くうっ、と、ただならぬ狂おしい呻き
声を上げた。狂ったように、あらあらしいし
ぐさで、刃をなかばまで——臍窩の下あたり
まで左へ戻した。

「ぐわっ」獣めいた呻き声だった。

きず口が二寸以上も割れ、右脇腹に、不気
味な紫灰色のうごめきが走った。

——臟腑。と、誰の眼にも明らかで、

「介錯ッ」多右衛門が叫んだ。

甚七は焦ったが、苦恥によじれる礼津の姿勢は、介錯に不利だった。

ようやく、礼津がのけぞり頤が胸をはなれた時に、甚七は機会をつかんだ。かっとな椎を断つ音がひびき、首は、凄まじく歪んだ形相で、一間ばかり前へ墜ちた。

おもわず刑部は、

「あッ」

と叫び、床几から立った。

首をなくした礼津の胴が臟腑をはみ出してどうと前へ倒れ、裾がわれると形のいい脚が、膝近くまであらわになった。その脚の白さは異様に生々しく、無惨な光景であった。

付記 あまりに我田引水式な推理に呆れられたことであろうか？ 中康弘通先生も以前嘉

六の死を自刃と述べられたことがあり、のちに『切腹』では病死とし、これを定説とされたようだが、わたくしはこの稿に当り必要上前説を採った。故意の倭曲をこころみた点、中康先生におわび申し上げるとともに、読者諸賢にお断り申し上げておく。

——完

壮大なスケールと 味のあるS場面

——映画「蒙古の嵐」から

本号の四七ページにも、この映画の紹介記事がでているが、もうすこし、くわしくのべてみよう。

S派にとっては、それだけのネウチのある映画なのである。

提供会社の東和映画会社から頂

戴した豪華なパンフレットに、推理作家の高木彬光氏が「多くのイタリイ製歴史映画に見られるような、大味すぎる欠陥もなく、雄大

なスケールと、繊細な映画的神経

とをあわせ持った一つの傑作とい

ってよいのではなからうか」

と、書かれているが、この賞め

ことばが、S派にとっても、そっ

くりあてはまる。

過去日本に封切られたイタリイ製時代チャンバラ映画には、S・Mシーンが多く登場し、そのシーンだけをめあてに入場料を払う人も

すくなくなかったと思う。

しかし、そのかんじんなシーンが、とかく「大味」すぎた。残酷性だけがむきだしにされて、派手だが、こまかい味にとほしかった。

この「蒙古の嵐」のSシーンは、その点、なかなかデリケートに演出されていて、みごたえがある。

まず、暴虐蒙古軍に抵抗する美女、アミナ（アントネラ・ルアルディ）への拷問シーンを特筆したい。

アミナは上半身を裸にされ、両手首はべつべつに縛られて、その縄は天井に吊られてゐる。両手をバンザイ型に吊られた裸身へ、オゴタイ（ジャック・バランス）の長い皮鞭ががびしりッ、びしりッ

「ううッ、ううッ」という悲鳴と苦悶の表情が、ていねいにうつしだされる。

つづいて、オゴタイの妻ウルナ（アニタ・エクバーグ）が責め手になる。

彼女は「縄をもつと巻け」と、部下に命令する。

縄がひかれ、アミナの両手は、

じりじりと上に吊りあがる。

「ひいッひいッ」と、アミナは苦悶の声をあげる。ウルナはそのア

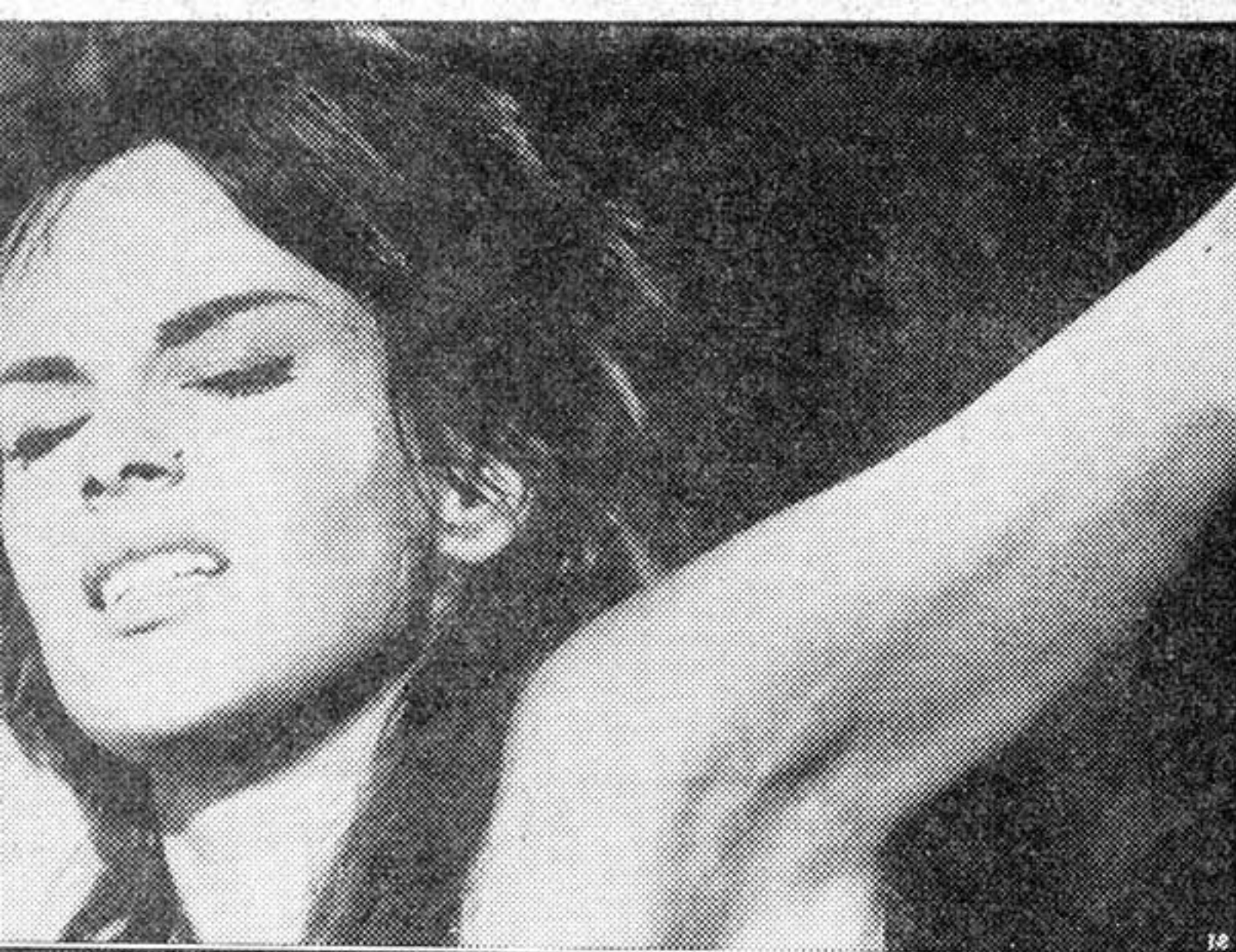
ミナへ、こんどは皮鞭をふるう。

鞭が裸身へ、くいこむように巻

きつき、びしりッ、びしりッとい

う、リアルな鞭音。

この拷問室には、ほかにも女が大勢、前手縛りに縛られて、あえ



景ではなく、一人一人うつしだされる。

そういえば、古今東西数ある映画のなかでこの「蒙古の嵐」ほど「縄で縛られた人間」がたくさん登場する映画はないだろう。

後半、クライマックス近くになると、蒙古軍に捕われた男女たちが、数十、誇張していえば数百、ぜんぶが縄で手足を縛られて、広い寺院のような建物の中にとじこめられるのだ。

このシーンを撮影するときには、撮影所の中に存在する、すべての縄が動員されたのではなかったか！

アミナは、ここではもう一人の女と、柱へうしろ手に縛りつけられる。

背後へまわされた手首に、黒い縄がぎりぎり巻きついている。緊縛感があつて、このへんが、いわゆる「味」のあるシーン。ただし胸に縄がまわされてない。

勇敢な主人公が、これらの女たちを救いだそうとするシーンも、壮烈である。

足の縄は切つてやるが、手の縄を切る余裕がない。女たちは前手縛りにされたまま逃げる。

それを発見した蒙古兵が、弓に矢をつがえて、女たちの背後から射ちまくる。

最後に、このアミナがほかの男女たちとともに、火あぶりにされるシーンも、かなり凄烈な雰囲気

がでている。

X字型のハリツケ柱に、二十人ほどの男女たちが、ぐったりと死んだように縛りつけられている。

火がつけられると、アミナが苦しげにあえぎはじめる。

縛られた手首のアップ。

悲愴美のきわみ、といった感がある。

また、嫉妬に逆上したオゴタイが妻のウルナを鞭打つ場面も、凄みが

ある。

水浴びしていたアニタ・エクバークを、水のなかからひきずりあげて、ふとい皮鞭で、びしんびしん叩く。

恐怖と憎悪と苦痛の表情を、エクバークが迫真的に演ずる。その肌に刻みついた紫色の鞭あとを、ジャック・バランスふんするオゴタイが、キスしたり、頬ずりしたりする場面もある。

このあたりなど「大味」どころか、東洋人ごのみな芸のこまかさをみせる。

また、このエクバークが悪運つきて、底なしの泥沼にしずみ、もがき苦しみながら、鼻の上まで没していくシーンもていねいにうつしだされ、迫力がある。

監督は、アンドレ・ド・トスという人で、いままでに「肉の蠟人形」「平原の落雷」などの映画を手がけたという。

まだまだご紹介したい場面もあるのだが、あとは劇場でのおたのしみということにしておきましょう。

(豊)

二月二十七日から、TYチェーンで公開される予定です。



Mの世界

なめたい

田沼醜男

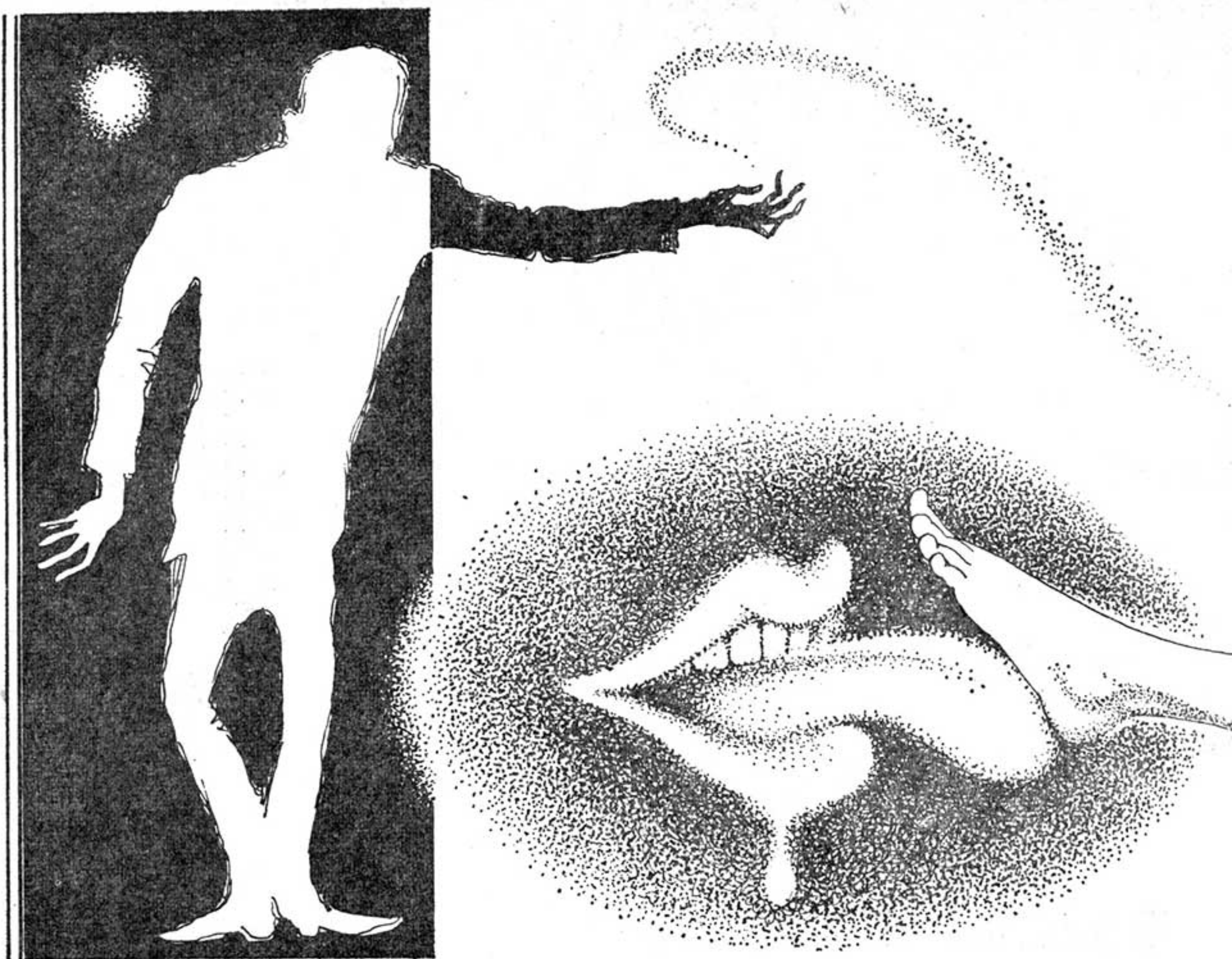
絵・美濃村晃

1

はじめて明子をみたのは二年ばかり前のことになる。何不自由なく暮せる身ではあったが先天的なマゾの悪癖からぬけることができず、三十台もなかばをすぎるまで独身を通してきた私が年甲斐もなく一目で惚れこんでしまったのだ。

バアではかなり顔だった。なじみの春江を相手に飲んでいると急にガタガツと音がして、外人と日本の女がもつれ合うようにとびこんできた。女の方が明子だった。五尺六寸はあるだろう、二重瞼の眼が勝気そうで口もとに強情な線があった。ストッキングをつけていないふくらはぎがまぶしかった。

「どういうふう、あの子」お茶をひいていた女の子の声が聞えた。「毎晩外出してるじゃない？」



明子のことをいっているのだ。大体蔭口をきくのが男にもてない方で、きかれる方がもてると相場はきまっている。

外人が出ていったので明子を呼んでくれるように頼んだ。春江にいわれて明子は私をみた。

「いやよ、あんなくたびれたの。あたし中年の日本人はきらい」

私は上げ潮のようにみちてくる陶醉とともに感じた、この小生意気な女の子こそ理想のドミナになるだろうと。

実際明子は外人にだかれていることが多かった。日本人のボックスにいても外人がはいってくるとそっけなく席を移した。私は明子に愛されようという野心は持たなかった。ただ行きがけの駄賃に私から金を捲きあげてほしかった。それだけで私は十分堪能することができる。

私に財産があるとわかると明子はやや興味を持ったようにみえた。

「ふウン、そんな金持なのにあんた奥さんないの?」
「俺は変態だから結婚できないんだ」

私はいつかすがりつくような眼になっていたにちがいない。

「どう変態?」

私がクニリングスをもちかけたのはこのときだった。明子は身をくねらせて笑いだしカウンターにむかって云った。

「このひと、舐めさせてくれだって」

女給やバーテンは瞬間ギョツとしてみつめていたが冗談だと思ったのだろう、やがてクスクス笑いだした。私は顔が火のように熱くなるのを感じ、同時にマゾの歓びに脊筋を貫かれて明子の肩に唇を押しつけた。その肩は笑いのためにまだ揺れていた。

2

明子は男に肌をさわられるのがきらいだった。短いスカートから覗いた膝小僧にさわろうとすると、

「落着いてもっと飲みなさいよ」などといった側にある雑誌やコートで膝小僧をかくしてしまう。

私は彼女の耳に口をよせ小声で打診してみた。

「いくらだせばさわらせてくれる！」

明子は横眼でチラッと私をみたがすぐに眼をふせていった。

「そんなにさわりたいきゃ、さわらしたげるけど……」

そしてちょっとバーテンの方をみた。このバアではバーテンが女給の監視役をかねている。私は彼女の自尊心にこびるようにいった。

「君は神様なんだ。神様は信者からお賽銭とるだろう？ 俺はほんとは君に搾られれば満足なんだよ」

彼女は瀬ぶみするように私をみつめた。

「ほんと？」

私は手早く千円札を握らせた。

「スカートから下だけよ」

彼女は長い脚を突きだし膝小僧やふくらはぎを私の掌いっぱい満喫させてくれた。

それ以来明子は私から金を捲きあげる方法を覚えた。私が値段をきめた。スカートに手をいれたら二千元、パンティにさわったら三千円。そして彼女の心がそれに順応して行くのを見て楽しんだ。

ある晩のこと、パンティの上から臀の感触を楽しみ太腿のスベスベした皮膚を味わった。そつと三千円握らせると明子は顔をふせたまま突返してよこした。

「スカートに手入れたしパンティもさわったでしょ、合計五千元じゃない」

私はこの自分勝手な計算にあきれ

るよりもたまらなく明子が可愛くなり、要求通り五千元渡した。

「ほんとにそうだった、君は数学ができるなア」

「おだてないでよ」

明子はちょっと得意そうにいい、気前のいいところをみせた。何を思ったのかヒョイトスカートをまくるとはりきった太腿をさしていったのである。

「ここにキッスしてもいいわ」

私は接吻の値段もきめた。膝から下は三千円、腿に接吻するのは五千元。こうして明子に金をみつぐことに私は云い知れぬ歓びを感じていたが、ときとして現金の持ち合わせのすくないことがあり、そんな晩の明子もおもしろかった。

どうやって金を吐きださせようと思ったの



であろう、明子は膝を私の脚に割りこませ鼻歌をうたいながら刺激してくる。あるいはまた長い脚を揃えて私の腿の上へ乗せてくる。彼女の脚の重みが私を刺激する。私は十分に堪能しきったところになって囁くのである。

「実は金の持ち合わせがないんだよ」

このときの明子ほどしらしいものはまたとないだろう。眉をよせ凄じい眼つきでみつめる。力いっぱいスカートをおろしてきれいな膝小僧までかくしてしまう。しかしほかの女給の手前新しい客でもはいつてこないかぎりボックスをはなれることはむずかしい。そこで私はできるだけいやらしい調子でもちかけるのである。ただでさわらせてくれ、ただでキッスさせてくれ、等々。

明子がそれにたいして示す軽侮、嫌悪の表情にはマゾを感じさせるに足る凄まじさがあった。何をいつても返事してくれない。やけになってグイグイ飲む、頼みもしないオードブルを運んでくる。そして私の方は見むきもしてくれないのであった。

酔いも手伝って大変下卑たことを思いついた。すばやくスカートに手を突っこみ、さわったのである。ジャリッとした繊維の感触がたしかにあった。

「なんてことするのよ！」

明子は私を突き

のけて立ちあがり眼をキラキラさせて睨んだ。私がニヤニヤして彼女にふれた指先を嗅いだ途端平手打ちが飛んできた。私は呆然と頬を撫でた。明子はカウンターで荒い息をついていた。

「だってさ、いやらしいったらないのよ、あいつ」

明子は暴力が金になることを知った。

「俺を撲ったときの君、ズベ公みたいで素敵だったなア」

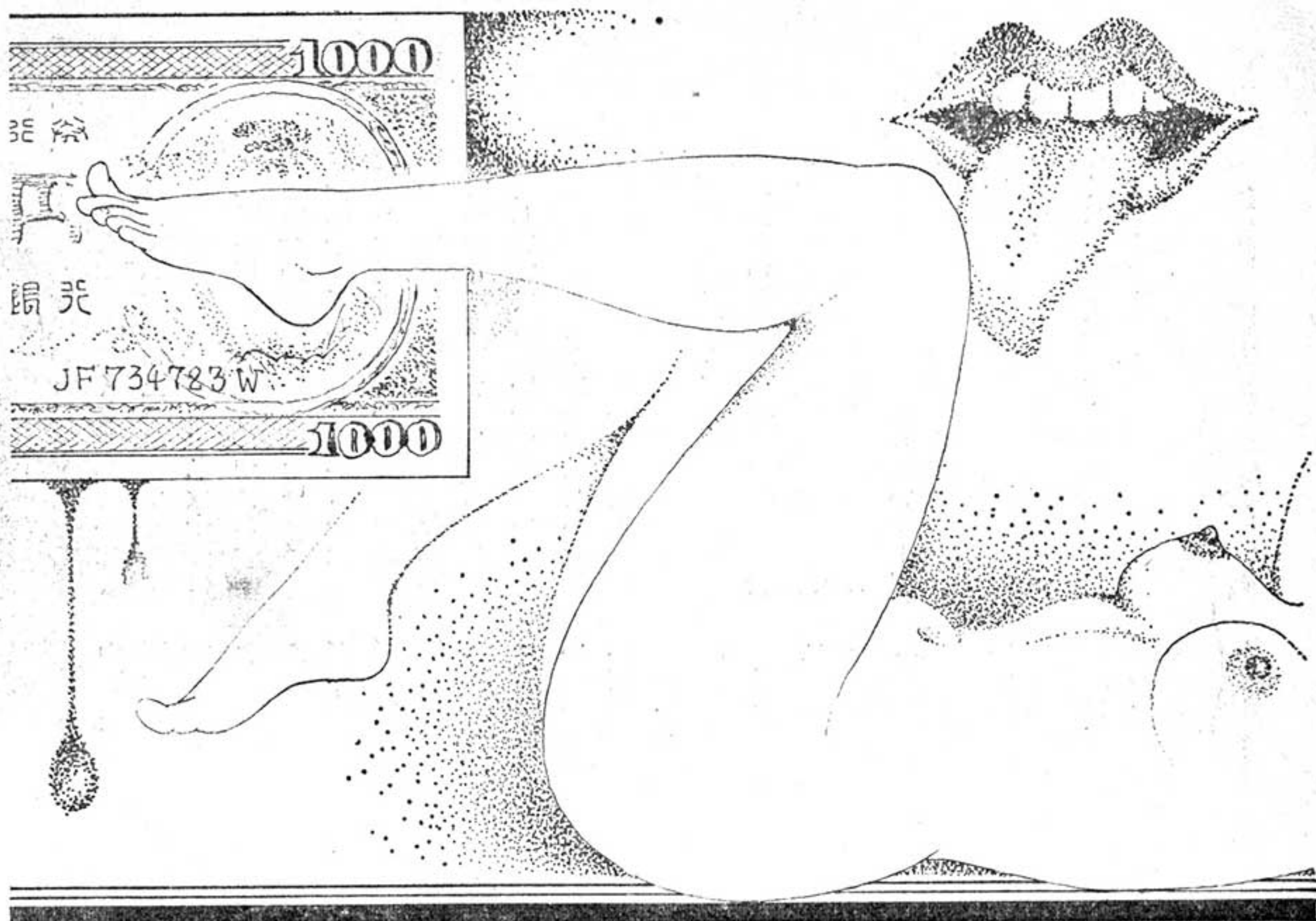
「ふん、じゃまた撲ったげようか」

「頼む」

私は白い手に干



晃



円札をのせた。

「あんたとつきあ
ってるにあたしま
で変になっちゃ
う」

平手打ちをくれ
たあとで彼女はい
った。

3

あるとき彼女に
きいてみた。街で
外人が理由もなく
私に乱暴したとす
る。明子が偶然通
りかかったとして
私を助けてくれる
だろうか？ 明子
は薄笑いを浮かべ
て答えた。

「助けないわ、笑
って見てる」

「だって半殺しの
めに合ってるんだ
ぜ。悪いこともし
ないのに……君は

外人と仲がいいんだから勘忍してやれって頼
んでくれてもいいだろう」

「もつといじめてやれっていうわ、あんたな
んかい気味なもの」

私は胸がキュッとしめつけられ、残酷なな
めらかな腿を撫でながら囁いた。

「そんなに俺がきらいか？」

「きらい、気味が悪いわ」

「そういう……ひどいことをいってくれれば
お金をあげるよ」

私はことあるごとにクニリングスを哀願し
続けた。自分がいかに練達の技術を持ってい
るかをくりかえし説得した。明子はすくな
らず興味を示したけれども、結局、
「そのうちに舐めさせたげるわ」とそらされ
るのが常であった。

パンティをねだったとき、明子はあまり驚
かなかった。

「男ってすぐパンティほしがるのね」

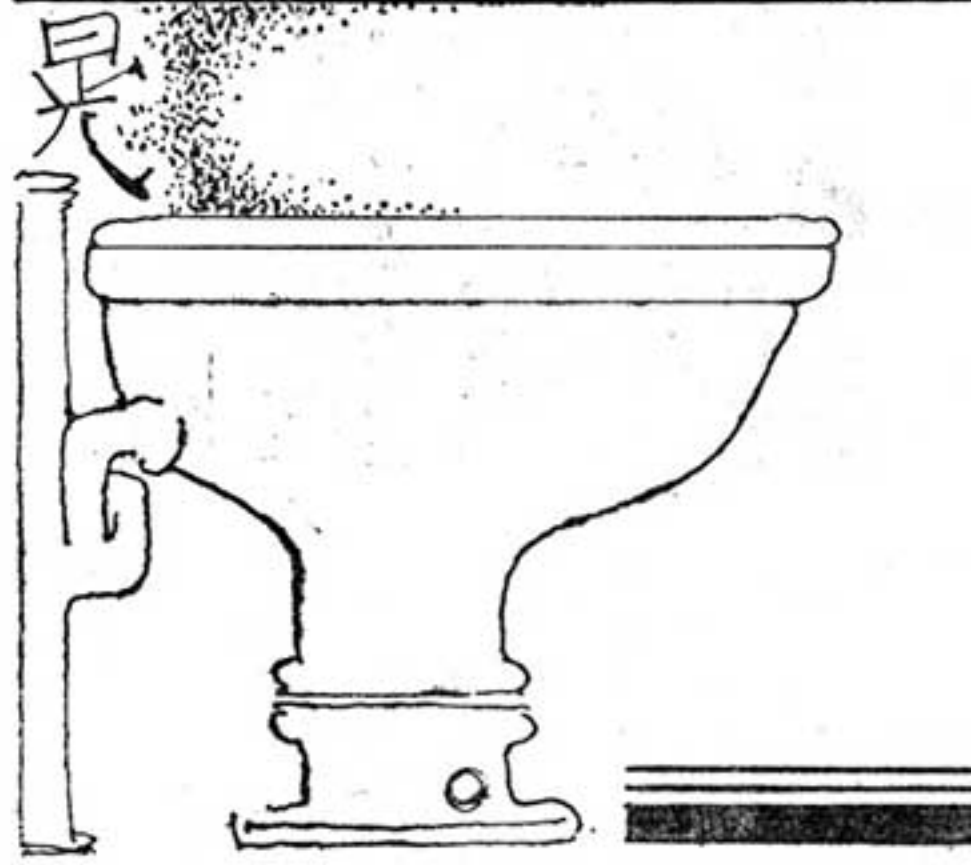
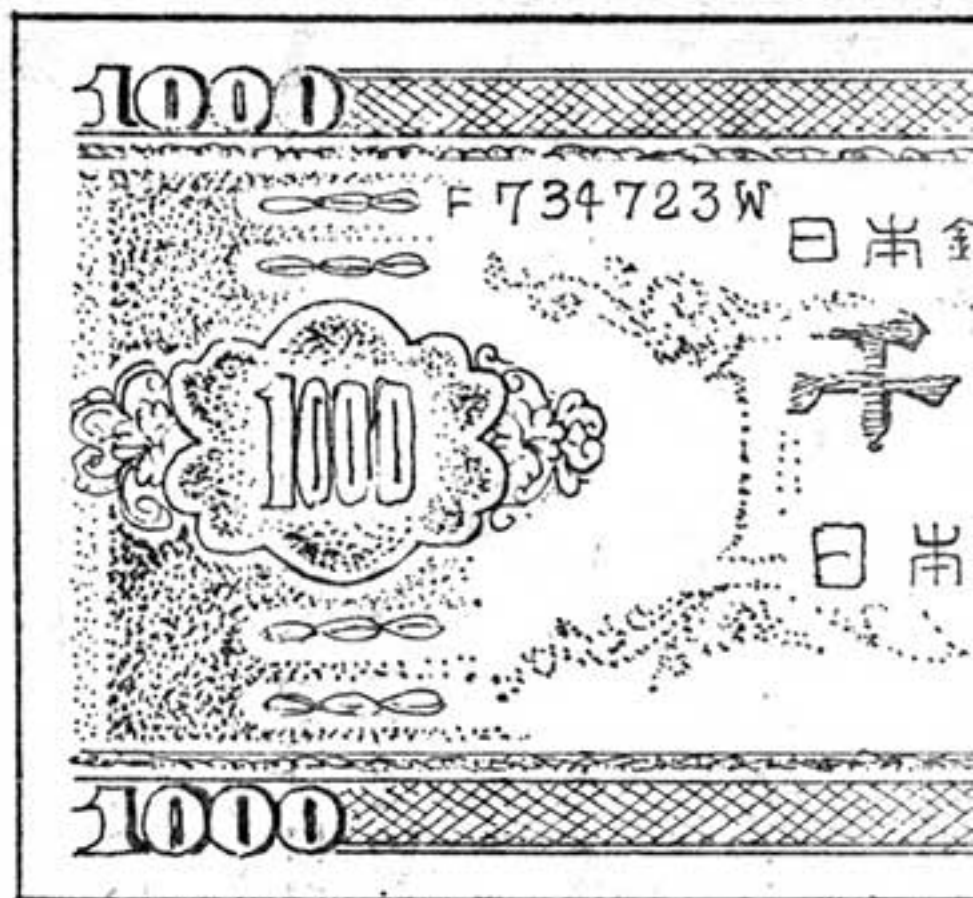
そして前にも二、三人ほしがった客がある
といった。

「それで、くれてやったのか！」

「やりやしないわよ、そしたら脱脂綿でもい
いからくれだって……あんたもその口でしょ」

明子は身体をのけぞらせて笑った。

私はしつこくねだり続け、最後に今度持



その手に五千円札を握らせ、家に帰ってその通りを実行した。

4.

明子がいらない

で春江を相手に飲んでいた晩、私は

久しぶりで、本来の客に戻ったような気がした。

「何かプレゼントしたげる、あなたがいちばん好きなもの」春江は顔を覗きこんでいった。「パンティなんか、どう？」

私は突嗟に明子がしゃべったにちがいないと思ったがだまっていた。明子が私を笑いのにしている事実を指摘していいものだろうか？　そうすれば明子は警戒心をいだくにきまっている。私を軽蔑しきっている彼女の心がいささかでも動揺することになる。私は春江にいった。

「俺は女のパンティには眼がないんだ、実は明子さんからも貰ったんだよ」

春江は意味ありげに笑った。

まもなく明子が帰ってきた。チラリと私の方をみるとカウンターの前へ行って水を飲ん

だ。長身が遠くからみると一層美しくみえた。ボンヤリみとれている私にはニコリともせず春江にだけ眼で挨拶した。

「明ちゃん、あんた、パンティあげたんだって？」

明子がたじろぐのをみて、春江はつけたした。

「このひとにきいたのよ、ほんと？」

私は申しわけないというふうになだれてみせた。おそらく明子と春江はニヤニヤしてめくばせしあったにちがいない。明子は笑いを抑えるのに苦労していた。

「あんたって何でもしゃべっちゃうのね、いやらしい」

「悪かったよ、勘忍してくれ」

彼女が必死になって笑いをこらえるのをみると私もなぜか笑いの発作におそわれた。思わずニヤニヤした拍子に明子の平手が頬を打った。見あげると明子はもう笑っていない。春江が心配して囁いた。

「いいの？　ぶったりして」

「いいのよ、このひとはそれが好きなんだから」

明子は長い脚をデンと私の腿にのせた。春江がみていることが私を熱くさせた。ふるえる手で明子の脚からナイロンをはがした。私

ってきてやると約束させた。いまはいているのをくれと頼んでもそれだけはいくらもなかった。よごれている方がいいんだと力説しても気持わるそうに首をふるだけだった。

明子は約束のパンティをオーバーのポケットにに入れて持ってきた。テーブルの下でみると黄色いナイロン製でレースの縁どりがしてあった。

「これ、はいたことあるんだろうな」

「二、三回。でも洗ってあるからきれいよ」

「洗わないでくれるとよかったのに」

「そのパンティで何するの？」

「匂いを嗅いだり、舐めたり、頭にかぶったりして、それからいちばんはすかしいことをする」

「いちばんはすかしいこと？」

彼女はキョトンとして私をみつめた。私は

が彼女の魅力に弱ければ弱いほど同僚の春江に鼻が高いにちがいないのだ。そう思った私はそのまま身をすべらせて明子の内腿に唇をつけた。

「こんなんだからね、何だって云いなりなのよ」

明子が笑った。私はウツ、ウツ、と咽喉を鳴らしながら次第にスカートの奥へ額を押しこんで行った。

いきなり明子が耳をつかんでひきだした。

「今度から余計なおしゃべりしないか」

「はい……」

私は彼女の前に両手をついて頭をさげた。

5

それ以来明子はお茶をひいている女給を呼んで私に奢らせるようになった。

「こちらいつもお静かね」

「ええ、明ちゃんは幸福よ、こんないいお客さんがついてるもの」

女たちは私に関心はなかった。口でこそ何とかいいながら冷めたい眼で見ている。そのくせ明子には笑顔をみせ、あからさまに機嫌をとっていた。私がだまっていると明子はニヤニヤして覗きこんだ。

「はずかしがることないわよ。みんなあんな

が変態だってこと知ってるんだから」

私はドキンとして耳のつけ根まで赤くなった。明子はスカートをまくり男のように股をひらいてすわった。

「ホラ、キッスさせてやる！」

女給たちの視線を感じながら私は明子の前に跪いた。忍び笑いが聞えた。

「明ちゃんの脚がそんなに美味しいのかねえ」一人が素ッ頓狂な声をだした。「あたしの脚じゃ駄目かしら」

明子は太腿をデンと私の肩に休ませ上から私の額をみおろした。

「君ちゃんのにキッスしてごらん」

君枝はヒョイと和服の裾をまくって脂ののったふとい腿をむき私の方へ突きだしてよこした。

「キャッ、くすぐったい！」

君枝の内腿のあたりには若い女にはない淫靡な匂いが充満していた。

「どう、おいしかった？」

「明子さんの方が味がいい」女給たちがどッと笑い崩れた。私は思いきつていった。

「俺、明子さんのなら尿でも飲むぜ」

「わア、やれんなア！」

「ほんとに飲む？」

君枝が顔いっぱい好奇の色を浮かべて訊いた。明子は冷めたい眼でグラスをかたむけた。

「ほんとさ、賭けてもいい」

「何を賭けるの？」

「飲まなかったらあんたに一万円やる。飲んだら明子さんに五万円」

「わア、率のいい賭けだ！」

女給たちがはやしたてると明子はツイと立ちあがった。

「じゃ、いらっしやい」

驚く私を尻目に明子はトイレに消えた。女たちは度胆を抜かれてだまっていた。私は明子の後を追った。

明子は無表情な顔で立っていた。

「紙、持ってきた？」

「紙はないけどハンカチがある」

「きれい？」

私は一度も使っていない麻のハンカチをひろげてみせた。私が後手にドアを閉めると明子は脚をひらいて便器をまたぎ立ったままスカートをまくった。私はそのうしろに跪きパンティをすりあげた。

「馬鹿ね、そんなに下までおろしたら濡れるじゃないの」

私は女性のパンティを脱ぐ手伝いは何度も

■モデルさんご紹介



本号のグラビア「ゆがむ豊胸」「片隅にうごめく」に大活躍のモデル、榛名リエさんのプロフィールをご紹介します。

年令の若さ、容貌の愛らしさ、からだのりっぱさは、グラビア写真をごらんになれば、一目りょう然。

彼女は、東京S芸能社専属の一流踊り子さんです。さいきんは映画にも進出されて、大映の「釈迦」日活の「男と男の生きる街」などに出演されています。

おとなしくて、上品なお嬢さんで、ときによつては非常に情熱的な性格の一端をのぞかせて、男性の心を、グッとよろめかせる、魅力百パーセントの現代女性です。（豊）

（写真は榛名リエさん）

したが排尿するために手伝うのははじめてだった。慌てて膝のところまでたくしあげると明子はグイとしゃがみこんだ。

尿がタイルにあたってはじける音がし透明だった水がみるみる金色に染った。

「拭いて！」

明子はしゃがんだまま命じた。次の瞬間私はいきなり明子の下に首を突っこんだ。明子の眼がチラとみえた途端に思いがけないことが起った。重い臀が頬舐りっぱいにのしかかってきたのだ。

横顔をタイルに押しつけられまだ温かみのある尿に浸かりながら私は明子の嘲笑う声を聞いた。

「いい気持？」

次に行ったとき明子はもうそのバアにいなかった。

女性をつかむ道はいろいろある。私は私なりに明子の虚栄に媚び驕慢におもねろうとした。明子がいくら私を軽蔑し紙屑同然に思ったところで彼女は私によつてはじめてマゾの世界を覗いたのだ。

明子もまたその怖しさを知ったのではあるまいか。

私はそう思うと満足し初春の風に吹かれてそのバアを去った。

真夜中の プロダクション

邪悪なカメラが回る時、囚われた娘の肌が戦慄する！悪夢のような照明が屈辱の肢体を隈なくさらけ出す！

文・海老沢七郎 絵・羽田真樹

1 拐われた娘

どうしてこんな目に遇わされるのか、ナンシイにはまったくわけがわからなかった。

グラマーとして知られる映画女優の誰彼にも決して劣らない、と思っっている。もちろん、この薄暗い殺風景な密室の中では、最も美しいものであることは間違いない。

なぜ誘拐されたのか、ここがどこなのか、これから何をされるのか——少しもわからない。人違いをされているのではないか、とも考えた。とにかく、生まれてはじめての災難が突然に振りかかってきたのだ。

両手を吊り上げられてから、ずいぶん時間がたっている。もがくことは無駄だった。苦痛を大きくするだけだった。手首を縛った縄は、どう努力しても解けないことがわかっていった。

ただ、じっと耐えているよりほかに方法はない。うな垂れると、白く豊かな自分の乳房が眼のすぐ下にあった。

ナンシイは、自分の乳房に自信があった。

——。

恐怖と苦痛の中に身を置きながらも、自分の曲線の美しさに見入っているふしぎさに気がついて、ナンシイは狼狽した。

その時、厚い扉があいて三人の男たちが入ってきた。

「……どうだ。なかなかいい娘だろう？」

得意そうにいったのは、ナンシイをさらった若い男だった。

「うむ、これなら気に入るかも知れないな」と肥満した中年男が答えた。ギャングの親分のような悪党面の男である。

いま一人は、無言のまま眼鏡の奥から鋭い視線を向けており、これはやや知的な相貌を持っていた。

「わたしを、どうしようというの！ どうしてこんなひどいことをするの！」

ナンシイは男たちを気丈に睨んだ。

「ほう、まだ元気だな」

「もう少し吊っておこうか」

「吊り方が悪かったかな？ もっと嚴重に縛って吊り上げれば、素直に話し合えるようになるかも知れない」

勝手なことをいう連中だった。脅かしかも知れないが、いった通りのことを本当にするのかも知れなかった。

「あなたたちは、いったい何なの！」

「やむを得ず強引な手段を使って君に来てもらったが……決して悪いようにはしないつもりだ。君をヒロインにして映画を撮るだけだからね。むろん、出演料はお払いするよ」

「映画ですって?!」

「そう。君は女優になりたくてハリウッドまで来たのだろう。俳優紹介所ではあまりいい返事はしなかったらしいが、俺たちは君を買っているんだ。そこで、主演女優として抜擢することに決めた……」

「もっとも、ここは君があこがれたハリウッドのスタジオではないし、君の映画は一般には公開されないのだが……その点はあきらめてもらう」

ナンシイは、ハリウッドの街の路上から誘拐されたのである。欺かれたと気づいたのは男の車に乗ってからだ。いぶ後であり、逃がれようとはしたのだが薬を嗅がされて意識を失ってしまったのだ。

「ハリウッドでは、ときどき奇蹟が起きる。昨日まで田舎娘だった女が、今日はスターになっているような話もある。そういうおもしろい町では、君のような娘も拾える……」

「君は、俺たちのスターなんだ。君の美しさをフィルムにおさめるのが俺たちの仕事さ」

喋りながら、男たちはナンシイの肢体をなめるように眺め回すのだった。

「いやよ。あなたたちの映画になんか出る気はないわ! どうせ、おかしい映画を作るんでしょう!」

「いやでも出てもらう。俺たちは予定通りに撮影する。予定というのは、君を屈服させることだ。いろいろな道具を使ってね……」

男たちはナンシイの縄を解いた。

しかし、それは解放のためではなかった。



縄に代ってナンシイの両手には冷たい鉄の手枷が篋められたのである。

2 カメラ・テスト

大きな邸であることはわかったが、窓という窓には全部カーテンが下がっており、外の景色を見ることはできなかった。

ただ、街の中ではないようだという見当はついた。車の通る音さえ聞こえないのだから、よほど人里はなれた所に建つ家らしい。

どこかの山荘のようなところかも知れない——とナンシイは考えた。

最初の食事が与えられた時、ナンシイはひどい屈辱を味わった。後ろ手錠にされたナンシイの前に、皿に盛った食事が置かれたのである。

「遠慮はいらない。早く食べなよ」

男たちはニヤニヤ笑って眺めていた。

ナンシイは空腹だったから、食事を拒否するつもりはなかった。

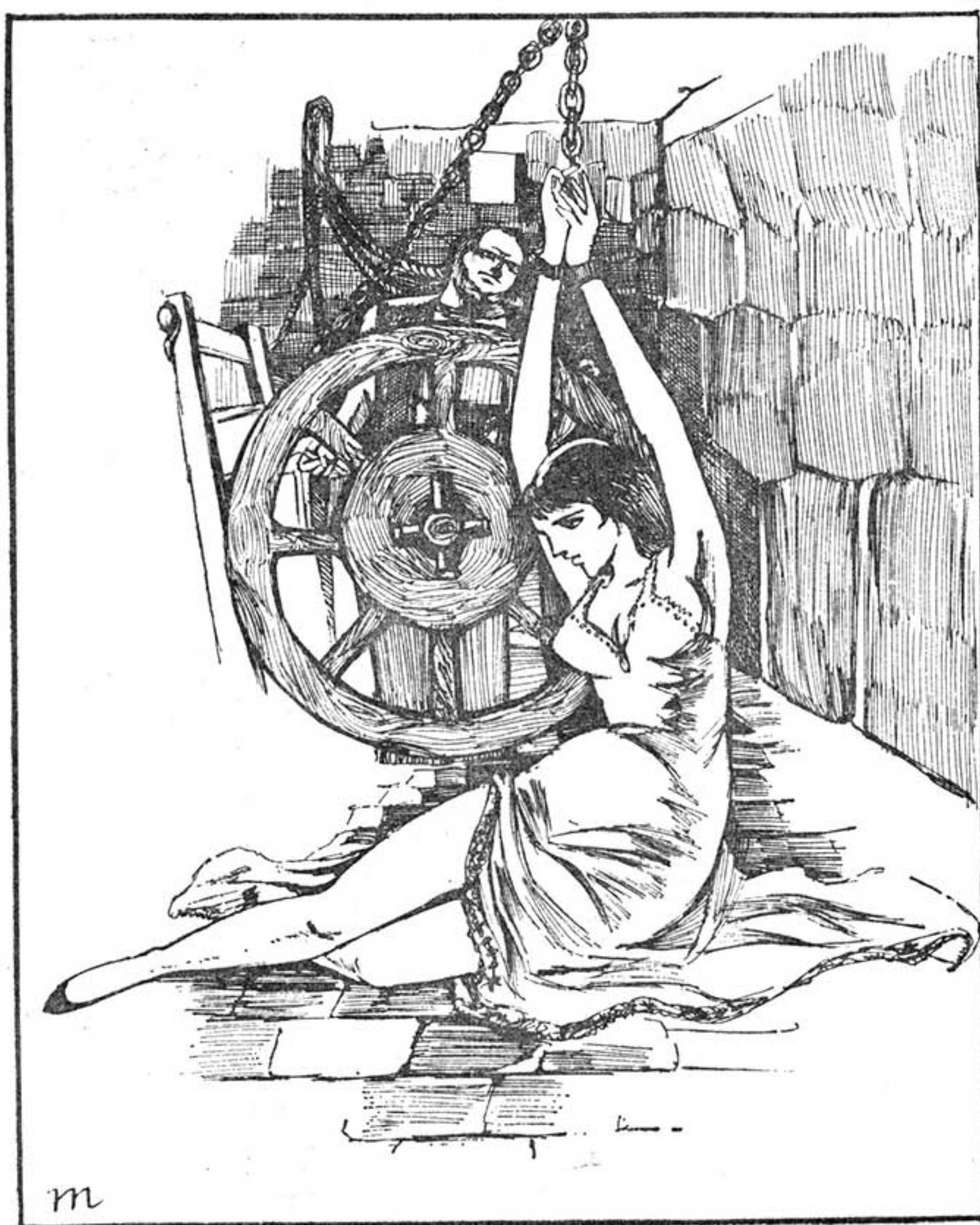
「食べるから、手錠をはずして！」

「だめだ。そのまま、口だけで食うんだ」

「そんなこと、できないわ」

「素直にした方がいいな。この家には上等な鞭があるんでね……」

最初の皮鞭が背中へ飛んだ時、ナンシイの



心は震え上がってしまった。反抗する心を容赦なく削りとって行くような、恐ろしい痛さだった。

いわれたとおりにするほかはない。ナンシイは床の上の皿へ顔を近づけ、みじめな格好

で食事をした。

食べる間も、何度か鞭が襲ってきた。

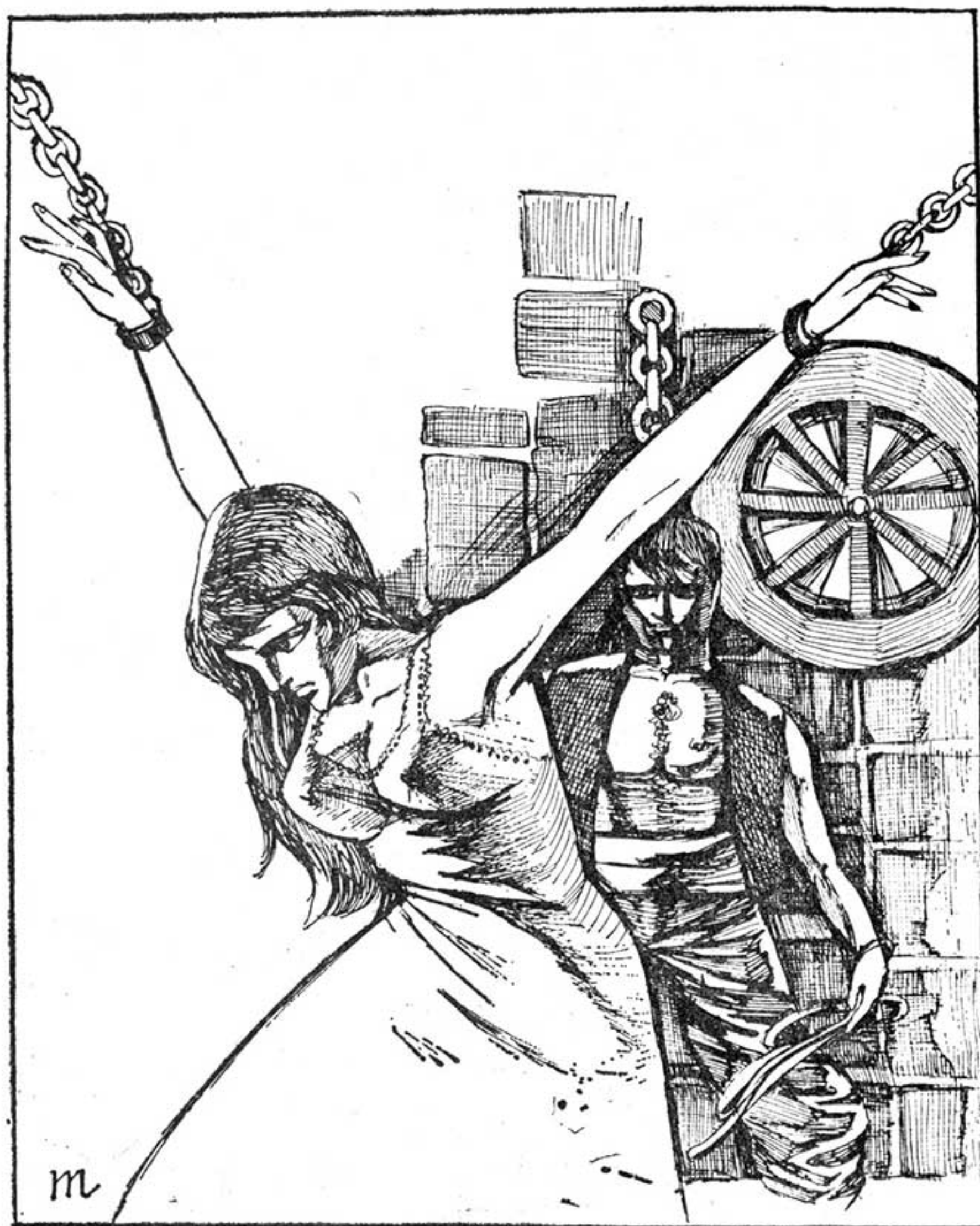
しかも、屈辱はそれだけではなかった。男たちはそういう光景を映画に撮ったのである。

それはつまり、カメラ・テストだったのだ。
テストの結果は、男たちにとっては予期した通りの上首尾であり、ナンシイにとっては不運だった。

ナンシイは誰かに気に入られたのである。

男たちの会話から判断して、ナンシイを気に入ったのは、この邸の主であるらしかった。「老人」とか「車椅子」などという言葉がときどき出てきた――。

(体の不自由な老人が、この男たちを使って



わたしの映画を撮らせるのだわ……) と思った。

3 クランク・イン

「いよいよ、今日から撮影を開始する。ナンシイ・サーストン主演の映画だ。あまりスティーらしい名前ではないが、名前はどうでもいい。俺たちの使うフィルムは、残念ながらシネスコや七〇ミリではないし、カラーでもないが、しかし、迫真力においては大会社の作品に劣らないものを撮るつもりだ。撮影開始の前に、スタッフ一同が揃ったから紹介しておく。まず、助演者のエドワード・G・ロビンソン……」

ひどく覚えやすい名前が、次々と紹介された。

肥満した体の、上下を押し潰したような顔の中年男がG・ロビンソンで、あごの尖ったのがカーク・ダグラスだった。

腫れぼったい顔の男はマローン・ブランドで、小柄なのがオーディ・マーフィだという。一番若いやさ男はジェームス・ディーンと名乗った。

「そして、監督のアルフレッド・ヒッチコックというのが、この俺だ。一流ぞろいで君も嬉しいだろう。俺たち六人は役者もやれば照

明係もやる。都合次第でカメラマンにもなり録音係りにもなるだろうが、君には女優以外のことはさせない。だから演技に専念し、大いに熱演してもらいたい」

ヒッチコックにしては年も若いし肥ってもない眼鏡の男が、そう宣言した。

「さあ、みんな、スタジオへ行こう」

ナンシイはヒッチコックに鎖を引かれて立ち上がった。

拐われて以来、ナンシイの両手はいつも何かで拘束されており、自由が与えられることは一度もなかった。

ロープ、手錠、鎖、古風な手枷——そんなものがこの家にはたくさんあるようだった。コレクションとして備えられていたのかもしれない。

今日は、鎖のついた手枷が締められていた。その鎖を握ってナンシイを引いて行くヒッチコックは、この男たちの中ではボスであるのに違いない。

長い廊下の奥にスタジオがあった。スタジオといってもただの部屋だが、撮影のための準備はすでにできていた。

暖炉のそばに不気味な拷問道具が据えつけられており、カメラもライトも用意されていた。

ナンシイの手枷は天井の滑車から垂れ下がっている鎖につなが合わされた。

「な、なにをするの！」

「題して『姫君と海賊』だ。ナンシイは海賊の本拠に捕われたお姫様という役だ。セリフは即興で行く。責める男はエディとマールン・ブランドの二人にしよう。シミイはテープを回してくれ」

「OK、ヒッチ」

ヒッチの指示に従って二人の男は海賊の衣裳に着かえ、シミイがテーブルコーダーを点検した。

4 姫君と海賊

万事がお手軽なプロダクションであるから準備はすぐに完了する。

エディ・ロビンソンは鎖を吊り上げる車の前に立ち、冷酷な表情でナンシイを見おろした。

「リハーサルはなしだ。ぶっつけ本番で行く。用意はいいかね？」

まかせておけ、というようにエディが片眼をつぶってみせた。

カメラを受け持ったのはカークである。

「ハイ、スタート！」

掛け声と一緒に、ヒッチは腕を大きく振った。

て合図をした。

「……やい、女！ よくもだましたな。だが、俺たちはそんなに甘くはねえ。さあ、白状しろ！」

決して巧くはないが、エディのエロキューションには一種の気味悪さがあって意外に個性的だ。

「どこへ隠した？ 言わねえか！」

「何をです?！」

ナンシイは、ついそんなことをいってしまった。

「キャプテン・キッドの宝を埋めた無人島の地図だ。知らないとはいわせねえぞ！」

「そんなもの……」

わたしが知っているはずはない——と言いかけて、ナンシイは口をつぐんだ。そして、ただ首を振った。

うっかり喋れば男たちを喜ばせるだけなのだ。カメラの回っている音がハッキリ聞こえ、シミイは録音機にかじりついている。まぎれもなく本番中なのである。

「言えねえのなら、言えるようにしてやろう。お前の体の重さをわからせてやるぜ……」

エディは憎々しげに頷いて、車を回し始めた。厭な音が起こって、ナンシイの両手首が上へ引っ張られた。

「痛い！」

「痛けりや白状しちまいな。それとも、車の回るのが好きかね？」

「胸が伸び、続いて腰が宙に浮き、次には足が悶え始める——」。

「ああッ、く、苦しい！ あなたたちは何というひどいことをするんです！」

エディにとっては芝居だが、ナンシイには苦悶の実況だ。悲鳴と呪詛は自然に口をついて出た。

ついに足が床をはなれる——。

「ひいッ、……ゆ、許して！ やめて！」

もがくたびに太腿があらわとなって宙に躍り、男たちの視線を集めた。

手枷の上で、白く細い十本の指が、ヒクヒクと震えていた——。

「カット！ OKだ。エディは好調だな」

「何だ、もう終りかい？」

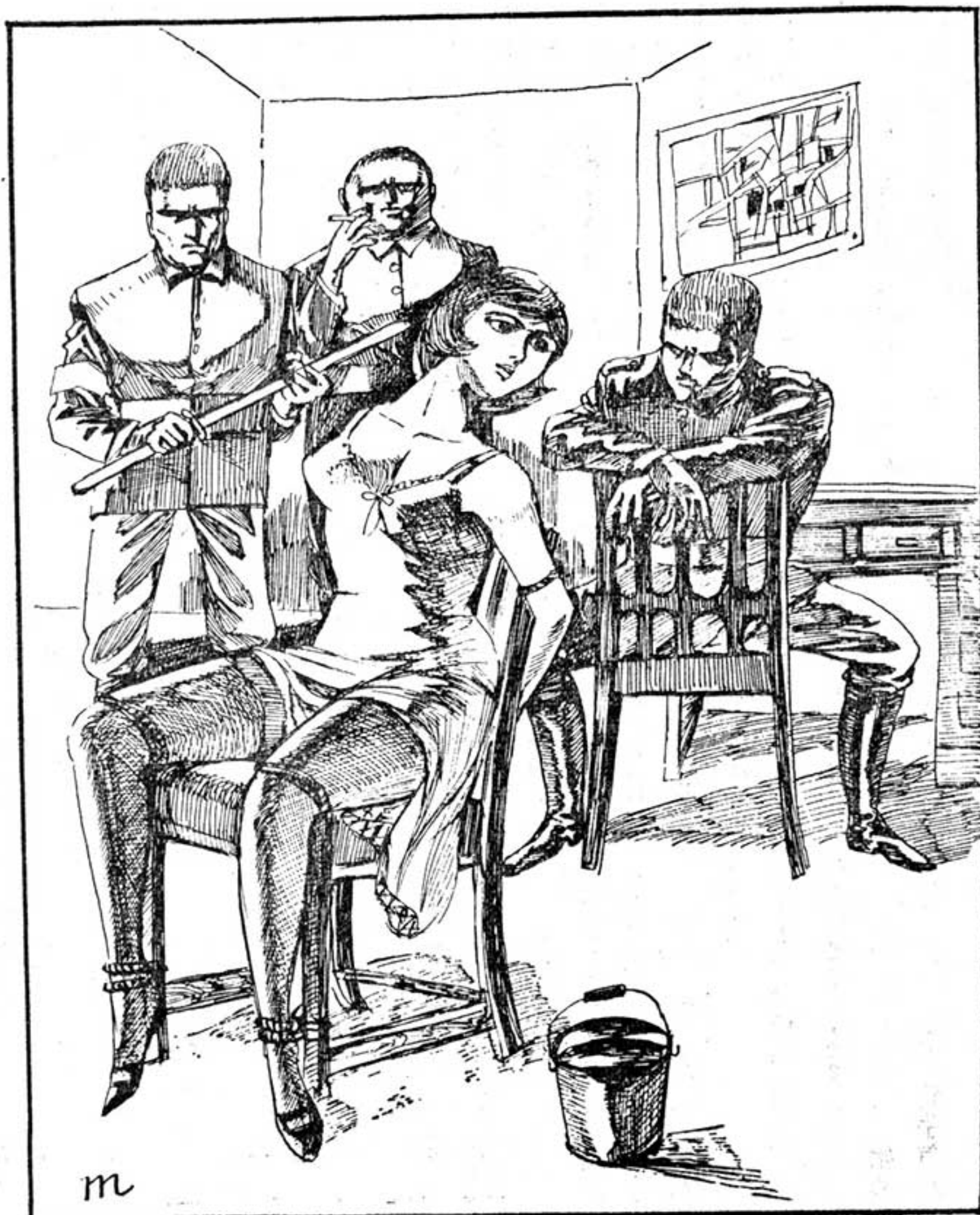
ほめられたエディは、しかし、不服そうに聞き返した。

「ナンシイの手首に傷をつけたくないんでね。さあ、早く降ろしてやれよ」

ヒッチは、ナンシイの十九歳の白い脚に鋭い視線を注いでいた——。

午後の撮影は、鞭打ちの場面だった。

両手をひらいて吊ったナンシイの背中に、



マーロン・ブランドの使う皮鞭が何度も高鳴った。

しかし、これも、皮膚が破れないうちにヒッチがOKを出した。

監督とは、この場合、犠牲者の肌を台なし

にしないためのブレーキの役目を果たす者のようだった。

5 捕われた女スパイ

翌日——。

ナンシイは再びスタジオへ引っ張り出された。拷問部屋に引き立てられて行く女囚のよう、ナンシイの顔色は恐怖に蒼ざめていた。

「ずいぶんと、強行撮影なんだな……」

ジミイが少し心配したような声でいったが、ヒッチは意に介さず、縄で縛って連行した。

「リアルな効果を出すためだ。ナンシイは疲れている。おびえてもいるだろう。その方が自然でいい」

とうそぶいて、ナンシイの背を小突いた。

ナンシイは足がすくんだようになり、幾度も立ちどまったが、しょせんは無駄だった。

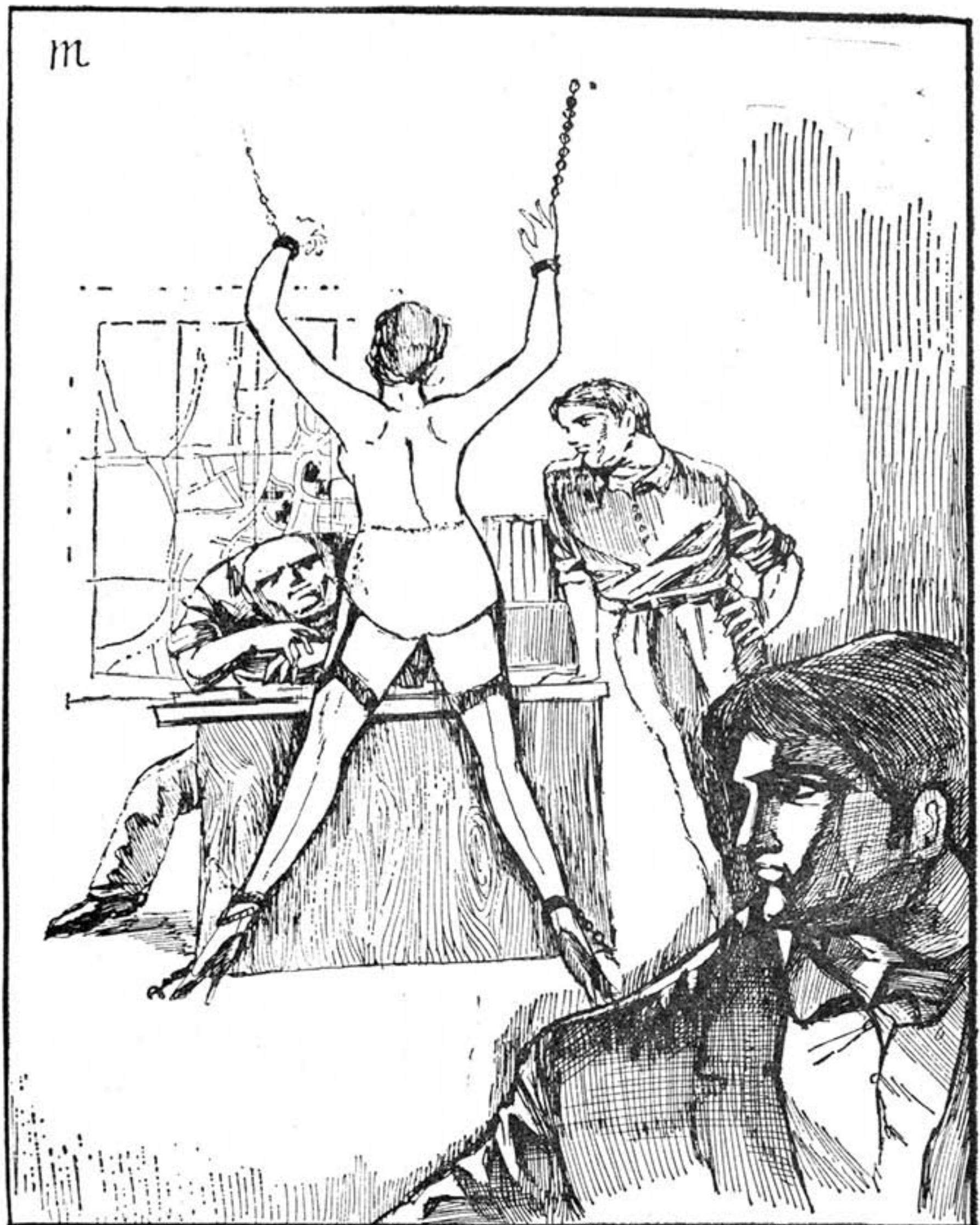
ヒッチに縄尻で脚や腰を鋭く叩かれると、すぐに服従してしまう。

「覚えていらっしゃい。きっと復讐してやるわ！ 警察が仇をとってくれるわ……」

負けぬ気でののしるその声も、語尾が思わず震えてしまう。

ふしぎなことに、拐われてから今日までの間、男たちは誰もナンシイには手を出さなかった。

夜の間も、ナンシイは手枷足枷をかけられている。その鍵はヒッチが持っているのだ。ヒッチは、男たちに対して、ナンシイをス



タジオ以外の場所で辱かしめることを禁じているのかもしれない。

「今日の撮影は、第二次世界大戦秘話、ナチの将校とフランスの女スパイの話だ。配役は、女スパイにナンシイ。ナチの将校にエディと

カークとマーロンの三人だ。いいね」

奇妙な映画である。ストーリーイというものはないのだ。あるのは女が責められる場面だけである。つまり、ナンシイを責めさえすればそれでいいのであり、あとはキャプテン・

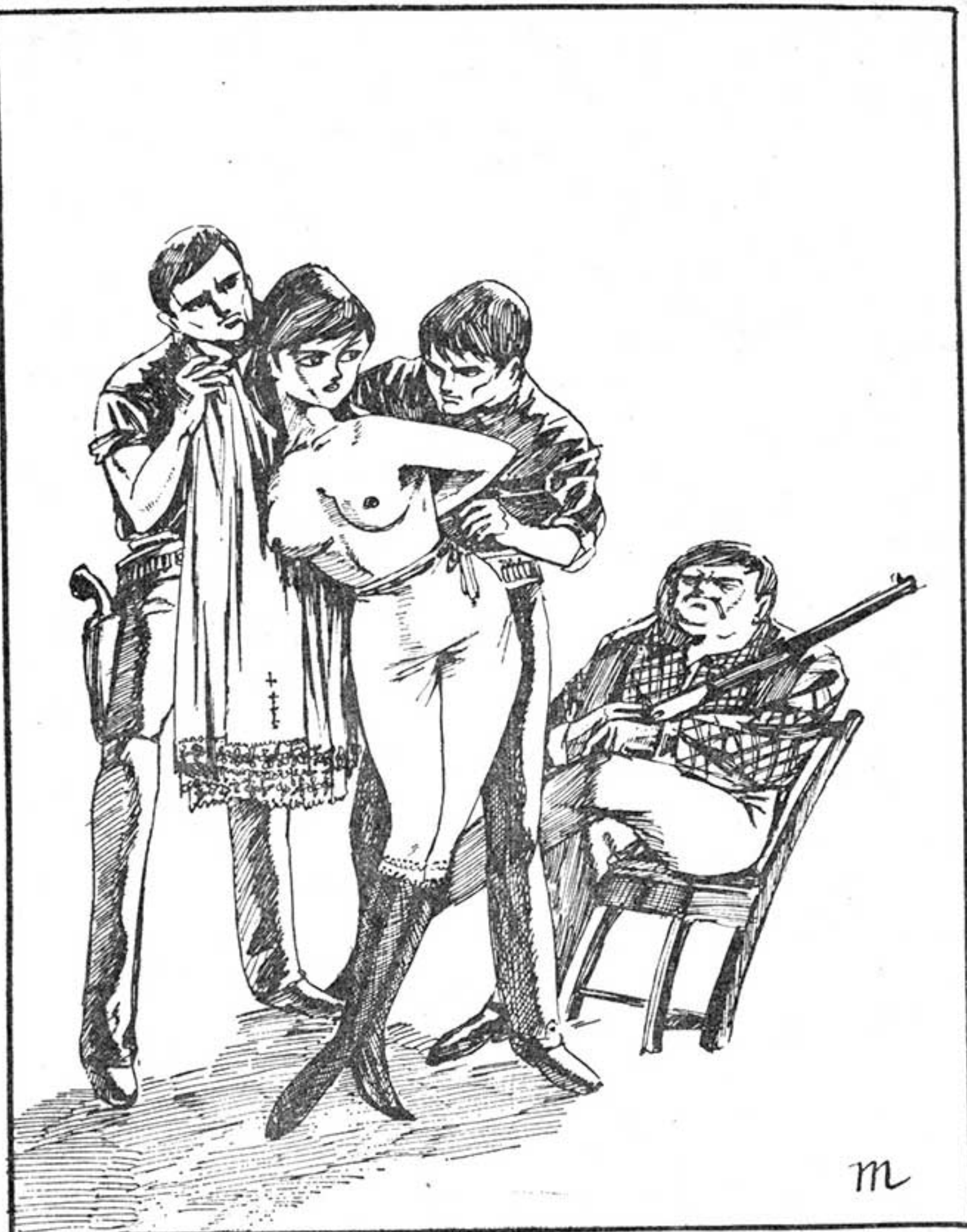
キッドであろうとゲー・ペー・ウーであろうとゲシユタポであろうと、そんなことは大して問題ではないらしい。

ナンシイは椅子へ後手に縛りつけられた。両足を開いて椅子の脚へ括りつけたのは、

演出者のヒッチ自身である。

「ナンシイ。もっと胸を張ってごらん。君は地下抵抗運動の女闘士なんだからね。捕えられても誇りを失ってはいけないのだ」

ナンシイは無言で、ヒッチを睨んだ。



「そう。そんな眼がいい……その調子だ」

ヒッチは人差し指でナンシイのあごを軽く押し上げた。

「用意……。スタート！」

カメラが回り始めた。

今日の責め手はカークであり、棒を手にして仁王立ちになっている。

「……いいか。一人のドイツ兵を殺したら百人のフランス人が殺されるのだ！ それを忘れるな！」

カークは、ちよつとしゃれたセリフを吐いてナンシイの胸へ棒を伸ばした。

「お前たちの本拠を自状しろ。同志の名前を全部いえ。いえば釈放してやる。いわなければ銃殺だ」

棒の先で突かれて、ナンシイの乳房が大きく揺れる。

「銃殺がいいか、それとも白状するか。どっちなんだ！」

調子づいてきたカークを冷やかすように、エディがくわえタバコでいった。

「まあ、そうあわてることはないぜ。若い者はせっかちでいけないな。この娘の体はなかなかいい眺めだぞ。われわれはフランス女の体を存分に堪能しようじゃないか。ユックリと、ジワジワと……楽しませてもらおう。そ

うするうちには、厭でも白状するさ。どうだ諸君？」

エディには、やはり年配相応の貫祿がある。セリフと現実の区別はほとんどなく、いやらしい口調にも表情にも実感がこもっていた。

「賛成だ。それは総統への忠誠にも通じることだからな」

とマールロンが重苦しい声で合槌を打った。

「まず、この下着は邪魔だな。取ってしまおう……」

マールロンの提案は、すぐに実行に移された。

「いやです！ そんなことは！」

ナンシイは必死に哀願したが、相手は大の男が三人だ。厭がれば厭がるほど男たちを喜ばせ、映画の出来をよくするだけだった。

裸にされて机の前に縛りなおされるまでのナンシイの悶えを、カメラは克明に捉らえ、

悲鳴も余すところなく録音された。

ナンシイは両手両足を鉄枷と鎖で拘束され、切なく呻いた。身をよじると、四本の鎖が音をたてた。

天井にも壁にも床にも、要所々に鎖が打ち込んであるのだ。この家の持ち主は一体どんな人間だろうか。

ナンシイの前には一度も姿を現わさない

が、財産家には違いない。そして、その財力をもっても充たされない何らかの事情があって、代りにナンシイが選ばれたのに相違あるまい。

（わたしは、フィルムを通して身をけがされて行くのだわ。一方的で間接的な、このおぞましいペッティングを思いついたのは、年寄りで卑劣で好色で嗜虐的な廃人に違いないわ……）

ナンシイの裸の乳房は、おぞましさに大きく波打った。それがまた男たちを喜ばせる。

何を考えても、何をしても、一挙手一投足のことでごとくが、ナンシイの意思を裏切る動きとなって表われるのだった。反抗も拒否も嫌悪も、憎悪も呪詛も痛罵も、すべて結局は男たちのいう「協力」にしかならなかった。

6 OK牧場の拷問

「今日は、目先きの変わったところで西部劇と行こう。題して、OK牧場の拷問、だ。配役はオーディとジミイとカークに、牧童や拳銃使いになってもらう。エディは牧場主だ。今日は私も出演する」

総出演で西部劇を撮ろうという日、ナンシイはある決意をしてスタジオに入った。

もう、決して男たちのいう通りにはなるま

い、と考えたのである。

まず、ナンシイは上半身を裸にされ、後手に縛られた。縛る男は特別出演のヒッチであった。

「ナンシイ。今日は素直だな。いい子だ」ヒッチは満足そうにいった。

「どうせ、思う通りにされてしまうんですからね。あなたたちはケダモノよ。女を縛っていじめる悪党よ！」

「悪党じゃない。悪役といってもらいたいな。俺たちの映画には、正義の二枚目は出ないのだ。拳銃と暴力がすべてを支配する町の、君は哀れ薄倖に泣く受難のヒロインだ……」

「その通りだ。俺たちは西部の無法者。この町では、縄が法律だ。鞭が掟だ」

オーディが変な合槌を打った。

カメラが回ってから、ナンシイは必死に反抗した。

「ケダモノ！ 気違い！ あなたたちの映画に協力なんかしないわ！」

「こら！ 映画じゃない！ ここは南北戦争直後の西部の町だ！」

「あなたたちは、一人残らず死刑になるのよ！ 電気椅子で死ぬんだわ！ わたしは、あなたたちの顔を決して忘れない！ 必ず仕返ししてやるわ！ あなたたちにこんな映画



112

を作らせる人も
きつと探してや
るわ！」

ナンシイは男
たちの望む「セ
リフ」を徹底的
にぶちこわした
「いかん。撮影
中止だ。この女、
増長したな。俺
たちのやり方に
馴れてきたの
だ」

「今の録音は使
えないな」
「まだ、手はあ
る。よく協議し
よう。その間、
ナンシイには柱
を背負わせてお
け」

ヒッチは不機
嫌な声になっ
た。

男たちの協議
は午後まで続け

られた。

彼らはナンシイを眺めながら、声をひそめ
て話し合い、扮装のままで飲んだり食ったり
していた。

ナンシイは咽喉が渴いていたが、無言で耐
え続けた。

もっとも、渴きを訴えたとしてもおそらく
は無駄であろう。かえって弱点をつかまれる
かも知れない。彼らの会話の中に「お仕置き」
とか「懲らしめる」などという言葉が使われ
ているのが、ときどき聞こえた。「水が欲し
い」と訴えれば、逆に水をもらえなくなっ
てしまふに違いない。

ナンシイはまたしても無力感に襲われた。
体を縛られているということは、絶対に支
配されている状態に違いなかった。ナンシイ
はサムソンでもヘラクレスでもないのだ。反
抗したとしても、限度がある。

午後——ヒッチは恐ろしい宣告をした。

「俺たちを甘く見てはいけない。縛ったり鞭
打ったりは、苦痛の中には入らない。ある種
の女たちは、それを一種の愛撫とし甘受する
ことさえあるのだ。本当の苦痛とはどんなも
のかを、これから教えてやる。そして、お前
を造り変えてやる。俺は今から監督のほかに
お前の調教師を兼ねることにする。容赦は一

切しないぞ！」

宣告が終ると、テーブルが片づけられ、代りに木馬が運び込まれてきた。

ひと目みただけで、ナンシイはそれを「木馬」だと思った。自分がこれからどういう姿勢で縛りつけられ、どういう苦痛を与えられるのかも知っていた。まったく、ふしぎなほどによく知っていた。

木馬の背は、鋭く尖っている。それは、極度の苦痛と羞恥と屈辱を生むはずの、恐ろしい鋭さだった。

鞍も、手綱もなく、横坐りに足をそろえて上品に乗れるわけでもない。

両手を背中で縛られたまま乗る——それが木馬のルールだった。けれども、倒れて落ちることはない。

両足は精いっぱい伸張を強いられて括りつけられるか、錘りをつけられるかするはずであり、髪の毛は、天井へ吊り上げられるはずであった。

——ナンシイは、それをよく知っていた。

子供の頃、木馬責めにかけられて歓喜している裸女を描いた妖しい秘画を見たことがあった。その時の強烈な記憶が、まだ残っているのだ。

画の中の女は苦悶しているのではなく、歓



喜しているのであることを、まだ少女であったナンシイが見抜いていたのだ。

その時の記憶は、まだ残っている。生きて残っている——。

（わたしは、調教される女……それらしい女

……木馬にふさわしい女なのかも知れない）

ナンシイは、切ない呻き声を洩らした。表情も声も身悶えも、今までにない好演技となっていた——。

中央線沿線のあるバアのマダムは、若くて美人だが、これまでにいろいろと苦労もしてきた。その苦労ばなしの中に、おもしろいのがあった。

ある晩――、囚人だの手錠だのという話が出てきた時、彼女は「あたし、囚人服を着せられて、両手に手錠をはめられて、都心を歩かされたことがあるのよ……」といいはじめた。

「へえ。何をやったんだい？ 洋酒の密売かい？ それとも……」
「バカね、本当の囚人じゃないのよ。あれは何年ぐらい前になるかしら？ とにかく、あたしがいろいろなアルバイトをしていた頃のことなのよ。お金にさえなるなら、女サンドウィッチマンでも何でもやろうと決心していた、苦しい時期があったの……だから」

「気をもたせないで、早く白状しちゃいなよ」

「刑事みたいなこといわないでよ。……東宝映画の（女囚と共に）

というのが封切りされた時だわ」

「五、六年ぐらい前かな？」

「そうだね。その映画の宣伝で

ね、女ばかり十五、六人もいたかしら、女囚の服を着せられて、素足に草履をはいてね、手には撮影所の小道具の手錠をはめられて、縄で数珠つなぎにされて、街を歩いたのよ……」
「へえ。凄いな。」

「ジロジロ見物されたろう」

「だって宣伝ですもの。見せるのが目的よ。羞ずかしくって、本当の女囚みたいに身も細る思いがして、皆うなだれているものだから、宣伝に見えないくらいなのよ。よく見れば映画のことが書いてあるんだけど……」

「なるほどね。巧い手だな」

「仕事だと割り切ってはいるんだけど、何だか哀しくなってきたやうのね。あたし、泣きながら歩いていたのよ……」

「おれも見なかったなア」

「イヤな人！」

「で、その時の気持だがね、哀し

い、とか、羞ずかしいだけかい？ もっとほかに何かありそうなものだな」

「そりゃあ、やっぱり、自然とマゾヒスティックな気持も混ってくるわよ。何だか胸がキュウツと締めつけられるような、上気したような、もっとひどい目に遇わされてみたいような……さあ、いくらでもどうぞ見物してちょうだい、って叫んでしまいたいような変な気持……」

「何時間ぐらいそんな格好をしていたんだい？」

「それがね、割合に短かいのよ。途中で駄目になったものだから。余りにも名プランすぎたのね。お巡りさんが飛んできてね、ちょっとゴタゴタしたけど、結局、道路交差と通違反とかいうことになって、中止させられたの。余り奇抜すぎて通行の邪魔になるという理由で

ね」

「ははあ……そりゃきつと表面的理由だぜ。本当はね、宣伝の限界を越えている、と睨まれたのさ」
「その通りなのよ。でも、うれしかった。すぐに自由の身になれたんですもの」

「もの足りなかったんじゃないか？」

「ひどい……いいわよ。あとでウンとイジメてやるから」翌日の晩、彼女のアルバムをみた。

新聞の切り抜きが、写真の中に一枚だけ混っていて、「女囚群」の写真つきで中止になったいきさつが記事になっていた。

「この中に、あたしがいるのよ」と彼女はマゾ的な微笑を浮かべた。どれが彼女であるのか、写真が小さくてよくわからなかったが昨夜の話が嘘でなかったことだけはわかった。

手錠と宣伝

田雲子

ある読者からの手紙

地獄への招待状

小川 左門
絵・喜多 玲子

④

あのころ、君は美恵子の羞しい姿の写真を何十枚となく撮って、それを自分の楽しみのためと、美恵子をおどすことのために使っていた。おまけに、作家だった君の、日夜書きまくる原稿のネタに、美恵子は利用されてもいたのだ。

現実に君の手でしいたげられ、羞しめられて、あくことのない羞恥と苦悶の中に、身をもたえる美恵子の動きの瞬一瞬が、作家である君の眼を通して、原稿の中に再燃されて

いったのだ。

美恵子は、俺のために金をつくらなければならなかった。だから、俺にかくして、モデルになり、脂ぎった男たちの前に、肌をさらしたのだ。美恵子が、君のためにだまされてあんな写真を撮られるハメになったのも、その金がほしかったためだったが、一度捕えた美しい犠牲を、そのまま逃がしてしまおうような君ではなかったのだ。

⑤

美恵子が自殺したのは、ボクの責任じゃな

いと君は云いたいのだろうが、そうは云わせないぞ。いたぶられ、脅かされ、いやだと云えば、療養所にいる俺のところに、例の写真を送る……と強迫しながら、思うさま、美恵子をしゃぶりつくした君の行為が、それに耐えきれなくなった美恵子を死に追いやったのだ。

俺は、遺書を読みながら、療養所のベッドの上で泣いた。泣きながら復讐を誓ったのだ。胸をむしばまれ、もう、あと、いくらか残っていない俺の生命の火は、ただ、君への復讐ということだけで、消えることもなく今日まで燃えてきたのだが……。

今日こそ、その俺の思いがとどく日がきたのだよ。

俺は、からだの中にT・B菌を一ぱいかかえたまま、療養所を追い出された。美恵子が死んで、金が来なくなってしまったからだだが、それをいい機会に、俺は埼玉の療養所を出て上京した。

そして、毎日、夕方になるとけだるく熱っぽくなるからだに鞭うちながら、必死になって君の動静を探ったのだ。

病気ともたたかわなければならなかったし生活ともたたかわなければならなかった。

新宿のキャバレーやバーのキャッチボーイ

をしたり、桃色クラブの客引きをして、どうにかこうにか生命を持ちこたえながら、俺の心の中の眼は、君から離れなかった。

何よりもありがたかったことは、君が、毎月、裏窓に作品をのせていたことだ。それによって君の存在をいつも知ることができたし今にしろ！ という闘志がかきたてられたことだ。

編集部周辺にまでうろついて、何とはなしに半日を過したこともあるし、他の雑誌社の名をかたって裏窓編集部に電話をかけ、君の住所を聞きだそうとしたこともある。

君と、君の奥さんに、最も不幸だったことで、俺にとって幸いだったのは、君が裏窓の編集長になったことだった。

それまで、君の住所も調べあげ、家庭の状態で調べてあったのだが、作家という君の仕事の行動の不定期さが、どうにも俺の復讐の機会に、いい隙をあたえてくれなかったのだ。

毎日、君の家の周囲をうろついているわけにはいかないし、俺は俺でその日その日を食いつなぐために、前に云ったような仕事を持っている。一番いい機会に、一番凄惨な復讐をするためには、あせらずに時期がくるのを待たなければならなかったし、それが判ってい

るだけに、俺の心の中はジリジリしていたのだ。

日に日に弱って行くからだをかかえて、俺が機会をねらっているとき、そんなことを知らない君は、裏窓編集長になったのだが、そのことが雑誌に発表されたとき、俺はもう、どれほど喜んだことやら。

おまけに、毎月の下旬頃、雑誌の校正が多忙になる時期には、きまって三日ほど家に帰らず、印刷工場にとまりこみで、校正の仕事にかかりつきりになるということまでわかつてくると、いよいよ、美恵子の仇をうつときが目前に迫ったことを感じたのだよ。

⑥

長い手紙を、よくここまで読んでくれてありがとうよ。

そろそろ、おしまいにする時間が近くなったようだ。俺のからだは、もう、生命の火が燃えつきてしまいうさななんだ、

君の奥さんも、おとなしく転がっていらっしやるが、退屈らしいから、これから、ねちねちといじめて可愛がって、泣かせてあげようと思っっているところだ。

奥さんをこの倉庫に連れ込むまでのことはいろいろ苦心談もあるのだが、もう、いいだ

ろう。社用で三日も家をあけている君の留守宅から、美しい奥さんをダマして連れ出すくらしいのことは、この計画の最後の仕上げにしては案外たやすいことだったかもしれない。さて……。

いよいよ、これから、君が美恵子にしたようなことを、君の奥さんにしてやるんだ。

この倉庫に、こうしてとじこめられるまでに、君の美しい令夫人は、決しておとなしい方じゃなかったことを、君に知らせておこう。俺の顔を引っかき、大声で助けを呼び、必死になってあばれたものだ。

病気の俺が、このあばれまわる美しい犠牲を抑えつけ、身動きもできないように縛り上げるまでに、どれだけの苦心をしたか、どれだけの精力を使い果たしたか、ちよつと考えてみてくれないかね。

いくら相手が女だからといっても、若い、健康な軀が、力一杯はねまわるのだし、俺は貧弱な結核患者だ。何度かはねとばされ、引つかれ、つきとばされたことか。

しかし、俺は負けなかったぞ。えもののあばれ方が激しければ激しいほど俺の執念は油をそそがれた火のように燃え盛ったのだ。

今にも息が切れて心臓が破れてしまいう

な苦しい思いで、君の奥さんをおさえつけ、あばれる両手両足を、やっと縛り上げて、こうして転がしてしまった時には、実のところ、もうへとへとになってしまっていたのだが、そのからだの疲れとは別に、俺の心の中には、何とも云えない、小気味のいい勝利感がわき上ってくるのをどうしようもなかったのだ。

⑦

さあ、これから、いよいよ、とりかかるぜ。君への手紙の筆を、ちよっとの間休んで、奥さんのブラジャーを外してやる。

おまちどうさま。いま、ブラジャーを外してきたところだ。たまらないおっぱいが、すっかりむきだしになってしまったぜ。

奥さんの口には猿ぐつわをかませてあるがね、あの猿ぐつわの下から洩れる泣き声というやつは、何とも云われない、たまらない情感をそそのめるものだね。

美恵子も、君のためにこんな目にあわせられて、泣いたのかと思うと、俺は、気の狂いそうな思いに、胸の中が火のようになる。

さあ、次は、最後の一枚だ。

それをはぎとる前に、俺は、奥さんの両足を、別々に縛って、倉庫の両端のパイプに縄

を通して引きしぼっておくのだ。

どう、素晴らしいポーズ。

想像ができるかい。

じゃあ、これから、その作業をするためにまた一時、ペンをおくことにする。

いつもより熱が出ているようなので、どう

もからだがだるい。だから、両足を開く作業は、せかず、あわてず、ゆっくりとやった。

別に急ぐことでもないのだから。

いま、君の可愛い奥さんは、パンティー

枚を身につけたまま、倉庫の冷たいコンクリートの上に、人の字になって横たわっているのだ。

俺の、この机の上には缺がある。

これで、あの最後の布っ切れを、シヨキシヨキと切り取って、軀からとり去ってしまつてやるのだ。

これを読んでいる君の、蒼白な顔が眼の前に浮んでくるようだ。この光景をカメラにでも納めておいて、後日君の手許に送るようにしたら、この復讐はもっと効果があるのだろ



うが、残念ながら、今の俺には、カメラまで用意する金が残っていなかったのさ。

そのかわり、別のことで、充分君にお返しができるようにするつもりだ。

太い蠟燭は数本用意してあるし、また、モゾモゾと毛の硬い鳥の羽根も、ちゃんと用意してある。

これらのものが、何に使用されるのかは、君の方がよく知っていることだから、今更ここに云うまでもないだろう。

これはみな、君が美恵子にしたのと同じことなのだ。いや、もっと、別のことだって俺は知っているのだぞ。

そのことも、今夜のプログラムの中にちゃんと組み入れてあるのだから……。

さあ、鋏を使ってと……。

⑧

俺は、奇妙な感動で、胸の中がふるえている。何度目かの喀血で、俺の唇は血で濡れているのだが、そんなことはいっさい気にならない。

それよりも、この倉庫の音に対する反響のよさ、微妙さが、俺の心を捕えているのだ。いま、鳥の羽根を使って、楽しんできたところだ。時計を見ながら、きっかり三十分。



その三十分の間、俺は鳥の羽根を、あらゆる場所に動かし続けたのだ。

はじめの足の裏のひとなぜふたなぜには耐えられもしようが、それからあとが大変だったぜ、これが耐えきれぬわけのものではないことを、君に説明する必要はないはずだ。

何と、君の奥さんの悲鳴の、泣き声の、うめき声の、それから、それらのどれともつかない軀中からしほりだす声の、何と素晴らしかったことか。

猿ぐつわの下から、ヒーヒーと洩れ出てくるその声が、倉庫の空間に一杯に反響して、足首からつながった縄が、そのたびにギシギシと今にも切れそうに音をたてるのだよ。

こうして、一休みしては、いちいち、君に報告を書くのが無上の楽しみなようでもあり、また少しは邪魔くさくなっているのも本当だが、俺が、この手紙を書き終って、封筒に入れ、投函しに行った後、それからこの倉庫で人知れず行われることの方が、一層面白い地獄図絵なのだが、それを全部君に見せられないのが、今の俺には一番残念だ。

さて、これから、俺は、マッチをする。そして、蠟燭に火をつける……。いや、火をつけない蠟燭も何本か用意しよう……。

これからあとの、何時間かのことは、報告できなくて残念だが、この倉庫があとで発見されて、君と警官がふみこんできたとき、どんなことが行なわれたかが判るように、ちゃんと証拠を残しておくつもりだ。

では……。

裏窓編集長。

これが、最後のボクの原稿です。いくら投稿しても、ボクの小説を使ってもくれないので、もうやけくそになって、こんな仮空の手紙を書いてみました。

編集長にも、それから、奥さんにも、一度もお目にかかっていないボクが、頭の中で、一生懸命になって創作した夢物語でした。

原稿をボツにされた恨みも、幾分かは入っていますが、編集長を悪人に仕立てたのでこれもやはりボツになることでしょうね。

×月×日

小川左門

浅草のサド劇

黄金観音

ご紹介

—浅草座文芸部・作—

矢桐重八

小さなストリップ劇場、といえば申しわけないが、浅草座のなかには何かぎっしりつまったムードがある。たとえば、踊り子たちが観客の顔面にぶつかってくるような、あるいはおっぱいの黒点のしわがよめるような、浅草ならではの体臭を満喫できる、そういったところである。

問題のだしもの——お色気コント『黄金観音』の幕がひらく。いやバックは黒幕が下りていて舞台の前方だけだ。ライトがその黒幕の中央をまるく照らしている……と、その内側から客席に向かって、まっ赤な腰まき一枚きりの娘が、つんのめるように現われる。そして横たわる。

真紅の腰まきがほぐれ、ほのめくのは白いひざがしらだ。それまでのブガブガドンパーのにぎわいにかわり、場内はしんとなり、ちょっとした妖気がかもしだされる。上手から現われるのは、目明し陣太親分だ。暮れから春にかけ、娘ばかりねらった誘拐殺害事件の連続。その下手人を引ッ



と、とようと十手捕り縄を手に。ところでこの陣太親分はひどい近視だ。たおれている娘につまづいてしまう。

「おや！　なんだこれは……」親分はひざをつき、たおれている娘



の背後から、裸の上半身、脇の下から乳房へと手を回す。「やわらかい、娘だ。まだ生きている……」と、ひとりごと。抱き起こされた娘の口から血がしたたり、首すじから肩、背にかけてミズばれのムチあとがはしっている。

陣太親分は娘を肩にかついで上手に消え、ふたたび戻ってくる。そこへ下手から出てきたのが、あでな姿のお吉姐さんだ。

「陣太の親分さん……どうしたの、何か……」親分は近視だから、お吉にぶつかるとように接近するまで、相手がわからない。

「おお、おめえはお吉だな」

「ねえ親分、そこらまでつきあってちょうだいよ、ねええ……」

お吉の鼻にかけた声と媚態——根は助平の目明し陣太親分。

「えっ、へへへ……ほかならぬお吉姐さんのいうことだ」

お吉にからみ合って消えていく。

つぎの場——消えたライトがつき黒幕が開くと、古寺の内部を想わせる舞台の上手から、陣太親分がぬき足でそっと出てくる。

「臭い、どうも臭い、さて……」それだけ言って消える。

つぎは下手からお吉と、悪党の弟分である現世坊主が現われる。

黒いけさに金剛杖を持った坊主が、じろりと悪党面で見栄をきり、

「姐御、うまくいきやしたか？」

「細工は上々だよ。ところでお前の方はどうなんだい。黄金観音のありかはわかったのかい？」

「それでさ姐御。娘のやつどうしても口を割らねえんです」

「お前の責めがゆるいんだよ。かまやしないびしびし責めな。たかが娘っ子じゃあないかい」

「へえ、じゃ、いよいよ最後の手を使いやすか——」

つぎの場——黄金観音像の秘密、それにかくされた財宝をねらう



悪党坊主現世が、町娘お琴とお加代の二人を折檻する。舞台の上手
よりに、お琴は後ろ手に縛り上げられ、竹の足枷をくくられ、ぐい
と髪をわしづかみにされる。下手にはお加代が柱に立姿で縛りつけ
られ、頭をたれている。

「やいやい。白状しねえか、黄金像をどこへかくした。言え！ 言
わねえか、この強情っ張り！」坊主はお琴の髪をぐっと後ろに引っ
ぱり、顔をのけぞらせる。お琴は縄や枷に心を打たれながらも、き
っと坊主をにらみ、

「言うもんか、たとえ責め殺されても言えやしないよ。悪党！ 糞
坊主！」と、つばを吐きかける。

「ちくしょう！ このあま！ いいか、言えなきゃあ、言えるよう
にしてやるぞ」現世のムチがお琴の背中へピシッ！ 一撃加えた。



「うっうう」うめき、のけぞる胸へさらにムチが喰い入る。
「どうだ、これでもまだしゃべらねえか？ うん、そうか、よしよ
し待っている、もっと痛い目にあいてえんだな」

今度は柱に縛りつけられているお加代に近づいた現世坊主。

「おい、おめえは深川材木問屋のひとり娘だったな。お父ちゃんに
会いたくねえか、え？ どうだ。どこに黄金像はあるんだ。言え、
言えば縄をといてやるし、けえしてやるぜ」

ムチの先であごを突き上げられるが、お加代も無言のまままだ。

「ちくしょう！ どいつもこいつも強情っ張りだ。よおし、いいか、
これは南蛮渡来の手裏剣だ。こいつで口を割ってやるぞ！」
手裏剣を取りだし、お加代の首根っこから肩へ引き裂く。

「ぎゃあ——」お加代の絶叫。

そこで坊主は妖しげな笑いをもらし、ふたたびお琴の方へ近づく。あお向けにたおれ、股を枷のため開いたまま、まるだしになっっている白い内モモに手をすべらせながら、



「どうだ。まだ強情っ張るといふのか。え……いいモモしているじやねえか。えっへへ……」

坊主の手の触覚に気づいたお琴が身をくねらせ上体を起こす。

「おお、まだ起き上がる気があったのけえ、よおし、それでも言えねえなら、今度の責めは焼け火ばしだ！」立ち上がった坊主。まっ赤に先を焼いた火ばしを持ちだす。お琴の面前で立ちはだかり、

「おい三つだけかぞえる。いいか、その間に言え！ 一つ……二つ……三つ……ちくしょう！ なめるな、これでもか、ええい！」

「うっ！ ぎゃあ——」断末魔のようなお琴の叫びが、二度三度場内を圧し、あお向けにたおれ、お琴は失神してしまう。

ついでお加代に向かった坊主は、容赦なく火ばし責めにかかる。身にせまる火ばしの先におびえ、体をすくめるお加代。だが縛り上げられているため、顔だけを左右にのけぞらせ叫びもだえる。その首すじへ火ばしが……狂気のような絶叫を最後に、ぐったり失神。

現世坊主が去り、沈黙。やがて目明し陣太親分が二人を救いだしに登場するのだが、お吉と坊主のワナにかかり大乱闘の末——目明し陣太の飛燕の手裏剣が勝ちをおさめる。抱き起こされたお琴が、たえだえの息の下で、足枷の股をひるげ、

「親分、黄金観音はあたいのこの中に……」これで幕——。

客席から舞台まですべて手の届くようなかまえも生かされて、こうした芝居の効果を上げているのだが、欲をいえば責めの演出、縛りが一筋縄でなく、いく重にも縛ってもらいたいところ。

責められ役の柏真琴（お琴）さんの演技には、まさにズバリ観客に錯覚を起こさせるものがあった。ここには、まだまだ浅草ならではのにおいが生きているし、新しいムードもかもしれないことに期待しよう。

（写真・本誌特写）

モデル随想

まりもの ためいき



谷 ま り も

本号巻頭グラビアに登場のモデルの谷まりもさんが、きわめて新鮮な一文を寄せられました。若くてピチピチして愛らしくて、ほんとうにいいお嬢さんです。
(編集部)

藤見先生から、書いてごらんさい、っていわれて、かんたんに「それじゃ書いてみようかしら」と、ひきうけてしまったけど、ホントは、私、筆不精だし、すごい気まぐれだから、書くのは、ニガ手なの。

しばられるモデルだけで、精一杯。感想文なんて、困っちゃうナ。とにかく、ラクな仕事じゃないわ。撮影の日はすごく寒くて、スタジオにはストーブの火がぼんぼん燃えていたけど、それでも寒いのだって、ゆかも壁もコンクリートなんですもの。たまらないわ。藤見先生や、カメラの吉田先生は、あたたかそうなセーターをきて、好きなことをいってかまえてる。私だけがはだかで、むずかしいポーズ。

しばられるというのはいへんな仕事です。だって、手も足もう

ごけなくなっちゃうんですもの。手をうしろにしばられて、ゆかの上にポーズをとっていると、腰のあたりから、ジンジンとひえてきてほんとに拷問されているみたいです。

その上、吉田先生は「このつぎは、ハリガネでしばりましょうか」とか「ストーブに押しつけましょうか」なんて、じょう談ばかりいって、私をドキドキさせます。

藤見先生も「かわいそうだなあ、こんなにしばっちゃ。ごめんなさいね」なんて、口ではやさしいことをいいながら、手のほうは、私の両手を背中にもわして、ミシミシしばっていくんですもの。かなわない。

私はよく、ひとから「モチハダ」なんていわれて、ほんとにハダ

がやわらかいんです。それで、縄でしばられると、すぐアトがついて、なかなかとれないので困ります。

女のひとを縄でしばって写真にとって本にのせて、どうしてそんな本を人が買うのか、私、はつきりわからないのですけれど、自分のしばられた写真をみると、なんとなく、わかるような気がします。

自分の写真を見て、まアひどくしばられてる、こんなに縄がグルグル巻きついて、残酷な感じ、と自分がかわいそうになります。

この、かわいそうという感じが、ぐっときて、愛情に似た感じを、男のひとが抱くんじやないかしら、と、これは、まりも流の解釈ですけど……。よくわかりません。

藤見先生にきいても、なんだかニヤニヤ笑ってばかりいて、はっきり教えてくれないんです。

「わからないひとには、わからないのさ」だって。くやしくなっちゃう。でも藤見先生って、とてもかわいい感じで、しんせつで、紳士的で、いい人です。

でも、撮影がクライマックスになって熱してくると、なかなか縄をといてくれません。すると、私は苦しくなり、縄で腕のあたりをしめつけられる苦しさ、むりなポーズをとっているつらさで、からだじゅうが、カッカと熱くなってきました。

「早く撮影が終われ、早く終われ」と、そればかりを胸のなかで祈りながら、目をつぶってがまんしています。

ときどき休けいがあり、そのときは藤見先生が、すぐに縄をといてくれます。

縄がハダからはなれていくときの解放感は何ともいえません。

ホッとして、からだじゅうに血がよみがえる感じですよ。

私ってネ、一種の写真マニアなんです。自分の若いうちのヌードを、たくさんとっておきたいの。

だってサ、あと十年か十五年たてば、やっぱり、ハダがおとろえちゃうもの。

自分でも、いまが一番きれいだと思うし、だから誇りに思っ、たくさん写真にとってもらってるの。(モデル料もほしいけどさ)だから裏窓さん、これからかわいがってちょうだいネ。

私は、たべることが大好きです、なんでもよくたべるけど、とくに、あまいものが大好き。

それから、ダンスが好きです。ダンスはもう、それこそマニア的な。それもオールジルバよ。若くてスタミナがあるから、八時間ぐらい踊っても平気。

うんと踊るとネ、美容体操のかわりになって、足がほそくなると思っ、私って、足がちよっとふといのよ。それが一番ユーウツなの。

さいごに、こんなことを書くと、藤見先生にしかられるかも知れないけど、私ってね、ほんとに、しばれるのより、相手の男をひっぱいたり、こき使うほうが、性に合うような気もするの。

私の理想の男性はね、生活力があって、ほうよう力があって、私のすこしぐらいのワガママを笑ってきいてくれる人。顔やスタイルは、ふつうでいいけど、あんまり固い人はきらいよ。人間的なゆとりのある人が好き。

まりもだって、イザ結婚ということを考えると、真剣になって、ためいきがでますわ。

姫君様



小田桐 爽

春日 章

じゃじゃ馬剣法

「ま、参った！ 参りました!! とうてい手前などの及ぶところではございません」

何人目かの家臣が、木剣を叩き落とされて平伏した。

「剣を拾うがよい。まだ勝負はついておらぬではないか」

「い、いや。まさしく手前の負けでござる。姫君には一段と御上達。」

御入牢

江戸艶魔帳

ま、まことにお見事な御腕前にて……、何とも、はや……」

大の男が平蜘蛛のようになって、シドロモドロである。

しかし、決して勝ちをゆずったわけではなく、実力の相違だった。

陸中の国、鷲ヶ崎の城主で二万三千石の大名、二階堂輝房の息女、

雪姫——花のように美しい十九歳だが、女だてらに、しかもこの泰

平の世に、何の因果か無類の武芸好きであり、また滅法強かった。

というよりも、二階堂家の家臣の方が揃いも揃って滅法弱い——

といえは正確だ。

俗に、文武両道という。その二つを極わめるのが真の武士だとされてい。しかし、それもはや昔ばなしに近くなってしまったようだ。

ひとり二階堂家の場合に限らず、一般に尚武の気風はひどく薄れてしまった昨今である。

珍らしくはやっている町道場があるので、よく聞いてみたら道場主の娘がすこぶる美形で、聳えらびの最中だった——という話があ

ったくらいだ。ところが聳はなかなかきまらず、娘はなびくように見えて一向になびかない。入門した男たちはやがて諦めて稽古に来なくなるが、代りに新しい門弟も集まるから、出たり入ったりで、結構ソロバンが立っている。つまり、看板娘の上等なのが、可憐にもおのれの青春を犠牲にして親を助けているのだ——というのが真相だそうだから涙ぐましい。

武芸に上達するよりは、三味線の一つも器用にひけた方が何かと便利で、実益にもつながりやすい——という奢侈淫靡な風潮である。

もとより、すべての武士が剣を軽ろんじたというわけではないが、二階堂家は特別だった。

名前だけは何となく重みのある感じだが、藩の財布は至って軽い。火の車、とまでは行かないが、それからあまり遠くはない。

数年前、剣術指南番が病死して以来、代りの指南役を召し抱えることもなく今日に至っているのは、財政逼迫のためにほかならなかった。

妙に気を合わせて剣技に弱い家臣たちにとって、指南役が空席のままであるのは、まことに当世風でありがたいことのはずだったが——俗諺にもいう通り、とかくこの世はままならぬものだ。

まさか死んだ指南役の霊が乗りうつったわけでもあるまいが、生前、直接に手ほどきを受けてひどく筋のよかった雪姫が、暇さえあれば家臣を相手に木剣を振るいたがる。

江戸詰めの家臣の中にも、雪姫に勝てる者は一人もいないのだから

★括られた両手の白魚のような十指が往生柱をかきむしって激しく苦悶する！

ら腑甲斐ない話だ。

その上、勝つとよけいに不機嫌になる——というのだから始末がよくなかった。

今も——例によって雪姫の機嫌は、きわめてよくない。

「それでも武士か！ 男なのか！」

肩を思いきり打ち据えられて、男は不ざまな呻き声を立てた。

雪姫は凜然と叫ぶ。

「次ぎ！……」

喧嘩屋渡世

「なるほど……すまじきものは宮仕えですな」

柏木左近は、思わず苦笑を洩らした。

神田竜閑町の孔雀長屋に住む柏木左近は、通り名を「喧嘩屋左近」

といい、天下無祿の浪人暮らした。

門口に妙な看板がかかっていて、「よろず揉め事お引受け処」とある。

知恵も貸そう、腕つぶしも貸そう、どんなに厄介なこと、危険なことでも、より好みはしない——という稼業だ。ただし、お道楽で始めたわけではないから、依頼を受ければ料金はもらう。

「何分にも貧乏な藩であるから、そうたくさんは払えないが……」

としみいったれた挨拶を用意して訪れてきたのは、左近の叔父に当

る二階堂家の江戸家老、津田兵庫であった。

「喧嘩屋左近……とかいわれておるそうではないか。その喧嘩屋としてせひとも引き受けてもらいたいのだ」

「困りましたな。女を相手の喧嘩は……」

兵庫の依頼は、家臣に化けて雪姫を打ち負かしてくれ、というのである。

「いや、女といってもいろいろある。小野小町も楊貴妃も女、巴御前も板額も、また女だ。姫はその巴や板額の方でな。あれが戦国乱世の男であつたなら……と、殿が長嘆息なされるほどのお腕前だ。さればこそ、お前に頼むのだ」

「そんな女は、早く嫁にでもやってしまえばよろしい。もっとも、

板額では貰い手もありますまいが……」

板額は武勇にはすぐれていたが醜婦であつた——というところから、板額といえは醜貌の女を意味する。しかし、これは左近の早合点であり、兵庫の言葉が足りないのだ。

津田兵庫はそれに気づいて、云い直した。

「間違えてはいかん。姫は美女であるぞ。左様……まず、絶世の美女と申して過言ではないな」

「ほう。絶世の美女ですか。それなら事は簡単。嫁にやってしまえば、自然と気も鎮まり、女らしくなるはずです。いつまでも娘のままで甘やかしておくことがよくない」

「さ、そこだて。姫と太刀打ちして勝ち得た男でなければ嫁には行かぬ……との仰せでな。今までに、そのため良縁が何度だめになったことか……。殿もついにたまりかねて、姫の鼻っ柱を打ち砕く男を探して参れ……と」

「わかりました。とことんまで叩きのめしてよろしいのですな」

「左様、左様。思いきりこっぴどくだ」

「ひとつ、やってみますか」

「頼むぞ。何だ、最初から素直に引き受ければよいものを、氣を持たせおって！」

兵庫は安堵をしたのか、冗談の調子になった。

「なかなかおもしろそうな役目といえるぞ。なろうことなら儂が代りにやりたいくらいだ。何しろ、美女だからな……」

兵庫はしきりと、雪姫が美女であることを強調し、独りでおもしろがっているが、左近の方はあまり気乗りのしない様子であった。（仕方がねえ。浮世の義理で引き受けるんだ）ぐらゐの顔つきである。

（用が済んだら、さっさと帰ってもらいてえな……）

と云いたいのだが、久しぶりに訪ねてきた叔父を追い出すわけにもいかないの、黙ってはいゐるものの、元来、「左様しからば」などという固苦しいことは大嫌いな性分であり、普段は伝法な言葉の方が使い馴れている浪人者だった。

折檻

数日後——左近は、芝、伊皿子にある二階堂家江戸屋敷の庭で、雪姫と相對していた。

「見ぬ顔だが……名は何と申すのか？」

「喧嘩いや、柏木左近でござる。このたび江戸詰めを仰せ付かり、俄かに出府いたしました」

「流儀は？」

「剣は真庭念流。ほかに武芸十八般を一通りは……」

「ほう。それは頼もしいこと……」

雪姫は、涼やかな眼で笑った。この微笑、実は——家臣たちにとつては戦慄すべき微笑なのであり、雪姫は闘志を覚えた時に笑う癖があった。

「左近とやら、参れ！」

「御免……」

左近は一見、無難作に構えているようだが、雪姫にはわかった。ほかの侍達とは段違いだ。

ただの木剣が、持つ者によってこうも違うものか——と思わせる。左近の手から伸びている木剣は、もはや木ではなく、腕の続きだ。生きている。魂が入っているし、その尖端には眼がある——。

雪姫の木刀は、それに睨まれているようであり、動こうとしても動けない。

「おのれ！」

「いざ……」

何もしていないようでありながら、じりじりと圧迫してくる左近の剣気は、まさしく尋常一様のものではない。

雪姫の顔はみるみるうちに血の氣を失い蒼白と化して行つた。

だが、雪姫は、これではならじと氣を取り直し、精一杯の勇を振るつた。

「えい！」

紅唇から裂帛の氣合いがほとばしり、鋭く打ち込んだ——と見えた瞬間、見守る侍たちは驚きの声を上げた。

痛烈にして爽快な音を残し、雪姫の木剣は高々と宙へ舞い上がったのである。

「おのれ！」

雪姫はいっそう蒼ざめ、口惜しさに震えた。

「どうなされた、姫君。早く剣を拾いなさい。まだ勝負はついておりませんぞ」

左近は、雪姫の真似の真似をしてみせた。

「無礼者！」

雪姫は懐剣を抜いた。

「無礼とは何事！ 血迷われたか、姫君」

「許せぬ！」

烈しく突きかかってくる白刃を、左近は軽くかわして、雪姫の利き腕をつかんだ。

「俗に、生兵法は大怪我の元、と申しますぞ。こんな物を振り回して、そのきれいなお顔に傷でも負ったら、どうなさる」

「は、放せ！」

「いや、放しません」

「お、おのれ無礼な！」

雪姫は屈辱に目もくらむ思いだった。

苦もなく懐剣をもぎ取られた上、左近の膝の下に組み敷かれてしまったのである。

「無礼、無礼と、まるでブレイを売りにでもきたようなことをおっしゃるが、素直に敗北を認めぬ姫君の方こそよほど無礼ですぞ。さあ、参ったと云いなさい」

「手を放せ！」

「敗けを認めれば放してあげましょう」

左近は、憚りもなく雪姫の白い腕を背中に捻じ上げている。

「誰か、この無礼者を斬れ！」

苦痛の下から雪姫は叫ぶのだが、家臣たちはそれを黙殺した。津

田兵庫に云い含められているからである。

兵庫は手真似で（もっとやれ、もっとやれ！）と合図を送っている。

それを認めて、左近は軽くなずいた。

「わがままであるばかりか、姫は卑怯な女だ。これでは殿がお困りになるのも無理はない。よろしい。殿になり代って拙者が折檻してさし上げよう」

「せ、折檻?!」

「いかにも。井の中の蛙^{かわず}、大海を知らず——という諺を御存じか。姫はつまり、その蛙だ。蛙が陸にいては身分不相応ゆえ、拙者が適当な場所へ御案内する。立ちなさい」

少しはなれた所に泉水がある。その畔りまで、左近は雪姫を引き立てた。

「これに懲りて、今後は女らしくなされるがよろしい。それを誓えば許してさし上げよう」

「許しなど……乞わぬ！」

頬を紅潮させ、雪姫は身悶える。

「強情な女だ。やむを得ん。頭を冷やしてよく考えてみることだ」

左近は雪姫を池の中へ突き落とした。

その瞬間、雪姫はついに甲高い悲鳴を上げたのである。

叱 ら れ た い

注文された通りの役目を果たした左近は、謝礼金を受取って孔雀

長屋へ帰った。

「場合によっては泉水へ突き落としてもよい。そのくらいに辱かしめねば、姫の病氣は直らぬ」

当主の和泉守輝房からじきじきに云い含められてやった荒療治だ。少々ひどい方法のようにも思えたが、稼業である以上は依頼に忠実でないといけない。

兵庫や家臣たちからも礼を述べられた上、しばらくは酒代に困らぬぐらいの金も入った。（女を相手の喧嘩も、たまには悪くねえものだ。なかなかきれいなお姫様だったな……）
左近はその後の時折、その名のように色白な雪姫の美貌を思い出すことがあったが——記憶が去り切らぬうちに、ある日、思いがけないことが起こった。

雪姫が屋敷を抜け出し、この長屋へ訪ずれてきたのである。
「先生、いますかい？ いたら表てまで顔を出しておくんない」
同じ長屋に住む男で、通り名を頬白の三次という遊び人がうるさく呼ぶ声に、昼寝を中断された左近が表へ出てみると、路地に辻駕籠が入ってきており、乗っていた客というのが雪姫だった。
「何だか妙な具合いなんですがね。駕籠賃を左近の旦那からいただ



きてえと、駕籠屋がいておりますぜ」

雪姫は金を持たずに出てきたらしい。

「冗談じゃねえ。何だってこんな女を引っぱってきたのだ？」

「いえね、別に引っぱってきたって訳合いのものじゃねえんで……」

三次は口をとがらせて、不服そうであった。

賭場の帰りに三次が札の辻へさしかかった時、不意に雪姫が声をかけたのだという。

「これ、町人。柏木左近という者の住居を知っていますか？」

「へ、へい。あっしの知っている左近さんなら同じ長屋の住人でござんすが……」

「その者の剣は何流ですか？」

と雪姫はきいたという――。

「……先生はいつたい、何流でござんしょうかね？」

「もういい。わかったよ。全く、呆れたものだ……」

ボヤきながら左近は、ともかく金を立て替えて駕籠屋を帰し、雪姫を家へ上げた。

「姫。いつたい、何をしに見えたのです。仕返しですか？」

雪姫は首を振った。

「……お雪は、もう屋敷にはいられぬ身となりました。ほかに行くところはありませぬ。この家に置いてください」

「冗談を云っちゃあいけねえ。この家で何をしようってんだ？」

つい、生地言葉が出たのは、昼寝の邪魔をされたり駕籠賃を立て替えたりして、いささか中っ腹のせいもある。

「何卒、御門弟の端にお加えください……」

雪姫はピタリと正坐し、三つ指についてそんなことをいうのだ。

「正気の沙汰じゃねえ。俺は剣術の指南なんぞやっていない。第一、

先日のことは姫の武芸気違いを直すための、苦肉の策だったんだ。まだ懲りねえのかい！」

「ならば、召し使いでも構いませぬ。どうか、わらわをお傍にお置きください！」

「バカを云うな。わらわなんてのたまう召し使いなんざあ見たことも聞いたこともねえ。だめだ、だめだ。お屋敷へお帰んなさい」

「無慈悲なお言葉……」

つぶらな瞳が、哀しそうにうるんだ。

左近の素性については、兵庫から家臣一同に対して固く口止めが申し渡されたはずなのだが、誰が教えたのだろう――。とにかく、口の軽い奴がいて不用意に洩らしたものに違いない。

左近は本気で腹を立てた。

「よしてくれ。喧嘩屋左近は気が短けえんだ。怒るぜ、本当に！」

「はい。お雪は、いま一度、叱られてみとうございます。あの時のように……」

左近は仰天した。若い娘の考えることは不可解である。いくら貧乏な小藩とはいえ、いやしくも二万三千石の大名の姫君が、一介の素浪人に叱られてみたいとは何たることであろうか――。

据え膳

戸障子の破れ穴から代る代る物珍らしそうに覗いていた長屋の連中が、やがて倦きて帰って行った頃――左近は説得に疲れてしまい、ゲッソリとなっていた。

（元来、話してわかる娘じゃねえんだ……）

と改めて気がついた。

この上は、思いきり脅かすより他に手はない——と考えた。

「改めてきくがね。姫は俺に惚れた……というんだな？」

「ほれた？」

「つまりだ、恋慕、懸想……面倒くせえな。要するに、惚れることだ！」

左近は思わず声が大きくなる。

「そうです。お雪は、ほれたのです……」

果たして正確にわかったのか、どうか——甚だ心もとないが、もはや一々かまってはいられない。左近の言葉はますます無頼になり、荒っぽくなる。

「女がうっかりそんなことをいうと、下世話では、裾膳食わぬは男の恥、といってな、女をひどい目に遇わせることになるんだが、承知か？」

「ひどい目に？」

「そうとも」

「どんな目に遇えばよろしいのですか？」

云うことが一々変っている。この娘、剣術にばかり夢中になって育ち、色の道には暗いのかも知れねえ——と左近は思った。

「つまりだな……姫を素っ裸にして、肌身を汚しちまうのだ。なぐさみものにするのだ」

「なぐさみ……もの？」

「そうだ。俺などはうっかり吉原にも行けねえ貧乏浪人だから、据え膳の口がかかりやあ渡りに舟だ。意地汚なく姫の体をむさぼりたてまつること請け合いなんだ」

「体を……裸に……」

さすがに雪姫は羞恥の色をみせ、首筋までが朱を刷いたようにな

ったのだが——

「いといませぬ。左近様がそれをお望みならば……」

いよいよいけない。全然、庶民の生活感情とは食い違った受け答えをして、みずから怪しむところがないのだから、実に始末がよくない。

「それだけじゃねえ。俺は生まれつき悪い癖があつてね、ただ女を抱くだけじゃ済まねえ性分なのだ」

「どうすれば済むのですか？」

「お前さんを裸にして、体を縄で縛っちまうのさ。その上で思う存分に辱かしめようってえ寸法だ」

「お雪を、いましめるのですね？」

「そうよ。いましめちまう。痛てえぞ。苦しい、羞ずかしいぞ……」

「かまいませんぬ。左近様こそは、お雪が心に決めた唯一人の良人。何事を命ぜられても従います」

左近は、ウンザリした顔つきになった。何だか逆にからかわれているような気分になさなってくる。

こん畜生め——と思う。

「良人になるとは誰も云っていやしねえ。辱かしめる、と云ったはずだぜ。と云うからには連れ添うつもりは毛頭ねえのだ」

「それは困ります。いけませぬ」

雪姫は初めて動揺を示した。

「左近様は、お雪が嫌いなのですか？」

切なげな声になった。

「決して、嫌いじゃない……」

云ってしまったから、左近は狼狽を覚えた。思わず本音を吐いた自分に気がついたからである。

「嫌いじゃないが……考えてもみる。大名の娘を女房にできるはずはねえ。それでは天下の掟を破ることになる」

「掟とは？」

「お前さんは、早くいえば將軍家へ人質として預けられている体だ」

「人質になった覚えは、ありません」

「ところが、人質なんだ。お前さんに限ったことじゃねえ。大名の妻子は江戸に置くべし……ってのは江戸開府以来の掟だ。これは詰まるところ、徳川の天下に弓引く大名を出さねえための配慮から来ていることだ。その人質が俺なんぞの女房になっていいという道理はあるまい」

いつの間にか左近の声には真剣な響きが混ざり始めていた。

言葉にして云えば（大名の娘に惚れられたとあっちゃ、満更、悪い気がしなかったとしても無理はなからう）とでもなるのだろうか——正直なところ、もっと強烈な男心が発動しかかるのを懸命に抑さえ続けた、と云っても決して嘘にはならない。

煩悩具足

（ひどいものだ!!）

と左近は腹を立てた。今度はムカツ腹というほどの怒り方だった。

昨日、左近は頬白の三次を伊皿子へ走らせて、事の次第を津田兵庫に注進し、「姫をお預かりしているが、至急引き取りに来てもらいたい」と頼んだのだった。

それなのに、どうしたわけか一夜明けての今日になっても、兵庫がこないのである。何の音沙汰もないのだ。

（あの狸おやじ……全くもって太え野郎だ！ 無礼者め！）

いったい、どういう料簡なのか、気が知れない。

左近とても生ま身の体だ。煩悩具足は人一倍だ。恋に身を灼く絶世の美姫に、夜通し異様な調子の口説（くづ）を述べられて男心の動かぬはずはない。

天衣無縫というべきなのか、それこそ姫御前のあられもないと称すべきなのか、雪姫は夜具の足りないのを幸いに、深夜、左近へ身をすり寄せて泣訴をくり返したのである。

「お雪を……妻にして！ 早く！」

この途方もない女難に、左近は呻吟した。思いきって自分の手で女にしてしまおうかと、何度思ったか知れない。

だが左近は、辛うじて踏みとどまった。

雪姫は身をくねらせ、すすり泣く。泣きながら、純





白の処女肌を大胆不敵に露わにしようとする。たまったものではない。

明け方に近い頃——左近はそれを避けるため、非常手段に出た。

「御免！」

一礼しておいて、いきなり手足を縛り上げたのである。

雪姫は、昼間の左近の言葉を真に受けたためか、感違いをして素直に縛らせた。

だが——左近がそっぽを向いて横たわったのを知ると、烈しく怨ずるのだった。

「黙ってくれ！ 黙らんと猿轡を齧めるぞ！ 口を縛るのだ……」

と叱ってはみたものの、まさかそこまではできない。仕方なく、左近は雪姫の縄尻を桂に結んでから払暁の戸外へ飛び出した。

神田明神へでも行って靈気を身に受け、煩惱を払い落とそうかとも考えたが、それもできなかった。

（もし留守中に、長屋の誰かが、タチのよくないのが上がり込みでもしたら、どうなる！）

と考えると、長屋の外へ出る気にはとてもなれないのだ。

結局——そのまま路地で朝を迎えてしまったのである。

（狸おやじめ、厄払いができて喜ばしい、とでも思っているのか？ とにかく、とんでもねえ奴だ）

陽がのぼり、井戸端へ山の神連が現われ始めた頃になって、左近はようやく家の中へ戻った。

雪姫は後手の縄目を噛みしめるような表情で瞼を閉じ、微かに身を悶えていた。

顔の下で、男くさい夜具が涙に濡れていた。

「もう、我慢ができねえ！」

左近は雪姫を解放したあと、帯刀して立ち上がった。

（刀にかけても引き取らせるぞ！）

と心に決めた。これから兵庫のところへ行き、強談判をする気なのだ。

「どこへ、行くのです？」

返事もせずに飛び出すと、後から雪が追ってくる――。

（ちやうどいいや。その調子でついてこい！）

腹立ちまぎれ、というよりも、煩惱から逃がれ去るような急ぎ足となったのが間違いの元となった。

どこでどうはぐれてしまったものか、姫の姿がいつの間にか見えなくなっていたのである。急ぎすぎたのだ。

（いったい、どこまで世話を焼かせりや気が済むんだろう、あの娘！）

左近は立ち止まって大きな吐息をしたが、その頃――雪姫の身には奇妙なことが起こっていた。

「御守殿お雪！ 御用だ！」

「神妙にしゃがれ！」

左右から不意に両腕をつかまれ、捻じ上げられていた。

「わらわはお雪に相違ないが、御用とは、何の用じゃ？」

「やい！ この期に及んで、まだ御中臆気取りを続ける気か！ そ

の取り澄ました顔を見忘れるような俺じゃねえ。今度こそは逃がさねえぞ！ 神妙にお縄を頂戴しろ！」

「お縄？ 縄をくれると申すのか？」

「当たり前えだ！ 縛ってしよっぴくのよ！」

「それはならぬ。姫を縛る男は……」

この世にたた一人――と云いかけたが、さすがに事態がおかしいと気づいた。

抵抗をしようとした時は、すでに早縄を打たれていた。

牢 問 い

雪姫は血の気の失せた唇を噛み、身をよじった――。

世の中には、このように恐ろしい所もあったのか、と戦慄した。

伝馬町牢屋敷の拷問場で、雪姫は今、石抱きの責苦を身に受けているのだが、もとよりそんな名称などは知らない。

もともと何も知らずに牢へ送りこまれてしまったのだから「知らぬ、存ぜぬ」と答えるほかはない。

何でも、自分に容貌のよく似た重罪の女がいて、しかもお雪という名までが同じであり、おまけに年格好から服装までが似通っていたための誤解らしい。

白昼の路上で捕縛された時、雪姫はほとんど抵抗をしなかった。

左近の手で初めて縛られた時の、苦しいような、羞ずかしいような、切ないような、快いような、一種絶妙な感覚が心身に甦え、時と場合を思わず忘れたのである。

再び左近に縛られているような錯覚が起こって、事の重大さをすぐには悟れなかったのだ。

自分よりも強い男の力で身の自由を奪われる——ということの中には、輝やかしいような驚きがあった。

しかし、もとよりそれは、好ましく思う男から行われてこそ成り立つものであることは、云うまでもなかった。

今は違う。ただ恐ろしいばかりだ。

(左近様！ お雪を救いに来てください！)
心の中で必死に叫ぶ——。

まことに、言語道断な責め苦である。

腰から上の獄衣を剥がれ、半裸にされた。

太い縄で後手に縛られた。尖った木材を並べた台の上に坐らせられ、上体を背後の柱に括りつけられた。

その上さらに、腿の上に大きな石を積まれたのである。

「しぶとい女だ。御守殿お雪！ 白状せい！」

吟味方の役人が、噛みつくようにどなった。

「ひ、人違いじゃ。わらわは、左様な者ではない……」

「うぬ！ まだ白らを切るか！ それなら、いったいお前は誰だ？」

「わらわは……」

「誰だ？ さあ申せ！」

云えない。本当のことは云えないのだ。

いくら間違いにもせよ、大名の娘が牢へつながれ、裸身に縄打たれた浅ましい姿で拷問に悶えているのだ。本当の身分など、口が裂けても明かしてはならない——。

「どうした！ 往生際の悪い女だ。いさぎよく泥を吐いたらどうだ！」

「無法な！ 泥など……吐ける道理はない」

「どうでも吐かせてみせるぞ。もう一枚、石をふやしてもらいたい

か！」

「いやじゃ！ それだけは、許してたもれ」

「たもれ？」

吟味役は小首をかしげた。

「さてはお雪。その方、狂ったな」

「狂うてはおらぬ。痛い……くる、しい……早よう縄を解け」

「お雪と呼ばれて答えたのは、何よりの証拠。語るに落ちる、とはこのことだ」

吟味は、したり顔に頷いた。

責め台の脇に立つ打ち役が、手にした笞で雪姫の裸の乳房を小突いた。

「素直に恐れ入ってしまえ」

「ひッ！」

自由を持たない裸身が、それでも精一杯に縮まった。

「是非もない。石だ」

差図を待ちかねていたように、二人の牢屋下男が石を追加した。一枚が十二貫の伊豆石だ。

「ひいッ！」

腰の後ろで括り合わされている両手の、白魚のような十指が、往生柱を掻きむしって激しく苦悶する。

黒髪は無数の蛇のように乱舞し、石の上で、乳房の前で躍り狂った。

「い、いう……いうから許して！ わらわは、驚ヶ崎城主、二階堂

和泉守の娘……雪姫……」

息も絶え絶えとなり、精根尽きた雪姫は、ついに身分を明かしてしまった。

だが——死にもまさる恥辱を忍んで名乗ったのに、役人たちは取り合わなかった。

「おのれ、愚弄する気か！ 一筋縄では行かぬ女め！ 構わぬ。責めて責めて、責め抜けい！」

吟味役は白扇で床を鳴らし、叱咤した。

それから先は——ハッキリとは覚えていない。雪姫の心気は朦朧となり、恍惚感さえ覚えるようになって、意志の働きを失なっていたのだ。

何でも認めなくなる。嘘と真実の境いなくなる。どうでもよい、と思ってしまう。こうして雪姫は、御守殿お雪という女がなすべき白状を、全部させられてしまったのである。

市中引回しの上、小塚っ原刑場において磔刑に処するという断罪がくだったのは、それから数日後のことであった。

磔 柱

公儀の御仕置きとは、これほどに恐ろしいものか——と思い、雪姫の心はおののいた。

地上に横たえてある磔柱に両手を括りつけられただけで、すでに生きた心地はなくなっていた。

獄衣の両脇の下から腰の辺までを切り裂かれ、前でまとめて括られたのは、突きやすいようにするための定法だったが、非人たちの手がおぞましく肌に触れてくるのを覚えても、雪姫は一度だけ、ピクリと蠢いたのみであった。

何をやるにも、もう気力がない。もはや雪姫は、家臣たちを相手にして木剣を振るっていた頃の暴れ姫ではなくなっている。

刻々として迫りくる死の恐怖に、齒の根も合わないほどに震えている、ただの弱い女であった。

胸縄、襷縄、腰縄から足縄と、手荒く罪木に括られて行く間——まるで念仏のように左近の名を心の中で呼び続けるばかりだった。非人が四、五人で柱を起こし、根元を三尺、土中に埋めて踏み固める。

検使の役人が進み出て罪状を読み聞かせている声も、雪姫の耳にはほとんど入らない。磔柱の左右に立った非人が「アリアアリアッ！」とかけ声を発して錆び槍を突き出し、その二つが眼のすぐ前で、チャリンと冷たい音を立てて交差した瞬間に、雪姫の首は力を失なってガックリと垂れた。見せ槍だけで失神したのである。

その時であった——。

刑場を取りまく竹矢来の外に猛烈な土煙りが上がり、その中から、「待てい！ その処刑、しばらく待てい！！」

必死に絶叫する声が届いた。

疾駆してくる馬は三頭——。

これ以上の真剣はないという、汗と砂埃りにまみれた武士の顔が三つ——。

先頭は、南町奉行の狭山備前守。続いて牢奉行の石出帯刀と柏木左近が、一線に並んで鎧よろいを蹴立ててくる。

「その咎人に不審の点あることが判明した。しばらく待て！」

まさに、危機一髪のところだった。

頬白の三次が、雪姫の引回しを見て驚き、左近へ急報したのである。

「あれは御守殿お雪なんかじゃねえ。例のお姫様に違いありませんぜ。そういえば顔が似ていたが、お雪の阿魔ならわっしもよく知っ

ている。あれほどの別嬪じゃねえし、第一、気品ってものが違いま
さあ」

左近は跳び上がらんに驚いた。いくら探しても杳として行
方の知れなかった雪姫が、あろうことかあるまいことか、女囚とし
て処刑されかけているとは！

「三公！ その、御守殿お雪の特徴を云え！」

「へい！ 内股に赤い痣がありますんで。もっとも、これを知って
いる男は日本広しといえども……」

下らない注釈をつけ加える三次をあとにして、左近は急ぎに急い
だ。前代未聞の椿事であるだけに、処理は早く進んだ。大名の姫君を
冤罪で殺したとあっては一大事だから、町奉行が飛び出し、牢奉行
も転ろがり出るようにして馬に乗ったのである――。

「その者の内股を検分いたす。獄衣を上げさせよ」

大変なことになったものだ。失神しているのは不幸中の幸いであ
ろう。雪姫の豊かに白い太腿が、刑場の陽にさらけ出されたのであ
る――。笞の痕や縄痕こそはみとめられたが、もとより赤い痣など
のあるはずはない。

「中止！ 中止だ。早々に解き降ろして介抱せい！」

奉行は、すっかり恐縮していた。

津田兵庫と二階堂和泉守が馬で駆けつけたのは、それから間もな
くのことであった。

「もう、大丈夫だ……」なつかしい声をすぐ近くで聞いた時、雪姫
の心身はようやくハッキリと醒めた。

夢かと思った。自分が馬の背に、縄目のない自由な体で乗ってお
り、手綱を取る左近の逞ましい腕にささえられていたのである。

すでに、薄暮が迫っていた。

「命が縮まる思いがしたぜ。全く、今日ほど忙がしい思いをしたの
は、臍の緒切って以来、初めてだ」

「お雪は……助かったのですね。死ななかったのですね！」

「そうとも、安心しな」

「左近様。お雪はこの先、どうしたらよいのでしょうか」

「家名を汚がした女を屋敷へ入れることはできぬ。俄かに病没した
ものとして公儀へは届けるゆえ、何とも勝手に生きるがよい、って
のが、おやじ様の言葉だ。ひでえものさ」

「それは……姫が左近様の妻になれるようにと願う、父上のお心か
らでございましょう」

「よしてくれ。おめえの気持は嬉しいが、俺は生来、固っ苦しいの
は性に合わねえんだ。姫君を女房になんかできやしねえ」

「言葉は、直します」

「それは無理というものだ。直せるはずはねえ」

「いえ、直せます」

「無理だよ」

雪姫は不意に、謎のような微笑をうかべた。左近の胸へもたれか
かり、色っぽい眼つきとなって顔を見上げた。

「ねえ……」

「む?!」

「……わたしは、お前に首ったけなんだ。お願い！ 後生だから、

女房にしておくれよ」

「おいおい、おめえ、いつの間に……」

「女牢の内習ったのさ、フフフ……」

「巧いな。こいつは驚いた」

可愛い女だ――と左近は思った。

一、発端

河添宮子は、しばらくためらったのち、その家のガラス戸をあけた。

「おへやですね」

心得顔にだみ声の四十男が、無愛想な視線を宮子に投げかけてそう言った。

ほかにはだれもない。古ぼけた机に古ぼけた背広の薄ぎたない印象の四十男、彼がこの事務所の責任者でもあるのか、でも宮子は、今さらためらうことは許されなかった。

「安くて通学に便利なおへや、どこかありませんでしょうか」

こう切り出すのに、宮子は精いっぱい気を要した。また同時に、シンとしびれるような感激をも味わった。だれの世話にもならず、自分だけの力で生きていく独立生活の第一歩を、こうしてみずから宣言した、という思いにかられて、生活だけではない。学校も独力で卒業するつもりであった。いっさいが自分ひとりの力で……

河添宮子はS女子大の学生で、微生物を専攻していた。若い化学者の卵である彼女は、日常生活にもきわめてきちょうめんで、おとなしやかな反面、人一倍潔癖感も強かった。

日ごろ、心からなついていた父に反抗し、女中のタキが必死に止めるのも聞かず、ついに家を飛び出してしまったのも、彼女の性格の一端を物語っていた。

父は弁護士として世間的にも名が知られていた。幼いころ母を亡くした宮子にとってもまたかけがえのない父であった。父と娘、この好一對の平和な図柄は、特に婦人雑誌の好個な題材として、グラビヤや訪問記などの記事でしばしば扱われたことがあった。

宮子が父に反抗して家を出たことは、まだだれも知ってはいなかった。ただひとり、学友の真佐子だけには、ついその一端を説明し



黒田史朗
絵・秋吉 巒

奇妙な あしながおじさん

てやらねばならなかったが……。真佐子は世話好きで顔が広い。だから世間的に無知な宮子は、アルバイトの口や下宿先のことなど、彼女にはどうしても相談をもちかけねばならなかった。

「おっしゃりたくないんなら、事情はお聞きしませんけど、でもそうとなればこれから先大変ね」

真佐子は、宮子の家出に非常な興味をおぼえたようだったが、深く追求しようとはしなかった。また別段、それをお義理に止めようともしなかった。それが宮子にはわずらわしくなく、ありがたかった。だが真佐子は真剣

な面持ちで、

「……でもいろいろと厄介ですよ。あなたみたいに、今まで何不自由なく過ごしてこれたお嬢さまには、こんなこと言ってもピンとはこないかも知れませんがね」

と、暗に翻意を促すような口ふんを漏らしはした。だが宮子は、それを軽く聞き流す風情で、つい先日、目白駅近くの、貸間あっせん所を自分で尋ねてみた時の様子を、報告がてらに話した。

「まあ、あなたがご自分で。大したものね。今までのあなたは、蜜豆食べにもはいれなかったのに、ずい分思い切ったことなすったも



のね」

「近日中にご連絡しますって、その人は言
ってたけど」

「あまり当てにはならないわよ。いいかげん
口から出まかせなところがありますものね、
相手は商売だからやむを得ないけど……」

真佐子はしばらく考えてから、

「いいわ。ちょっと心当たりの人がいるから
聞いてみてあげる。もしかしたら、おへやは
もちろん、アルバイトしなくっても勉強でき
るかしれないわよ」

ともかく身の振り方が決まるまで、宮子は
真佐子の家に寄遇する羽目になった。

二、あしながおじさん

二、三日後、真佐子は宮子に、従姉妹だ
という宣子を紹介した。宣子は学校を中退して



結婚するのだという。だから今まで彼女が下
宿していたへやは、明日にでも引き払い、宮
子さえよければ、すぐにでも移ってきていい
のだということだった。

その条件がまた、今の宮子にとっては、う
そではないか、というほどに、何もかも話が
よすぎた。へや代はタダ、まかないも三度の
食事ともタダ、場合によっては、小づかいや
学費さえ先方で負担しようという、薄気味の

悪くなるような話であった。

「そんなところ、あんまりよすぎて、少し変な
くらいですね」

「宮子さんがそのようにご警戒なさることは
ごもっともですけど、慣れてしまえば、それ
はそれで決して変なことありませんよ」

「だって、少し気味が悪いですわ」

「先方の家主さんは、大変なお金持ちで、篤
志家なんです。女子大に行ってらした娘さ
んを交通事故で亡くしてから、こんなおかし
な下宿屋業を始める気になったんですって。

商売じゃなくてご自分の一種の道楽ね。亡く
なった娘さんと、同じ年ごろの娘さんのお世
話ができれば、それだけでいいんですって……」

宮子はその説明だけで、充分得心がいく気
がした。何といっても彼女は、まだ直接世間
と接して生きた経験がないので、何を聞くに
も素直にうなずいた。そんなこともあるのか
と、新しい世間知を得る思いで納得した。宣
子の説明によって、その話があまり虫のよす
ぎる話であっても、虫のよすぎることについて特別
の警戒はしなかった。それどころか、おかつ
ぱ時代に読んだことのある「あしながおじさ
ん」の話を連想して、すばらしい、ロマンチ
ックな夢さえわいてくるようであった。



宣子は宮子に対して、初対面でありながら、長年つきあってきた真佐子より、かえってむしろなれなれしく、ぐいぐいと宮子のふところの内に割りこんできて話をする、そんな調子のよさがあった。

「こない下宿って、ほかにはどこにもありっこないわ。おへやだって洋式の次の間付きっていうりっぱなものだし、上げせん、すえせん、で至れり尽くせりなの、まるで女王さまみたい。それでいて何もかもがタダで学費まで払ってくれる、こんな所ってほかにあるかしら……」

「そうね」

真佐子が感にたえぬ面持ちで合づちを打った。

「どうしてもっと早くそれを言わなかったのそしたら、わたしがそこに行くのに」

「だって、下宿のこと、あんまり人に言っちゃだめだって」

「あなたって、おしゃべりのようで案外口のかたいところもあるのね」

宮子は宣子と真佐子の会話を聞きながら、その篤志家のおじさまは、きつとすばらしい、あしながおじさんみたいな人だ、と、心に決めてしまった。

「そのお金持ちのおじさまって、どんな方。

きつとすばらしい人でしょね」
「それがわたし、まだ一度もお会いしたことないのよ」

「どうして……そんなことってあるかしら」
真佐子はへやのことで宣子を宮子に紹介したものの、まだ何にも詳しいことは知らないらしかった。宣子は苦笑するように笑って、
「ほんとよ、全然お会いしたことないの。だからお礼を言う機会もなくて……」

真佐子はそれでも不審そうに頭をかしげていたが、宮子にはそれがよく理解できた。彼女はやっぱりあしながおじさんだ、こういう素敵なおじさまが日本にもいるのだ、という思いで胸がふくらんだ。

三、不思議な下宿屋

人の好意に寄りかかるような、虫のいい気持ちなど、宮子には全くなかったが、正体のわからない不思議なおじさまの好意には、全幅的な信頼を寄せた。

坂の多い小路を、幾つも曲がりくねった奥に、小ぢんまりした二階建ての洋館があった。石畳の上を少し歩き、宮子を案内してきた宣子は、勝手知った気やすさでドアを開いて声をかけた。

「じいや、お友だちを連れてきたわよ」

廊下の奥から六十歳ぐらいの小がらな老人がいそいそした足取りで出てきて宣子らを迎えた。宣子はまず、その時の情景の不思議さに驚かされた。宣子は、まるで富豪の令嬢が、わが家でわがままいっぱいに振る舞うように、横柄な態度をとった。その家の老人を、じいや呼ばわりするのもおかしい気がしたが、もっと驚いたことには、宣子は足もとにはいつくばる老人に、その場に突っ立ったまま、片足ずつ投げ出して、くつを脱がせるのであった。それからすぐに宮子に目配せして、老人に命令した。

「早く、ぐずぐずしてないで、お嬢さまのおくつ！」

一言で老人は、サルのように飛び上がって宮子の足もとにはいつくばった。考える間もなかった。宮子はせかされるままに、片足ずつ老人の胸元にくつをあずけ、それが済んでから上に上がった。

紹介されれば宮子は、丁重にあいさつをするつもりであったが、その間がなかった。片足ずつ、土足の足を相手の胸元に突きつけるのが、初対面のあいさつになった。

こんな恥ずかしい思いをしたことは、今まで宮子にはなかった。その余裕がなかったためだとはいえ、相手の老人に大変失礼なこと

をしてしまったと、気がとがめた。それに、そんな無礼な振る舞いをあえてする、宣子の気持ちに全くわからなくなった。

ところが、それを聞きただすまでもなく、宣子は二階のへやに落ち着くと、早速そのことの説明にかかった。

「そんなにびっくりしたような顔をなさらないで、おかけになったら」

促されるままに宮子は、豪華なひじいすに腰をおろした。これがただか女子学生の分際で、自分のへやとして独占していいものだろうかというほどの、豪華なふんい気を持ったへやだった。あっけにとられたように宮子は、ぼんやりした表情で両手で付きの机や、落ち着いたしぶい朱色のカーテンをながめたりした。家出をして下宿探しをするという、追い詰められた気持ち、何だかうそのように心の内に引いていった。しかし同時に、当り前でないあたりをはばかりるような警戒心が、彼女を緊張させた。

「何だか様子がおかしいですわ。……宣子さん。わたしにも、よくわかるように説明してくださいませんか？　だって、今どき、こんな妙な下宿屋って、どうにもふに落ちかねるんですもの」

「そうおせきにならないで。そのうちよく得

心がいくようになることですから。とにかく、何にもご心配なさらず、気楽に振る舞うことよ。じいやと女中が、あなたの身の回りのことはすっかり果たしてくるでしょうから、遠慮なさらずに何事もお言いつけになつてちようだい」

「だって変ですわ」

「何が」

「何がって、じいやさんがですよ」

「ああ、そのこと。でも、女はうんと尊大で、思いっきりわがままで、ぐんと残酷になるべきですって。……だれでもない、わたしたちの好意ある後援者が、そうなるようにお望みな。またそうでなければ、このおへやの主人になる資格はないことよ。だからわたしは、わがままいっぱいに暮らしてきたわ。じいやを相手に、うんと残酷なまねもしてみたわ。おかしいことかもしれないけど、旧道德のわくに捕われない、その後援者のおじさまのご希望が愉快だと思うの。第一、ご自分のお顔もお見せにならず、その上何の恩着せがましい点もないところが素敵じゃない。りっぱな社会人になれとか、そんな押しつけがましい代償もないし、こんなフェアなことって、ないわ」

四、じいや

結婚して学校さえやめなければ、いつまでもこの家でわがままを言っていたいと、宣子は本気でそう言いながら、残り惜しそうな顔して引越していった。

宮子は、根がお嬢さん育ちであり、父と一時のいさかいで家を飛びだしたとはいっても、実のところ、大変に心細かった。それで、この思いがけない「あしながおじさん」の提

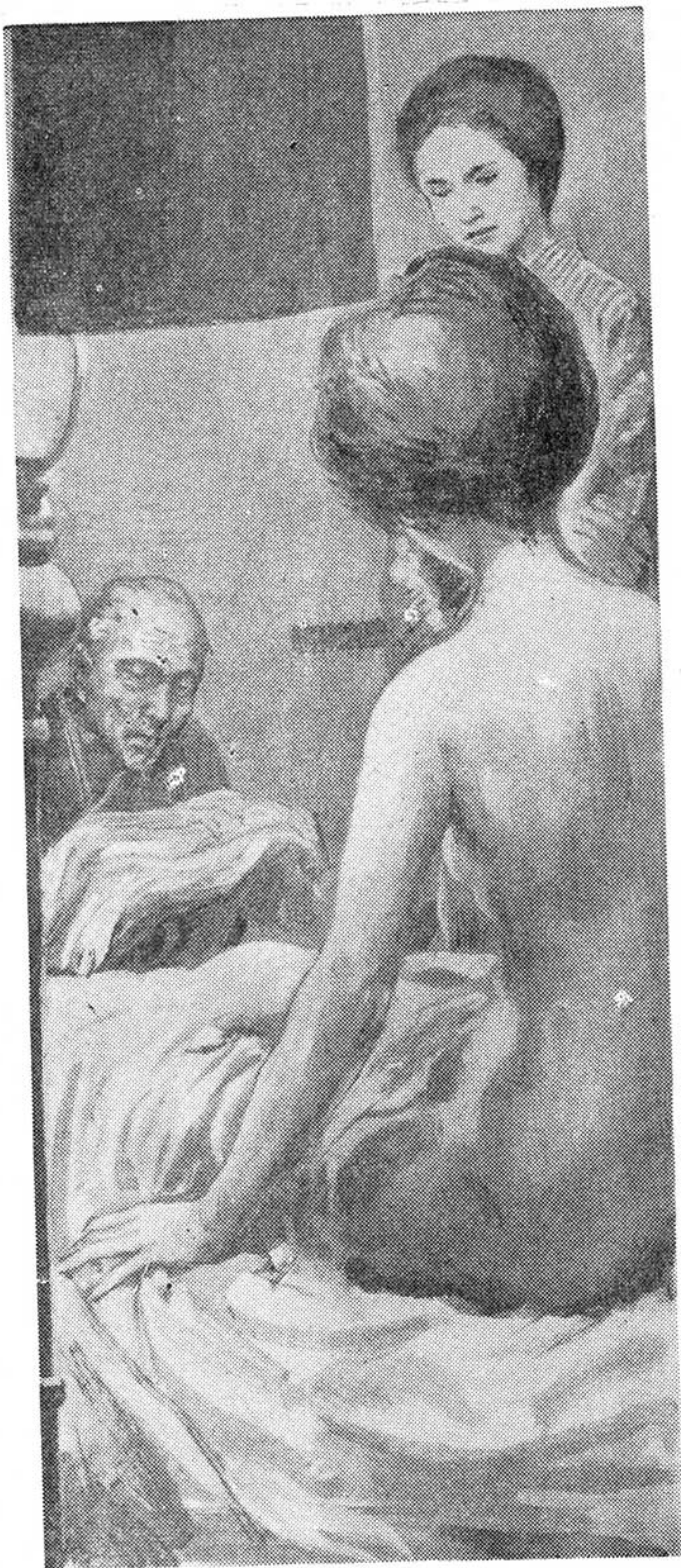
供になる下宿屋は、彼女にとっては願ってもないおくり物になるのであった。わがままで尊大で、残酷な女になれば、この条件も不思議なことだか、条件を果たすことが自分の義務と思えば、いっそ度胸もするるのである。

朝、目をさますとすぐまくら元のベルを押す。すると、いちはやく女中のノブとじいやが飛んでくる。宮子はただベッドから起き出すだけでよかった。寝まきを脱ぐと待ちかまえていたようにじいやがそれを受け取り、き

れいにはこりを払って貴重品か何かのようにたたむのである。うむをいわせぬがんこなところがうかがわれ、相手のなすまま、すべてを任せるしかなかった。

お湯はいつでもわいていたし、それで顔を洗うとノブが手ぬぐいをささげて背後から差し出す。鏡台の前にすわると、身づくろいするにも、クリームをつけるにも、すべてあなた任せで用が足りた。

早速朝食である。簡素ながらも温室育ちの



新鮮なトマトなどがあり、家にいた時よりむしろ食欲が進むほどであった。食事の給仕はじいやのつとめであった。一度宮子はそれがきゆうくつだと断わったが、それではわたし困ります、といって、どうしても引きさがるうとはしなかった。でも、慣れてしまえば結局、彼女にとってもそのほうが便利でもあった。

くつをみがくのもじいやのつとめである。何をするのもほとんどがじいやのつとめで、さすがの宮子も、恐縮するよりその徹底ぶりにむしろあきれてしまった。それでこの上、へや代も食費も、給料もいらないということがありがたい条件というより、おかしくってこっけいで、しょうがないくらいであった。

宮子がこの家に腰を落ちつけて間もなく、じいやは一通の手紙を托されて彼女のもとに持ってきた。まだ見ぬ後援者、つまりこの家の本当の持主からのものであった。

——あなたのことは、じいやからよくうかがいました。非常にきれいで、心がけのりっぱな娘さんだということで、わたしは大変満足です。死んだ娘以上に、あなたはわたしにとって、かけがえのない人です。あなたのお世話がこうしてできることは、どんなにうれしいことか、とてもおわかりに

はなりますまい。

ところで、わたしの好意に感謝したりなぞ決して無用に願います。その気づかいには全く不必要だからです。ただ、わたしのこれから述べる条件だけを、確実に守ってください。さるだけで、あなたの義務は完全です。

つまり、わがままで残酷な女であってほしいのです。女であることのよさは、貞しゆくでつましいばかりが本分ではありません。それは、封建時代の野ばんな男たちが、



手前がってに作り上げたいつわりの女性像です。性欲の道具にしぼりつけておくか、鑑賞用の生きた人形として愛がんする、ただそれだけのために、長年かかってそのような婦徳を女性に強要したまです。

これからの女性は、真に自分のためだけに生き、自分のためだけに相手に要求する。恐れを知らぬものであるべきです。

宮子さん、あなたは絶対権力というものの味をご存知ですか。あなたは今、それ勝手に納められています。あなたは、ご自分が要求することだけを知る、絶対権力の持主であることに、まだお気づきではありませんか。

じいやは、わたしがあなたにプレゼントする、忠実な実来です。彼は、忠義という二字を、何よりも大事なものとして生きる。いわば前世のこつとう品みたいなものです。だから、容しやなく彼に命じ、容しやなく彼をいたぶってください。

× × ×

文面はここで、プツンと途切れてしまった。宮子は、へあしながおじさんVのこの奇妙な手紙の解釈に、しばらくの間迷った。文章表現に、しっくりと来かねる大時代的なオーバーささを感じた。

だが、これでどうやら、あの奇怪な宣子とじいやとの関係のしくあいが、かなり納得されるのであった。

五、馬遊び

宣子はじいやを正式に宮子に紹介する時、おかしくってしょうがないというふうに笑い転げた。あまり笑って、おなかが痛くなるほどであったが、宮子はあっけにとられてしまった。

「ごめんなさい、宮子さん。でもおかしくて、しょうがなかったの。あなたを笑ったのではなく、このじいやを笑ったのよ。全くこのじいやったら、ばかみたいなのよ。何でもわたしの言いなりなんだから……」

宣子はじいやに向かって、床に腹ばいになれと命じた。そうして、彼をしばらくカメの子のように床の上をはわしたあげく、スリッパをほうってそれをくわえてこさした。

「あなたもほうって上げるの」

ためらう宮子のスリッパを脱がせ、宣子は景気よく空中にほうった。それはくるくる



と三回転すると、勢いよく落ちて、じいやの頭を打った。宮子はただぼう然とするばかりであったが、じいやが口にくわえた彼女のスリッパを、その足もとにそろえ、彼女の素足を頭で促してそれを両足にはかせようとした時、彼女はハッと気づいて顔を赤らめた。ぽうーっとはおが上気するようで、白昼夢のようなこの場の光景が、まるで秘密な絵空事として、半分信じかねた。起こりうるはずのない光景であり、起こりうるはずのない感慨だった。

自分で自分の野放図さがはずかしい。あの時、宣子は興に任せてじいやをからかった。薄ら笑いさえ浮かべて、キキとしてその侮べつをみずから楽しむかのようなじいやの表情が、宮子には理解できかねた。宣子は彼に馬になることを強要した。

というより、ただ単に指示を与えただけだった。

「宮子さん！ いい、とってもおもしろいん

だから！」

宣子はいったい何を考え、何のつもりでそんなことをしてみせるのか！　だが不思議なことに、心の底のどこかで、もっとやってみせて、と快哉を叫ぶ自分の心が意識されたのであった。

じいやは四つんばいで、宣子だけでなく宮子にも背を向けた。

「いいじゃない。あなたもいっしょに乗るのよ」

じいやの口にくわえさせた帯の端を、宣子は無理に宮子の手持たせた。宮子は前の方に、つまり馬の首根っこのあたりにこわこわ腰をおろした。

馬はのろろと動き出したが、じき止まってしまった。やはり老人の身にしてみれば、娘盛りの女のからだを、同時にふたり乗せて運ぶには、体力がなさすぎたのである。

床の上に平たくひしゃげた馬の背で、宣子はいつの間にか手にしていたほうきの柄で、何度も何度も老人のしりのあたりを打ち続けた。

六、泣き声

ある日、宮子はじいやに向かって、ぜひ一度でいいから恩人の八あしながおじさんVに

会わせてくれるよう、頼んだことがある。じいやは、腹立たしいまでに不後要領な返事で彼女をじれさせた。

「いいこと、わたしの身にもなっちゃんない。相手がだれだかわかりもせずに、その上こんなわがままをいって暮らすのに、その人の名も顔も知らずに過ごすなんて、どうにもがまんができません。それにお前はいい何者なの？」

「はい、お嬢さま、わたくしは一介の召使いにすぎません。旦那様に拾われて、こうして無事に過ごして参りましたが、ハイ、お嬢さまにお任せしたことがありまして……、旦那さまのお嬢さまは、それはあなた様みたいなきれいなお方でして、その上ご利発でご活発なお方でいらっしゃいました。

わたくしは、旦那さまのお言いつけがなくとも、こうしてお嬢さま方にお任せしていたいのでございます……。

旦那さまのことは、それだけごかんべんください。もしかすると、そのうちおわかりの時が来ると思いますので、それまでごかんべん願いたいです」

宮子は、慣れるに従って、じいやの扱い方のコツをおぼえるようになった。そしてその時々の日記みたいなおぼえ書きを、名も知ら

ぬ後援者に書き送るのであった。じいやに托して届けられる文面の中でだけ、彼女は彼とつながり、彼の好意に対しての謝意を、キタンなく述べることができた。

「きょうわたしは、じいやに大変ひどいことをしてしまいました。彼がそれを望んだのです……。こう言えばうそになるかもしれません。わたしは冷酷な女なんです。ね。冷酷な血が、こんなにわたしの心をかき立てるとは、思ってもみませんでした。

じいやのからだに、あんな傷がつくとは思ってもみませんでした。彼は常にない声で泣いたのですが、わたしは夢中でした。でも、おじさまにだけ正直に言います。こんなおもしろい遊びがほかにあるでしょうか。相手は自由がきかないようにくくりつけてあります。それを初めは平手でぶつのです。それからこぶしをかため、ついにはムチや棒で力いっぱいいるのです。その時、相手の泣き声が大きければ大きいほど、わたしはすっかり昂奮してしまうのです。これはいったいどういうことなのでしょうか」

宮子は、こんなにあけすけに、自分の気持ちを書きつづけたのは、どうせおじさまとは会うことができないのだ、というあきらめと、

見たもの聞いたもの

■靴下のふくめん

2月3日、GBSネットのアメリカ・テレビ映画「サーフサイド・6」の「完全犯罪をくずせ」は、ちょっとしたフランス映画ムードがあっっておもしろかった。

その中で、ギャングたちが、歌姫の首かざりを強奪しようとフロアに乱入する際、ストッキングをひろげて、すっぽり頭からかぶる。余った端を首に巻いてふくめんするのだが、このギャング・スタイルは変わっていた。顔になにか不透明なクモの巣でも張ったような感じで、それが婦人靴下というところが、フェチ的なくすぐりを感じさせて、興味があった。

題名は忘れたが、やはりアメリカのテレビ映画で、怪漢のちん入におどろいた娘が、あわてて手あたりしだいに衣類を投げつける場面があり、そのなかに、シュミーズやブラジャーにまじって、パンティがあった。

パンティを顔に投げつけられた男の表情に、なんともいえない、おかしみがあつた。(尻)



同時に安心感がそうさせたのに違いない。顔を合わせることもある相手だとしたら、もつとえん曲な言い回ししかできなかったに違いないことを知っていた。

しかし、折々彼女の頭の中では、もしやじいやが人あしながおじさんVの正体では、と疑ってみることがあった。なんの根拠もそれにはなかったが、ふとした瞬間、そう思ったのだった。だが、あまりとつびすぎる着想に、自分ながらおかしくなった。床にはいつくばって、足の指などペロペロなめたりするあのじいやが、何でわたしの人あしながおじさんVであり得よう。

ただ、物語としてはそのほうがおもしろい気がした。何でそのほうがおもしろいか、そう自問してみると変に面はゆい気持になった。

とにかく、毎日があわただしく過ぎ、宮子もその生活に慣れた。

慣れるということは、恐ろしいほどの効力を持つ。毎日宮子のように、人から床にはいつくばるような奉仕を受けつけてくると、自然にそれが日常の習慣になる。一度そうして習慣づく、宮子に限らず女性は皆、その習慣を大事に守ろうとする。こうした保守性は特に宮子のような深窓育ちの娘には強かった。

だからもし、じいやが毎日の習慣を破り、女主人の奉仕に当たって手を抜いたり、また召使いにあるまじき不そんな態度を彼女に示すことがあるとすれば、彼女は決してそれを容しゃしないであろう。召使いを罰する方法についても彼女は少しも困りはしない。よくそのことは承知してしまっているはずだし、それがまた彼女の新しい習慣なのだ。

「わたしが人あしながおじさんVだ、あなたの恩人なのだ」

とじいやがまじめくさって白状すれば、ただ女主人のびん笑を買うだけのことで終わるに違いない。

(了)

おえん地獄夢

五斗六太郎

古正英生・絵

おえんの雪の肌にいつのまにか一の字のうす紅が浮びあがって……

一

「あら、江戸屋さん、もう、お店、おしまいにするの？ まだこんなに明かるいのに」

右隣りの小間物みせ、近伝の女房が、店先から顔をだした。

「ええ、うちの人が親類の不幸で、雑司ヶ谷へ出かけちゃったもんだし、どうせ今夜は、お通夜で、帰ってこれないだろうといっておられたし、わたしも、きのうからからだの具合が……、なんだか、どうもたいぎで」

ふりかえって、おえんがこたえた。

「それはいけませんねえ、春そうそうから。でも、おえんさん、もし風邪だったら氣をつけなさいよ。今年のかぜはとてもたちが悪いっていうから……」

あら玉の年を迎えて、松の内の店のにぎわいも、ようやく静まった今日十日、ひる過ぎから急に吹きはじめてきた強い風に、もう、とそ気分のすっかりぬけきった人足がまばらに動く並木通り、暮六つにも間近い。

「関東のからっ風」

おえんはぼつんとつぶやきながら、がらがらと店の板戸をしめにかかった。

いつもはおしゃべり好きの、隣りの女房の顔も、寒いのでいつの間にか奥の方へ消えてしまった。

浅草雷門のおひざ元、並木通りの絵草紙みせ江戸屋は、おえんの世辞愛嬌と、江戸前の仇っぽい容姿で、店相当の繁昌をみせていたが、今日は明かるいうちから、久しぶりの早じまい。近所の子供が五、六人、きょとんと

した顔つきで、おえんの戸をしめる手つきを見つめていた。

二

「まア、正さん、何て気が早いんだろう、お天道さまがまだかくれてやしませんよ、正さんったら」

あるじの才兵衛が出かけたあとは、おえん一人っきりのこの店に、若い男が忍んでいた。小ぢんまりとした四畳半の小座敷に、男はあくらをかいている。長火鉢の猫板には二合徳利、皿小鉢などが雑然としていて、さかすきが、男のてのひらで、踊りを踊っていた。色白のやさ男だが、悪酔いのためか、顔にうつすら青みが加わってきている。

目がすわってきている。もう、だいぶ前か

らやっていたらしい。

「正さん、ほんとうに手回しがよすぎるよ。だが、おとつつあんは、大丈夫だね、帰ってはきませんね」

若い男は、おえんをじっと見つめている。座敷の片隅にはもう、寝じたくの夜のもの、二つの枕までが、二人を待っていた。

色このみのおえんでも、さすがになかばは

呆れている。

「泥棒猫だね、まるで……、親父のうちでありながら、人目をさけてこっそりと、裏からしのぶそのせつなさ……」

「なにをいってるんだよう、頼みもしないのに、正さん、隣り近所は大丈夫だったかえ」
「おっと、みなまでおっしゃいますな、おっかさん、ほんとに今日は大安吉日、時節到来、

国芳先生に音羽屋の似顔のことで、どうして

も今日中に打ち合わせをしなけりやならないと、雑司ヶ谷でお線香一本、あげるのもそこそこに、飛んできたあたしだ、おやじだまして、おっかさんを盗む、いやはや、悪い件もあつたもんだ、どうか察しておくんない」
父親才兵衛ののちぞいにあたるおえんは、二つ年上の二十八、水茶屋暮しの浮いた世界



に育ってきたからだに、あそびの好きな正太郎がいつの間にか接近していったのも当然のことであつた。

と、正太郎の左手が、立っているおえんの足のかかとをつかんだ。右手は裾へ、浅黄色の湯文字へと。

「いやだよ、くすぐったい」

おえんははらいのけようとした。

が、今度は親指と人差し指が、ふくらはぎをきゅっと力強くひねりあげた。

「あいた！」

おえんは、思わずそこへペタリとすわりこんだ。

「ごめんなさい、おっかさん、さア一ぱい」

「もし正さん、おとつあんのいない時だけは、おえんと呼んでおくれよ、いやだよ、おっかさん呼ばわりは、第一、気分をまるでこわしてしまうもの……」

「すみません、おっかさん、ではこれからはおえんさん……」

浮いた稼業のおえんにとって、あまり激しかった男出入りのほとりさまし、三年前に連れあいに死なれて、独り寝の淋しさをかこっていた、今年五十七のまだまだ元気な才兵衛の浮気心をゆすぶらせて、隠居所がわりのこの店へ、ついにころがりこんできたのでは

あつたが、性来の色このみは、ここでも頭をもたげはじめた。

「おえんさん、お互いに因果同志となりにけりだねえ、親父の目をぬすんでの性悪ことは、出雲の神様もにが笑いだろう。この頃では、おえんさんを誰にもやりたくねえ、とられたくねえ、と思うようになって、いっそのこと、おまえを殺して……」

「そんなうまいことをいって、正さん、あんまり殺し文句をならべると、蔵前のご本宅、ご新造さんにいいつけて、その口を封じてもらいますよ」

「おしのはおしのだ、あいつはむつつりやで色気がねえ、きれいだがおもしろくねえ、そこへいくと、おえんさん、お前さんのからだは実にいい、すばらしい、これまでずい分と道楽もやってきたが、もう離したくなかった。さっきもいった通り、今日という今日は時節到来、待ちかねたよ、おえんさん」

弁天山の暮六つの鐘が鳴りおわって、星が降るような夜空ではあっても、ごうごうと吹き荒れる風の凄さは、相変らず江戸の町まちをふるえあがらせていた。

三

「正さん、苦しいよう！」

ながいこと正太郎の左腕が、おえんの肩を押さえいる。苦しがついていながら、おえんは正太郎のなすがままだ。と、今度は右手がおえんの胸へ、着ているものが力強くはだかれて、ふっくらとしたまっ白い乳房がチラリ、と見えてくる。

「ううむ、いたいよう、正さん……」

おえんが大げさな表情でもなく。
正太郎は、そのまま異様な抱き方をつづけながら、じっとして動かない。いつの間にか帯がとけて前が乱れる。襦袢のえりがピリピリとかすかな音をあげて破れた。



正太郎の顔が、おえんの横顔をおおった。

「いたァい！」

おえんの耳たぶを噛んだのである。

今度は頬つべたをがぶり。と、おえんが顔をしかめた。

「いたいッ、正さん、よしてッ、売りものだよウ、顔は、だいじなんだよウ、顔は」

と、おえんは悶える。両足をばたばたさせる。裾と湯文字がはねあがった。ゆたかな下半身がおどり出て、上半身の苦しさをうったえる。

正太郎にとっては、おえんを心ゆくまま、自由にすることは今宵がはじめての、また、おわりかも知れない。

「いっそのこと、殺してしまいたえようだ」
もう、無我の境である。

半とき、一刻、疲れきった二人が、ようやくグッタリとなって、激しい息づかいもなく、らか落ち着いた頃、表の強い風に送られて、という訳でもなからうが、黒い影が一つ、この家の裏口にあらわれて、じいっとなかのようすをうかがいはじめた。

四

風のいたずらか、雨戸のさんがゆるんでいたのか、黒い影は、いつの間にかおえんと、



正太郎のいぎたない寝姿の前に姿を現わした。枕二つが、とんでもないところにころがっている。

「きつう髪が乱れましたな、おえんさん」

「あっ、おまえは、梶川さん！」

おえんはとび起きた。店から半町ばかり先の、いろは長屋に住んでいる、浪人の梶川十内を目の前にして、正太郎もびっくりとび起きる。

「十、十内さん、なんだい、この夜更けに、

まるでどろぼうじゃないか」

正太郎がもつれた声で怒鳴るようにいう。

「はッはッは、泥棒ですよ、いかにも今宵は泥棒だ、しかも、ご新造泥棒だ」

「ええッ」

「けさがた菊屋橋で、才兵衛どのと、正太郎どのお会いした折、今日は通夜のため、遠方に泊りがけでお出かけのお話、好期いよいよ到来、奥山においでの際は、ひじ鉄砲をいただき通しのこの十内、幸か不幸か才兵衛

どのと、いつのまにか将棋友達と相成り、猫をかぶってこちらへ近づき、今では親身も及ばぬ仲じゃ、だが、将棋に力はいらなくなり、三度に一度は敗北いたすも、才兵衛どのの奥方がここにおられるため。しかし、運がよかった、今日という日が、こんなに早くこようとは」

「梶川さん、おまえさんも正さんと同じようなことをいつてね、だがいやだよ、おまえさんは。奥山の時分から、ふってふって、ふりぬいてきたおまえさんだ。今さら、やすやすと、いうことはきかれないよ」

「はッはッは、その言葉で、はいはいと、引き退ってゆく十内と見えますかな、下手にお騒ぎあると、近所手前がありますぞ、灯台もと暗しといえど静かに願ひましょう。お江戸名代の盛り場で、こんなこともおもしろい出来ごとじゃ」

梶川十内の声は、おどしとも、さげすみともつかない、無気味なしわがれ声だ。それがかえって二人の胸のなかをふるえあがらせ、十内の顔をにらみつけるだけで、身動き一つ出さない。正太郎がふるえ声でようやく口を開いた。

「おい、十内さん、こんなところを見られちまって、こっちもめんぼくねえ、が、今日か

らはおえんは誰にもやれねえ、たとえ親父でも。ねえ、十内さん、おとなしく帰ってくれ、遊びのかねには、けっして不自由はさせねえから」

「うるさいなア、正太郎。もう、なにをいわれても聞き分けのよいそれがしではなくなつた。時刻が移れば、うつるほど、楽しみのすくなくなる色事だ。正太郎さん、気の毒じゃが一晩ご辛棒願ひましょう」

どっしりとした図体、三十を幾つか越したこのたくましい浪人は、素早く正太郎にとびかかつていった。

おえんのしごきで後手に固く縛られた正太郎は、十内の腕にかかるかと抱かれて、押し入れの中へほうりこまれた。

「二人とも、猿ぐつわの必要はなしと……、声をたてれば身の破滅、か、ふふふ」

十内はふくみ笑いをしながら、おえんに寄りそっていく。おえんは力まかせに十内をつきとばした。

「いくら男好きのわたしでも、おまえばかりは大嫌い、いやといったら金輪さい、誰がいうことをきくもんかい！」

「いったな、おえん、では、こうしたらどうだ……」

十内は馬鹿力を出して、おえんの両腕をう

しろにねじあげた。背なかに両手がひつついて、わきの下までがいき苦しい。

「ううむッ」

うめいておえんは、ひざに顔をふせる。

ねじった腕をしっかりとつかんで十内は、ずるずると押入れの前に、おえんをひきずってきた。おえんは横倒れとなつて、そのまましどけないからだつきでひきずられてくる。

十内はぱつと手を離れた、押入れの戸をすばやくあけた。上の段のつづらに、さつき目をつけておいたからである。いや、つづらにくくつてある細引きに目をつけていたのだつた。

「ひえッ」

と、おえんの悲痛なさけび。十内はぐい、ぐいッつつづらの細引きをときはじめた。

「ふうん、たつぷりと十五尺はありそうだ。

おまえがあんまり暴れるので、とうとう手荒な真似をするようなことになつちまつた。往生するんだ、これ、奥方」

ふくみ笑いをつつけながら、十内は一生けん命、つづらから細引きをほどきつつける。

おえんは苦痛をこらえながら、首をすこしあげた。両の手をじりじりと十内の片足に近づけていった。ぐつとつかんで首をよせる。

「な、なにをする、おえん」

つぎの瞬間、十内は足をがぶりと噛みつかれてのけぞった。

とっさにおえんは店の方へ馳けだしていった。今までの苦痛はどこかへ飛んでいってしまつたようだ。

十内はびっこをひきながら追っていく。

暗い店の土間から、おえんの姿が浮かびあがった。その手にはしつかりと、商売ものの紙のたち切り庖丁がにぎられていた。

「馬鹿っ、なにをする」

十内は、ほどけた細引きを片手につかみ、それをむちがわりに振った。おえんは庖丁を無茶苦茶にふりかぶりながら、十内にむかつて突進していった。

さすがに十内はてこずった。

「きゆう鼠、かえって猫を噛むか」

がらがらと座敷の中のもの、ひっくりかえる、つぶされる、灰神楽もたつた。

おえんはあくまでも十内に対して、抵抗をつづけたかった。だが、痛めつけられたからだが、いうことを聞かなかった。

「くやしい……、くやしい……、やせ浪人」

夜にはいつて、ごうっ、ごうっとなおも吹き荒れる風の音、近所の火の見る半鐘が二つばんを報らせる。火事は四谷か、小石川あたりか、西の空が、うっすらと赤味を帯びてき

た。

五

「骨を折らしたなア、おえん、やっこきとわしの前に、おとなしくなってくれたな」

十内は大あくらをかきながら、おえんの寝乱れ姿を見おろしていた。茶碗で何ばいかあおった大口から、酒臭い息が絶えずおえんの顔の上へひろがる。

おえんは、敷ぶとんの上にころがされていった。湯文字一枚の痛々しい姿態である。くやし涙であろう、顔中に涙があふれている。うしろ手に縛られているのだ。

「畜生ッ！」虫の鳴くような細い悲痛な声をあげて、足をばたばたさせた。弱腰からふとももへかけてが、今のおえんの、かくしどころであった。だが、足をばたつかせるたびに、湯文字の裾がまくれて、むっちりした両ももが躍りだす。十内はそれを嬉しそうに見つめる。そうして、おえんの両足をきちんと押さえつけ、湯文字をのばして、足へきれいに巻いてやる。その上からしりのあたりをポンとたたく。

「もう、暴れても無駄な話よ、おまえのからだは、今から、おまえのものでなくて、わしのもものだからな」

おえんの手首はかたい縄目にちぎれそうだ。幾重にも固くいましめられ、血管のながれがとまっている。

固く縛った結び目を、つぎに両肩へまわして腕のつけ根をふた巻きしてある。ここはいっそうかたく、紐がすこしズレて二の腕がひょうたんのようにくびれていた。肉づきのよい二の腕は、赤味をさして、苦痛が加わった。「おい、そのかわいい口で、よくもわしの悪態を、さんざ毒づいてくれたなあ」

十内は、いきなりおえんの鼻をつまんで、火鉢の上のふきんをつまみとると、口の中へ押しこんだ。大きな手のひらで、おえんの口がふさがれる。

それから、どこからかうす汚ない手ぬぐいをひっこぬき、おえんの口と鼻とをふさぐ。首のうしろで、ぎりりとしめあげるのだ。

おえんの目が、カッとみひらかれる。恐怖と憎悪の目。しかし、その切れながの目が、たまらない色つぼさで十内にせまるのだ。

「うふふふ、にらめ、もっとにらめ。そうやって口と鼻とをふさがれ、ふたつの目だけでもがく美しさは、おれの心をとろとろとろかす。おれの胸に火をつける、うふふふ」

飢えた狼の笑いだった。その笑い声のいやらしさに、おえんはすく

みあがる。

(あッ、あッ、ち、ちくしょう。まアなんてうす汚ない声をだす素浪人なんだろう。こ、こんな山犬みたいな乞食浪人に、あたしのからだになぶられてたまるかい。だけど、ああ痛い。く、くるしい。縄が胸乳のしたをしめつけて、い、いきができない。なんてえ馬鹿力なんだろう、く、くやしい！)

声がだせないから、胸のなかで悪態をつくおえんだ。

くるしいから、もがく。もがけばいいよ白肌がむきだす。白肌がむきだせば、十内の目がますます光り、おえんの四肢五体、すみずみまでをなでまわす。

(ち、ちくしょう、こんなにめちやくちやに縛りやがって、なんてえ、不粹な浪人なんだろう。こ、これじゃ、どうすることもできや

しない！)

もう絶望だった。どんなにあばれたところで、哀願したところで、この素浪人はゆるしっこない。

それなら、いっそ縄をといてくれれば……と、おえんは思う。

「うふふ、もがけ。あばれろ。もっと目をむけ。白い目でおれをにらめ。お前の顔は、そんなときが、いちばん美しいぞ」

そんなことをいいながら、十内の手がおえんの髪の毛をつかんでひきずりまわす。

「うッ、ウッ」

と、おえんは顔をゆがめて悶えた。

息がとまる、目をとびだすほどみひらいて、からだをくねらせる。足だけがまたばたばたと宙におどった。さらにめくりあがる。

「さア、顔の仕置きはこれくらいにして、今

だ。吸口の方をしっかり握って縄目へ雁首を

突っこんだ。こじる、やたらにこじる。紐の結び目のゆるんだ湯文字が、きせるにからみついて、ピリリ、と裂けた。痛さをこらえて、本能的にひざを合わせる。

十内はきせるをぬいた。

腰から、ひざ、足のつまさきまで、おえんのからだを、じいっと見つめた。

雪のような白さと、二つの脚線が、十内の眼を射た。

「この足腰だけでも、男を悩ますに充分だわえ」

きせるの雁首がピカリ、と光った。太ももが音をたてた。ピシリ、ピシーリ、十内の手先に力はいる。つづけさまに、きせるが鳴る。白いももがくねる。まるで白蛇だ。白蛇がのたうつ。

「ひいいッ！」

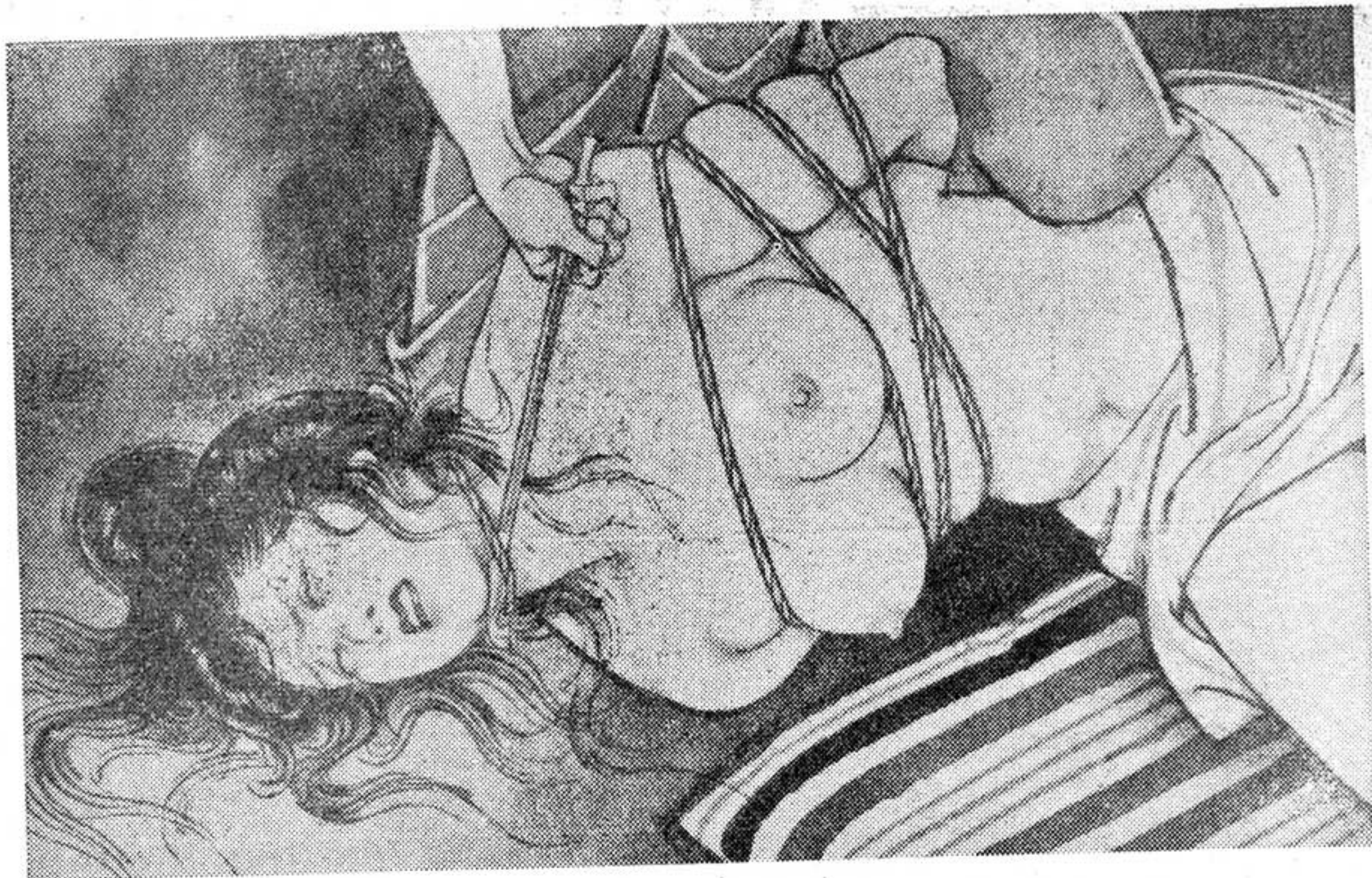
おえんの悲鳴。はッとして、十内はのど首を押さえた。

「ウッ、ウッ」

と、うめきも出なくなったおえんの、悲しい息。腰をはねあげる気力も消えていた。わずか、ひざを上げ下げするだけにしかすぎなかった。

十内は、そばにころがっていた長煙管をつかん





足で十内に抵抗してやり
たかった。せめて、急所
だけでも蹴ってやりたか
った。

（でも、もうおしまい……
、このまま、殺されて
しまうのかも知れない）
自分のはずかしいすが
たに氣をとられるだけ
が、精一ばいだった。

しわくちゃんになって、
ともすればまくれあがる
湯文字を、ひざではさみ
こむ。その腰のうねりに
十内のにこった目が楽し
そうである。

十内はあおむけのおえ
んのからだを、ごろりと
ころがした。すんなりし
た背なか、弱腰から下腹
部へかけて豊満な肉のか
たまり。それが、むちむ
ちと息づくのだ。あらゆ
る男の目と心を殺す、女
ざかりの肉づき。
「うッ」胸を圧迫されて、

うつぶせのおんなの顔の色が、しだいに青く
なっていく。

つつけうちのきせるのむち、おえんは辛う
じて、ひざを折りまげた。ぐうッと顔をあげ
た、起き直ろうと試みた。必死であった。

「こいつウ」

十内は、おえんの頬をはった。おえんはま
た横倒しとなった。背中から、腰がまるで芝
居でもしているように、くねくねとくねった。
おえんのむっちりとした雪の肌に、いつの
まにか、一の字のうす紅が浮びあがってきて、
からだ中の痛みとともに、手首のいましめが、
悶え、苦しむおえんにますます食いついて、
息がとまるようだ。

（くやしい。このままわたしは、こいつのた
めに、なぶり殺しにされるのか！）

六

まだ夜明けには半刻あまり、大江戸の町ま
ちを、あれほど吹きまくった強風も、やっと
静まり、降るようにかがやいていた星も、一
つ、二つと消えていった。

おえんは、いつのまにか縛られたまま眠っ
ていた。風のやんだ夜の静けさのなかで、ス
ヤスヤと寝息だけが軽く聞えている。

（ふしぎな女だ！）

十内はまっ暗な部屋の中で、女の髪の毛の匂いをかいている。あれほど責めさいなみ、死ぬ苦しみをさせて、身悶えにのたうっていた女、そのおえんが、いまは、ここちよげな眠りをむさぼっている。

(この女のからだは、男をとろかす力を持っている。女を意のままに、喜ばせる、なびかせる、従わせる自信のあったわしが、かえって女にほんろうされてしまった)

十内はつぶやいた。

丸く、大きく、盛りあがった乳房が、なまめかしい呼吸をくりかえしている。

「ううん、苦しい、梶川さん、もう、いや」

おえんは、眠りを妨げられて、おどろいたような声をあげた。

「苦しいったら、梶川さん、またつづきをはじめのウ」おえんは、まだ夢のなかにいる。地獄夢か。あるいは極楽夢か。

「起きろ。おえん。もう、いいかげんに目をさませ」

あきれたように十内がいった。

「だって、まだ、ねむい……」

むにやむにやとつぶやきながら、おえんはひとつ寝がえりをうち、うす目をあけた。

「たいした女だ。縛られたまま、ねむられるのか」

いささか、へきえきした形の十内だった。

おえんの目が、ようやくひらいた。

うっとり、十内の顔を見あげるのだ。

肌身にぎりぎりくいこんだ縄目を、すこしも感じていないような表情なのである。苦痛の度を越し、極度に感覚がしびれて、もうすてばちになっているのかもしれない。ぶきみな肉体をもった女だ。

「ねえ、十内さん」

さすがに寝ぶそくか、まぶたをふくらませたおえんの顔が、ふしぎな色っぽさをうきあがらせて、十内の目のおくをすかしみる。

「む、なんだ？」

「たいへんなことになっちまったねえ、あたしたち」

とろけるようなおえんの声だ。

十内は、背すじに、ぞくりと妖しいうずきをよみがえらせる。

半裸のまま縛られ、まぶしいような白びかりのおえんの肩が、胸が、腰のくねりが、ことば以上のことばを、十内につけているのだった。

「とにかく、その縄をといてやろう。もう縛っておく必要はない」

とこうとしたが、肉が縄を噛んでいて、なかなかほけない。十内は、とんだところで

苦勞をした。

おえんの肌に、くつきり残った縄目の跡。おもわずそれを愛撫している十内の手だ。

さすりながら、十内はかんがえる。

(いま、この女に、三人の男がいる。そのうちの、一人以外には、女を最後のどたん場まで喜ばす男はいない。この女も同じだ。男を最後まで喜ばしてくれる。どっちみち、あと二人は消えてもらわなければならない、消えろ、消えろ、才兵衛も、正太郎も、どこかへ消えてうせろ……)

暗い町なかから、一番どりのなく声が尾をひいて聞こえてきた。

七

正太郎は、雁字がらめに縛られたまま、押入れからひきずり出された。

猿ぐつわまではめられた、この蔵前本だなの若主人にとって、これは、あまりにも無残な、だらしない態たらくであった。

「おえん、おまえの計画はうまくいくかな、それにわしは、まだ人殺しということをやったことがない。なんとか、ほかに方法が……」
「いくじがないねえ、十内さんは。毒食わば皿、正さんさえ片づけければ、あとは年寄り、わけはない。手はじめに、やってごらん」

「驚いた、いよいよもって悪女だな……」

「これもみんな、十内さん、おまえさんのせいじゃないか！ それに、わたしは、人を一人、殺したことがある……」

「ええっ、人殺しか」

「わたしのおとつあんは、信州でやくざもなかった。さいころのこたごたで、土地のものに、暗討ちをかけられ、三日たつて、わたしの亭主になる人が、そのかたきを、ふん縛って目の前へつれてきた。さんざ怨みごとをいったのち、手拭いでしめ殺した。他愛のない死に方であつてなかつた。その晩、水車小屋のなかで、その男と、しつぱり一晚名残りを惜しみ、それっきり、はかない、永のお別れさ……」

十内は、ぶるつとふるえた。

「だからさ……、おまえさんが、いつまでも強がつているだけで、手を出さなければ、わたしができるよ……」

正太郎は、あまりの恐怖に、もだえ、おのいている。自由の利かない正太郎の首を、おえんは、かかえ起した。にぎっていた手拭いをぐるっと一巻き、肉づきのいい、たくましい両の腕に力がこめられた。

おえんは、右ひじを立てひざの上に据えて手拭いをぎゅうッ、とひと絞り、手元へひい

て、また力一ぱい締めあげた。

男の断まつまのうめきを聞きながら、おえんは、からだ中の血が、こころよくうずいてくるのを、ひしひしと感じた。

二十日ばかりすぎたある日。

並木通り、江戸屋の出店、おえんは相変らず、美しい丸まげぶりを見せて店が忙しい。

あるじ才兵衛は、あの惨劇のあつた奥の座敷で、ぼんやりと、将棋の駒をもてあそんでいた。盤の向う側には、梶川十内が、これも元氣のない顔で、駒をいじくっている。

二人とも勝敗を争う氣力がわいてこなかった。なにかもが悪夢のあとであつた。

「才兵衛どの、正太郎どのも罪深い御人じゃつた。あの夜、かりにもあなたの妻、母と呼ばねばならぬおひとにいどみかかり、不意に現れた盗賊のために、若い命を失うとは……、かえすがえすも、情ないことじゃつた……」

「梶川さま、今さら愚痴でございますが……、ほんとうに情ないやつでした。それでもあの時、観世音へ朝参りのあなた様と、お隣りの近伝のおかみさんが、早く変事を見つけてくだされたので、おえんの生き恥が、弥次馬たちのさらしものにならず、すみしました。あれも、一晚中賊のために手痛いしましめられ、

なぶりものにされました。しばらくの間は、死んだようでございましたが、やっとこの頃、元氣になりました、今はもう、あれだけが、私の生き甲斐でございます」

「それについて、才兵衛どの、うわさによりますと、三日ほど前、稲妻小僧という不敵な盗賊が捕えられたそうで、奉行所では、正太郎どのの下手人として、厳重にお取調べの由、それがしも、たしかにあの夜の凶賊は、そやつではないかとにらんでおります」

「そうでございますか、それは喜ばしい。恐ろしい盗賊が捕えられれば、それだけ町の人たちの心が休まる。ありがたいことじゃ。だがおえんはかわいそうなやつだ、あの晩のことは、一生忘れることはできませんまい。目に見えない傷あとが、大きなしこりとなって、残ることとてございましょう……」

その夜も、相変らずおえんは、才兵衛との睦ごとに輪をかけた。

才兵衛は、途中で拒んだが、おえんの計画的な欲望が、年寄りの拒みをしりぞけた。

からだ全体が炎であつた。あわれな、この年寄りを、焼きつくそうとする肉の炎は、今夜もまた、精かぎり、こんかぎり、燃えさかっている。



読

者

コ

1

ナ

1



▼はじめて投稿いたします。書店で裏窓（三月号）を見いだした。なんとなくページをめくって、おもわずすばらしいとつぶやきました。そこですぐ買い求め、電休日を利用して一日中読みふけりました。このような雑誌をいままでに読んだことがなく、内容もさし絵が数多く非常に充実したものであったからです。「女人伝奇館」は読み物の中でも、もつともおもしろく読みましたが、おいしいことにさし絵が同じようなのは、少しものたりない感じでした。そのほか「美妃責め行者」は絵も文も申し分ないものでした。こういう類のものをどっさりのせてください。小生は時代もの、とくに忍者も

の、間諜ものをこのみます。最後に貴誌「裏窓」は他に類なきものであることを：（新潟K生）▼グラビアの縛り写真が多くなり、それぞれに迫力があつて見ごたえする。とくに「ぶどう棚の女」「くらいいへやのムード」など傑作。芸術写真とともにリアルなものが多い。編集者がベテランだけに時代物の責め小説は第一だろう。「海老沼武七の執念」三月号のトップに押したい。つづけてこのようなものの連載がほしい。「日本拷問史」は考証学的にも読みごたえがありたのしみ。絵物語にも時代物を多くほしい。（一緑林）▼毎号グラビアとさし絵にひかれて購読しておりますが、最近

では編集長みずからグラビアページにも参加され「裏窓」ファンにとつて心強いしだいですが。しかし他誌のグラビアページ数には追いつきませんが、その縛りと新鮮なアイデア、モデルのフレッシュさを買います。それに美しいさし絵とベテラン作家陣の息の合ったところにSMマガジンとして第一級であると思えます。三月号編集後記にも記されてありましたが、秋山氏のいうようにグラビアページを増し、定価を上げてよいのではないでしようか。内容が充実し高度なSM誌ができあがるとき値段が増額されたからといってだれが「裏窓」から遠ざかつていくでしようか。マスコミで公

☆他にも多くのご投稿がありましたが、スペースの都合で掲載できなかったことをおわびします。このらんの投稿はハガキでも結構ですからご自由にお書きください。

今月掲載しました方には、本誌次号をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所・氏名はお書きください。（読者コーナー係）

然とアブの世界が紹介（？）されてる今日、いま以上の読者を「裏窓」が招くことは可能であると思います。編集部諸兄姉の千辛万苦にもくじけぬ強い強固さを期待します。（長野・小林）▼裏窓三月号は新装以来一カ年を過ぎるが、このあたりでそろそろ質的に脱皮してほしいような気がする。つまり幼蟲から成蟲になることだが、誌中某氏の言葉じゃないがテレビで存在を認められる以上、せめて浅草界限の芝居小屋から台本要請がほしい。ちよいあるくらいにこぎつけたいものである。「マングロープの葉かげで」は多分雪がふるであろう南の島の、さしずめ一幕物であろうし、「煩惱地獄医者」が総天然色フィルムならこのシーンめがけてファンはふえるにちがいない。いま流行の雑誌が、その大半は目で判読するものでなければ大人の雑誌ではなからうし、また座右にはべらす意味もないであろう……と考えると質的にカメラ雑誌以上にぬいているグラビア「ソファベッドのある部屋」「可憐な縄目」「暗いへやのムード」など見ていてうれしい、というより本誌の唯一の異色でありサイレ

ソトの数コマだから、ぜひ続けてもらいたい。筆者は画家でもカメラマンでもないが、縛られた女の斜め横向きや後ろ向きの哀れさには正面向きよりも魅力と迫力を感じるのだが、「SMコント三題」くらい分析的に随筆風に、どなたか書いていただくと大へんうれしい。その理由は縛り小説にはスピードは禁物だからである。ゆっくり落ちついて女の手を觀賞しながら念入りに縄目をつけていくところにダイゴミがある。リバイバルチームで猫も杓子もきものを着るのはよいが「極楽バンテイ往生」のごとく、三文週刊誌として、「裏窓」が路傍のツユのように消滅せざるようくれぐれも用心の上、折々は汚れたツンパなりお腰なりを十分洗たくして号数を重ねてもらいたいものである。

(東京・由茂 滋)

▼ながかった一カ月もようやくすぎ、ふたたび「裏窓」をしつかりと手にすることができました。時に、一月二十三日午後一時三十分。この日、天気晴朗なれど、風つめたし。

まず、写真から官評をいたしますと「沈黙のポーズ」においては、モデルは百点。高倉光子

さんは、からだつきといい、顔といい、なかなかの美人です。とくに、最後のページの写真などは、S派好みの顔をしていまして、プルンとつきだした乳房もすばらしい。私はこの写真をみていますと、形のよい彼女の鼻を、ぐいと下から突きあげて、いじめてみたいような気もちになつてきます。彼女には、M女性の雰囲気があったよつていうことです。ガッチリうしろで縛られた両手もよし、柔肌をくびつてしめつけている縄もよし(編集部の方はお気づきかもしれません)が私は黒色の女の下着にひかれます)まず申し分ない作品です。そのつぎにいいのは最初のページのものです。高倉さんの表情はなかなか生きています。しかめた目のあたり。しかしこの写真で彼女のいきいきした表情に効果をあたえているのは、彼女の髪の乱れではないでしょうか。といつても乱れすぎず演出の藤見さんのご苦心がわかります。また髪が一本一本写っているのは吉田カメラマンのお手柄でしょう。カメラの冴えに敬服いたします。けれど演出の藤見さん! ちよつと申し上げたいことがあります……それは三

ページ目がとくにそう思うのですが、手首を縛ったときは、そこにあまり縄をこてつかせないで、しつかりと縛り目を見せていただきたいのですが——それからサルグツワ、なんだかゆるいようですね。二ページ目なんかサルグツワがゆるいのでおつこちなように彼女下アゴを突きだしているんじゃないですか。来月号に期待します。「ソファベッドのあるへや」これは同じ演出の作品にしては「沈黙のポーズ」より落ちます。その理由は、こしらえた感じがするからです。第一ページ目はとくにそうです。「ハイ五月さんは上を向いて、笑い……天城さんは五月さんのものにも頭をつけて体を横にして、いいですか、ハイとりますよ。パチッ」なんだかそんな藤見さんの声が聞こえてきそうです。だから迫力がないのです。それに五月さんを縛った縄がゆるいじゃないですか。だから五月さんくすぐったくて笑っているのかな? 二、三ページの写真も同じ、だめ。八重さん優子さんという美人を使いながらおいしいなあ。しかしひろい物があります。それは二ページ目の右上の写真です。これを大

きくのせていただきたかった。黒いタイツが官能的な光沢をしています。四、五ページ目は二、三ページ目より格段のちがいでいいです。ソファに二人並んでねかされているのは、いい表情です。とくに五月さんは縄目の味をかみしめつつ一種のあきらかににもた表情をしている。天城さんはちよつとはじらいをふくんだ顔でうつむいている。ですからもつとしつかりおふたりを縛るべきでしたね。黒いタイツのは静的な中にも動的な感じがあるいい写真です。しかし一つ苦言。左の方のモデルのもののあたりにある縄の束がじゃまです。なぜこんなところに置いたのですか。太ももを見せなくてはいいけません。おいしい写真でした。六、七ページいい写真です。じつと見ていると「なぜ女はこうも縛られなくてはいけな



何んですって？これは失礼。この六、七ページの写真いいですが、天城さんのお尻の丸みを強調するようにとるべきでしたね。こんなダブダブのものをまわせないで。五月さんの方はお尻のくぼみがほの見えてまああのできです。お尻の丸みで思いつきましたが、四、五ページの二人でねている写真で五月さんにもつとピッタリしたパンティをはかせるべきでした。最後のはおもしろくありません。もうこういうのは見あきています。しかし天城さんの表情はいいです。演出の藤見さん、この最後のページであなたが狙われた点をつあててみましょうか。いくつかあるうちの一つだけですよ。それは五月さんの鼻孔を見せること、でしょう。はずれましたか。もしそうだとしたら残念ながら成功されなかったようですね。むしろ天城さんの何かこらえたような表情における鼻孔の方が官能的です。(これは五月さんの鼻が美しくないといいのではなく演出の責任ですよ)ところで藤見さん、鼻孔はこういうのが一審男の官能をそそるものだというよい写真が三月号の中にあるのですが、お教

えしましうか。それは「もだえ三態」その下段のモデルさんの鼻孔です。これは一月号「熊笹のなか」と同じモデルさんだろうと思いますが、それです。「熊笹のなか」もよかったがこの「もだえ三態」下段のものはじつによい作品です。ただおしいことに写真がみな小さい。三月号はいい写真が皮肉にも小さい。このモデルさんのうっとりした目、黒くろとした鼻孔、ぐつと太く巻きついた豆しほり。柔肌をきびしくしめつけた縄。長じゆばんの光沢。ああ、もう何もいうことはありません。ほんとにこれをどうして大きくしなかったのだろう。左上の吊りもよいです。柔かい尻をぐいと縛った二本の縄が効果的かつ印象的です。右上の一月号「雪の朝」と同じ写真でしょうが、私の買ったのは雑誌の印刷がこすぎて黒色がちで写真が不鮮明なのは残念です。「くらいへやのムード」すごくいいじゃないですか。どうしてこれをたった二ページにおしこんだのですか。これは編集長の責任ですね。あなたはこの罪ほろほしをしなくてはいいけません。というのは、これと同時にとった写真があつ

たらそれをもつと大きくはつきりと改めてのせることです。まん中の二人の女のもの(こういうとき一人は洋装だといいいですね)右上三番目四番目(これはよい)五、七、九番目のなんかすばらしいでかと思えます。「ぶどうだなの女」顔がはつきりしないせいかなんだかマネキン人形でも縛った感じでした。「白い背景」まず最初のもの首から太ももに縄をかけてしめ上げた方がよかったのではないかい。白いシユミーズに黒パンティのコントラストがいいです。背面(つぎの見開きページ)のものは何かものたりないと思つたらパンティがプカプカだからです。それでなかったら、縛り上げられた女の柔かいムードがにじみ出たと思います。つぎの二ページとも見あきていますから可もなく不可もなし。「可憐な縄目」右上のは股間縛りにすべきでありましょう。五月さんが天城さんを抱いている写真は同性愛的な責めを狙ったのでしようが、どうも焦点がぼやけたかつこうです。天城さんをもつとギリギリに縛り上げ、それをしっかりと横抱きにでもポーズをとった方が強烈に訴えたのでは

ないでしょうか。左ページの上は、天城さんが見方によっては痛さをこらえている表情でいい写真です。そのつぎの二ページものはぜんぜんだめですね。一体何を狙ったのですか。なぜこれを大きくのせたのですか。縛った縄がゆるんでいるじやないですか。「裏窓」ともあろうものがある写真、サルグツワは豆しほりにした方がよかったと思います。というの、黄地に白ではあまり目立たないからですよ。中段のいいです。つぎは小説。今月の色ページの読物はおもしろくありませんでした。第一縛り場面がないじゃないですか。「不貞現場の女」S派の読物としてはなかなかおもしろい。しかし最後のオチが何かはぐらかされたような気がしないでもありませんが読める作品です。二五、二八ページの責めの過程がいたりつくせりでサービス過剰の感もしますが、ソーセイジ縛りと円すい木馬がよかったと思います。ソーセイジ縛りなどやってみたい気がします。「女人伝奇館」ただ読んだだけ。別に感想もない作品でした。「由美子よ逃げろ！」

竹谷さんの作品は以前から好きでした。一種の竹谷調——いわく女が女を責める。女体のすみずみまで責める。乳房を責めるなど——女が女を責めるのは大好きです。男よりも女体のすべてを知っていますから男が作りだせないようなテクニクをあみだすからです。この中ではあけみが高田と共に由美子を責めるところなどおもしろい。これは好短編だと思います。「鞭と縄と美貌の迫害者」写真からストリーを作るものとしては二月号のよりこの方がおもしろかった。七十二ページから七三ページあたりがよいです。しかしこれを一読して思ったのは、少し理屈っぽいですね。もう少しやわらかみを出してほしい。それと写真の印刷がよくないのが残念でした。こういうのを大きくグラビアにのせていただけないでしょうか。じつに惜しい。

「SMコント」なかでも「マゾ女優」「イカと女体」がすぐれていると思います。二つともコントで読むのはもったいない。とくに「イカと女体」はまさに佳品と申すべく文芸専門誌に発表しても堂々たるものです。加代子の人妻らしさもさることな

がら、加代子が愛しているのは良人一人ということとをさとりず今でも自分のS的な愛ぶが彼女の上に優勢であると信じているが、意に反してそれが破られていく周平のかなしさ、さびしさはS派そのものであり、少くともS派の読者ならば周平に自己の姿を発見するでしょう。自己のテクニクについての自信過剰、一人よがりなどいずれもS派共通のものであらうと思います。しかしこれを文学的に見ると、おいしいことに最後で作者ちよつと調子を傷つけている。「イカの寿司を続けて七個も喰った」の一行は筆のはしりすぎと申せましょう。むしろ「周平は立ち上がり最後のグラスを干した」で筆をおくべきです。せつかく文芸性の高いS派小説を発見したよろこびが高かっただけに、ウツチャリが非帯に気になりました。「吸血鬼号の女囚」あまりりおもしろくありませんでした。以前の島本氏のように妖艶な作をおねがいします。「美妃責め行者譚」作者の学識の深さに敬意を表します。私も漢文学は好きなので、その意味でもおもしろく読みましたがS物としてはつまらなかつたです。「極楽

パンティ往生」SとともにFである私は、大へんおもしろく読みました。そして巨万の富でパソネイを買える早野老人、いくらでも盗むことのできる「おれ」がじつにうらやましい。じつさい汚れたパンティや腰巻きは魅力のあるものです。これから一作くらいは、こういうF物をのせてください。そして欲をいいますと、F物は(Sもそうですが)創作より体験談の方が生しく真に迫っているですね。「マングローブの葉かげ」もう少しネチネチ鈴子を責めていただきたかつた。あまり行きがよすぎますね。小説はこびも定石通り。「海老沼武七の執念」なんだかもう批評を書くのがつかれました。「畜獣デリムソン」男性マゾ物らしいので読まなかつたのですが、さし絵にひかれひろい読みました。思わぬひろいものがありました。そして三月号のS小説が束になつてもかなわないくらいの興奮をおぼえました。六〇ページの尋問から六四ページ上段がそれです。私は吉野を女にすりかえて何度も読み返しました。じつにいいですね。「裏窓」もこういうものばかりだといいいのですが……つ

ぎにさし絵。一般に低調です。都築峰子さんの絵は、女の表情といい、腰からももの線がなんともいえぬ感じなので、以前から好きですが、三月号はどうもおもしろくありません。都築さん、ちよつと力をぬかれましたね。いま一度初めからバラバラとページをめくりましたが、やはりこれといって印象に残るのは見あたりませんでした。最後はひとつお願い。海外のS写真やS物語をのせてください。それから苦言を一つ。印刷や製本によくご注意ください。私の買った書店には貴誌が三つあつたのですが、どれも写真ページに軽い折目が何本も入っているのです。そのなかでえらんで買ってきたのですが、家へ帰りよく見ると「沈黙のポーズ」に四本も折目がついていてガッカリしました。最近ちよつと不完全な製本のあとが目につきます。あらためていうまでもないですが、「裏窓」はその場かぎりで読み捨てる雑誌ではないのです。いつまでもいつまでもそばに置きたいのです。今後よろしくお気をつけてください。

(郷 保夫)

原稿募集



★創作★(四百字詰め)25枚まで

S・M、その他を題材とした作品をお寄せください。妖気ただよう、異色ある小説をお待ちしております。

★告白体験記★(四百字詰め)20枚前後

真実の告白、得がたい体験記をもとめます。本誌むきの原稿を、どしどしお寄せください。

★読者随筆★(四百字詰め)10枚ほど

本誌に適する風俗、社会、身边雑記、見聞記など、思いついたままを、かいてお送りください。

★裏窓雑報★(四百字詰め)10枚以内

映画、演劇、テレビ、ラジオ、週刊誌、月刊誌、新聞、その他における裏窓的なニュースをお知らせください。

★読者短評★

本誌最近号に対する批評、感想、希望などをお送りください。原稿紙におかきくださることも、ハガキでもけっこうです。掲載させていただいた短評には、本誌一冊(短評掲載号の翌月号)と二百円をお送りいたします。

◎掲載させていただいた作品には、相応の稿料をお送りいたします。

◎応募原稿は、それぞれの種別を朱書してください。

◎原稿の第一ページに、住所氏名をおかきください。

◎原稿はおかえし致しませんから、必要ある場合は、コピーをとっておいてください。

◎原稿は第五種郵便になりますから、五十グラムごとに十円の郵券をはり、開封にして投函をおねがいいたします。

◎原稿の送り先は、つぎのとおりです。

東京都中野局区内江古田一ノ二三〇二
久保書店内 裏窓編集局

編集

後記

▼先月号のこの欄で、増ページについての私案を申しのべたところ、意外にたくさんの方の反響をちょうだいいたしました。こんな隅っこ小さな欄にまで、読者のみなさまがたのお目とおしがあるとは、まことに、感激をおぼえたしだいです。

▼そのお手紙のせんぶがせんぶ「グラビア増ページ・値上げ賛成」のご意見ばかりでこれまた、恐縮いたしました。

▼けっきょく、二百円ということに決定しましたが、内容はごらんのとおり、値上げ分を数倍した、豪華けんらんたる重量感とひそかに自負しております。

▼単なる娯楽誌に墮せず、特殊な文献性をも織りこみ、しかも芸術的な香気をも維持した雑誌にしたい、というのが、編集部欲ばった念願です。

▼編集長を交代してから、早くも四カ月たちました。前編集長時代、すでにりっぱに完成された様式はそのままに、内容の深奥部において、新しい特色をだそうと心がけてきました。この四月号あたりから、ようやく意図したその狙いが、にじみでてきたような気がいたします。

(飯田)

妖蘭亭の愛欲

豊田一狼

密通と嫉妬、私刑と復讐とが、どすぐろく渦巻く妖蘭亭のなかに、めらめらと燃えあがる人妻心理の妖しさ……



① 廃屋

武蔵野台地の暗うつな林のかげを、ひとりの老人があるいていた。

道らしい道もない、さびしい場所である。

濃い森かげの、人目につかない暗いくぼ地に、ひとつの廃屋があった。

廃屋の周囲には、野生の蘭が、妖しいほどびっしりと密生していた。

——ああ……とつぶやくと、老人はその場に立ちどまった。

このとき、無人の廃屋とみえた屋根の下から、ひとりの老女が、すがたを現わした。

「お寄りなさいませ。お茶などいれましょう」
ふかいしわの微笑をうかべて老女はいった。

② 追憶

さそわれるままに、老人はその廃屋の庭へ足をふみいれ、朽ち縁に腰をおろした。

老人同志の気軽い感情が交流した。

「こんなさびしいところに、あなた、おひとりでお暮らしなのですか？」

だされた茶をすすりながら、客の老人がきいた。

「きいていただけですか、私の罪ぶかい身の上ばなしを……」

老女がいった。しわのなかに沈んでいる彼女のひとみが、このとき複雑な色に光った。

老女は、かたりだした。

「遠いむかしの話になります。私が、さよう

二十二、三才のころでございますもの——」

彼女の名は、秀子といった。秀子の夫は、

久世蘭骨という、日本画家だった。

蘭骨はすでに四十をこえていた。草花だけしか描かない画家で、ことに蘭ばかりを熱心に描いた。家の周囲に、あらゆる種類の蘭をあつめては植え、繁殖させた。

そして、この家を妖蘭亭と称した。世間の交際をきらい、変人とよばれていた。

妖蘭亭には、蘭骨夫妻のほか、弟子がひとりいた。沼井草一という青年で、師夫妻と起居を共にしていた。



③ 密通

秀子のからだに、妊娠の徴候がみえたときから、この家に不穏のかけがまといついた。蘭骨は、性的不能者だったのである。妊娠はそのまま、秀子の不貞を意味した。

あからさまに、蘭骨は怒った。「だれだ、腹の子の親は、だれだ！」秀子は責められた。返事を拒絶した。うしろ手にされても、口を割らなかつた。不能者にもかかわらず、いや、不能者なるがゆえに、蘭骨の嫉妬は異常だった。

「密通の相手を白状するまで、おれはおまえを責めぬぞ」蘭骨は画業をわすれた。秀子をせっかんすることになった。毎日毎夜、一定の時刻になると秀子をはだかにしてしほりあげ、責めさいなんだ。

さびしい武蔵野の一隅に展開している陰湿なあらそいは誰にも気づかれず、しだいに残酷な方法へむかつた。

しかし蘭骨は、すでに秀子の相手の男を、知っているはずだった。

秀子の周囲に、男は二人しかいないのだ。夫である蘭骨と、弟子の沼井草一と――。

草一が秀子と関係した！この推測は、蘭骨の心をくするわせる。

なぜなら、秀子に対しては不能を自覚する蘭骨も、同性を抱いたときには、ほつせんと燃えあがる性癖をもっていたからである。

蘭骨の嫉妬の異常な複雑性は、そこにあった。



④ 抵抗

うしろ手にしばられたまま、秀子は庭へひきだされる。

身には腰巻ひとつ。素足だった。

「タヌキ女郎め、いふし責めにしてやる！」

秀子の前に、火がつけられた。ぶすぶすとけむりになって秀子をおそった。

秀子は、石のように口をとぎして、夫のしつような攻撃を耐えた。

責めたければ、いくらでも責めるがいい。そういった、どこかふてぶてしい態度が、

秀子の全身の肉にふくれあがっていた。

かくごをきめた女の肉体と心ほど、強靱なものはない。秀子は無言と無抵抗のなかに、もつともしふとい抵抗をみせた。



⑤ 逃亡

妖蘭亭から、草一のすがたが消えた。
飽くことを知らぬ蘭骨の嫉妬の執念に、恐怖をいだいて逃げだしたにちがいない。

「草一がいない、草一がいない！」
蘭骨は口をゆがめ、目には怒りと悲しみの
なみだをうかべて、家じゅうをあるきまわっ
た。
「恩知らずめ！」

草一の逃亡は、秀子と草一の間を、いっ
そうあきらかにしたようだった。
蘭骨は、呪咀に似たうめき声をあげて、草
一をのしつた。草一への怒りは、倍加され
て秀子にかぶさってきた。

「白状しろ、秀子。おれは、
おまえの口から、姦通の事実
をききたい。それをいうまで
おれは責め手をゆるめんぞ」
まるで江戸時代の女囚のよ
うに、庭さきへむしろを敷い
て、その上にすわらせた。

秀子は、反抗の無言を守り
つづけた。

「腹の子は、草一の子だな、
そうだな、おい！」

蘭骨は、にくにくしげに秀
子の腹をけりつけた。

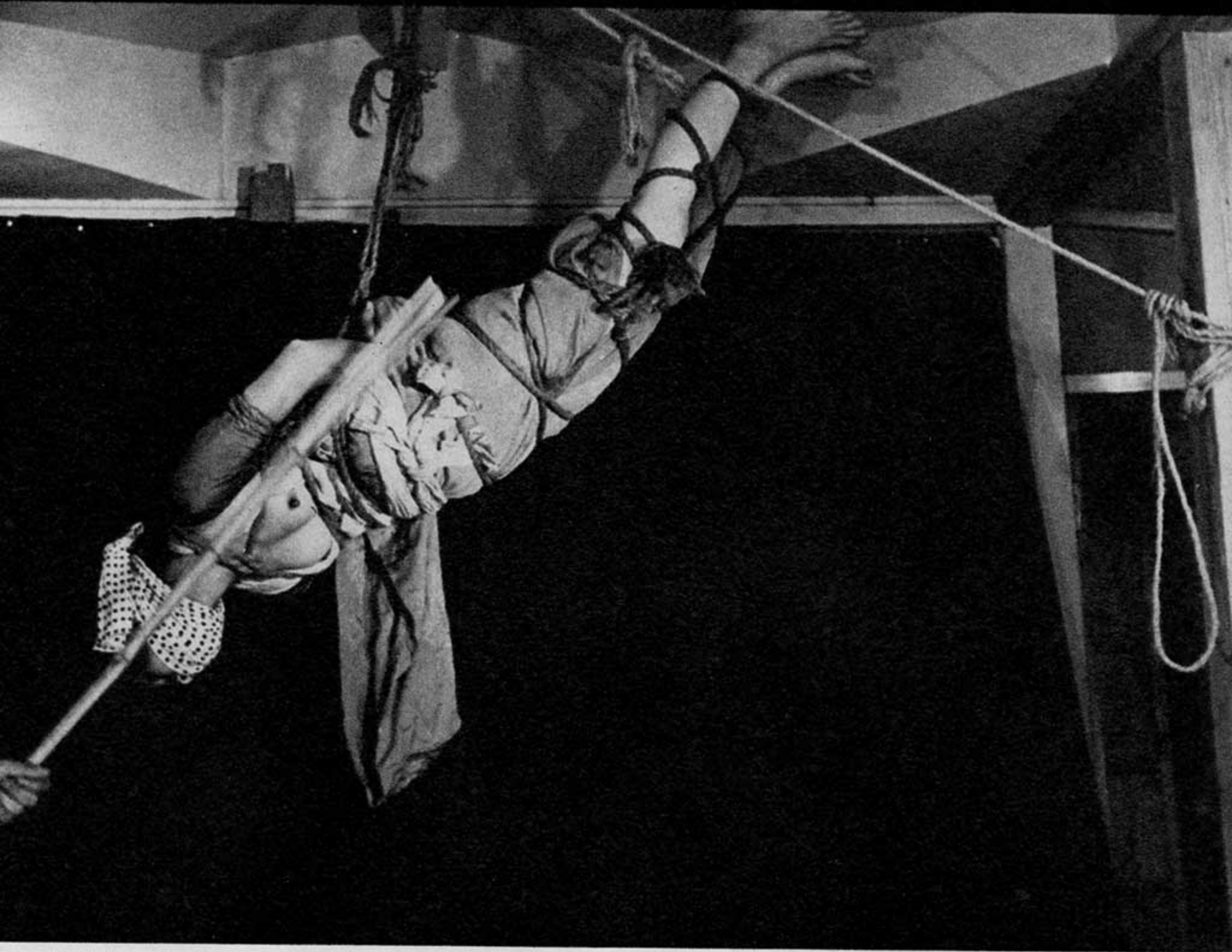
秀子のからだは、しばらく
たまま地面にころがった。

肩も乳房も、黒い庭土にま
みれた。

「ちくしょう、腹の子をたた
き殺してやる！」

足を蘭子の腹の上にのせ、
ぐりぐりとふみにじった。





⑥ 嘲笑

さかさ吊りは、さすがに苦しかった。

吊られる秀子はもとより、責め手の蘭骨にとっても、これはたいへんな労働だった。

憎悪と嫉妬の執念だけが、蘭骨のやせ腕に力をあたえた。

さるぐつわがはずれたとき、秀子はきれぎれの声でいった。

「私は、どうしても、おなかの子を生みますわ。私は子どもが生みたい。そして、あなたの子として、育てますわ」

その声音には、嘲笑のひびきがあった。

「うぬッ、そんなにも草一の子が生みたいのか！」

割れ竹が、秀子のからだに、ぴしりッとう鳴った。

「さあ、草一さんの子だか、だれの子だか、私にもわかりませんわ」

あえぎながら、秀子はそんなことばも吐いた。

「ちくしょう、きさまという女は！」

蘭骨はくやしさにのたうちまわった。

割れ竹のムチを、狂気のようにふりまわした。

「不貞女め！」

⑦ 復讐

秀子は、さかさに吊り上げられ、ともすれば遠くなりかける意識の底で、苦しい快哉をさげんでいた。

——わめくがいい、いくらでも私を吊るしたくがいい。もっともっと嫉妬に苦しむがいい。どんなに苦しんでも、私のいままでの苦しみにくらべれば、まだまだ軽いはずだ。さるぐつわのなかで、秀子は微笑する。

——こんなにひどくしばられ、さかさに吊るされていても、これまでの私の心の苦しみにくらべれば、ラクなものだ。私は平気だ。熱病患者のような汗をかいて、あなた、いくらでも責めるがいい。私は耐えてみせる。

蘭骨と草一の関係を、秀子はとうから知っていた。

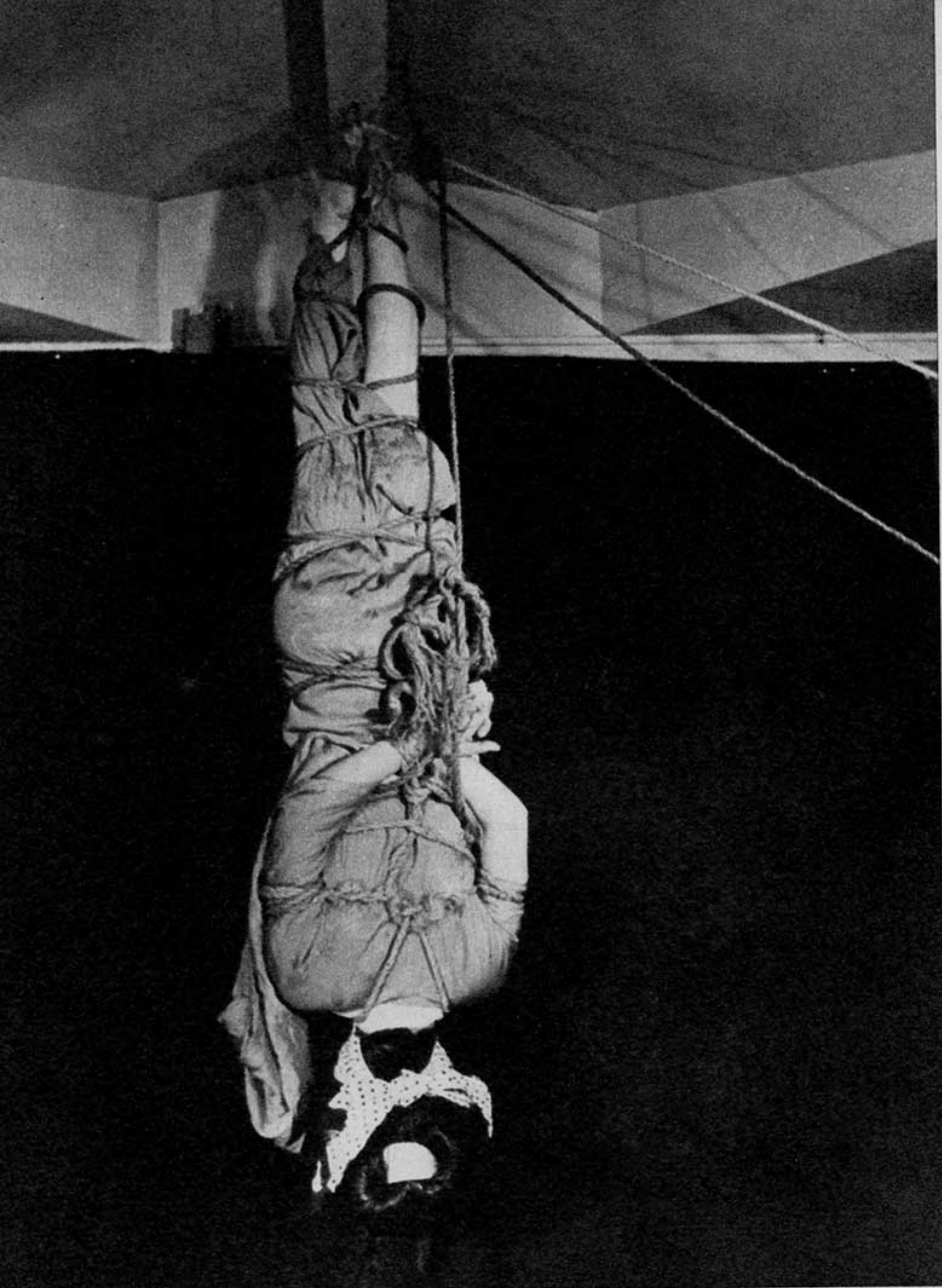
妻をかえりみず、同性の弟子と愛しあう蘭骨を、どれほど憎んだか。秀子は、どろ沼のような嫉妬に苦しんだ。

同じ屋根の下にねながら、夫は妻をかえりみず、男の弟子と痴態をくりひろげていたのだ。

——これが、私の復讐なのだわ！

秀子は心のなかでさげふ。草一を誘惑し、通じたのは事実だが、妊娠したということは、うそだった。秀子の復讐だった。夫はキリキリ舞いをしている。

残酷な拷問に秀子はうめいているが、秀子の胸は勝利感に酔っているのだった。

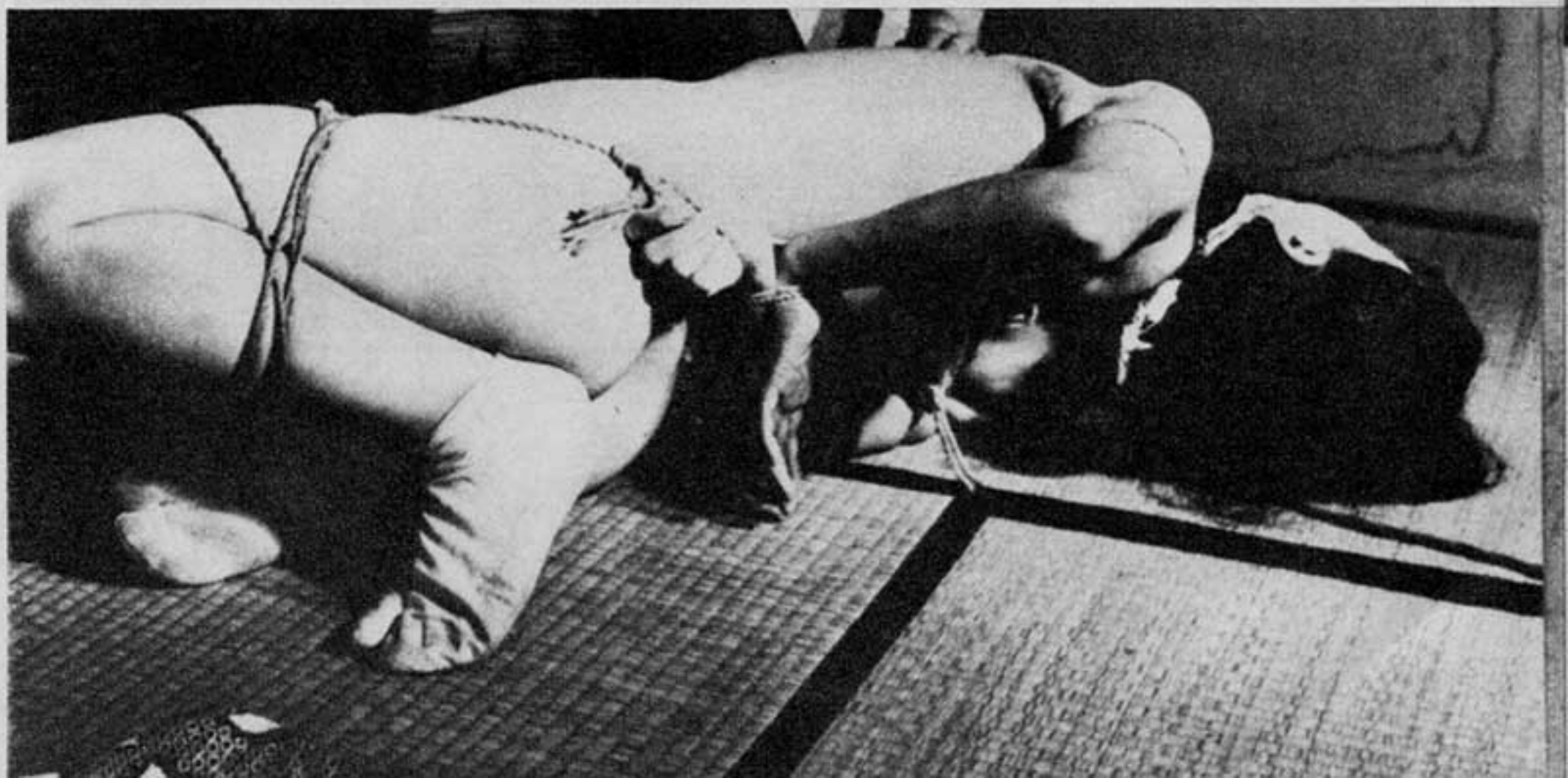
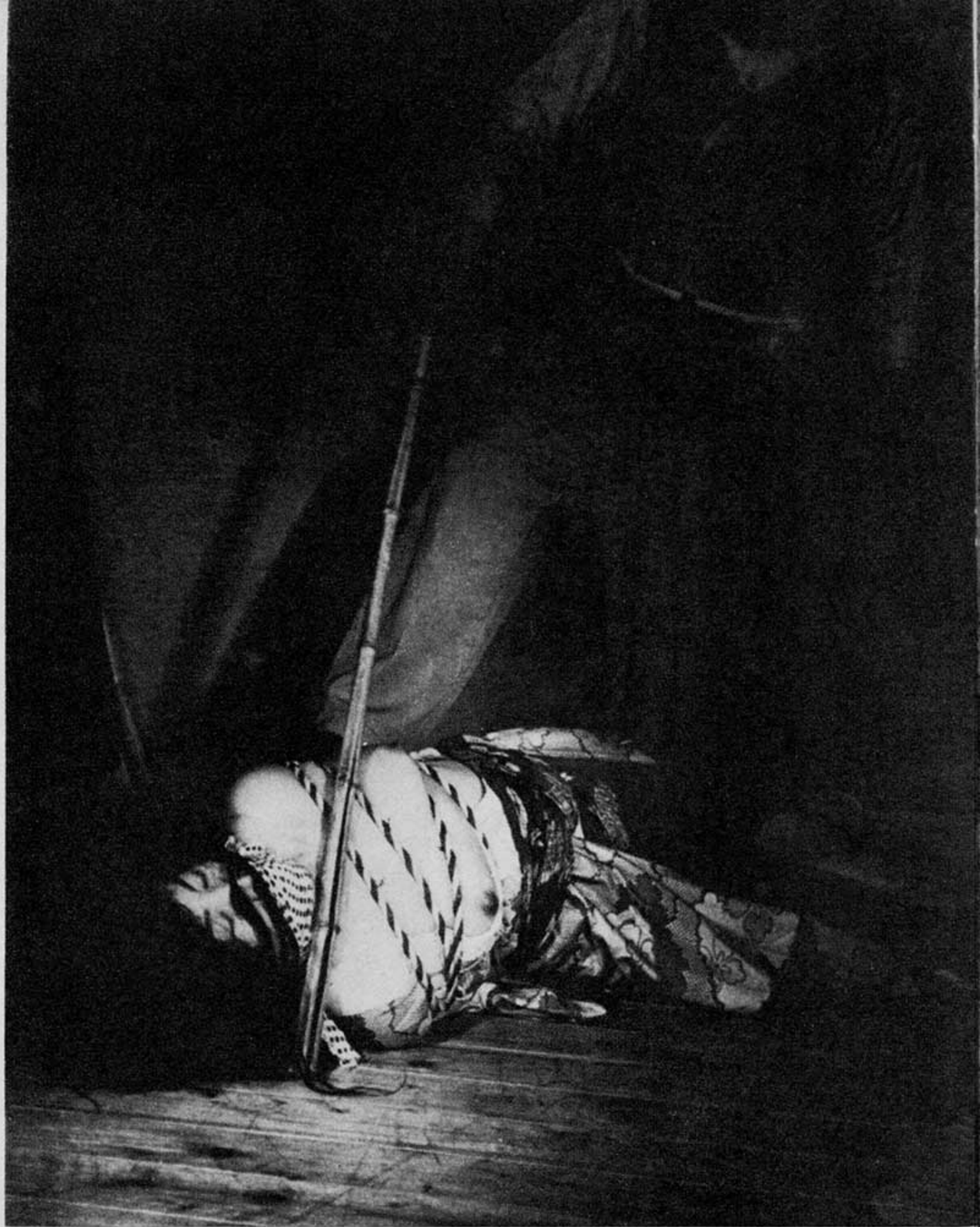


⑧ 夕日

武蔵野の森に、夕日が落ちていく。
老女秀子の話を、客の老人は、ひとつひとつうなずきながらきいていた。

「——蘭骨は、その後まもなく死にました。私に毒をのまされて——。私は三十年間を、牢獄ですごしました。つい数日前に刑を終えて、ここへやってきたのです。思い出の妖蘭亭へ……」

ひえた茶をすすり老女はことばをたした。「——でも、まさか、あなたがお見えになろうとは、夢にも思いませんでしたわ。なつかしゅうございますわ。ほんとに。さあ、熱い、お茶をいれかえましょう、草一さん」

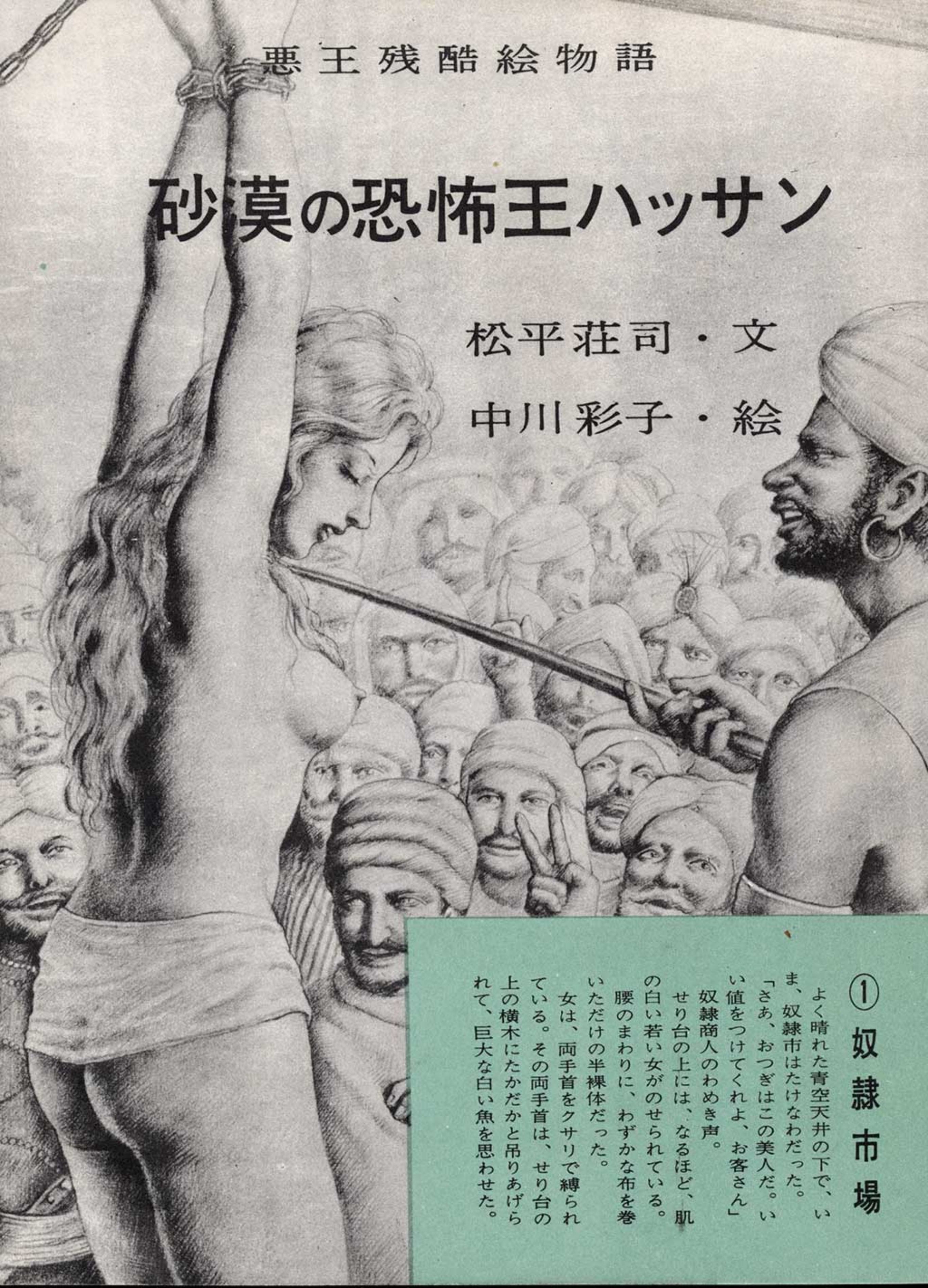


悪王残酷絵物語

砂漠の恐怖王ハッサン

松平荘司・文

中川彩子・絵



① 奴隷市場

よく晴れた青空天井の下で、いま、奴隷市はたけなわだった。「さあ、おつぎはこの美人だ。いい値をつけてくれよ、お客さん」奴隷商人のわめき声。せり台の上には、なるほど、肌の白い若い女がのせられている。腰のまわりに、わずかな布を巻いただけの半裸体だった。女は、両手首をクサリで縛られている。その両手首は、せり台の上の横木にたかだかと吊りあげられて、巨大な白い魚を思わせた。

② せり売り

むらがり寄った客の中から、声がかかる。

「銀五枚！」

「銀十枚だ！」

奴隷商人は黒い顔に白い歯をだして笑う。

「じょう談はやめてくれ。こんな白人の上玉を、五枚や十枚の銀で売れるものかい」

手にもった長い皮鞭で、奴隷商人は女の腰のまるみを、びしりッと打った。

「それ、この肉づきをごらんせえ」

両手をクサリで頭上に吊られたまま、半裸の女は身をよじらせた。

商人の鞭は、つぎに、むきだされている女の乳房をたたいた。

白い蛇のように、女からだはくねった。苦痛と羞恥の悶えだった。



③ ハッサン

そのとき、群集のなかから、ひとときわ高く声があがった。

「わし買った。銀百枚だ！」

その声の主は、このアラビアでもっとも勢力と実権をもつ、ハッサンという男だった。

せり、台の上の若い白人女サビナは、銀百枚と交換されて、ハッサンの所有物となったのである。



④ 好色愚王

回教の始祖マホメットが歿したのは、西歴六百三十二年六月八日である。

マホメットは、アラビアを統一した偉大な指導者であり、教徒たちからは、アラーの神の使徒として尊崇された。

メッカの奴隷市場からサビナを買い求めたハッサンは、そのマホメットの孫にあたる。すなわち、ハッサンの母親が、マホメットの娘なのである。

その血統によって、なんら劣することなくハッサンは絶対者の地位についた。しかし、彼には、父祖の名を恥ずかしめるだけの能力しかなかった。愚王であり、暴君であり、しまつにおえない好色王だった。

回教においては、四人まで妻をめとることができる。マホメットが定めた掟である。

ハッサンはこの掟をやぶり、六十人の妻をあつめ、さらに多くの美女を後宮においた。

奴隷市場からハッサンのハレムに移された白人女サビナは、この好色な愚王を嫌った。数日後のある夜、サビナはひそかにハレムを脱出した。

しかし、砂漠のなかで、彼女は追手の兵につかまった。

そして、残酷な刑がはじまった。

⑤ 白い肉の柱

王宮の広間の中央にある、ふとい円柱に、サビナのからだは立たされたまま縛りつけられた。

うしろ手に強く縛りつけられ、サビナは白い肉の柱と化して戦慄した。

「これ、サビナ、なぜわしの後宮から逃げたのだ。それほど、わしがきらいか」

ハッサンが憎悪の目をぎらつかせて、サビナの前にあゆみ寄った。

いままでに彼の宮殿から逃げた女はいなかった。

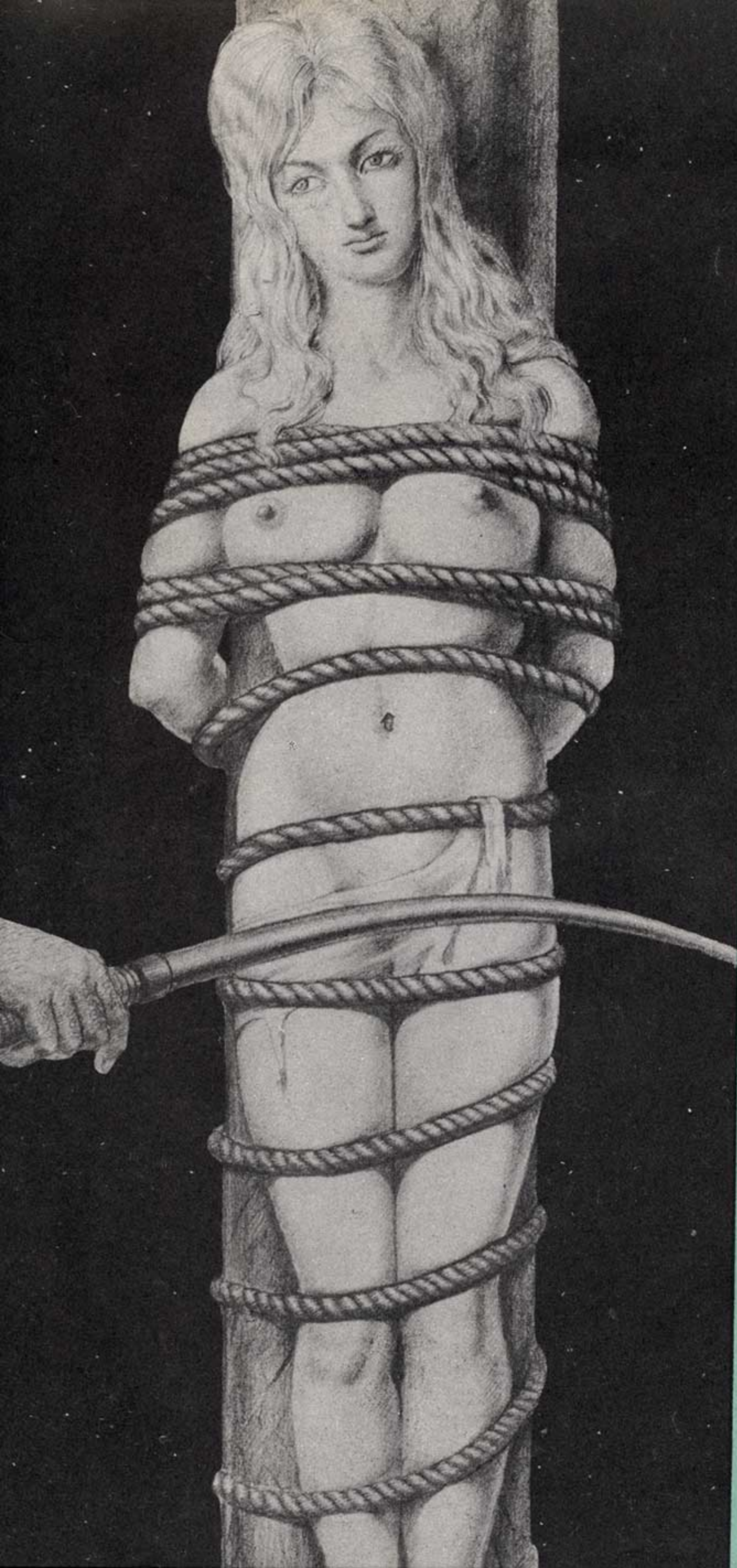
その権力と財に屈しない者は、一人もい

なかったのだ。

愚王にも自尊心はある。いや、愚王だからこそ、醜悪な自尊心は人一倍はげしいともいえた。

「あなたなんか抱かれるくらいなら、死んだほうがマシです！」

サビナは、悔べつをこめていった。



⑥ 鉄の馬

ハッサンは激怒した。

奴隷女から、このように痛烈な罵言を浴びせかけられようとは。

「よし、それならば、死よりもつらい苦しみを、その白い肌にきざみこんでやるぞ！」

サビナは鞭をうけて牢獄へぶちこまれた。

それから三日のあいだ、サビナは牢獄から一歩も外へだされなかった。

その三日間に、ハッサンは鍛冶屋にめいじて、奇妙な拷問具をつくらせたのだった。

鉄の棒が横にさしわたされ、その棒には、四本の足がついていた。

一見、鉄でできた骨だけの馬のように、みえた。

四日目の朝、サビナはうしろ手に縛られたまま、その鉄製の馬の前にひきだされた。

するどい皮鞭が、サビナの肩に鳴った。

「さあ、こいつにのるんだ、またぐんだ！」
いやもおうもなく、サビナは足をひらき、

馬にのった。

巧妙な仕掛けがあつて、その鉄の馬の足がやがて、ぶきみな音とともにのびていく。

サビナの両足が、ゆかからはなれた。同時に、自分の肉体の重量から発する激痛が、サビナの中心部に、ぐりぐりッと襲った。



⑦ 苦痛の重量

鉄の馬の足は、じわじわとのびていく。サビナのからだは浮く。両足も宙に浮く。その二本の足首に、鉄ぐさりのついたナマリ玉がくくりつけられた。重量と共に苦痛が増す。馬の上で、サビナの顔面は蒼白になった。骨のずいにまで揉みこまれる苦痛。
「きいッ！」とさけんでサビナは気絶した。



⑧ ただれた太陽

焼けつくような熱さのなかで、サビナは息をふきかえした。

空にはまっ赤にただれた太陽がある。

「あッ」助かったのだ、とサビナは思った。

しかし、それは一瞬の錯覚だった。

サビナの両腕は、まだかたい縄で背中に縛りつけられていた。そして、からだの半分は砂にうずもれていた。ここは砂漠なのだ！

サビナは、のどのかわきを知った。目の前に池がある。ああ、水がある！



⑨ 砂漠の刑

自由のないからだを、蛇のように這わせてサビナは池の水面ににじり寄ろうとした。

だが、駄目だった。

サビナを縛った縄尻は木の根につながれているのだ。

縄尻はぴーんと張り、どうしても水のなかへ顔を突っこむことができない。

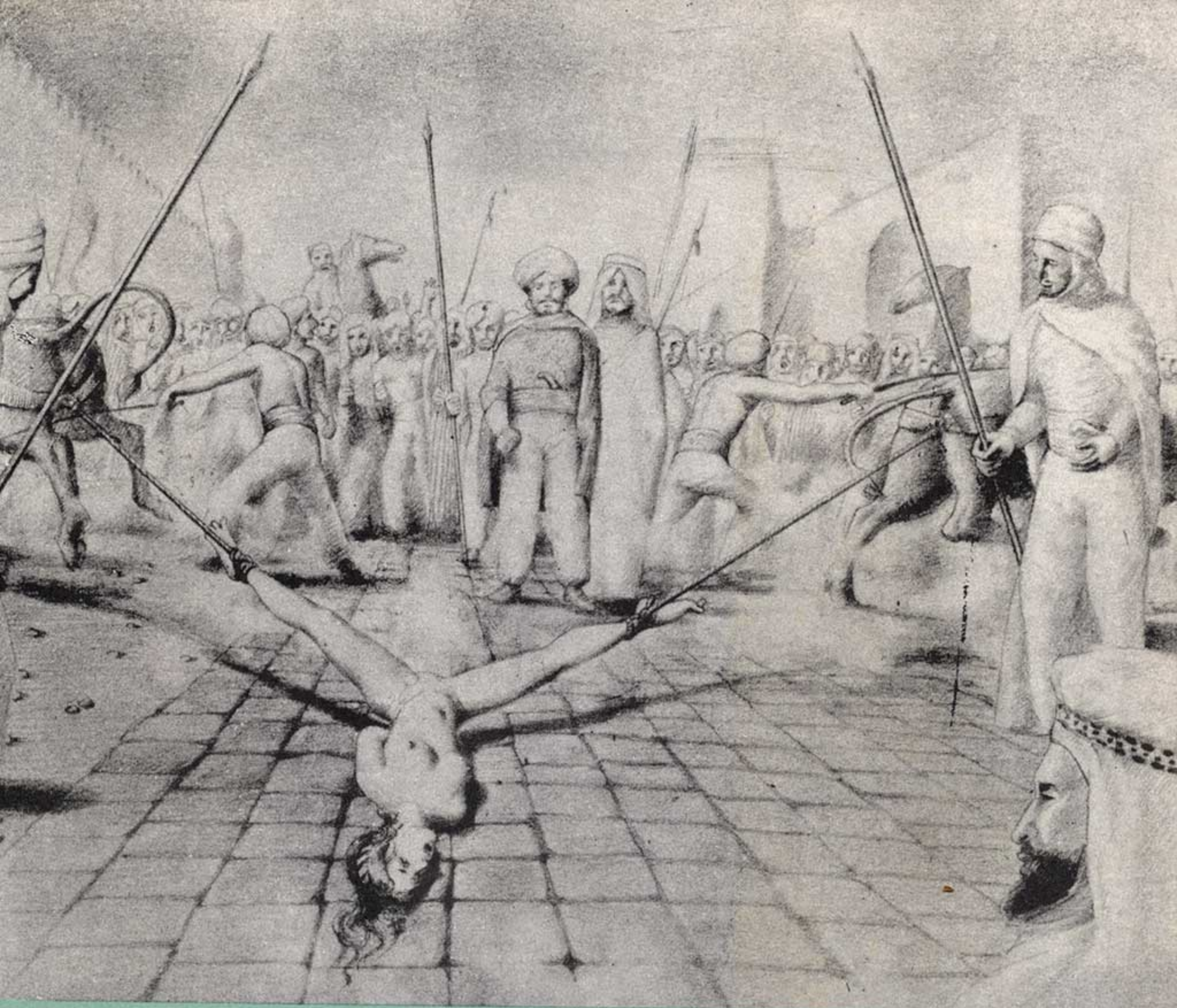
「み、みずをのませて！」

声にならない声で、サビナは哀願した。

「わかったか、これが砂漠の刑だ。おまえはここで飢えて死ぬのだ」

サビナの頭上に、ハッサンの声があった。





⑩ 牛裂きの刑

サビナは砂漠の太陽に焼き殺された。

「わしの意にそむく者は、みなこういう運命におちいるのだ。わっはっはっはっ……」

こちよげにハッサンは哄笑した。

砂漠の暴君の狂態は、しずまることを知らなかった。このハッサンの強度な残虐性におそれなして、ハレムから逃亡をはかる女が続出した。

ハッサンは、それらの女に牛裂きの刑をくわえた。女の両足首に二本の縄を縛りつけ、その縄を二頭の牛につなぎ、合図とともに二頭の牛を左右に走らせる。女の肉体は絶叫もろとも、まっぶたつにひき裂かれるという、残酷な刑である。

この、神をおそれぬ行為のかずかずに、当然、信徒たちの心は、はなれていった。民衆のなかから、怨嗟の声がたかまっていくな。

シリアの太守エジトが、この機をのがさず突如、軍勢をひきつれてハッサンの宮殿を襲撃した。

つい数刻前まで、全回教徒の主として勢威を誇示した残酷王も、たちまちエジトの軍にやぶれさった。

ハッサンは降服し、追放され、最後には、ネズミのように毒殺されるのである。

裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区江古田1の2302 株式会社 久保書店 (振替東京 10756)

37年(三月号)一五〇円

○グラビア・沈黙のポーズ……………吉田 久	○ソファベッドのあるへや……………藤沢 修	○もだえ三態ほか……………編集部・編	○絵物語・青い野獣のブルース……………鳥丸 克彦 絵・秋吉樹	○女忍伝奇館……………文・黒部 恭治 絵・古正 英生	不貞現場の女……………春川 光彦	畜獣デリムソンIV……………阿麻 哲郎	マゾヒズム文化時評……………森下 高茂	由美子よ逃げろ……………竹谷 十三	鞭と縄と美貌の迫害者……………院南 五郎	○絵物語・吸血鬼号の女囚……………文・島本 春雄 絵・中川 彩子	日本拷問史②……………名和 弓雄	美妃責め行者譚……………来島 操次	フォト・ストーリー・鞭に生きる女①……………ヴァン・ロッド作・画	○絵物語・煩悩地獄医者……………絵・中島 喜美	極楽バンテイ往生……………重 文彦	マンガグローブの葉かげで……………松平 荘司	海老沼武七の執念……………小田桐 爽	黒い鉄の扉……………南郷 京助
-----------------------	-----------------------	--------------------	-----------------------------------	-------------------------------	------------------	---------------------	---------------------	-------------------	----------------------	-------------------------------------	------------------	-------------------	----------------------------------	-------------------------	-------------------	------------------------	--------------------	-----------------

37年(二月号)一五〇円

○グラビア・がくぶちの女・吊られる 白いとられれ……………藤沢 修	○グラビア・光る円丘・逃げられない部屋……………吉田 久	○グラビア・鞭をもつ貴婦人たち……………文・島本春雄 画・中川彩子	○絵物語・フランス乳房の塔……………文・松平荘司 画・山田彬弘	○絵物語・脱獄囚を追え……………文・島本春雄 画・山田彬弘	絵物語・姫小姓さきさき呪縛……………絵・中島喜美	畜獣デリムソン(3)……………阿麻 哲郎	奇妙な町の奇妙なたべもの……………淡路 周五	赤い野牛の群れ……………画・秋吉 樹	美貌の毒花……………重 文彦	日本拷問史①……………名和 弓雄	○絵物語・臆病者は地獄へ行け画・沖 涉二	きょうもまた黒い太陽……………豊田 一狼	被虐妻……………御子神吉雄	ビンの中の女……………牧田 洋一	修羅縄侍……………万里小路崑	ぬめ肌むさん雨……………江津 浅夫	江戸悪党伝……………小田桐 爽
--------------------------------------	------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------	----------------------------------	--------------------------	----------------------	------------------------	--------------------	----------------	------------------	----------------------	----------------------	---------------	------------------	----------------	-------------------	-----------------

37年(一月号)一五〇円

○グラビア・縄のムード……………吉田 久	○ろうそくのあかり……………編集部・編	○雪の朝・浴室の女……………編集部・編	○ながいまつ毛……………吉田 久	○熊笹のなか……………編集部・編	○絵物語・恐怖王イブラヒム……………文・松平 荘司 画・中川 彩子	○縛った男をさがせ……………文・島本 春雄 画・堂 昌一	○捕り縄恋慕……………小田桐 爽	○畜獣デリムソン(2)……………阿麻 哲郎	朝姫様仔細……………吉田 義雄	○絵物語・手綱をとる姫……………文・山本 節夫 画・小日向一夢	あらしの夜の悪夢……………三井多美子	犬の独房……………須見 憲治	新春うらまど・いろはかるた……………画・沢幸史	魔女鏡……………西田 仁	奇妙な町の奇妙なたべもの……………淡路 周五	夜の刑律……………鳴滝 三郎	変幻鬼女囃子(最終回)……………矢桐 重八	風流責め句選……………画・中島 喜美	濡れる屈辱の夜……………たけの・みのる	マゾヒズムへの道程VI……………黒田 史朗
----------------------	---------------------	---------------------	------------------	------------------	--------------------------------------	---------------------------------	------------------	-----------------------	-----------------	------------------------------------	--------------------	----------------	-------------------------	--------------	------------------------	----------------	-----------------------	--------------------	---------------------	-----------------------

36年(十二月号)一五〇円

○グラビア・ポーズするヌード……………藤沢 修	○豆しぼりと長襦袢……………編集部・編	○救いを求める乙女……………深森 映士	○悦虎フォト集……………編集部・編	○川柳狼ぐつわ漫考……………絵・小日向一夢	浅草えれじい……………花巻京太郎	花開かぬ夜……………豊田 一狼	○絵物語・女旅逢魔峠……………文・黒田 恭治 画・古正 英生	マゾヒズムへの道程V……………黒田 史朗	札束は悪魔の手先……………八巻 令	手錠と女たち……………院南 五郎	ギブスに泣く恵子(3)……………片山 俊一	黒髪化粧(1)……………志摩 不二	畜獣デリムソン(1)……………阿麻 哲郎	凌辱の公開……………鬼山 鞠策	裏窓既刊号挿絵名作選……………編集部・編	ろくでなしの檻……………鳴滝 三郎	乾いた泥……………西田 仁	メス／＼専制帝国の良……………九十九十郎	宝石が女を狙う……………三田 三郎	責め句選……………絵・中島 喜美	変幻鬼女囃子(6)……………矢桐 重八
-------------------------	---------------------	---------------------	-------------------	-----------------------	------------------	-----------------	-----------------------------------	----------------------	-------------------	------------------	-----------------------	-------------------	----------------------	-----------------	----------------------	-------------------	---------------	----------------------	-------------------	------------------	---------------------

36年(十一月号)一五〇円

- グラビア・アメリカ悦虚フォトより
 ○々・ポーズするヌード……吉田 久
 ○々・悦虚フォト傑作選……編集部・編
 ○絵物語・髪と拳銃……文・深川 昌夫 画・秋吉 椿
 八丁堀の鬼……小田桐 爽
 屋根裏部屋の大嵐……長谷川 勇
 倦怠期は演技で埋めろ……黒部 恭治
 マゾヒズムへの道程Ⅳ……黒田 史朗
 スリッパはもうゴメンだ……九十九十郎
 ギプスに泣く恵子(2)……片山 俊一
 黒髪模様(二)……志摩 不二
 明治薬民秘話……樋口 逸馬
 黒いホクロのヴィーナス……阿麻 哲郎
 白磁の壺……島田 昇
 ○絵物語・魔女を縛れば縛られる……文・飯田豊吉 画・堂 昌一
 裏窓タウン……
 虚構の真実ということ……古河 豊
 妖奇の顔……鬼山 絢策
 ○グラビア・悦虚フォト集……編集部・編
 江戸川柳・賣め句選……画・中島 喜美
 変幻鬼女囃子(五)……矢桐 重八

36年(十月号)一五〇円

- グラビア・執念泥沼地獄……本誌 特写
 ○々・海と女……藤沢 修
 ○々・悦虚フォト集……編集部・編
 ○絵物語・復讐の鬼……文・万里小路 崑 画・古正 英生
 ○々・脅迫者に明日はない……文・花房山紀夫 画・秋吉 椿
 セールスマンに御注意……九十九十郎
 黒いホクロのヴィーナス……阿麻 哲郎
 懸想文受難……小田桐 爽
 白い肌と黄色い画家……南村 蘭
 マゾヒズムへの道程Ⅲ……黒田 史朗
 ○漫画・山の夜ばなし……左 次朗
 黒髪模様(一)……志摩 不二
 ギプスに泣く恵子(一)……片山 俊一
 褐色のひとみ……藤見 郁
 江戸断獄記……吉川 玄
 お六受難街道……東 洋太郎
 紅いスピード……久我 二郎
 獄門桶の囚人……坂木 頼
 執念泥沼地獄……美濃村 晃
 賣め句選……画・栗原 伸
 変幻鬼女囃子(四)……矢桐 重八

36年(九月号)一五〇円

- グラビア・アメリカの悦虚絵物語より
 ○々・あきらめの表情……吉田 久
 ○々・障子の影……深森 映士
 ○々・悦虚フォト集……編集部・編
 ○絵物語・幻影の崖……文・西崎 彰 画・豊田みのる
 暗い湿っぽい穴の中で……松平 荘司
 戦国血笑記……万里小路 崑
 ドル箱スターに手を出さな……鳴滝 三郎
 スリルは引き合わない……九十九十郎
 明治地獄島秘話……樋口 逸馬
 黒いほくろのヴィーナス2……阿麻 哲郎
 ○絵物語・真夏の夜の戦慄……文・飯田 豊吉 画・堂 昌一
 上客は逃がすな!……長谷川 勇
 刺青人肌蜘蛛……佐伯 邦夫
 花と女と眼帯と……豊田 一狼
 サジストは地獄へ行け!……佐路 素人
 マゾヒズムへの道程Ⅱ……黒田 史朗
 文芸切腹史……中康 弘通
 裏窓既刊号挿絵名作選……編集部・編
 和服姿の乙女に寄せる……植野 達也
 変幻鬼女囃子(三)……矢桐 重八

36年(八月号)一五〇円

- グラビア・お好み映画誌上試写会
 ○々・オブジェ……吉田 久
 ○々・鏡のある部屋……深森 映士
 ○々・悦虚フォト集……編集部・編
 ○口絵・奴隷の反乱……石塚 芳幸
 ○絵物語・民は女にかけろ!……文・依田 精二 画・秋吉 椿
 ○々・殺し屋は真夜中に泣く……文・飯田 豊吉 画・堂 昌一
 ○々・邪法忍者呪縛……文・万里小路 崑 画・古正 英生
 生き人形と二人の男……藤見 郁
 マゾヒズムへの道程Ⅰ……黒田 史朗
 弗の馬……西田 仁
 黒いほくろのヴィーナス……阿麻 哲郎
 じゃじゃ馬馴らし……九十九十郎
 獣の家……永井 卓二
 女に腕はいらぬ……鳴滝 三郎
 謡拐吸血鬼秘話……樋口 逸馬
 絵物語・眠らせてちょうだい……文・豊田 一狼 画・山田 彬弘
 黒髪美髯記……志摩 不二
 変幻鬼女囃子(二)……矢桐 重八

36年(七月号)一五〇円

- グラビア・椅子……深森 映士
 ○々・民……吉田 久
 ○々・あき家の女……深森 映士
 ○々・悦虚フォト集……編集部・編
 ○絵物語・にせ聖女……文・雪俊 遥 画・山田 彬弘
 ○ある表情集……美濃村 晃
 ○裏窓既刊号挿絵名作選……編集部・編
 お吉魔除け肌……小田桐 爽
 弄 獣……葛原 令太郎
 黒水仙の女……竹谷 十三
 Fの世界……佐瀬 利五郎
 戦国剽盗記……万里小路 崑
 あべじの足……新津 勉
 若妻地獄……竹田 十三
 青木菊子の最後……柳生 亘
 妬 刑……松江 梨矢子
 むしたんご……佐々木 力
 春岡村事件……雪俊 進
 旅芝居見てある記……境 利彦
 裏窓ショート・ショート……森 喜一
 裏窓タウン……
 変幻鬼女囃子(一)……矢桐 重八

36年(六月号)一五〇円

- グラビア・溪流……………山下久一郎
- ……倉庫の中……………吉田 久
- ……フロア・ランプ……………深森 映士
- ……悦虚フォト集……………美濃村 晃
- 口絵・開魔堂……………画・石塚 芳幸
- 妖艶貴絵競作選……………各画 伯
- 魔性の客が通ってくる……………浜松 武
- ある老遊侠伝……………矢桐 重八
- スカートの下の世界……………阿麻 哲郎
- 明治女工哀話……………樋口 逸馬
- 痴者の文……………南村 蘭
- 妖夢を覗けば縛られる……………藤見 郁
- マゾヒズムへの誘惑……………黒田 史朗
- 悪女……………明石 沙子
- 芳村順造のレジャー……………秋 久夫
- 髪屑箱……………大塚真佐男
- バスティーユ牢獄の黒い処女画……………中川 歌子
- 絵物語・復讐は俺に任せろ……………文・万里小路 崑
- ……………画・沖 涉司
- 浅尾の蛇責めについて……………猪 勝彦
- 逆転への陶酔……………聖 粒三
- 裏窓情報……………永井卓二郎
- 悦虚の園(終回)縄と恋と夢……………殿村 恵

36年(五月号)一五〇円

- グラビア・悪(あくむ)夢……………吉田 久
- ……機(いけにえ)牲……………深森 映士
- ……文・藤見 郁
- 絵物語・真夜中の闇入者……………画・沖 涉司
- 絵物語・三つ目竜船の妖女……………文・島本春雄
- ……………画・堂 昌一
- 暗い部屋で笑った女……………ホ・ハタ
- 妖異お菊虫……………矢桐 重八
- スカートの下の世界(4)……………阿麻 哲郎
- 江戸誘拐魔秘聞……………樋口 逸馬
- 黒髪懺悔(完結編)……………志摩 不二
- 悪(あくじょ)女……………明石 沙子
- マゾヒズムへの誘惑V……………黒田 史朗
- 女王様お馬にどうぞ……………山本 節夫
- 絵物語・強盗ごっこ……………文・松平 荘司
- ……………画・豊田みのる
- 司祭と悪魔と若後家と……………長谷川 勇
- 名月恋遊女……………久富 浩司
- グラビア・悦虚フォト・柱……………吉田 久
- 火あぶり……………成宗美美夫
- 昔懐かし活動大写真の思い出……………由茂 滋
- 裏窓既刊号挿絵名作選……………編集部・編
- 悦虚の園V甘美な戦慄……………殿村 恵

36年(四月号)一五〇円

- グラビア・荒縄と黒髪の構図……………吉田 久
- ……陣子と女……………深森 映士
- ……文・島本 春雄
- 絵物語・照姫呪縛……………画・堂 昌一
- 絵物語・責め具製造人……………文・九十九 十郎
- ……………画・沖 涉司
- グラビア・悦虚フォト集……………編集部・編
- 悪魔の唇……………田沼 龍男
- 呪われた乳房……………小田桐 爽
- 音に憑かれて……………松平 荘司
- マゾヒズムへの誘惑IV……………黒田 史朗
- 井上筑後守覚え書……………明石 沙子
- とらじを縛るべし……………阿里 俠二
- 飢えた眼は階段に光る……………永井卓二郎
- 奇妙な女護が島……………豊田 一狼
- 黒髪さんげ(続・青春編)……………志摩 不二
- スカートの下の世界(3)……………阿麻 哲郎
- 座談会・晴雨画伯を偲んで……………聖 粒三
- 美食ストーリー妙……………文津部三郎
- 乱歩文学における耽美趣味……………森脇 光
- ネオ・ナチズムの地下組織……………編集部・編
- 裏窓既刊号挿絵名作選……………殿村 恵
- 悦虚の園IV女奴隷の祈り……………殿村 恵

36年(三月号)一五〇円

- グラビア・光と影の構図……………深森 映士
- ……悦虚の部屋……………吉田 久
- ……文・柳沢 直彦
- ……文・堂 昌一
- 絵物語・修羅小町……………画・根元 裕
- 絵物語・Y座文藝部員……………文・依田 精二
- 絵物語・女間蝶は悶える……………画・沖 涉司
- 絵物語……………文・松平 荘司
- 明日の晩また逢ってね……………画・山田 彬弘
- 絵物語・妖説閨人形……………画・中島 喜美
- 青い情事……………豊田 一狼
- あばずれから逃げろ……………長谷川 勇
- 不動堂の女……………明石 沙子
- マゾヒズムへの誘惑III……………黒田 史朗
- 妄執の炎……………小田桐 爽
- 明治癡狂院秘話……………樋口 逸馬
- スカートの下の世界(2)……………阿麻 哲郎
- 市民生活の中のアブ……………阿里 俠二
- 里髪懺悔(青春編)……………志摩 不二
- 裏窓既刊号挿絵名作選……………編集部・編
- 悦虚の園III受縛の詩……………殿村 恵

36年(二月号)一五〇円

- グラビア・悦虚フォト特選集……………編集部・編
- ……魔屋の女……………深森 映士
- ……文・藤見 郁
- 絵物語めくら狼……………画・堂 昌一
- ……文・松平 荘司
- ……画・沖 涉司
- ……文・依田 精二
- ……画・豊田みのる
- ……狙われた囃……………阿麻 哲郎
- スカートの下の世界(1)……………志摩 不二
- 黒髪懺悔(続・少年編)……………万里小路 崑
- 妄執の影……………長谷川 勇
- 遺産相続猫……………九十九 十郎
- 錯誤の犠牲者……………黒田 史朗
- マゾヒズムへの誘惑……………永井卓二郎
- 古バンティ一五〇枚の効用……………久富 浩司
- さくら塚縁起……………森脇 光
- 黒い奴隷の残酷物語……………秋 久夫
- 布はいつもぬれている……………殿村 恵
- 悦虚の園II飼われる女体……………風間練太郎
- 幻の痴漢……………文・坊城 友成
- 絵物語・逆立ち小町……………画・中島 喜美
- 櫛に呪われた女……………鳴滝 三郎

36年一月号・一五〇円

35年十二月号・一五〇円

35年(十一月号)一五〇円

35年(十月新装号)・一五〇円

35年(九月号)妖気感覚小説特集

一二〇円

○グラビア・白い壁……………深森 映士
○悦虚フォト特選集……………編集部・編
○既刊号挿絵名作選……………編集部・編
○絵物語・招かざる危難……………文・依田 精二
○絵物語・縄恋罪業記……………文・藤見 郁
○絵物語・男になり損った男画……………豊田みのる
○絵物語・大奥裸女絵巻……………画・中島 喜美
○人が消える沼の家……………九十九 郎
○魔堂絵師……………矢桐 重八
○女中になりたい男の話(4)……………阿麻 哲郎
○受難場面美女優たち……………芝 利泰
○マソヒズムへの誘惑……………黒田 史朗
○東京へど野郎……………南村 蘭
○尻を振って走れ……………阿里 俠二
○悪魔の魚は口まで黒い……………長谷川 勇
○黒髪さんげ(少年篇)……………志麻 不二
○落武者非命……………久富 浩司
○女囚と胎教……………鳴滝 三郎
○黒髪夜話……………黒崎 善之
○悦虚の園(1)因われの檻……………殿村 恵

○グラビア・秋の夜……………深森 映士
○悦虚フォト特選集……………編集部・編
○既刊号挿絵名作選……………編集部・編
○絵物語・女スバイと裏切者……………文・依田 精二
○絵物語・彼の孤独な夜の遊び……………画・古正 英生
○異変女隠密記……………画・古正 英生
○女神の足の下……………泉谷 洋
○マリヤ受難記……………黒部 恭治
○お町の危難……………花巻京太郎
○黒髪さんげ(幼年篇)……………志麻 不二
○マンハッタン倶楽部(4)……………鴉 嘔吐夫
○明治時代の女権無視……………河西 恒一
○足を殺してやりたい……………阿里 俠二
○妖髪記……………鳴滝 三郎
○二色オフ……………文・坊城 友成
○絵物語……………画・中島 喜美
○裏窓タウン……………森下 高茂
○マソヒズムへの招待……………阿麻 哲郎
○女中になりたい男の話(3)……………院南 五郎
○恋を見た女……………飯田 豊吉
○鬼乳房伝奇(六)……………飯田 豊吉

○グラビア・ヌード傑作選……………編集部・編
○あるポーズ……………吉田 久
○因われの構図……………深森 映士
○絵物語・能面の女は問える……………画・山田 彬弘
○絵物語・執念の白髪鬼……………文・藤見 郁
○絵物語・悪の報い……………画と文・中島 喜美
○嘉七老人のコレクション……………栗橋 譲
○火焙りについての考察……………吉田 義雄
○お尻の下男ども……………泉谷 洋
○マソヒズムへの招待……………森下 高茂
○マンハッタン倶楽部(3)……………鴉 嘔吐夫
○女スバイと鬼憲兵……………笹木 恵一
○黒髪散歩……………黒崎 良之
○女中になりたい男の話(2)……………阿麻 哲郎
○悪女の栄え……………西田 仁
○悪魔が覗くバスルーム……………東城京太郎
○くすり部屋……………円城寺 達
○私は耳の穴そうじ師……………須能 秀雄
○嘘つきの遺言……………村岡 藤里
○身悶える白い人質……………依田 精二
○鬼乳房伝奇(五)……………飯田 豊吉

○グラビア・悦虚ヌードの幻想……………藤沢 修
○ある表情……………編集部・編
○因悦虚フォト傑作選……………編集部・編
○絵物語・俺の心に悪魔が住む……………画・堂島 昌一
○絵物語・悦虚作家の秘密……………画・山田 彬弘
○絵物語・女間蝶の最期……………文・依田 精二
○絵物語……………画・豊田みのる
○ピララの敗北……………南村 蘭
○肩車に乗る女たち……………泉谷 洋
○マソヒズムへの招待……………森下 高茂
○鏡の中に他人がいる……………長谷川 勇
○マンハッタン倶楽部(2)……………鴉 嘔吐夫
○責めの挿絵……………山根 豊
○切腹と隣についての考察……………吉田 義雄
○黒髪をしゃぶる……………倉科 信介
○女中になりたい男の話……………阿麻 哲郎
○黒髪教類魔記……………志麻 不二
○天狗の安について……………長岡 愛一郎
○既刊号挿絵名作選……………編集部・編
○絵物語・刻参りの女……………画と文・中島 喜美
○鬼乳房伝奇(四)……………飯田 豊吉
○見たもの聞いたもの……………飯田 豊吉

○カラーヌード……………海外 特約
○絵物語・洞窟の魔女……………文・真木不二夫
○絵物語・続肌伝法……………画・山田 彬弘
○裏窓既刊号挿絵名作選……………画と文・中島 喜美
○肌絵しらべ……………編集部・編
○乳房小天狗……………清原伸二郎
○黒髪教類魔記……………藤白 欣嗣
○続婦人蝶報部員(二)檻……………文・依田 精二
○連載まんが・おうら草紙……………画・沖 涉司
○開化牢獄奇話……………左 次朗
○沙漠を走る船……………鈴木 和夫
○悪魔祭願末記……………長谷川 勇
○マンハッタン倶楽部……………鴉 嘔吐夫
○萬のある魔屋……………豊田 一狼
○セルジュとシュヴァンダ……………原 忠正
○黄色い肌の犬……………南村 蘭
○鬼伏の裸女……………島本 春雄
○鏡花世界の女性像……………中康 弘通
○くすり部屋……………円城寺 達
○鬼乳房伝奇(三)……………飯田 豊吉